

自己点検評価書（2022年度）
教育研究年報（2021年度）

2022年6月

群馬パース大学

目 次

第 1 部 自己点検評価書 (2022 年度)

I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等	1
II. 沿革と現況	4
III. 評価機構が定める基準に基づく自己評価	10
基準 1. 使命・目的等	10
基準 2. 学生	31
基準 3. 教育課程	63
基準 4. 教員・職員	78
基準 5. 経営・管理と財務	88
基準 6. 内部質保証	99
基準 A. 地域への貢献	104
基準 B. 国際交流の推進	109

第 2 部 教育研究年報 (2021 年度)

I. 教育活動の記録	113
1) 看護学科	114
2) 検査技術学科	117
3) 放射線学科	119
4) 臨床工学科	121
5) 理学療法学科	123
6) 作業療法学科	125
7) 言語聴覚学科	126
9) 保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程	128
9) 保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程	129
II. 研究活動の記録	130
1) 看護学科	131
2) 検査技術学科	163
3) 放射線学科	186
4) 臨床工学科	205
5) 理学療法学科	215
6) 作業療法学科	229
7) 言語聴覚学科	243
8) 教養共通教育部	254

第 1 部
自己点検評価書
(2022 年度)

I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等

1. 建学の精神

Paz (平和) 平和で公正な社会の発展
Pessoa (個性) 個人の尊厳と自己実現、
Assistencia (互助) 多様な人々の共存と協調、
Zelo (熱意) 知の創造、
への貢献

すべての人々が「Dum Spiro Spero ～人には生命ある限り希望がある～（以下、「基本理念」という。）」を「PAZ グループ（図 1-1）」の基本理念とした中から創設された、学校法人群馬パース学園（令和 3（2021）4 月「学校法人群馬パース大学」へ名称変更、以下、「本法人」という）は、平成 10（1998）年、人口 3,000 人ほどの高山村に看護短期大学を開設した。法人名と同じ、平和「Paz」を大学名にし、「群馬パース看護短期大学」とした。



図 1-1 PAZ グループ構成図

「Paz—平和」は、16 世紀、日本に初めて西洋医学を紹介したポルトガル人「ルイス・デ・アルメイダ」にちなんで、ポルトガル語から選んだ。

Paz は、すべての人が、「美しく、健やかに、元気で」老いる社会の実現を求めて、大学名の Paz には、「平和で公正で安定し成長する」社会を希求する大学であることを示し、

同時に大学も学生も「平和・公正・安定・成長」を旨とすることとしている。

看護短期大学の設立当初には、P、A、Zの各文字に **Pessoa**（人々・人類）、**Assistencia**（保健・医療・福祉）、**Zelo**（貢献・献身）という個別の概念を付与した。そこには「人類愛を抱き、看護を通して保健医療福祉に貢献する」という理念が込められている。その後、看護短期大学から「群馬パース大学（以下、「本学」という。）」に成長する過程で、看護短期大学の理念を発展させ、P、A、Zを現在の **Pessoa**（個性）、**Assistencia**（互助）、**Zelo**（熱意）として再構成した。これにより、群馬パース大学では、学生の「一個人、社会人、職業人」としての能力を磨くことを教育の三本柱とすることとした。

P、A、Zの表す能力をそれぞれ「柔軟な知的適応能力」、「円満な対人協調能力」、「有用な業務遂行能力」と呼び、簡略にして「P力、A力、Z力」と書く。三つの力を併せて総合的な人間力を持った人材を世に送り出すことが、本学の使命であり、どんな地域であっても「PAZグループ」の基本理念の体現者となり、「美しく、健やかに、元気で」老いる社会の実現に必要な人材となってもらいたいと願う。

2. 群馬パース大学の使命・目的

上記で説明したように、本学が大学名とする「Paz—平和」を希求する力（PAZ力）を持った専門職を育成し、一人でも多くの PAZ 力を持った専門職を社会に送り出すことを本学の使命とするが、臨床の現場と教育とを循環させ、大学院や研究所活動を通じて再教育の仕組みを確立させることも大切な使命としている。

本法人は、医療法人を含む他の5つの法人とともに「PAZグループ」を構成している。6法人が基本理念を基に「美しく、健やかに、元気で」老いる社会の実現を目指し、事業展開をしている。

学校法人がグループ法人と密接な相互関係を持ち、医療・福祉の現場と一体的つながりをもった教育・研究機関であること、また、それらの周辺をサポートする関連会社があり、本学と積極的な協力関係を築いていること、そしてそれらを背景に本学が地域に存在する意義を持たせるように努めている。

3. 本学の個性・特色等

本学の建学の精神及び教育目標を、本学に学ぶ学生が理解できるよう、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを明確にし、「学生自身が、三つのポリシーの関係の背後にある大学の特色を理解する。」ことが重要であるという視点に立ち、毎年1年生全員に学長特別講義を実施する中で「P+A+Z=PAZ」という概念を以下のとおり説明している（図1-2 学長特別講義資料（抜粋））。

P＝個人的側面—知的適応能力、A＝社会的側面—対人調整能力、Z＝職業的側面—業務遂行能力として、これを組み合わせ、「平和・公正・安定・成長」を目指している。

群馬パース大学の教育体系の理解と記憶のために

■本学の名称 PAZ（パース）は、16世紀に日本に初めて西洋医学を紹介し、日本初の病院を作ったルイス・デ・アルメイダにちなんでポルトガル語から選ばれた。

■「PAZ」は平和を意味し、「平和で公正で安定し成長する」社会を希求する大学であることを示し、同時に、大学も学生も「平和・公正・安定・成長」を旨とすることを示す。
注：公正とは、規則を守ること、道を外れないこと。

■「P、A、Z」の各文字には、Pessoa（個性）、Assistencia（互助）、Zelo（熱意）という個別の概念が付与されている。読み方は、ペーソ、アシステンシア、ゼロ。

■この対応に基づいて、学生の「一個人、社会人、職業人」としての側面を高めた能力を磨くことを本学の「教育の三本柱」とする。

■P、A、Zの示す三つの能力を「P力、A力、Z力」とも書き総合能力を「PAZ力」と呼ぶ。それぞれの基本の表現は以下の通り。

「柔軟な知的適応能力」、「円満な対人協調能力」、「有用な業務遂行能力」

■本学は三力を併せて総合的な人間力をもった人材を世に送り出すことを目指す。ここで
P力は「学識を増し、見識を磨き、人として成熟し、適応力を高める」ことで、
A力は「共感力、協調力、交流力を高めて、円満な対人能力を伸ばす」ことで、
Z力は「専門的な知識と技能を真摯に学び、有用な仕事力を修得する」ことで
それぞれ得られる。下表では、以上の内容を整理したもの。

用語	意味する内容
PAZ（平和）	平和・公正・安定・成長を希求する
Pessoa（個性）	柔軟な知的適応能力（一個人としての側面）
Assistencia（互助）	円満な対人協調能力（社会人としての側面）
Zelo（熱意）	有用な業務遂行能力（職業人としての側面）

■医療の場で言えば、P力、A力、Z力は以下の内容を含む。

P力：「問題意識を高め、人格を磨き、倫理観を養い、研究する能力の基礎を育むこと」。

A力：「医療の現場で出会う人々に真摯に向き合い、思いやり、優しさ、共感を持って接し、的確なコミュニケーション能力を発揮し、チーム医療のセンスを育て、地域や社会に貢献する意志を養うこと」。

Z力：「日々進歩する医学医療の知識と技術を的確に学び、向上心を失わずに努力し、役割を理解し、医療の現場のさまざまな問題を発見し、評価し、解決し、主体的、意欲的、効率的にかつ責任感をもって職能を発揮する基礎を習得すること」。

図 1-2 学長特別講義資料（抜粋）

本学は、グループ法人である「医療法人社団ほたか会」の実践を通じた人材育成の必要性から創設されたものである。医療法人社団ほたか会では、病院・診療所・介護老人保健施設・ケアハウス・通所リハビリテーション等を運営している。これにより成立した臨床と教育のつながりの中から、指導者の育成と研究機能が求められるようになり、大学院の開設が導かれた。また、各株式会社では、福祉施設関連事業、医療職のための職業紹介事業及び学生支援関係事業等を営んでいる。

創設 24 年目を迎えた本学では、教職員全体で、大学を積極的に活動させることに取り組める状況である。学生数も、比較的小規模であることの利点が、教学や学生支援にも反映されている。

学校法人と大学の関係も毎月 1 回開催される法人運営会議の実施により、経営側と教側との意思疎通、連携、協働が円滑であり、機動的な意思決定がなされ、責任が明確にされ、大学の管理運営が統括されている。

Ⅱ. 沿革と現況

1. 本学の沿革

平成 09 年 12 月	群馬パース看護短期大学の設置認可
平成 10 年 04 月	群馬パース看護短期大学の開学
平成 10 年 04 月	看護学科第 1 回入学式の挙行
平成 12 年 12 月	地域看護学専攻科の設置認可
平成 13 年 03 月	看護学科第 1 回卒業証書授与式の挙行
平成 13 年 04 月	地域看護学専攻科第 1 回入学式の挙行
平成 13 年 12 月	理学療法学科の設置認可
平成 14 年 03 月	地域看護学専攻科第 1 回修了証書授与式の挙行
平成 14 年 04 月	大学名を「群馬パース学園短期大学」へ変更
平成 14 年 04 月	理学療法学科第 1 回入学式の挙行
平成 15 年 09 月	高崎キャンパスの開設
平成 16 年 11 月	群馬パース大学の設置認可
平成 17 年 04 月	群馬パース大学の開学
平成 17 年 04 月	保健科学部看護学科、理学療法学科第 1 回入学式の挙行
平成 20 年 10 月	群馬パース大学大学院の設置認可
平成 21 年 03 月	保健科学部看護学科、理学療法学科第 1 回学位記授与式の挙行

平成 21 年 04 月	群馬パース大学大学院の開学
平成 21 年 04 月	大学院保健科学研究科保健科学専攻修士課程第 1 回入学式の举行
平成 22 年 02 月	新キャンパス（1 号館）の竣工
平成 23 年 03 月	大学院保健科学研究科保健科学専攻修士課程第 1 回学位記授与式の举行
平成 24 年 08 月	保健科学部看護学科が助産師学校の指定を受ける
平成 25 年 02 月	検査技術学科棟（2 号館）の竣工
平成 25 年 04 月	保健科学部検査技術学科第 1 回入学式の举行
平成 25 年 10 月	体育棟（3 号館）の竣工
平成 29 年 03 月	放射線学科・臨床工学科棟（4 号館）の竣工
平成 29 年 04 月	保健科学部放射線学科・臨床工学科第 1 回入学式の举行
平成 30 年 04 月	大学院保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程第 1 回入学式の举行
平成 30 年 10 月	日本看護協会から認定看護師教育機関（摂食・嚥下障害看護）の認定を受ける。
令和元年 07 月	認定看護師教育課程（摂食・嚥下障害看護）第 1 回開講式
令和 2 年 01 月	認定看護師教育課程（摂食・嚥下障害看護）第 1 回修了式
令和 3 年 01 月	1 号館 ANNEX（別館）の竣工
令和 3 年 03 月	保健科学部放射線学科、臨床工学科第 1 回学位記授与式の举行
令和 3 年 03 月	保健科学研究科博士後期課程第 1 回学位記授与式の举行
令和 3 年 04 月	学校法人群馬パース大学（旧 学校法人群馬パース学園）に設置者名称変更
令和 3 年 04 月	リハビリテーション学部理学療法学科、作業療法学科開設、言語聴覚学科開設
令和 3 年 04 月	リハビリテーション学部理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科第 1 回入学式の举行
令和 4 年 04 月	保健科学部（検査技術学科・放射線学科・臨床工学科）が医療技術学部へ名称変更

令和 4 年 04 月 看護学部看護学科開設

令和 4 年 04 月 看護学部看護学科第 1 回入学式の挙行

2. 本学の現況

・ 大学名

群馬パース大学 群馬パース大学大学院

・ 所在地

群馬県高崎市問屋町一丁目 7 番地 1 【1 号館】

(看護学科・理学療法学科・作業療法学科・言語聴覚学科・図書館棟)

群馬県高崎市問屋町一丁目 8 番地 1 【2 号館】 (検査技術学科棟)

群馬県高崎市問屋町一丁目 3 番地 8 【3 号館】 (体育棟)

群馬県高崎市問屋町三丁目 3 番 4 【4 号館】 (放射線学科・臨床工学科棟)

群馬県高崎市問屋町一丁目 5 番地 2 【5 号館】 (学生支援センター等)

群馬県吾妻郡高山村中山 6859-252 【グラウンド】

・ 学部構成

学部等	学科、専攻・課程
看護学部 ^{※1}	看護学科
リハビリテーション学部 ^{※2}	理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科
医療技術学部 ^{※3}	検査技術学科、放射線学科、臨床工学科
保健科学部	看護学科 ^{※4} 、理学療法学科 ^{※5}
大学院保健科学研究科	保健科学専攻 博士前期課程 保健科学専攻 博士後期課程

※1 令和 4 (2022) 年 4 月、開設

※2 令和 3 (2021) 年 4 月、開設

※3 令和 4 (2022) 年 4 月、「保健科学部」より学部名称変更

※4 令和 4 (2022) 年 4 月、学生募集停止

※5 令和 3 (2021) 年 4 月、学生募集停止

・学生数、教員数、職員数

全学部定員及び在籍学生数

学部	学 科	入学 定員	編入 学 定員	収容	在籍	編入 学生数 (内数)	b/a
				定員 (a)	学生 総数 (b)		
看護 学部	看護学科	80	—	80	87	0	1.09
看護学部 合計		80		80	87	0	1.09
リハビリ テーショ ン学部	理学療法学科	60	—	120	146	0	1.22
	作業療法学科	30	—	60	69	0	1.15
	言語聴覚学科	30	—	60	63	0	1.05
リハビリテーション学部 合計		120		240	278	0	1.16
医療技術 学部	検査技術学科	60	—	240	275	0	1.15
	放射線学科	70	—	280	323	0	1.15
	臨床工学科	50	—	200	221	0	1.11
医療技術学部 合計		180		720	819	0	1.14
保健科 学部	看護学科 ^{※1}	—	—	240	267	0	1.11
	理学療法学科 ^{※2}	—	—	120	134	0	1.12
保健科学部 合計		—	—	360	401	0	1.11

※1 令和4（2022）年4月、学生募集停止

※2 令和3（2021）年4月、学生募集停止

保健科学研究科定員及び在籍学生数

研究科	専攻	入学定員	収容定員	在籍学生総数	b/a
			(a)	(b)	
保健科学研究科	保健科学専攻 博士前期課程	8	16	17	1.06
	保健科学専攻 博士後期課程	2	6	3	0.50
合計		10	22	20	0.91

学部教員数

学部・学科		専任教員数					助手
		教授	准教授	講師	助教	計	
看護学部	看護学科	9人	6人	6人	8人	29人	4人
リハビリテーション学部	理学療法学科	6人	3人	4人	5人	18人	0人
	作業療法学科	4人	3人	1人	2人	10人	0人
	言語聴覚学科	4人	2人	3人	1人	10人	0人
医療技術学部	検査技術学科	5人	3人	4人	1人	13人	2人
	放射線学科	6人	4人	2人	3人	15人	1人
	臨床工学科	5人	2人	5人	2人	14人	0人
保健科学部	看護学科	—	—	—	—	—	—
	理学療法学科	—	—	—	—	—	—
計		39人	23人	25人	22人	109人	7人

保健科学研究科教員数

研究科・専攻、研究所等		研究指導教員及び研究指導補助教員		
		研究指導教員	研究指導補助教員	計
保健科学研究科	保健科学専攻 博士前期課程	28人	4人	32人
	保健科学専攻 博士後期課程	12人	1人	13人
保健科学研究科計		40人	5人	45人

*一部保健科学部との兼担

職員数	
正職員	41人
その他	28人
計	69人

Ⅲ. 評価機構が定める基準に基づく自己評価

基準 1. 使命・目的等

1-1 使命・目的及び教育目的の設定

1-1-① 意味・内容の具体性と明確性

1-1-② 簡潔な文章化

1-1-③ 個性・特色の明示

1-1-④ 変化への対応

(1) 1-1 の自己判定

「基準項目 1-1 を満たしている。」

(2) 1-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

1-1-① 意味・内容の具体性と明確性

1-1-② 簡潔な文章化

1-1-③ 個性・特色の明示

1-1-④ 変化への対応

大学の使命・目的及び教育目的の具体的な明文化と簡潔な文章化については以下のようになっている。

本学及び群馬パース大学大学院（以下、「本学大学院」という。）の使命・目的については、「群馬パース大学学則」（以下、「学則」という。）第 1 条及び「群馬パース大学大学院学則」（以下、「大学院学則」という。）第 2 条に定めている。

大学の使命は、「建学の精神」に学生の理解が深まる表現を用いた補足説明を加え表記している。

本学ホームページ、学生便覧等における「建学の精神」の補足説明

Paz は、平和を意味するポルトガル語、パース (Paz) に由来します。同時に Paz にはこの 3 文字を頭文字とする Pessoa (個性)、Assistencia (互助)、Zelo (熱意) の意味が与えられています。

Paz (平和) 平和で公正な社会の発展

Pessoa (個性)
Assistencia (互助)
Zelo (熱意)

個人の尊厳と自己実現、
多様な人々の共存と協調、
知の創造、
への貢献

次に大学及び大学院の目的は、簡潔な表現で以下のように具体的に文章化されている。

【大学の目的】

豊かな教養と人間愛を備えた質の高い保健医療専門職を育成し、保健・医療・福祉サービスとの協働及び知の創造を通じて、国際社会、地域社会に貢献することを目的とします。

【大学院の目的】

現代医療の高度化、複雑化、多様化に幅広く対応するために、保健科学を看護学、理学療法学、病因・病態検査学、放射線学、臨床工学の立場から探求するとともに、保健科学に共通する高度な学術的基盤を修得し、各分野における次世代を担える研究能力と豊かな人間性を備え、その分野で活躍できる教育者、研究者、指導者を育成することを目的とします。

本学の教育目的については、学則（第3条の3）及び大学院学則（第2条）で規定し、学内外に示している。

学部及び保健科学研究科の教育目的については、以下のとおり本学ホームページ(以下、「本学HP」という。)において広く開示されている。

教育研究上の目的・養成する人材像

(ア) 看護学部

建学の精神である「平和で公正な社会の発展」を目指し、豊かな教養と人間愛、看護職としての知識と技術、柔軟な適応力を備え、保健・医療・福祉サービスの中で看護の役割を果たし、広く社会に貢献していける人材を養成することを目指します。そのため、看護の対象を全人的に捉え、科学的根拠に基づいた看護を実践する能力、社会の変化や環境に柔軟に適応し、医療チームの中で協調して看護の役割を果たす能力を習得させ、あわせて看護職としての感性や倫理観、社会の平和と発展に貢献していこうとする姿勢を育てることを教育研究上の目的としています。

1) 看護学科

人の尊厳を尊重できる豊かな人間性と高い見識をもち、看護の対象を全人的に捉え、様々な人々と調和し連携しながら、科学的根拠に基づく判断と適切な技術を用いて看護を実践でき、さらには、地域社会や国際社会にも関心を向け、看護学をとおして社会の平和と発展に貢献していくことを目指し、生涯にわたって自己研鑽し続けることができる人材を養成することを目指します。そのため、看護の対象とその健康課題を適切に捉え、科学的根拠に基づいた看護を実践できる能力、チーム医療の中で多職種と連携し、リーダーシップを発揮できる能力、社会の変化や地域の特性を踏まえ、多様な人や環境に積極的かつ柔軟

に対応できる能力を習得させること、また、看護職に相応しい感性、倫理観、教養、及び看護職として対象に寄り添い、役割を果たし、社会に貢献していこうとする姿勢を育てることを教育研究上の目的としています。

(イ) リハビリテーション学部

リハビリテーション学部では、建学の精神である「平和で公正な社会の発展」を目指す豊かな教養と人間愛、そして情熱に基づいた人間性の涵養を基盤とし、地域の医療・福祉と生活上の困難を抱える障害を持った人々の自立及び生活の質の向上を支援するために、専門機関や施設において、多職種と連携し共同してその責務を果たすことができる知識・技術と実践能力を備えたリハビリテーション専門職者を養成することを目的としています。

そのため、教育研究上の目的は、対象者の生活の質の向上と社会参加を目指すために、対象者の自分らしく生きようとする主体性を尊重し、対象者が必要とする機能の回復・代償あるいは残存能力の強化を最適に図ることができること、そして、地域社会を含めた生活環境づくりに医療専門職として参加し、十分に支援できることを目指します。

1) 理学療法学科

いかなる障害を持つ人に対しても、人としての尊厳と権利を認識できる真摯で柔軟な心を持ち、身体に障害を持つ対象者が自分らしく活動し、社会へ参加するという目的のために、多様で最新の理学療法の知識と技術を求め、それらを駆使して、運動や動作能力の向上を図ることができる人材養成を目指します。急性期から回復期、維持期リハビリテーションにおいて活躍できるように、基本となる理学療法の知識と技術を幅広く学習し、多職種連携の中で実践し貢献できる能力を培うことを目指します。さらに、リハビリテーション分野にとどまらず、健康維持・増進に貢献できる力を養うことを教育目的としています。

2) 作業療法学科

年齢の差異や障害の程度に関わらず、対象者が自分らしく人生を送るよう支援する作業療法を学び、仕事・生産的活動・遊び、余暇活動、日常生活活動からなる作業を求める人間を多側面から理解し、多様な臨床現場や地域社会で求められる分野において、作業療法の専門性と知識を生かして柔軟に活躍できる人材養成を目指します。

対象者や家族、他職種との適切な対人関係を作るコミュニケーション能力、協調性を基盤とした多職種連携を図ることのできる能力、求められる問題の解決に向けて問いを立て続ける意識、複雑な人間行動を理解するために論理的に思考する科学的視点と対象者の個別で多様な生活を洞察する力、作業療法の発展と社会に貢献する活動や研究に参加しようとする能力を培うことを教育目的としています。

3) 言語聴覚学科

高いコミュニケーション能力を有し、他者や地域に貢献する意識、新たな課題や未知の課題を創造的に解決しようとする意欲、さらに専門知識・技術を生涯にわたって学習し続ける倫理観を有する人材養成を目指します。

言語聴覚士の役割の理解に基づき、人が地域で生活する視点に立ち、高次脳機能障害・

言語発達障害・運動系障害及び聴覚系障害を持つ対象者のコミュニケーション能力の評価はもとより、活動、地域・社会参加の生活機能を多面的に支援でき、また、その方法の開発に関わろうとする姿勢を培うことを教育目的としています。

(ウ) 医療技術学部

医療技術に裏付けられた医学的知識と専門技術にかかわる知識、技術力を養い、高度な医療人として、個人の尊厳と倫理を尊重する人間性の醸成を基盤とし、社会が求める医療技術を国際社会、地域社会と協働して実践できる、熱意を持ち自ら学ぶ人材を養成することを目的としています。

1) 検査技術学科

生命の尊厳を理解し、思いやりの心を持つとともに高い倫理観を備え、臨床検査分野において健康や医療に関する専門知識と最新技術を学び、科学的根拠に基づく適切な判断ができ、臓器移植、遺伝子治療及び不妊治療分野などの生命科学や検査技術学分野に貢献できる人材で、実践的な診療支援ができる質の高い臨床検査技師（Clinical Laboratory Scientist）の人材養成を目指します。

医療の現場では様々な要素が要因・背景となって生じる課題や問題は千差万別であり、それらの状況に的確・柔軟に対応するため、実践的な高度な知識と技術を習得し、科学的根拠に基づく適切な判断能力と問題解決能力を培うことを教育目的としています。

2) 放射線学科

様々な疾病で苦しむ人々に対して、尊厳と人間愛をもって、診療画像検査、放射線治療の過程をとおして、病気の発見・治療を目指す高度医療技術をもった人材養成を目指します。

また、放射線による障害や防護、安全管理をとおして、画像生成と解析に関する知識、放射線と物理、生物、化学との相互作用による医療技術に関する知識を深め、問題解決能力を有し、高度なデータ・サイエンスと連携した臨床応用技術を自ら実践できる臨床力を養うことを目的とします。

3) 臨床工学科

生命の尊厳を自覚し、畏敬の念を持つとともに豊かな人間性と高い倫理観を備え、医学・工学に関する専門知識と技術を学び、論理的思考・高い洞察力と的確な判断力をもって医療機器の操作及び保守管理を行うことができ、チーム医療の一員として医療に貢献できる質の高い臨床工学技士の人材養成を目指します。

高度化・複雑化する医療技術に対応するため、医工学に関する基本的知識・技術を修得し、医療分野におけるさまざまな課題に対して、国際的視野を兼ね備えた広い視野で物事を捉え、問題意識と探求心、問題解決能力を培うことを教育目的としています。

(エ) 保健科学研究科

1) 保健科学研究科（博士前期課程）教育目標

1. 高度な専門知識・能力を有する実践者の育成

高度な倫理観と社会に対する深い洞察力、保健医療をとりまく社会システム、医学・医療の最新の知識を有し、根拠に基づいた高度な保健医療の実践を提供し、その結果を分析、蓄積するとともに、実践を研究、教育へと還元できる人材を育成します。

2. 保健医療分野においてリーダーシップを発揮する指導者の育成

保健医療システムを包括し、対象者の QOL 向上のために資源を活用し、他職種との協働の中でリーダーシップを発揮し、ケアを推進できる人材を育成します。

3. 実践分野において研究能力・教育能力を発揮する実践者・指導者の育成

臨床現場において生じる実践上の問題を抽出・分析し、その解決を図るために研究を推進・指導できる人材を育成します。また、臨床現場での新卒者、現任者を対象とする卒後教育、医療専門職養成機関での教育実践において、教育理論に基づいた教育方法を開発・構築し、実践できる人材を育成します。

2) 保健科学研究科（博士後期課程）教育研究上の目的

大学院修士課程における教育・研究を通して養われた知識や技術による高度な専門能力をさらに高め、医療科学領域において国際的な視野に立ち、自ら独創性の高い研究を遂行、指導できる教育・研究者、及び医療現場の高度な専門技術者を育成することを目的とします。

このように本学は使命・目的及び教育目的に大学の個性・特色を反映させ、各媒体でその趣旨を一貫した形で明示している。

(3) 1-1 の改善・向上方策（将来計画）

本学は大学の目的を踏まえ、開学以来一貫して建学の精神に基づいて保健医療専門職を育成している。しかしながら、大学の使命・目的及び教育目的については各職種養成所の指定規則改正等の法令改正や、社会情勢の変化に注視し、本学の「中長期目標・中長期計画（以下、「中長期計画」という。）」の見直しを実施されるときなど、必要に応じて本学の使命・目的及び教育目的の見直しを実施していく予定である。

1-2 使命・目的及び教育目的の反映

1-2-① 役員、教職員の理解と支持

1-2-② 学内外への周知

1-2-③ 中長期的な計画への反映

1-2-④ 三つのポリシーへの反映

1-2-⑤ 教育研究組織の構成との整合性

(1) 1-2 の自己判定

「基準項目 1-2 を満たしている。」

(2) 1-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

1-2-① 役員、教職員の理解と支持

本学の教職員協働による大学運営体制を図 1-2-1 に示す。大学内の審議事項は各種会議等で発議され、教授会、研究科委員会又は大学協議会にて承認され周知される。審議内容が法人を含む場合は大学協議会から発議され、法人運営会議又は理事会にて承認され周知される。教職員への周知は、学科会議、事務局会議などを通して全員に行われる。

その意思決定機構の中で、教職員は学科会議、各種委員会等に参加し、意思決定プロセスに関わる。また意見なども前述の各種会議を通して十分に尊重され、組み込まれる仕組みとなっている。

【大学・大学院共通】

大学協議会	学長 副学長 研究科長 各学部長 (議長:学部長) 各学科長 教養部責任者 IR推進室長 事務局5名
-------	--

会議名	構成員						
学術マネジメント会議	学長 副学長 研究科長 各学部長 (議長:学部長) 各学科長 教養部責任者 事務局2名						
財務マネジメント会議	学長 副学長 研究科長 各学部長 (議長:学部長) 各学科長 教養部責任者 事務局3名						

全学教学運営委員会	学長 副学長 研究科長 各学部長 (議長:学部長) 各学科長 教養部責任者 下部委員会責任者11名 事務局2名
-----------	---

【全学教学運営委員会 下部委員会】

会議名	構成員									
教員評価委員会	学長 副学長 研究科長 各学部長 (議長:学部長) 事務局2名									
会議名	構成員									
	看護学科	理学療法学科	作業療法学科	言語聴覚学科	検査技術学科	放射線学科	臨床工学科	教養部	事務局	
IR推進室会議	1名	3名			3名			1名	3名	
SD委員会	1名	3名			3名			1名	3名	
自己点検評価委員会	1名	3名			3名			1名	4名	
情報システム委員会	1名	3名			4名			1名	3名	
紀要編集委員会	1名	4名			3名			1名	3名	
研究倫理審査委員会	学内委員：13名 学外委員：3名									3名
利益相反マネジメント委員会	学内委員：9名 学外委員：2名									3名
バイオセーフティ委員会	3名				4名			1名	3名	
学生支援センター会議 (学生相談室運営委員会) (キャリア支援室運営委員会)	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	3名	
健康管理センター会議	1名	1名	1名	1名	1名	1名	1名	2名	3名	
国際交流センター会議	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	3名	
国際交流センター会議	2名	2名	2名	2名	2名	2名	1名	2名	4名	
地域連携センター会議	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	5名	
看護実践教育センター運営委員会 (看護実践教育センター 視守看護実践教育課程委員会)	センター長 主任教員 専任教員 看護学科長 事務局6名									
(看護実践教育センター 認定看護師教育課程入試委員会)	センター長 主任教員 専任教員 外部委員2名 事務局2名									
(看護実践教育センター 特定行為研修管理委員会)	学長 センター長 主任教員 専任教員 有資格者1名 外部委員1名 事務局2名									

【臨時委員会】

会議名	構成員									
数理・データサイエンス・AI教育プログラム委員会	1名	3名			3名			2名	3名	
会議名	構成員									
新型コロナウイルス感染症対策委員会	学長 副学長 研究科長 各学部長 学生委員長 健康管理センター長 事務局3名									

【大学院】

研究科委員会	学長 副学長 研究科長 研究科長補佐 (議長:研究科長) 領域責任者【前期課程:6名 後期課程:1名】 事務局2名
--------	---

会議名	構成員	
博士前期・後期課程運営委員会	教員 8名	事務局 6名
FD委員会	教員 6名	事務局 3名
教員審査委員会(保健科学研究科)	研究科長(議長) 領域責任者6名	事務局2名

【学部】

教授会	学長 副学長 各学部長 (議長:学部長) 各学科長 教養部責任者 全学部教授 事務局3名
-----	--

会議名	構成員									
	看護学科	理学療法学科	作業療法学科	言語聴覚学科	検査技術学科	放射線学科	臨床工学科	教養部	事務局	
教務委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	3名	2名	4名	
実習部会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	4名		
学生委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	3名	
入試委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	4名	
広報委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	4名	
FD委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	4名	
国家試験対策委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	2名	4名		
教員審査委員会(看護学部)	学部長 学科長 教養部責任者 事務局2名									
教員審査委員会(リハビリテーション学部)	学部長 各学科長 教養部責任者 事務局2名									
教員審査委員会(医療技術学部)	学部長 各学科長 教養部責任者 事務局2名									
附属図書館運営委員会	1名	3名			3名			2名	3名	
附属研究所運営委員会	1名	3名			4名			1名	5名	
附属研究所先端医療科学研究センター運営委員会	学長 センター長 附属研究所運営委員長 事務局3名									

図 1-2-1 教職員協働による大学運営体制

1-2-② 学内外への周知

本学の使命である建学の精神、大学の目的及び教育研究上の目的・養成する人材像及び大学院の目的の、学外に対する周知は、本学 HP に掲載して行っている。

一方、学内に対する建学の精神の周知は、学生の一番目につきやすい 1 号館学生ホールの壁面や附属図書館の出入口、また 4 号館の 2 階出入口に掲げる他、大学の目的及び教育研究上の目的・養成する人材像の周知は、学生に配付する学生便覧を通して行っている。

1-2-③ 中長期的な計画への反映

令和 4 年（2022）年 4 月に中長期目標・中長期計画を見直し、新たに策定した。今後も中長期計画は本学の重要な位置づけとし、企画課が策定した中長期計画を大学協議会や法人運営会議において定期的に見直しを行う。

1-2-④ 三つのポリシーへの反映

令和 4 年（2022）年度の学部の再編により、これまでの三つのポリシーを見直し、新たに策定した。看護学部、リハビリテーション学部、医療技術学部、保健科学研究科（博士前期課程）及び保健科学研究科（博士後期課程）の三つのポリシーについては、以下のとおり本学 HP において広く開示されている。

（ア）看護学部看護学科

1) ディプロマ・ポリシー

大学の目的のもとに定められた教育課程にそって研鑽に努め、卒業に必要な単位を修得し、以下の要件を満たすと認められた者に学位を授与します。

1. 社会人の基盤となる豊かな感性、倫理観、幅広い教養を備え、看護職としての態度を身につけている。
2. 看護の対象を身体的・心理的・社会的側面からとらえることができる。
3. 対象の健康課題を適切にとらえ、科学的根拠（知識・技術）に基づいた看護が実践できる。
4. チーム医療の中で多職種と協調し、調整することができ、リーダーシップを発揮できる。
5. 生涯にわたって専門分野を探究し、その発展に貢献する意欲と姿勢を身につけている。
6. 社会の変化や地域の特性をふまえ、多様な人や環境に積極的かつ柔軟に対応できる。
7. 世界で生じている保健医療の問題に関心をもち、看護職の役割を考えることができる。

2) カリキュラム・ポリシー

看護学部看護学科は、ディプロマポリシーを実現するために、教育課程を以下のように編成します。

1. 大学初年次教育を充実させ、在学中の成長を学生・教員が共に確認しあうために、修学ポートフォリオを活用します。
2. 豊かな感性と倫理観、幅広い教養を身に付けるために、思想・表現・環境・情報に関連する科目を教養科目群に配置します。

- 3.看護の対象となる人間を理解するために、発達や生活及び社会に関連する科目を教養科目群に配置します。
- 4.看護学を理解する上で基盤となる知識を獲得するために、人体の構造と機能、疾病の成り立ちと回復の促進、健康支援と社会保障制度などに関連する科目を専門基礎科目群に配置します。
- 5.専門科目群は看護学の概要を理解し、具体的な看護の方法を段階的に学べるよう科目を配置します。授業は講義・演習・実習を有機的に連動させて展開します。
- 6.授業では、能動的学習を充実させ、自ら考え、解決する力を養うために、多様なアクティブ・ラーニングの方法を積極的に取り入れます。
- 7.実習は、看護実践能力を身に付けるために、多様な場を活用して、入学後早期から段階的に実施します。
- 8.チーム医療に対する理解を深めるために、多職種連携・協働を学ぶ科目を配置します。
- 9.看護に対する関心や意欲を高め、更に探求できるための科目を適切な時期に配置します。
- 10.助産師または保健師の国家資格取得希望者には、各国家試験受験に必要な科目を選択できるように配置します。
- 11.人の多様性を理解し、国際的視野を広げるために、コミュニケーション、外国語、国際看護および看護の各専門領域における国際的な課題について学ぶ科目を初年次より段階的に配置します。

3) アドミッション・ポリシー

豊かな人間性と高い見識を持ち、確かな知識・技術をもとに多職種と協働して人々の健康生活を支援し、地域社会に貢献できる看護職(看護師・保健師・助産師)を養成する看護学部看護学科では、次のような学生を受け入れます。

- 1.相手の立場に立って物事を考え、思いやりをもって関わることができる人
- 2.人の健康や生活に関心を持ち、地域社会の要請に応え、貢献したいという意欲を持つ人
- 3.多様な人と積極的にコミュニケーションを取り、協力して行動することができる人
- 4.看護学の学修に必要な基礎学力を有し、探究心を持って主体的に学習する姿勢のある人
- 5.基本的な生活態度が身に付いており、心身の健康に気を配ることができる人

(イ) リハビリテーション学部

1) ディプロマ・ポリシー

リハビリテーション学部の教育目的に基づき、学生が卒業時まで身に付けるべき知識や能力を次のように定めています。これらを身につけたことを卒業要件とし、学位を授与します。

- 1.倫理観を持って障害の有無にかかわらず、人間の個性と尊厳を尊重する姿勢
- 2.人間や社会に関する幅広い教養に根差し、リハビリテーションを取り巻く諸問題を認

識できる能力

- 3.リハビリテーションにおける専門領域に必要な基本的知識と技術
- 4.多様化する地域社会の諸問題を理解し、多職種と連携してリハビリテーションを実践できる能力
- 5.自己研鑽に励み、人格的成長を目指す姿勢

①理学療法学科 ディプロマ・ポリシー

理学療法学科では、倫理観をもって人間の個性と尊厳を尊重する姿勢に加え、学生が卒業時まで身に付けている知識や能力を次のように定めています。

- 1.理学療法に必要な自然科学の学びだけでなく、人間が生み出した文化や歴史、社会の動きと仕組み、生命倫理、コミュニケーションの学びを積み重ねた豊かで幅広い教養
- 2.理学療法の実践に向かうための必要な基礎医学、臨床医学、理学療法学の基本的知識及び技術
- 3.地域に根差したリハビリテーションの必要性和多職種連携による問題解決の重要性の理解
- 4.自己研鑽に励み、自ら疑問や課題を設定し、問題解決のために調査・検討・分析できる能力

②作業療法学科 ディプロマ・ポリシー

作業療法学科では、倫理観をもって人間の個性と尊厳を尊重する姿勢に加え、学生が卒業時まで身に付けている知識や能力を次のように定めています。

- 1.心身の障害の有無によらず、家族、多職種との適切な対人関係を作るコミュニケーション能力と協調性
- 2.複雑な人間行動を理解するために論理的に思考する科学的視点と対象者の個別で多様な生活を洞察する能力
- 3.求められる問題の解決に向けて、問いを立て続ける能力
- 4.作業療法学の発展と社会に貢献する活動や研究に主体的に従事しようとする姿勢

③言語聴覚学科 ディプロマ・ポリシー

言語聴覚学科では、倫理観をもって人間の個性と尊厳を尊重する姿勢に加え、学生が卒業時まで身に付けている知識や能力を次のように定めています。

- 1.QOLの向上を支援するための言語聴覚療法学に必要な基本的知識・技術
- 2.リハビリテーションに関わる多職種、家族、地域住民とのコミュニケーション能力と協調性
- 3.新たな課題、未知の課題に取り組み解決しようとする姿勢
- 4.人間の個性と尊厳を尊重し、言語聴覚療法に必要な知識と技術を生涯にわたり学習しようとする倫理観

2) カリキュラム・ポリシー

リハビリテーション学部では、ディプロマ・ポリシーに沿って、その専門性に応じ、次

の趣旨を盛り込んだ科目によってカリキュラムを編成しています。特に、多職種連携の基礎となる科目と、国際生活機能分類（ICF）の概念に基づくリハビリテーションに対応できるように授業科目を工夫しています。

- 1.豊かな教養、コミュニケーション能力の育成、人工知能や情報社会に対応する能力、人間を多側面から理解するために、『人と社会及び自然の理解』と『情報と言語の理解』に区分した教養科目を配置しています。
- 2.『大学の学びの基盤』として、学び方入門、専門への導入、多職種理解と連携の科目を配置しています。
- 3.人間の運動や行動を解剖学、生理学、運動学、心理学、発達学的観点から分析・考察でき、リハビリテーション専門職として必要な医学的知識を学ぶための科目を配置しています。
- 4.リハビリテーションにおける専門領域に必要な基本的知識と技術を身につけるため、各学科に『評価学』『治療学』『支援学』の該当科目を配置しています。
- 5.保健医療チームとして、連携・協働を図りながら、社会参加、健康増進、障害予防の見方ができるように、「チーム医療とリハビリテーション」、「地域リハビリテーション学」を配置しています。
- 6.学内で学んだ知識と実践との経験を統合できる機会として、対象者との人間関係の構築、施設内外における多職種連携の構築を経験し、将来の人間像を形成する場として、『臨床実習』を配置しています。
- 7.専門職として基盤となる科学的思考や自己研鑽力を身につけるため、研究の基礎につながる科目を配置しています。

①理学療法学科 カリキュラム・ポリシー

理学療法学科では、ディプロマ・ポリシーに沿って、以下のようにカリキュラムを編成しています。

- 1.幅広い教養と、専門に必要な物理学などの自然科学の科目、大学での学び方を1年次で学びます。
- 2.理学療法に必要な基礎医学と臨床医学などの専門基礎科目及び語学を1年次から2年次にかけて学ぶように配置しています。
- 3.理学療法の専門科目は、全学年で学べるように、評価学及び総論を1・2年次に、疾患別理学療法、及び分野別の理学療法を2・3年次に、臨床実習を順次内容が豊かになる形で3・4年次に配置しています。
- 4.自らの問題意識をもち、科学的手続きをもって解明していく機会として「理学療法研究論」、「事例研究法」、及び「卒業研究」を3・4年次で学べるように配置しています。

②作業療法学科 カリキュラム・ポリシー

作業療法学科では、ディプロマ・ポリシーに沿って、以下のようにカリキュラムを編成しています。教養科目、専門基礎科目で修得した知識や技術を基に、専門科目でさらにそれを拡大していく編成としています。

- 1.幅広い教養を修得するため、教養科目群、共通基盤科目群を中心に学びつつ、医療専

門職としての意識を高めるための専門基礎科目群に加え、「作業療法学概論」、「基礎作業学」といった専門科目を必修科目として1年次から配置しています。

- 2.基礎医学系及び臨床医学系の専門基礎科目を学び、作業療法の専門科目として『作業療法評価学』、『作業療法治療学』区分の科目を学ぶことで具体的な作業療法の知識の輪郭が理解できるよう段階的に配置しています。なお、後期の「見学実習」によって実践的な知識への導入を図ります。
- 3.作業療法の専門科目の学びから、より実践的に考えられるよう「作業療法理論」、「作業療法リーズニング」、「日常生活活動学」を深く学びます。また、「作業療法基礎実習Ⅰ」、「作業療法基礎実習Ⅱ」、「総合臨地実習Ⅰ」「総合臨地実習Ⅱ」でこれまでの学習効果が確認できる配置とします。
- 4.論理的な思考、問題解決能力を高めるために、「作業療法学研究法演習」、「事例研究法」、「卒業研究」を3・4年次で学ぶことができるよう配置します。

③言語聴覚学科 カリキュラム・ポリシー

言語聴覚学科では、ディプロマ・ポリシーに沿って、以下のようにカリキュラムを編成しています。

- 1.大学で学ぶことの意味と学習の姿勢、地域への貢献、研究の姿勢、並びにコミュニケーション・スキルの向上、その他の言語聴覚士の役割について、教養科目、専門基礎科目、1年次の専門科目で学びます。
- 2.人間の尊厳並びに権利と障害、国際生活機能分類（ICF）の理解、個性の基盤である生活と地域・社会参加をそれが展開される地域そのものについて、1年次から2年次にかけて専門基礎科目、専門科目により理解を深めます。
- 3.言語聴覚機能の評価、機能回復訓練、機能回復の限界と障害を持ちながら地域・社会に参加するための支援並びに街づくりの実践について、2・3年次の専門科目に地域参加系科目を配置して学習します。
- 4.臨床実習は、学んだ知識を確認し、問題解決能力、創造力、実践力、応用力が育つよう1年次から4年次に配置します。

3) アドミッション・ポリシー

地域の医療・福祉と生活上の困難を抱える障害を持った人々の自立及び生活の質の向上を支援する専門職を養成するリハビリテーション学部では、以下のような学生を受け入れます。

- 1.人に対する関心や思いやりがある人
- 2.豊かな人間性、柔軟性、協調性を備え、他者との連携を保つことができる人
- 3.物事に対して自ら積極的に学ぶ姿勢・態度を有している人
- 4.入学後の修学に必要な、高等学校で学んだ基礎学力を有している人
- 5.保健・医療・福祉に対して強く関心を持ち、社会貢献しようとする意欲のある人
- 6.基本的な生活態度が身につけており、心身の健康に気を配ることができる人

①理学療法学科 アドミッション・ポリシー

身体に障害を持った方々を援助する医療職を養成する理学療法学科では、以下のような学生を受け入れます。

1. コミュニケーション能力を持って他者に共感でき、人間関係を作ることができる人
2. 人の運動・動作やその障害に関心がある人
3. 問題解決のために誠実で、常に協調性をもって最善を尽くす熱意のある人
4. 理学療法士になる意志を持ち、積極的に学ぶ意欲を持つ人

②作業療法学科 アドミッション・ポリシー

生活や社会参加に問題を抱えた方々を援助する医療職を養成する作業療法学科では、以下のような学生を受け入れます。

1. 他者との関わりを大切にし、相手の立場に立って物事を考えることができる人
2. 人の健康や生活、社会の動きに関心がある人
3. 問題解決のために、粘り強く努力を続けることのできる人
4. 作業療法士になる意志を持ち、積極的に学ぶ意欲を持つ人

③言語聴覚学科 アドミッション・ポリシー

コミュニケーション能力に問題を抱えた方々への援助者としての医療職を養成する言語聴覚学科では、以下のような学生を受け入れます。

1. 社会の出来事に興味を持ち、思いやりと熱意を持って社会貢献しようとする人
2. 未知の課題、新しい課題にひるまず向き合い、解決していこうとする意欲を持つ人
3. 他者と適切にコミュニケーションをとり、協調して行動できる人
4. 言語聴覚士になる意志を持ち、自分の能力を高め続けるための努力を惜しまない人

(ウ) 医療技術学部

1) ディプロマ・ポリシー

医療技術学部の教育目的に基づき、学生が卒業時に身につけるべき知識や能力を次のように定めています。これらを身につけたことを卒業要件とし、学位を授与します。

1. 人権を尊重し、高い倫理観をもって社会に貢献する姿勢
2. チーム医療を実践するための、コミュニケーション能力と協調性
3. 医療技術専門職としての基礎的知識と技術、及び社会人としての教養
4. 医療技術分野の諸課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる能力
5. 生涯にわたって専門分野を探究し、その発展に貢献する意欲と姿勢

①検査技術学科 ディプロマ・ポリシー

検査技術学科では、倫理観をもって人間の個性と尊厳を尊重する姿勢に加え、学生が卒業時に身につけている知識や能力を次のように定めています。

1. 臨床検査で求められる基本的知識及び技術を修得し、これを実践の場で活用することができる能力
2. コミュニケーション能力を生かしチーム医療へ貢献する能力

検査技術学に関する課題等の発見とその解決に向け、科学的根拠に基づいた思考や適

切な判断をする能力

- 3.幅広い教養と医療専門知識を身につけ、多様な価値観の認識と異文化を理解し、グローバル社会に適応できる能力

②放射線学科 ディプロマ・ポリシー

放射線学科では、科学的応用技術をとおして、対象である尊厳と人間愛を尊重する姿勢に加え、学生が卒業時まで身につけている知識や能力を次のように定めています。

- 1.先進・高度化する専門分野の基本的技術を実践できる問題解決型臨床医療技術力
- 2.医療技術専門職としての基礎的知識と医療人としての教養と協調性をもつ医療コミュニケーション力
- 3.多様な情報を適切に分析し、放射線の管理、防護、制御技術をとおして、医療安全に寄与する実践力や研究能力
- 4.人と社会に関心を持ち、自らの医療技術力を応用し、様々な分野で貢献する活動力

③臨床工学科 ディプロマ・ポリシー

臨床工学科では、倫理観をもって人間の個性と尊厳を尊重する姿勢に加え、学生が卒業時に身につけている知識や能力を次のように定めています。

- 1.医工学分野の基本的知識及び展開される医療分野に対応できるスキルを身につけ、実践に活かす能力
- 2.チーム医療の一員として多職種と連携し、全人的医療の実践及び医療安全の確保に貢献できる能力
- 3.思考力・洞察力・判断力を身につけ、医療分野における諸課題について国際的知識水準を背景に解決する能力
- 4.異なる文化を理解・尊重し、国際的視野を持って考察できる能力

2) カリキュラム・ポリシー

医療技術学部では、ディプロマ・ポリシーに沿って、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科のそれぞれの専門性に応じてカリキュラムを編成しています。その教育課程は、教養科目群・共通基盤科目群、専門基礎科目群、専門科目群から構成されています。

- 1.教養科目群は社会人としての教養、問題解決能力、コミュニケーション能力を身につけるため、「人と社会及び自然の理解」の科目群と「情報と言語の理解」の科目群に大別された広範な科目を3学科共通科目として配置しています。
- 2.共通基盤科目群は、「大学の学びの基盤」として、大学の学び入門、大学の学び一専門への誘い、多職種理解と連携の科目を3学科共通必須科目として配置しています。
- 3.専門基礎科目群は、医療技術専門職を養成する3学科それぞれに展開される専門領域の理論、技能の習得のための学術的基盤となる科目を配置しています。
- 4.専門科目群は各学科の専門領域とそれに関連する理論、技能を学ぶ科目を配置し、さらに高い実践力を獲得するため、臨地実習の科目を配置しています。

①検査技術学科 カリキュラム・ポリシー

検査技術学科では、ディプロマ・ポリシーに沿って、以下のようにカリキュラムを編成しています。

- 1.幅広い教養を修得するため、教養科目群、専門基盤科目群を中心に学びつつ、医療技術専門職としての意識を高めるための専門基礎科目群に加え、検査技術の概要を学ぶ専門科目を必修科目として1年次から配置しています。
- 2.多様な疾病、病態に沿った臨床検査を理解する上で必要となる知識と技術を修得するため、専門科目群の必修科目を2年次から多く配置しています。
- 3.専門的知識、実践的検査技術を系統的に修得できるよう体系づけ、専門科目群の学内実習の必修科目を3年次に多く配置しています。
- 4.実践的な高度な知識と技術を修得するための「臨地実習」と将来の医学・医療の発展に貢献できる評価能力及び研究能力を養うための「卒業研究」を4年次に配置しています。

②放射線学科 カリキュラム・ポリシー

放射線学科では、ディプロマ・ポリシーに沿って、以下のようにカリキュラムを編成しています。

- 1.自然科学の基礎、医学系科目や医療技術専門職としての医療コミュニケーションスキルを学ぶための専門基礎科目、大学の学び方を1年次で配置しています。
- 2.放射線学の基礎に関連する物理学、計測学、解剖学、診療放射線技師として必要な知識・技術・態度の基盤を形成する科学力を習得する科目を2年次に配置しています。
- 3.診療放射線技師の臨床実践での高度な思考と基本的技術を学ぶ科目は、3年次を中心にして、講義、演習、学内実習として配置しています。
- 4.専門分野の発展に寄与する科学的思考や倫理観を獲得するための診療放射線学研究は3—4年次を中心に、診療放射線技師としての知識、技術、態度を統合して臨床実践を学ぶ臨床実習は4年次に配置しています。

③臨床工学科 カリキュラム・ポリシー

臨床工学科では、ディプロマ・ポリシーに沿って、以下のようにカリキュラムを編成しています。

- 1.幅広い知識と教養の修得、豊かな人間性を身につけるための教養科目群と共通基盤科目群に加え、医療技術専門職として必要な医学・工学の基礎知識を修得するための専門基礎科目群を中心に学ぶとともに、臨床工学の概要を学ぶ専門科目を必修科目として1年次に配置しています。
- 2.医療者としての基盤を形成するため、生命の尊厳及び倫理観への認識を深めるための教養科目群の「生命倫理学」に加え、臨床工学に必要な臨床医学と理工学の基礎知識を修得する専門基礎科目群と、両者を有機的に統合して医療機器に応用するための知識・技術を修得するための専門科目群を中心に必修科目として2年次に配置しています。
- 3.生体医工学の理論・知識・技術を統合させ、医療技術の提供に必要な実践的な知識と技術を修得するための専門科目（講義・学内実習）と、チーム医療の一員としての臨床工学技士の責任と役割の理解を深め、医療者としての自覚を身につけるための

専門科目「臨床実習」を3年次に配置しています。

4. 修得した知識と技術を整理し、連携させることにより総合的な理解を深め、医療分野における問題の発見と創造的な研究を行う能力、問題解決能力を修得する「卒業研究」を4年次に配置しています。

3) アドミッション・ポリシー

豊かな教養と人間愛を兼ね備えた質の高い医療技術専門職を養成する医療技術学部では、以下のような学生を受け入れます。

1. 人に対する関心や思いやりがあり、相手の立場に立って物事を考えることができる人
2. 医療技術専門職になる意志を持ち、積極的に学ぶ意欲を持つ人
3. 入学後の修学に必要な高等学校で学んだ基礎学力を有し、基本的な生活態度が身につけている人
4. 問題解決のために、協調性をもって最善を尽くす熱意のある人
5. 生命科学や医療技術専門職を生かし、多様な分野に貢献しようとする意欲のある人

①検査技術学科 アドミッション・ポリシー

生命の尊厳を理解し、高い倫理観を備えた医療職を養成する検査技術学科では、以下のような学生を受け入れます。

1. 人を思いやる心を持ち、相手の立場に立って物事を考えることができる人
2. 臨床検査に関する技術と知識を学び、医療に貢献しようとする意欲のある人
3. 協調性があり、独創性と粘り強さで問題を解決しようとする人
4. 生命科学や検査技術学を生かし、多様な分野に貢献しようとする意欲のある人

②放射線学科 アドミッション・ポリシー

多職種との協働と連携からなるチーム医療を推進できる高度医療技術をもった医療職を養成する放射線学科では、以下のような学生を受け入れます。

1. 人に関心を持ち、人を思いやる心、労る心を持ち、相手の立場に立って物事を考えることができる人
2. 社会に対し積極的に関わり、コミュニケーションを大事にできる人
3. 診療放射線技師になるための意思を持ち、自ら学ぶ意欲、挑戦する意欲を持ち、粘り強く主体的に学習する意志のある人
4. 生命科学や放射線科学を生かし、多様な分野で貢献しようとする意欲のある人

③臨床工学科 アドミッション・ポリシー

積極的に社会参加できる精神を培うとともに、生命倫理や人間に対する尊敬心が幅広く持てるよう、人間形成を重んじた医療職を養成する臨床工学科では、以下のような学生を受け入れます。

1. 人を思いやる心、労る心を持ち、相手の立場に立って物事を考えることができる人
2. 臨床工学に関する知識と技術を深く学び、チーム医療及び医療の質の向上に貢献しようとする意欲のある人

3. 社会に対し積極的に関わり、コミュニケーションを大切にし、相互支援に努めることができる人
4. 生命科学や臨床工学を生かし、多様な分野で貢献しようとする意欲のある人

(エ) 保健科学研究科

1) 博士前期課程

①ディプロマ・ポリシー

保健科学研究科博士前期課程を修了し、次に該当するものに修士（保健学）の学位を授与します。

1. 保健医療専門職としての基礎的知識、科学的根拠及び高い倫理観に基づいて問題の探求・解決を図る高度な研究能力を有する。
2. 保健医療分野の諸課題に関して、科学的な手続きと洞察に基づく的確な判断能力を有する。
3. 先進・高度化する専門分野の基本的技術を提供する実践能力を有する。
4. 地域保健医療の実践現場で他の分野と連携して社会に貢献できる教育能力を有する。

②カリキュラム・ポリシー

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる人材を養成するため、以下のとおり教育課程を編成し、実施します。

1. 研究者としての基盤の涵養

研究能力の基盤を形成するために、共通科目に「研究方法特論」、「研究方法論Ⅰ～Ⅴ」、「応用英語」、「保健医療統計学」などの科目を設置します。又、専門の領域における研究実践の方法、すなわち研究テーマの設定から学位論文の完成までを段階を追って教育するために、専門科目に各領域の「特論」、「演習」、「特別研究」を設置します。

2. 高度な実践力とリーダーシップの涵養

保健医療分野におけるリーダーに必要な、専門領域の枠を超えた総合的・学際的な教育を行うために、共通科目に「医療倫理学特論」、「医療経営・管理学特論」、「人体の構造と機能学特論」、「加齢医学特論」、「家族社会学特論」、「保健学特別セミナー」などの科目を設置します。特に、「保健学特別セミナー」は幅広い視野の育成という目的に加え、協働（チームアプローチ）の重要性に鑑み必修科目として設置します。

3. 専門領域における教育能力の涵養

教育機関での教育志向だけでなく、保健医療の様々な場面における教育活動を想定した医療専門領域における教育学の教育を行うために、共通科目に「教育学」を設け、さらに専門科目の「特論」、「演習」のなかで領域ごとに、より実践的な内容を盛り込みます。

履修計画では、体系化された所属専門領域の「特論」、「演習」、「特別研究」を基本に置く。並行して学ぶ共通科目は一部を除き、学習ニーズ、学習進度に合わせて年次にかかわらず柔軟に履修できるように配置します。また、家庭や職場など社会的事情により標準修業年限（2年）での修業が困難な場合に、標準修業年限を超えて履修可

能な長期履修制度を設けます。以上のように、少人数教育の利点を活かし、学習者の志向・ニーズに対応できる柔軟で特色のある大学院プログラムを提供します。

③アドミッション・ポリシー

保健科学研究科博士前期課程ではアドミッション・ポリシーを以下のとおり定めます。

1. 高度な専門知識・能力を有し、実践の場を通して研究・教育に携わっていきたいと考えている人
2. 保健医療分野において対象者の QOL の向上に寄与したいと考えている人
3. 実践上の問題を抽出・分析し、その解決に努力を惜しまない人
4. 教育理論に基づいた教育方法を開発構築し、卒後教育に活かそうと考えている人

2) 博士後期課程

①ディプロマ・ポリシー

保健科学研究科保健科学専攻（博士後期課程）を修了し、次に該当するものに博士（医療科学）の学位を授与します。

1. 独創性・創造性に優れ国際的に通用する研究能力を備えた人材
2. 医療・保健科学分野の教育を行う大学あるいは大学院における教育・研究指導ができる人材
3. 医療現場において、高い倫理観と高度な専門知識に基づいた実践能力を持ち、自立的な研究ができる人材
4. 科学的エビデンスを構築しながら研究開発ができる人材

②カリキュラム・ポリシー

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる人材を養成するため、以下のとおり教育課程を編成し、実施します。

1. 高い倫理性と強い責任感、課題遂行力の涵養
共通科目において、社会的理解を得るための生命倫理に則った研究デザインと倫理的行動能力を修得することを目的とした「生命研究倫理論」と、自らの研究分野以外の幅広い知識と課題に適した研究方法を選択できる能力を修得することを目的とした「医療科学研究法」の科目を設置する。
2. 創造性豊かな優れた研究・開発能力の涵養
専門科目において、科学的エビデンスを構築するための高度解析技術や最新評価法などを修得することを目的とした「特講科目」と、各領域の解決すべき課題を広く探求し、課題解決思考を発展させるため、英文文献講読と教員との討論により、研究の評価・応用能力を養い、国際的な情報発信ができることを目的とした「演習科目」、さらに、医療科学における新たな知見を得るための研究を行い英文論文として公表できることを目的とした「特別研究」を設置する。

③アドミッション・ポリシー

保健科学研究科博士後期課程ではアドミッション・ポリシーを以下のとおり定めます。

1. 科学的・論理的な思考に基づいて独創的かつ実践的な研究を遂行することに意欲のある人
2. 医療・保健科学分野の教育を行う大学、あるいは大学院における教育・研究指導に意欲のある人
3. 医療現場において、高い倫理観と高度な専門知識に基づいた実践能力を持ち、自立的な研究を行うことに意欲のある人
4. 科学的エビデンスを構築しながら研究開発を行うことに意欲のある人

各学部及び保健科学研究科の三つのポリシーは、中長期計画により、具体的目標に変更の必要があった場合、各委員会を通して審議され、教授会及び研究科委員会を経て大学協議会にて決定され、法人運営会議の承認を経て速やかに反映される仕組みとなっている。

1-2-⑤ 教育研究組織の構成との整合性

本学は、学則第 3 条及び「学校法人群馬パース大学組織規程」（以下、「組織規程」という。）第 11 条により看護学部、リハビリテーション学部及び医療技術学部を置き、看護学部のもとに看護学科（入学定員 80 人）を、リハビリテーション学部のもとに理学療法学科（入学定員 60 人）、作業療法学科（入学定員 30 人）、言語聴覚学科（入学定員 30 人）を、医療技術学部のもとに検査技術学科（入学定員 60 人）、放射線学科（入学定員 70 人）、臨床工学科（入学定員 50 人）を置いている。また、教育・研究・実践 3 面の還流を意図して、大学院学則第 4 条・第 5 条及び組織規程第 11 条により、本学に大学院保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程（入学定員 8 人）、博士後期課程（入学定員 2 人）を置いている。

教育、研究を支える附属機関として、学則第 4 条・第 5 条及び組織規程第 11 条により群馬パース大学附属図書館（以下、「附属図書館」という。）、群馬パース大学附属研究所（以下、「附属研究所」という。）を有する（図 1-2-2）。

組織構成は、学長による学務掌握・職員の監督・教育運営の管理（組織規程第 11 条・第 15 条）のもとに、研究科長が統理する大学院研究科（同第 11 条・第 17 条）、学科長が学務を行う看護学科から成り学部長が統理する看護学部（同第 11 条・第 18 条・第 19 条 2 項）、同じく学科長が学務を行う理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科から成り学部長が統理するリハビリテーション学部（同第 11 条・第 18 条・第 19 条 2 項）、同じく、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科から成り学部長が統理する医療技術学部（同第 11 条・第 18 条・第 19 条 2 項）、附属図書館（同第 11 条・第 21 条）及び附属研究所（同第 11 条・第 22 条）が設置され、重要事項の協議のために研究科委員会と教授会が、教授会のもとに教務委員会、学生委員会、入試委員会、広報委員会、FD 委員会、国家試験対策委員会が置かれる（「群馬パース大学教授会規程（以下、「教授会規程」という。）」第 4 条）、という体制で運営されている。

以上から本学では、有機的に大学教員の教育研究をサポートし、また研究内容に関しても群馬パース大学附属研究所などを通して、速やかかつ丁寧にサポートする体制を敷いて

いる。

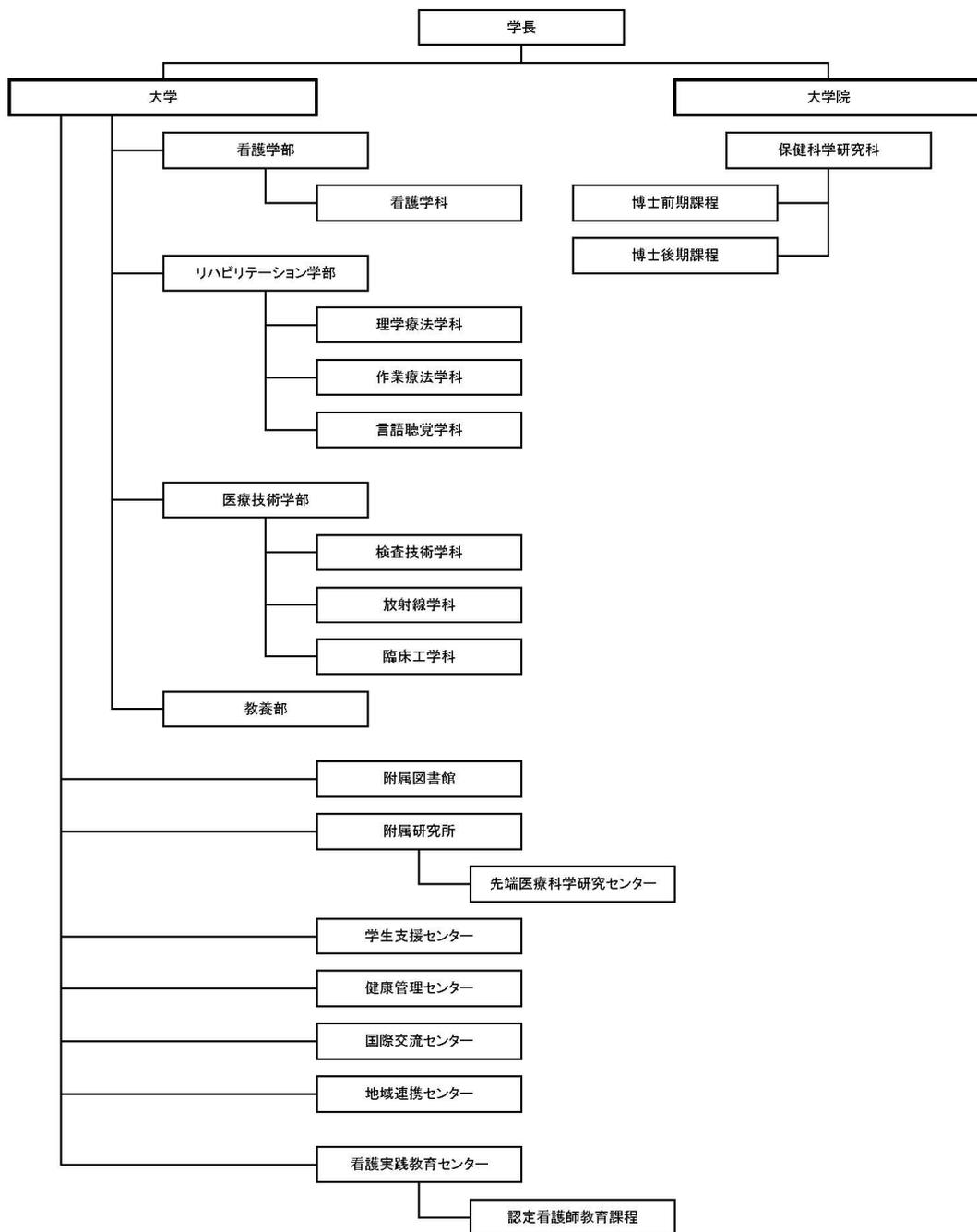


図 1-2-2 群馬パース大学・群馬パース大学大学院 教育研究組織図

(3) 1-2 の改善・向上方策 (将来計画)

社会情勢の変化や大学を巡る状況に迅速かつ適切に対応し、社会のニーズに応えるためにも、今後、大学の使命・目的を的確に遂行していく。大学を巡る状況の変化に対応するため、学長主導による大学協議会と理事会との調整機関である法人運営会議におい

て毎月学内すべての審議事項に対し検証を行っている。また、令和 4 (2022) 年度には、中長期計画の大きな見直しが行われたため、新たな学部・学科等の設置計画や各種指定規則の改正に合わせて今後の三つのポリシーの再整備を行う。

【基準 1 の自己評価】

大学の使命と目的は、学則の第 1 条に示され、教育目的は簡潔な文章で示されている。使命・目的及び教育目的を達成するための三つのポリシーは、本学 HP で周知されているだけでなく、学内の目につきやすい場所に掲示したり、学生便覧に掲載したりしている。教育研究組織は、図 1-2-2 の通り、教育目的に照らして整備されている。令和 4 (2022) 年 4 月に策定された中長期計画を踏まえ、教育目的に基づく三つのポリシーも時代に即して発展させる予定である。

以上のことから、基準 1 を満たしていると判断できる。

基準 2. 学生

2-1 学生の受入れ

2-1-① 教育目的を踏まえたアドミッション・ポリシーの策定と周知

2-1-② アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施とその検証

2-1-③ 入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持

(1) 2-1 の自己判定

「基準項目 2-1 を満たしている。」

(2) 2-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

2-1-① 教育目的を踏まえたアドミッション・ポリシーの策定と周知

(ア) 看護学部

本学看護学部のアドミッション・ポリシーは教育目的を踏まえ基準 1-2-④にあるように定めている。アドミッション・ポリシーは、学生募集要項、本学 HP に掲載し、本学の情報を収集しようとする受験生、保護者及び高等学校関係者等に向けて周知している。

本学 HP では、トップページから直接アドミッション・ポリシーを含む三つのポリシーの掲載箇所にアクセスできるようにしている。

また、進学ガイダンスやオープンキャンパス等の参加者に対しては、担当者よりアドミッション・ポリシーを直接説明して、その浸透を図っている。

(イ) リハビリテーション学部

本学リハビリテーション学部のアドミッション・ポリシーは教育目的を踏まえ基準 1-2-④にあるように定めている。アドミッション・ポリシーは、学生募集要項、本学 HP に掲載し、本学の情報を収集しようとする受験生、保護者及び高等学校関係者等に向けて周知している。

本学 HP では、トップページから直接アドミッション・ポリシーを含む三つのポリシーの掲載箇所にアクセスできるようにしている。

また、進学ガイダンスやオープンキャンパス等の参加者に対しては、担当者よりアドミッション・ポリシーを直接説明して、その浸透を図っている。

(ウ) 医療技術学部

本学医療技術学部のアドミッション・ポリシーは教育目的を踏まえ基準 1-2-④にあるように定めている。アドミッション・ポリシーは、学生募集要項、本学 HP に掲載し、本学の情報を収集しようとする受験生、保護者及び高等学校関係者等に向けて周知している。

本学 HP では、トップページから直接アドミッション・ポリシーを含む三つのポリシーの掲載箇所にアクセスできるようにしている。

また、進学ガイダンスやオープンキャンパス等の参加者に対しては、担当者よりアドミッション・ポリシーを直接説明して、その浸透を図っている。

(エ) 保健科学研究科

本大学院のアドミッション・ポリシーは教育目的（教育目標及び教育研究上の目的）を踏まえ基準 1-2-④にあるように定めている。アドミッション・ポリシーは、学生募集要項、大学院案内、本学 HP に掲載し、保健科学研究科受験生等に周知している。

2-1-② アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施とその検証

(ア) 看護学部

看護学部では、アドミッション・ポリシーに基づいて各学科の特色、専門分野の特性に応じた能力を持つ学生の確保を目的として、学生募集要項（入学試験要項）を定め入学試験を実施している。

開設初年度である令和 4（2022）年度看護学部入学試験においては、従前の保健科学部看護学科におけるこれまでの検証結果を踏まえ、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜、大学入学共通テスト利用選抜の区分を設定し、入学試験を実施している。

看護学部入学試験では、学長の責任のもと「群馬パース大学入学者選考規程」、「群馬パース大学入試問題作成委員会規程」、「群馬パース大学入試委員会規程」、に基づき、入試委員会及び入試広報課が中心となり適切な実施体制を整備し、入試問題作成委員会及び入試広報課が中心となり入試問題を作成し、全学的に実施している。

入学者の選考に関しては「群馬パース大学入学者選考規程」に基づき、入試委員長を議長とする合否判定会議を開催し合否判定を行い、学長が決定している。

看護学部は開設初年度であるが、このように実施されている入学者選抜の方法や運用が妥当、適切であるかについては、これまで保健科学部看護学科の入学者の追跡調査を毎年度入試委員会から IR 推進室にデータ解析を依頼し、その解析結果を入試委員会において検証してきていることを活用しながら、今後看護学部において検証を継続していく。

入試問題の作成は本学が自ら行い基礎学力試験、一般選抜学力検査とともに、ヒューマンエラーの発生を抑えるべくチェックを重ね適切に実施している。

以上のように看護学部ではアドミッション・ポリシーに基づき、「群馬パース大学入学者選考規程」、「群馬パース大学入試問題作成委員会規程」、「群馬パース大学入試委員会規程」に則って公正かつ妥当な方法により適切な運用ができてきているか検証を重ねながら、入学者選抜が実施されている。

(イ) リハビリテーション学部

リハビリテーション学部では、アドミッション・ポリシーに基づいて各学科の特色、専門分野の特性に応じた能力を持つ学生の確保を目的として、学生募集要項（入学試験要項）を定め入学試験を実施している。

令和 4（2022）年度リハビリテーション学部入学試験においては、既存の保健科学部におけるこれまでの検証結果を踏まえ、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜、大学入学共通テスト利用選抜の区分を設定し、入学試験を実施している。

リハビリテーション学部入学試験では、学長の責任のもと「群馬パース大学入学者選考規程」、「群馬パース大学入試問題作成委員会規程」、「群馬パース大学入試委員会規程」、に基づき、入試委員会及び入試広報課が中心となり適切な実施体制を整備し、入試問題作成委員会及び入試広報課が中心となり入試問題を作成し、全学的に実施している。

入学者の選考に関しては「群馬パース大学入学者選考規程」に基づき、入試委員長を議長とする合否判定会議を開催し合否判定を行い、学長が決定している。

入試問題の作成は本学が自ら行い基礎学力試験、一般選抜学力検査ともに、ヒューマンエラーの発生を抑えるべくチェックを重ね適切に実施している。

リハビリテーション学部は令和3（2021）年度に開設した学部であり、開設初年度入学者1学年の修学データのみを追跡調査に留まるが、今後、従前の保健科学部と同様にIR推進室によるデータ解析を活用し、入学者選抜の方法や運用の妥当性、適切性について、入試委員会において検証していく。

以上のようにリハビリテーション学部では、保健科学部と同様にアドミッション・ポリシーに基づき、「群馬パース大学入学者選考規程」、「群馬パース大学入試問題作成委員会規程」、「群馬パース大学入試委員会規程」に則って公正かつ適切な体制のもとに入学者選抜が実施されている。

（ウ）医療技術学部

令和4（2022）年度に保健科学部から名称変更をした医療技術学部では、アドミッション・ポリシーに基づいて各学科の特色、専門分野の特性に応じた能力を持つ学生の確保を目的として、学生募集要項（入学試験要項）を定め入学試験を実施している。

令和4（2022）年度医療技術学部入学試験においては、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜、大学入学共通テスト利用選抜の区分を設定し、入学試験を実施している。

医療技術学部入学試験では、学長の責任のもと「群馬パース大学入学者選考規程」、「群馬パース大学入試問題作成委員会規程」、「群馬パース大学入試委員会規程」に基づき、入試委員会及び入試広報課が中心となり適切な実施体制を整備し、入試問題作成委員会及び入試広報課が中心となり入試問題を作成し、全学的に実施している。

入学者の選考に関しては「群馬パース大学入学者選考規程」に基づき、入試委員長を議長とする合否判定会議を開催し合否判定を行い、学長が決定している。

このように実施されている入学者選抜の方法や運用が妥当、適切であるかについては、入学者の追跡調査を毎年度入試委員会からIR推進室にデータ解析を依頼し、その解析結果を入試委員会において検証している。

入試問題の作成は本学が自ら行い基礎学力試験、一般選抜学力検査ともに、ヒューマンエラーの発生を抑えるべくチェックを重ね適切に実施している。

以上のように医療技術学部ではアドミッション・ポリシーに基づき、「群馬パース大学入学者選考規程」、「群馬パース大学入試問題作成委員会規程」、「群馬パース大学入試委員会規程」に則って公正かつ妥当な方法により適切な運用ができているか検証を重ねながら、入学者選抜が実施されている。

（エ）保健科学研究科

保健科学研究科ではアドミッション・ポリシーに基づいて、博士前期課程及び博士後期課程各領域の特色、専門分野の特性に応じた能力を持つ学生の確保を目的として、入学試験要項を定め入学試験を実施している。

令和4（2022）年度保健科学研究科入学試験においては、博士前期課程及び博士後期課

程でⅠ期とⅡ期の入試区分を設け、入学試験を実施している。

1) 博士前期課程入学試験

看護学領域、リハビリテーション学領域、病因・病態検査学領域、放射線学領域、臨床工学領域、公衆衛生学領域において、共通の英語の筆記試験、志望する領域の専門科目に関する筆記試験、面接試験を行い、試験結果及び提出書類を総合して選考する。

2) 博士後期課程入学試験

医療科学領域においては、志望する研究分野に関する英語の筆記試験と口述試験、研究計画等に関する口頭試問を含む面接試験を行い、試験結果及び提出書類を総合して選考する。

保健科学研究科入学試験は、学長の責任のもと研究科委員会が中心となり実施体制を整備し、実施している。入学者の選考に関しては「群馬パース大学大学院入学者選考規程」に基づき、研究科長を議長とする合否判定会議を開催し合否判定を行い、研究科委員会において選考し、学長が決定している。

以上のように保健科学研究科ではアドミッション・ポリシーに基づき、適切な体制のもとに入学者選抜が実施されている。

2-1-③ 入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持

(ア) 看護学部

開設初年度である看護学部における令和4（2022）年度の入学定員充足率については109%と適切な割合で満たしており、教育を行う環境確保のため、入学定員及び収容定員に沿って在籍学生を適切に確保している。

(イ) リハビリテーション学部

令和3（2021）年度に開設したリハビリテーション学部の入学定員充足率は、理学療法学科で令和3（2021）年度において122%、令和4（2022）年度において125%となっているが、作業療法学科は令和3（2021）年度において117%、令和4（2021）年度において113%、言語聴覚学科は令和3（2021）年度において100%、令和4（2022）年度において113%と、適切な割合を維持している。また、リハビリテーション学部全体の収容定員充足率についても、令和3（2021）年度において115%、令和4（2021）年度において119%と適切な割合を維持している。

以上のように教育を行う環境確保のため、入学定員及び収容定員に沿って在籍学生を適切に確保している。

(ウ) 医療技術学部

医療技術学部は令和4（2022）年度に保健科学部から名称変更をした学部で、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科の3学科で構成している。

検査技術学科における入学定員充足率について、令和4（2022）年度においては128%であったが、過去5年間の入学定員充足率（平均比率）は120%以内に留められている。それ以外の学科においても過去5年間の学科別の入学定員充足率（平均比率）については、120%以内を維持している。

また、医療技術学部全体の収容定員充足率については、過去5年間117%以内を維持している。

以上のように、教育を行う環境確保のため、入学定員及び収容定員に沿って在籍学生を適切に確保している。

（エ）保健科学研究科

過去5年間の入学定員充足率（平均比率）は、博士前期課程で95%、博士後期課程で90%となっており、概ね適切に入学者を確保している。

博士前期課程では、看護学領域、理学療法学領域、病因・病態検査学領域に加え、平成29（2017）年度から放射線学領域、臨床工学領域を合わせた5領域、令和4（2022）年度から理学療法学領域をリハビリテーション学領域へと変更し、新たに公衆衛生学領域を加えた6領域の構成としている。

令和4（2022）年度において、保健科学研究科の収容定員22名に対して在籍学生数は20名であり、教育を行う環境確保のため、入学定員及び収容定員に沿って在籍学生を概ね適切に確保している。

（3）2-1の改善・向上方策（将来計画）

今後も各学部及び保健科学研究科の入学者選抜が、教育目的（教育目標及び教育研究上の目的）を踏まえたアドミッション・ポリシーに沿った方法により適切に運用できているか検証を重ねながら、アドミッション・ポリシーの周知手段を常に見直し、周知するよう努める。また、保健科学研究科においては、入学定員充足率（平均比率）が100%未満となっていることから、入試及び広報活動の在り方について検討していく。

これまで同様に公正かつ適切な入学試験の実施、入学定員及び収容定員に沿った適切な在籍学生の確保を目標に入学者選抜に係る体制の整備・確立を推進していく。

2-2 学修支援

2-2-① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備

2-2-② TA(Teaching Assistant)等の活用をはじめとする学修支援の充実

(1) 2-2の自己判定

「基準項目2-2を満たしている。」

(2) 2-2の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

2-2-① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備

教職協働による学生への学修に関する支援及び授業支援に関する方針及び計画は、学部においては教務委員会によって検討され、その実施状況を適切に整備・運営している。教

務委員会は委員長、副委員長、各学科教員、及び事務職員によって構成され、毎月1回開催される。

教務委員会は、①学事予定（年間授業計画）、時間割の策定、教育課程の編成、シラバスの作成、②履修登録管理及びキャップ制の遵守、③出欠・成績管理、修学ポートフォリオの推進、④教室や教育機器などハードウェアの保守点検、⑤単位認定及び進級・卒業判定基準の遵守、⑥学籍異動に関する事項の管理等を行っており、教職協働による学生への学修支援の要としての役割を果たしている。検討された内容は教授会に報告され、学長の承認を経て全学に周知されている。また、学生へは学内掲示やアクティブ・アカデミー、授業やガイダンスを通じて周知している。

保健科学研究科については、博士前期・後期課程運営委員会において、同様の活動がなされている。

2-2-② TA(Teaching Assistant)等の活用をはじめとする学修支援の充実

(ア) 障害を有する学生への配慮

障害を有する学生が入学する場合には現在のバリアフリー環境に加え、更なる物理的環境や、人的支援・配慮を行うべく学生委員会において検討されている。

(イ) オフィスアワー制度の全学的な実施

オフィスアワー制度は、開講されている全科目で実施されており、受付時間と場所等がシラバスを通じて周知されるよう、全教員にシラバス作成要領で指示している。教務委員会においてシラバスをチェックし、不備がある場合は記載内容の修正を求めている。このような段階を経ることで、オフィスアワー制度を全学的に実施している。

(ウ) TA等の活用

TA制度は「群馬パース大学大学院ティーチング・アシスタント（TA）に関する規程」に定められ、主として指導教員の授業において補助的役割を持って適切に活用されている。

直近3か年の実績としては、令和元（2019）年度2人、令和2年（2020）年度2人、令和3年（2021）年度11人のTAが授業における実技や演習の補助として活動を行っている。

(エ) 中途退学、休学及び留年への対応策

本学では、学生1人ひとりに目の行き届いたきめ細やかな支援を行うために担任制度やチューター制度を導入し、随時面談を行うことで学生の状況把握に努めている。

また、Active Academy Advance（アクティブ・アカデミー アドバンス）（以下、「アクティブ・アカデミー」という。）を活用して、全教職員が学生の出欠状況や成績状況等を確認し、学生の状況変化に早期に対応できるよう情報共有している。

加えて、中途退学、休学を希望する学生については、担任やチューターが学生本人や保護者と面談を実施し、必要に応じて学科長や他の教員、学生相談室などとも連携をとりながら対応している。

《各学科の具体的取組》

①看護学科

担任制度とチューター制度を併用し、定期及び随時面談を行うことで学生の状況把握と相談・支援を行っている。また、アクティブ・アカデミーを活用して、全チューターが学生の出欠状況や成績状況等を確認し、学生の状況変化に早期に対応できるよう情報共有している。

②理学療法学科

進級率が高い傾向は続いているが、2021年度入学生においては留年が例年より多く発生している。ただし、学科全体の中途退学や休学は減少傾向にある。休学と退学については、担任が保護者も含む面談にて、休学であれば理由とその期間になすべき事項、退学であれば理由と今後の進路について話し合い、無益な選択とされない配慮を行っている。

③作業療法学科

2人のクラス担任による面談を実施しており、学生の現状把握を行いながら対応への準備をしている。また、1期生は後期より、また2期生については入学時より一教員あたり3～4人の学生を担当するチューター制を導入した。現時点で中途退学、休学、留年はないが、成績及び生活状況等を把握して相談及び指導を行っている。

④言語聴覚学科

アクティブ・ラーニングを実践するゼミの指導者（チューター）が、通常の授業、アクティブ・ラーニング、国家試験対策などの学修支援のみならず健康管理、人間関係、就職活動等の生活支援も含めて支援している。今年度から1期生が2年生となったので、1年生に対するピアサポート（上級生が下級生を学修、生活面でサポートする体制）をゼミ単位で開始している。

⑤検査技術学科

1～3年の各学年に担任2人、副担任2人を選任し、4学年は、少人数のゼミ単位で各ゼミ担当教員を選任している。選任された教員が、学習面の細やかな指導を行うことはもちろん、講義への欠席も確認し、各学生に連絡することで体調や精神的な管理を行っている。

中途退学者に関しては、退学理由やその後の進学等を伺い、保護者と連絡を取っている。

休学及び留年に関しては、担任あるいはゼミ担当教員が随時連絡を取り対応している。

⑥放射線学科

休学及び留年者には、学年担任による個別支援を実施し、復学の支援、単位取得・学習支援を実施している。

⑦臨床工学科

退学、休学希望者に対しては、担任及び副担任により面談を行い、退学または休学希望の理由を聴取し、助言等を行っている。必要に応じて保護者を含めた面談を実施し、学生本人の意向を尊重したうえで、適切な選択に向けた助言・指導を行っている。留年者に対しては、担任により随時個別面談を行い、学修状況の把握及び相談・指導を行っている。また毎月2回開催する学科会議において、学生相談室運営会議に上がる事例などと学生の学修状況について全教員が情報交換を行い、学生指導の内容・方法についても協議を行うなど、情報共有を行いながら学生指導を行っている。

学部では、学科による差はあるが退学者及び留年者とも若干の増加傾向にある。大学院にあつては、目的意識を強く持った社会人が多いため、これまで休退学者は多くない。

(3) 2-2の改善・向上方策（将来計画）

オフィスアワー制度は全学的に実施しているが、シラバスへの記載内容が適切に実施されているか、今後、教務委員会においてチェック体制を強化する。

教職員協働による学生への学習支援体制については、アクティブ・アカデミーにおける修学ポートフォリオの活用を進めることが大きな課題である。

現在、修学ポートフォリオの利用状況は、各学生データの参照と学生指導の一部を記録する程度である。今後は、学生指導記録の活用を全教員（特に、新入職の教員）に徹底するなど、修学ポートフォリオを積極的に活用し、在学中のエンロールメント・マネジメントの一助としたい。

2-3 キャリア支援

2-3-① 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備

(1) 2-3の自己判定

「基準項目2-3を満たしている。」

(2) 2-3の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

「群馬パース大学学生支援センター規程」に基づき、本学に学生支援センターを組織し、同センターにキャリア支援室を置いている。キャリア支援室の管理は学生支援センターの下部組織であるキャリア支援室運営委員会が行っており、キャリア教育や就職支援全般の支援を一手に担っている。詳細については、以下（ア）キャリア教育に関する支援体制、（イ）就職に関する支援体制で示す。

(ア) キャリア教育に関する支援体制

1) 学生支援センターのキャリア支援室におけるキャリア教育の実施

キャリア支援室は、学生支援センター及びキャリア支援室運営委員会の管理のもと、本学のグループ会社の職業紹介部門（メディカルサフラン）のスタッフが本学の委託を受け、本学の職員と共にキャリア支援を行っている。

令和3（2021）年度のキャリア相談件数（延べ）は、看護学科613人（4年生の求職者

数73人)、理学療法学科294人(4年生の求職者数67人)、検査技術学科321人(4年生の求職者数64人)、放射線学科365人(4年生の求職者数67人)、臨床工学科175人(4年生の求職者数56人)であり、具体的な相談内容は、面接対策805件、履歴書添削が673件、小論文・作文の書き方245件、進路相談103件、添え状・送り状の書き方9件であった。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、就職対策講座のオンライン開催やキャリア相談の柔軟な対応(対面の相談を含めた電話相談やオンライン相談、電子メールでの相談)を行い、学生が就職活動で不利益にならないよう配慮している。

2) 各学科におけるキャリア教育

① 看護学科

看護職の多様な就業場所から実務者をゲストスピーカーとして招き、交流を行う授業科目を1年次に開講し、1年次から4年次まで各学年で開講する実習科目においてもキャリア教育の視点を踏まえた教育を行っている。さらに、これらの成果を学修ポートフォリオに組み込むことにより、入学後早期からのキャリア支援を組織的に進めている。また、看護学科キャリアサポート委員会を組織し、求人に関する情報の収集、学生への就職・進学に関する情報提供及び相談対応を行っている。担任及びチューターも就職・進学に関する相談に随時対応している。

② 理学療法学科

キャリアサポートセンターのキャリア支援と並行して、学科では担任及び就職担当の教員、更には卒業研究担当教員及び臨床領域に強い教員の力も協働して進路指導にあたっている。8月初旬に実施される大学独自の合同進路相談会を起点として就職活動が活性化されることが、早期の内定獲得に有効に作用し、このことが国家試験準備にも良い影響を与えている。

③ 作業療法学科

令和3(2021)年度開設のため、1年生の希望者に合同進路相談会への参加を体験させていることを除き、具体的なキャリア支援、相談・助言体制での対応は行っていないが、第1期生に対しては新入生研修において、関連施設である群馬パース病院の協力を得て病院見学・講義・説明を作業療法スタッフから行ってもらい、将来の自己イメージにつながるよう実施した。

④ 言語聴覚学科

1年生より「就職支援セミナー・1年次就職対策講座」への参加を促している。また、昨年度は新型コロナ感染の状況から一部学内実習で行った1年次の見学実習は、今年度も実施予定で、早期からの現場体験は、キャリア支援に有効であることが期待されている。

⑤ 検査技術学科

検査技術学科では就職説明会・就職対策委員会を組織し、学生への就職に関する情報

提供を行っている。また、企業、衛生検査所、病院、健診センター等の協力を得て、2学年（希望者のみ）と3学年を対象とした学内進路相談会を実施し、キャリア教育の充実を図っている。

⑥放射線学科

学科内に学生支援委員会を設置し、就職・進学学状況の把握、早期支援を実施している。また、就職支援・国家試験対策支援と連動して、関連資格取得支援として放射線取扱主任者国家試験受験対策講座を早期に実施している。

⑦臨床工学科

キャリア教育の一環として、全学年（希望者のみ）を対象に病院、クリニック、企業などへの一日見学を実施し、キャリア教育の充実を図っている。大学独自の合同進路相談会へも早い時期から参加を促している。キャリアサポートセンターの支援と並行して、担任・ゼミ担当教員による就職・進学に関する相談・助言及び応募書類の確認・面接対策を個別で対応し、就職活動の円滑な実施に向けた指導を行っている。指導内容は、アクティブ・アカデミーの修学ポートフォリオに記録し、教員間の情報共有も実施している。

3) インターンシップへの参加支援

大学のインターンシップについては、①教育課程や臨地・臨床実習などに位置付ける場合、②大学行事や課外活動の一環として位置付ける場合、③病院・施設・企業等が独自に実施し学生が個人的に参加する場合に分けられる。

①については、全学生が臨地・臨床実習を履修している。②については、課外授業において病院・施設見学を実施したり、教員が個別に得た情報を学科掲示板で案内したりしている。③については、大学に届いた情報をアクティブ・アカデミーや掲示で周知し、学生支援センターを窓口とし、インターンシップへの参加をサポートしている。

(イ) 就職に関する支援体制

1) キャリア支援室運営委員会における就職支援の実施

キャリア支援室運営委員会では、キャリア教育の他に求人票の管理、学外で行われる就職説明会の周知など、就職希望者を対象とした支援を行っている。病院や施設のパンフレット・ポスターなど求人票を含めた就職情報については、1号館は図書館、4号館は図書室にそれぞれ就職コーナーを設け、随時閲覧することができる。

なお、令和3（2021）年度の求人件数は、看護師297件、保健師58件、助産師89件、理学療法士540件、臨床検査技師284件、診療放射線技師237件、臨床工学技士191件（件数は同病院・施設の重複有り）であった。なお、同年度に開設されたリハビリテーション学部の作業療法学科と言語聴覚学科（両学科ともに令和6（2024）年度に卒業生を輩出）を対象とした求人は作業療法士416件、言語聴覚士282件であった。

また、令和3（2021）年度の卒業者のうち、就職を希望する学生は国家資格を活かした病院や施設、企業等に就職している。就職者数についての詳細は以下に示す（表2-3-

1)。

表 2-3-1 令和 3 (2021) 年度学科別就職率一覧

	卒業生 (A)			進学者 (B)			その他 ^{※1} (C)			就職希望者 ^{※2} (A+B+C)			就職者			就職率
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	
看護学科	74	11	63	1	0	1	0	0	0	73	11	62	73	11	62	100.0%
理学療法学科	67	36	31	0	0	0	0	0	0	67	36	31	66	35	31	96.9%
検査技術学科	66	17	49	2	0	2	0	0	0	64	17	47	63	16	47	98.4%
放射線学科	71	32	39	3	3	0	1	1	0	67	28	39	49	18	31	73.1%
臨床工学科	56	37	19	0	0	0	0	0	0	56	37	19	48	30	18	85.7%

※1 放射線学科「その他1人」：健康上の理由で内定を辞退し病気静養中

※2 就職希望者には国家試験不合格者を含む

2) 就職に関する情報提供

本学に届いた求人情報は、学内の就職コーナー（同項（イ）の1）参照）の掲示と同時に、アクティブ・アカデミーからも配信しており、学生が学内外を問わず最新の情報を閲覧することができる。

また、過去の就職試験や面接等のデータである「就職活動結果報告書」を年度ごとに収集、蓄積整理しており、学生は必要な情報を求人情報と同様に閲覧することができる。

3) 合同進路相談会

就職支援の一つに、病院、施設、企業の就職担当者を本学に招き、直接学生が面談できる合同進路相談会を例年実施している。参加者の専門職員の中には本学OB・OGも多数参加しており、先輩から直接就職の現場の説明を受けることにより、就職に対する強い動機付けになっている。合同進路相談会は全学科合同で年2回開催しており、令和3

(2021)年度の開催も1回目を8月、2回目を3月に大学近隣の施設（展示ホール）を会場として実施した。1回目の参加施設数は127施設（コロナ禍のため資料参加をした51施設含む）で、参加した学生は187人であった。2回目の参加施設数は135施設（コロナ禍のため資料参加をした58施設含む）で、参加した学生は242人であった。

また放射線学科の3年生を対象に、医療機器メーカー等の医療に特化した企業の方々を招いた進路相談会（参加企業10社、資料参加8社）を3月に開催し、64人の学生が参加した。参加した学生には、就職未内定者である4年生6人も含まれていた。

4) 就職対策講座の開催

令和3（2021）年度に行われた「就職対策講座」、「ビジネスマナー講座」は、本学のキャリア相談員が受け持ち実施した。また、国公立の施設に就職を希望する学生のため、地元の資格スクール校に協力を得て「公務員対策講座」を実施した。「専門職就活講座」では、医療現場で活躍している専門職の方を招いて講座を実施した。「みだしなみ講座」では、紳士服販売専門店のスタッフを講師に招き、採用担当者の視点からの就職活動のマナーやスーツの着こなし等の講座を実施した。新型コロナウイルス感染症のため、年間を通じてオンラインの形式による開催が中心であった。

5) 国家試験に関する支援

本学の学生は、国家資格を必要とした病院、施設、企業などに就職するため、国家試験が不合格の場合、内定が取り消される場合がある。そのため、国家試験合格のための支援が就職に関する支援と同様に重要となる。

本学では、各学科教員及び事務職員から構成される国家試験対策委員会を設け、国家試験対策を全学的な取り組みとしており、就職活動と国家試験対策とバランスを取りながら学生個々に応じたきめ細かな指導を行っている。

6) 再就職支援等

新規学卒者の事業所産業別離職状況（令和3（2021）年10月厚生労働省調べ）によると、医療職の早期離職率が必ずしも他の業種と比較して低いとは言えず、希望どおりに就職したものの、何らかの事由により3年以内に離職しているケースが多いとの報告がなされている。本学では、雇用のミスマッチや結婚・出産などの事情により退職した卒業生に対して、本学のグループ会社の職業紹介部門「メディカルサフラン」が再就職支援を行っている。具体的に、令和3（2021）年度にメディカルサフランで再就職支援を受けた本学卒業生は20人（中途退学者1人を含めると21人）であった。

7) キャリア教育と就職支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

学生の意見をくみ上げる仕組みの一つとして、学生委員会が実施している「卒業時アンケート」と「卒業後アンケート」がある。

令和3（2021）年度に実施した「卒業時アンケート」（令和3（2021）年度卒業予定者対象）と「卒業後アンケート」（令和2（2020）年度卒業生対象）で学生の意見・要望を集約した。「卒業時アンケート」は334人のうち321人が回答（回答率96.1%）し、「卒業後アンケート」は42人が回答（回答率12.7%）した。この調査では在学中のキャリア教育や就職支援に関する調査が含まれており、本学のキャリア教育と就職支援の重要な基礎資料となると同時に、改善と向上に役立つものとする。この調査結果は学生委員会から各学科にフィードバックされており、キャリア教育、就職支援の改善を全学的に行う体制を整えている。なお、令和4（2022）年度中に本アンケートの集計結果と学生委員会で作成した分析結果を本学のホームページで公表する予定である。

(3) 2-3の改善・向上方策（将来計画）

例年、低学年のうちからキャリア教育を段階的に導入し、専門職としての意識付けを卒

業年度までに確立するよう心掛けています。

キャリア支援室運営委員会が主体となって行う合同進路相談会や就職対策講座を低学年から実施することにより、広がりや深みのあるキャリア支援を全学的に展開している。

また、令和3（2021）年度には、卒業生を輩出していない2学科（作業療法学科、言語聴覚学科）を除いた5学科（看護学科、理学療法学科、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科）において、卒業生のいる就職先へアンケート調査を行い、早期離職防止や再就職支援のために活用した。なお、令和4（2022）年度中に本アンケートの集計結果とキャリア支援室運営委員会で作成した分析結果を本学のホームページで公表する予定である。

令和3（2021）年度はコロナ禍でのキャリア教育と就職支援となり、計画外の予定変更を余儀なくされたが、学生の不利益にならないよう細心の注意を払って対応した。令和4（2022）年度も、新型コロナウイルス感染症の感染状況は予断を許さない状況ではあるが、本学の開設以来蓄積してきたキャリア支援及び就職支援のノウハウを最大限に生かしつつ、コロナ禍における学生の安全を第一に考えた、社会的・職業的自立に関する支援を継続して行いたい。

2-4 学生サービス

2-4-① 学生生活の安定のための支援

(1) 2-4の自己判定

「基準項目 2-4 を満たしている。」

(2) 2-4の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

本学における学生サービス、厚生補導のための取り組みは、既存の「学生委員会」と令和3（2021）年度の組織改編で新設された「学生支援センター」と「健康管理センター」で、組織的な学生生活の安定のための支援を行っている。具体的には、学生サービス、学生の課外活動への支援は学生委員会と学生支援センター、厚生補導は学生委員会、奨学金など学生に対する経済的な支援は学生支援センター、学生の心身に関する健康相談、心的支援、生活相談は学生支援センターと健康管理センターで役割を分担している。

また、組織的な支援とは別に、個別の対応として各学科の担任やチューターが、学生の様々な問題についてきめ細やかな支援を行っている。

(ア) 奨学金などによる学生への経済的支援

本学における独自の奨学金制度の概要、及び令和3（2021）年度の奨学生数について以下に示す。日本学生支援機構の奨学金、修学支援新制度の授業料等の減免、地方公共団体や病院施設等の奨学金も含め、奨学金に関する情報については、学内掲示やアクティブ・アカデミーを通じて広く周知している。

1) 本学独自の奨学金制度

本学独自の奨学金は平成27（2015）年度より新設され、令和3（2021）年度では、17人の特待生（特待生S：6人、特待生A：9人、特待生B：2人）、15人の神戸（かんべ）奨学生、16人の兄弟姉妹奨学生（双子2組計4人含む）、本学の卒業生及び修了生が対象と

なる同窓生奨学生は10人となっている。本学独自の奨学金のうち、特徴的な奨学金として「群馬パース大学神戸奨学金」がある。この奨学金は本学創設者である樋口建介の教育の原点に多大な影響を及ぼし、学園創設に当たり多額の私財を投じた神戸照子先生の思いを尊重して設立された制度である。高い志があり、学業が優秀であるにも関わらず経済的な理由により修学困難な学生に対し給付すると定めている。

①特待生奨学金

申請資格：一般選抜（前期）の出願者のうち、特待生選抜を希望する者

採用条件：経済的理由により修学困難な者（入試成績優秀者）

給付方法：学納金と相殺し、現金給付無し

特待生の種類：特待生S	給付額－授業料全額相当
	給付期間－4年間 ※進級時に継続可否の審査あり
特待生A	給付額－後期授業料全額相当
	給付期間－4年間 ※進級時に継続可否の審査あり
特待生B	給付額－後期授業料全額相当
	給付期間－1年間（入学年度のみ）

②神戸奨学金

2～4年生で、人物、学業ともに特に優れ、経済的理由により修学困難な者に対し、300,000円（当該年度の後期授業料と相殺し、現金給付無し）を給付する。

③兄弟姉妹奨学金

1人以上の兄弟姉妹が本学に在籍（同時入学含む）しているか、本学を卒業した兄弟姉妹がいる新生で経済的理由により修学困難な者に対し、100,000円（1年次後期授業料と相殺し、現金給付無し）を給付する。

④同窓生奨学金（群馬パース大学大学院生対象）

本学を卒業して本大学院に入学した者、又は本大学院の博士前期課程（修士課程含む）を修了して本大学院の博士後期課程に入学した者で、経済的理由により修学困難な者に対し、入学金相当額（100,000円）を給付する。

2) 学外の奨学金制度

学外の奨学金制度は、日本学生支援機構奨学金や地方公共団体奨学金、医療機関等による奨学金がある。地方公共団体や医療機関等による奨学金は、令和3（2021）年度では94件の募集案内が寄せられており、学生は学内に設置している就職コーナーで自由に閲覧することができる。また同情報をアクティブ・アカデミーで配信しており、学外でも閲覧することが可能である。

3) 日本学生支援機構奨学金、高等教育の修学支援新制度

令和3（2021）年度、日本学生支援機構の奨学金、及び高等教育の修学支援新制度については、予約採用、在学採用等対象者別の説明会を開催し、各種手続方法から返還まで概要を説明した。令和4（2022）年4月18日現在の日本学生支援機構奨学生数と高等教育の修学支援新制度の給付者数を表2-4-2に示す。

表 2-4-2 日本学生支援機構奨学生数と高等教育の修学支援新制度の給付者数

第一種 奨学金 貸与者数	第二種 奨学金 貸与者数	第一種・第二種 貸与者延べ数	第一種・第二種 貸与者実数	給付奨学金 給付者数
346人	405人	751人	605人	129人

給付奨学金 給付者数	第Ⅰ区分	第Ⅱ区分	第Ⅲ区分	休・停止区分
129人	65人	38人	14人	12人

(イ) 学生の課外活動への支援

1) 学友会活動の支援

学生の課外活動の基幹的な役割を担っているのは、学生が主体となって運営している学友会である。学友会は「学業と同様に大きな意義を持つ課外活動を円滑に行うと共に学生相互の親睦を図り、学生生活をより豊かに、かつ充実したものにすること（学友会会則第3条）」を目的とした組織である。学友会は全学生から役員（会長、副会長、会計、書記）を選出し、その役員により学友会執行部が組織され、様々な課外活動の主体となっている（図 2-4-1）。学友会の活動に対しては、学生自治を尊重することを念頭に置きながら、学生委員会が助言及び支援を行っている。

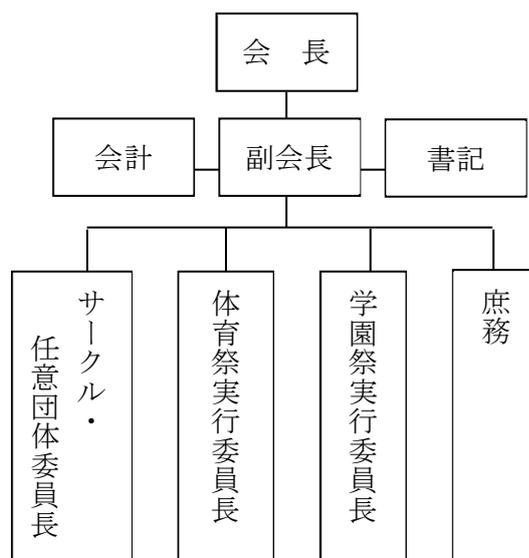


図2-4-1学友会組織図

学友会執行部管理のもと、サークル活動が行われており、学生は才能や趣味に合わせ自由に選択、入会ができる。各サークルには顧問として本学専任の教職員が就き、活動に関する助言、支援を行っている。サークル活動に関する経費については、学友会費より学生委員会の助言のもと学友会執行部が配分し執行している。令和4(2022)年5月現在の公認サークルの一覧を以下に示す。

公認サークル一覧（12団体）

- ・ Winter Sportsサークル
- ・ テニスサークル
- ・ スポーツトレーナーズサークル
- ・ バスケットボールサークル
- ・ バドミントンサークル
- ・ バレーボールサークル
- ・ フットサルサークル
- ・ アカペラサークル
- ・ 軽音サークル
- ・ ボランティアサークル
- ・ ダンスサークル
- ・ 野球・ソフトボールサークル

予算的支援はないが、任意団体を結成することが本学では認められている。令和4(2022)年5月現在の任意団体は、群馬県選挙管理委員会の大学コンソーシアムと学生消防分団の2団体である。

任意団体もサークル活動と同様に、学友会執行部管理のもと活動が行われ、各団体に顧問として本学専任の教職員が就き、活動に関する助言・支援を行っている。

2) 公認部活動に関する支援

公認部活動は本学で公式に認定された部活動で、体育会・文化会の活動を通して学生の自立心や人間形成を促進することにより学生生活を充実させるとともに、本学の伝統を構築し、帰属意識を高めることを目的にしている。

公認部の設立は構成人数が複数学年に渡り10人以上として、全国規模の大会があり、その大会を運営する大学連盟に所属していなければならない。なお、令和4(2022)年5月現在の公認部は硬式野球部のみである。

硬式野球部においては、専任教職員が各種助言・支援を行うとともに、本学として活動の資金的支援を行っている。また、3号館（体育棟）には、硬式野球部専用のブルペン練習場、バッティング練習場を整備し、練習環境の支援も行っている。

(ウ) 学生への心身に関する健康相談、心的支援、生活相談など

1) 健康管理センター

健康管理センターは、令和3(2021)年4月より発足した「群馬パース大学健康管理センター規程」に基づく新しい組織である。健康管理センター会議は月1回の頻度で開催され、保健室や静養室の管理、新型コロナウイルス感染症に関する臨時で設けた発熱等の風邪症状のある学生の一時待機所の管理、インフルエンザの学内予防接種、法令に基づく定期健康診断の実施、臨地・臨床実習における抗体検査及び予防接種等について協議し、学生の健康管理全般を管理している。

保健室は、学生の健康管理、健康相談の窓口として5号館健康管理センター内に設置している。保健室職員は、養護教諭と看護師の資格を有するパート職員2人、看護師と助産師の資格を有するパート職員1人、看護師の資格を有するパート職員2人の計5人で構成さ

れている。通常は保健室に1人が常駐し、日々の保健室業務とともに学生の健康に関する不測の事態にも対応できる体制を整えている。

臨地・臨床実習における抗体検査及び予防接種に関しては、実習部会と連携を図りながら、学生が本学に入学する段階から学外実習が始まるまで接種記録等の管理を行っている。

なお、新型コロナウイルス感染症の対応として、発熱等の風邪症状のある学生の一時待機所の管理と、各学科で行っている学生の日々の体調管理の報告に関するシステムの管理（2021年度以前はGoogle Classroom、2022年度以降はMicrosoft Teamsを使用）を行っている。いずれも本学の臨時委員会である新型コロナウイルス感染症対策委員会と連携を図りながら対応している。

その他、「日常の健康相談・傷病等発生時の対応図」、「近隣病院・診療所リスト」、「感染症発生時の対応図」（図 2-4-2）、「感染症の種類等に応じた出席停止の期間の基準」などを定めている。

2022年4月1日
健康管理センター

2022年度 感染症発生時の対応図

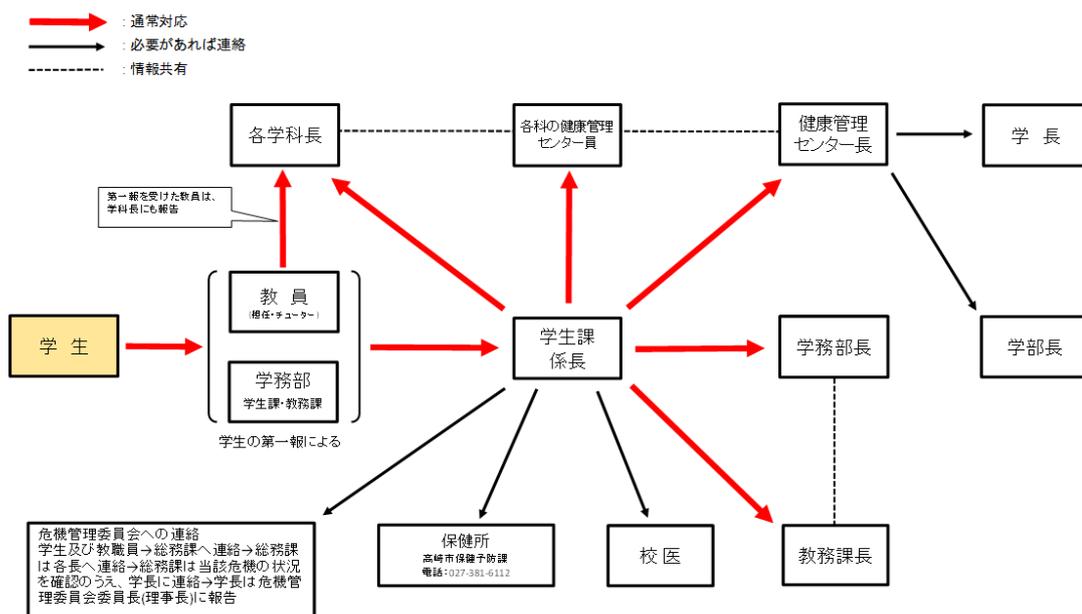


図 2-4-2 感染症発生時の対応図

2) 学生相談室

学生相談室（5号館学生支援センター内）は、学生支援センターの下部委員会である学生相談室運営委員会管理のもと運営されている。学生相談室運営委員会は、看護学科長を委員長として、理学療法学科長、作業療法学科長、言語聴覚学科長、検査技術学科長、放射線学科長、臨床工学科長、教養部責任者と学生相談室カウンセラー責任者、及び事務職

員で構成されている。委員会では各学科の学生が抱えている心の諸問題について話し合わせ、学生相談室及び各学科での学生の心理的・精神的な問題を共有し、即座に全学的に対応できる体制を整えている。

学生相談室では、専任の臨床心理士の資格を有するカウンセラーがカウンセリングを中心とした専門的な適応支援・教育的支援を行い、学生の心理的援助・発達・回復を促している。また、学生相談に関する不測の事態に備え、学生相談室来談ケースの対応において、通常対応に加え緊急時も含めた対応図を作成している（図2-4-3）。

なお、令和3（2021）年度は相談員4人による学生相談業務を行い、令和4（2022）年度は相談員3人による学生相談業務を行っている。

学生相談室 緊急時の対応図

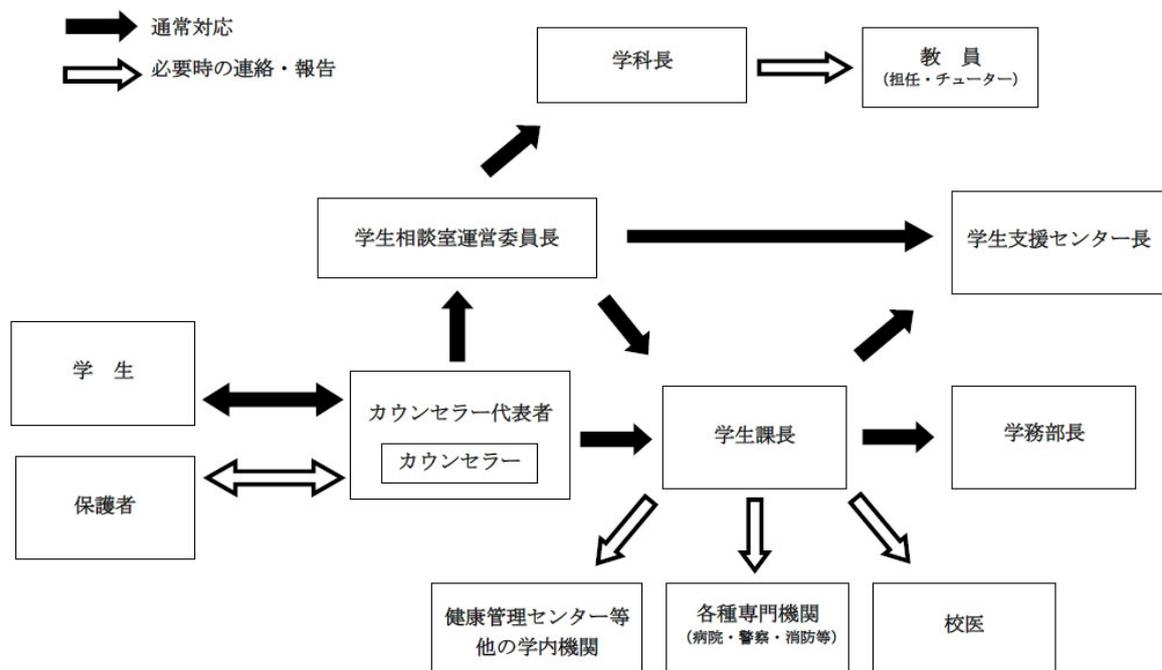


図2-4-3 学生相談室来談ケースの対応図

3) その他、各学科における個別支援の取り組み

保健室や学生相談室以外においても、担任やチューターが、学生の個別支援を行っている。必要に応じて保護者との連携を図りながら、きめ細やかな個別支援を行っている。学科別の取り組みについては以下に示す。

①看護学科

学科教員がチューターとして各学年2～5名の学生を担当し、新学期開始後、夏・冬・春季休業前と、必要に応じて随時個別面談を行っている。また、各学年の担任1名、副担任3名がクラス運営に関する学生からの相談を受け、指導を行っている。

③ 理学療法学科

各学年の担任と学生全体の担当教員が協働し、複数体制で学習や生活及び悩み事に関して相談に応じる体制をとり、学生の個別のニーズに応じた指導がタイミングよく行えるようにしている。学科長を通じ学生相談室との連携も行い、困難な事例にも対応できるようにしている。指導の状況は修学ポートフォリオと学科会議で共有され、学生の心身にかかわる支援について遅滞なく検討できる体制を有している。

③ 作業療法学科

クラス担任1人、副担任1人による学生面談を行って個別の情報を収集するとともに、学生相談室カウンセラーを通じた情報を学科で共有している。また、学生からの奨学金希望相談にも卒業後の返還も含めた適切な情報提供を行っている。令和3(2021)年度後期よりチューター制を導入し、学生の生活全般における相談・支援を行っている。

④ 言語聴覚学科

言語聴覚学科内部にFD(Faculty Development)会議を設定し、学生情報を日常的に共有している。そこで、合理的配慮が必要な学生、個別の理由により特に支援の必要な学生が確認された場合に、具体的な対応を検討している。また、ゼミ(学生5人程度)単位で、担当教員が年度内に最低2回面談を実施し、個別の状況を把握している。さらに、学生と日常的にコミュニケーションを取る中で、学修以外の生活面なども含めてきめ細かな相談・支援を行なっている。

⑤ 検査技術学科

1～3年の各学年に担任2人、副担任2人を選任し、学生面談や相談窓口となることで、きめ細やかな指導を行っている。また、担任だけでは解決できない問題については学科会議で情報を共有し、問題解決にむけて協議している。さらに、4学年については、少人数のゼミ単位で各ゼミ担当教員が国家試験対策や就職活動を含めた様々なサポートを行っている。

⑥ 放射線学科

1年から3年時は、学年担任2人が、健康管理センターと連携して学生の健康状態・生活状況等の把握を行っている。また、3年後期からは、卒業研究ゼミナールを通して研究指導教員による支援を行っている。

⑦ 臨床工学科

各学年の担任及び副担任が年1～2回及び必要に応じて随時個別面談を行い、学生の個別の状況把握及び悩みや相談などの諸問題に対する助言や指導を行っている。また、月2回開催の学科会議においても教員間で情報を共有し、学科全体で学生を支援する体制を整えており、必要時には学生相談室のカウンセラーへの相談及び連携のもとで学生の支援を行っている。

(3) 2-4 の改善・向上方策（将来計画）

令和 4（2022）年には、学生数の増加に対応するため、キャリア相談員を 2 人増員し、学生がストレスなくキャリア相談ができる環境を整えた。併せて、本学の特徴である医療分野に特化した相談にも対応できるよう相談員の再教育にも注力する。

障害学生の受け入れについて、障害者差別解消法の一部改正により、私立大学での合理的配慮の提供が3年以内に義務化される。本学では、障害のある学生の全学的な対応を図るため、学生支援センターで規程等の整備を行っている。令和3（2021）年度には、「群馬パース大学障害学生支援に関する基本方針」、「群馬パース大学における障害学生の修学支援体制」を整備した。引き続き障害学生の支援の詳細を取り決めた規程と留意事項を策定する予定である。

学生支援については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、サークル活動や学生が主体となったイベントが軒並み中止となっていたが、令和3（2021）年度は条件付きではあるが学園祭を開催することができた。令和4（2022）年度は、コロナ禍における学生の安全を第一に、次の世代に繋がる学生が主体となった学生生活の援助を継続したい。

2-5 学修環境の整備

2-5-① 校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理

2-5-② 実習施設、図書館等の有効活用

2-5-③ バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性

2-5-④ 授業を行う学生数の適切な管理

(1) 2-5 の自己判定

「基準項目 2-5 を満たしている。」

(2) 2-5 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

2-5-① 校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理

(ア) 適切な施設整備

本学の校舎については、平成 22（2010）年 4 月に完成した 1 号館（看護学科・理学療法学科・図書館棟）に、令和 3（2021）年 4 月にリハビリテーション学部を開設したことにより、作業療法学科、言語聴覚学科が使用する校舎（ANNEX（別館））を令和 3

（2021）年 1 月に増築した。平成 25（2013）年 2 月に完成した 2 号館（検査技術学科棟）、同年 10 月に完成した 3 号館（体育棟）、平成 29（2017）年 3 月に完成した 4 号館

（放射線学科・臨床工学科棟）に加え、学生の福利厚生施設の充実に向けて、学生支援センター・健康管理センター等及び学生寮などの機能を有する 5 号館を令和 2（2020）年 9 月に新設した。各校舎の施設概要を表 2-5-1 に示す。

表 2-5-1 校舎の施設概要（令和 4（2022）年度）

名称	校舎敷地	校舎面積	階	主要施設
1号館 【ANNEX (別館)】	3,141m ²	12,050m ² 【内 2,693m ² 】	8階 【7階】	学長室、会議室、事務室、図書館、講義室、演習室、ゼミ室、実習室、解析室、研究室、静養室、グループ学習室、コンビニ、学生ホール、印刷室、ロッカー室
2号館	764m ²	2,402m ²	6階	学科長室、管理室、会議室、応接室、講義室、実験室、実習室、測定室、準備室、研究室、共同ゼミ室、印刷室、ロッカー室
3号館	1,483m ²	2,705m ²	3階	野球ブルペン練習室、野球バッティング練習場、更衣室、アリーナ、ホール、多目的スペース
4号館	897m ²	6,447m ²	12階	事務室、会議室、応接室、静養室、実習室、実験室、解析室、撮影室、準備室、講義室、ゼミ室、研究室、図書室、印刷室、ロッカー室、ブックカフェ（カフェ・書店）、売店
5号館	1,773m ²	2,410m ²	5階	学生支援センター、健康管理センター、国際交流センター、地域連携センター、看護実践教育センター、学生相談室、保健室、会議室、研究室、講義室、学生専用マンション(40室)
学友 会館	452.6m ²	168.0m ²	1階	学友会館

1号館は8階建てで、3階から8階に20人から230人（8階大講義室）の講義室を整備している。実習室として5階に2室、6階に3室、7階に5室が整備されている。また、リハビリテーション学部の開設に伴い増築したANNEX（別館）は、7階建てで、6階と7階で既存の校舎と接続している。2階と3階に40人の講義室（計6室）を整備し、4階には聴覚検査室等5室の他、実習室1室、5階には実習室2室が整備され、各教室に実習に必要な機器及び設備を設置している。

これらの講義室及び実習室には規模に応じた視聴覚機器を設置している。また、小規模のゼミや学生指導を実施する教室として、3階に4室、4階に9室、7階に6室のゼミ・演習室が、ANNEX（別館）には、6階・7階に演習室（計8室）が各々設けられている。

2号館は6階建てで、2階及び3階に70人の講義室が整備されている。実習・実験室は

3階に1室、4階に4室、5階に3室が整備され、実習に必要な機器及び設備を設置している。6階には共同ゼミ室が2室設けられている。

3号館は3階建ての体育棟で、2階にバスケットボール、バレーボール、フットサル、バドミントン等を行うことが可能なアリーナを整備している。3階には多目的スペース及び観覧スペースを整備している。

4号館は12階建てで、5階から12階に60人から240人（12階大講義室）の講義室を整備している。実習・実験室は3階に学科教員が管理する放射線実習エリアとして9室、4階に3室、10階に3室、11階に4室が整備され、実習に必要な機器及び設備を設置している。また、小規模のゼミや学生指導を実施する教室として、6階に10室、10階に6室のゼミ室が各々設けられている。

5号館は5階建てで、1階に学生支援センター、健康管理センター、国際交流センター、地域連携センター、学生相談室、保健室を置き、学生生活支援の拠点としての機能を有する。2階は看護実践教育センターを置き、Lecture Hall 5（80人）、演習室1室、研究室が整備され、臨床研修などの企画・実施を通じて地域の看護職の資質の向上を目的に整備されている。3階から5階には学生専用マンション（40室）を整備している。

1) 飲食スペースの設置

1号館1階に学生の就学時間に営業時間（平日9:00~18:00 営業）を合わせたコンビニエンスストアを整備し、4号館1階には外部の方も利用できるブックカフェ、売店を設置している。ただし、これらのスペースですべての学生が食事をするには十分でないため、昼休みに限り、普通教室（1号館：7室、2号館：3室、4号館：6室）で飲食できるようにしている。

また、学生と周辺地域を結びつけ、周辺店舗の利用により学生自身も利益享受ができるよう周辺店舗の協力を受け「CAMPАЗ（キャンパス）」という本学独自のクーポン付きフリーペーパーを作成し、全学生に配付している。

2) 個人用ロッカーの設置

演習時に活用する個別の白衣や用具等を収納できるように1号館1階に看護学科及び理学療法学科、ANNEX（別館）4階・5階に作業療法学科及び言語聴覚学科、2号館3階・4階・5階に検査技術学科、4号館4階・10階に放射線学科及び臨床工学科の全学生用の個人用ロッカーを設置している。

3) 駐輪場の整備

本学の学生の通学形態の約3割を占める自転車通学の学生支援として、490台分の駐輪場を5箇所に分けて整備している。

4) 学生ホール等の設置

1号館1階・3階・6階には開校時間中に学生が自由に利用できる学生ホール及びオープンスペースを設けている。

4号館1階には開校時間中に学生が自由に利用できるブックカフェを設けている。学生

ホール及びブックカフェは自由に飲食ができるスペースであり、昼休みの昼食の際の主要な場所として活用されている。

これらの施設は、学生の自己学習、グループワーク、各種サークル活動等にも利用される。

5) 学友会館の設置

従来の学友会室が、新型コロナウイルス感染者や濃厚接触者の PCR 検査控室としなければならなかったため、長期にわたり利用できない状況であった。そこで、令和 3

(2021) 年 10 月より高崎市問屋町 1 丁目 6-3 に群馬パース大学学友会館を設置し、学友会による学友会活動、サークル活動、任意団体活動等の学生活動で利用できるようになった。

(イ) 施設・備品の維持管理体制

校地及び校舎の維持、管理等は施設管理課が担当し、各施設設備の状況を把握して日常管理や定期点検を実施している。清掃業務は一部外部業者に委託している。教育設備に関する維持、管理等は教務課が担当している。図書館・図書室の維持、管理は附属図書館運営委員会で協議の上、図書館司書及び補助員が行っている。学生の貸与・推奨パソコンの故障等の対応窓口は 5 号館学生支援センターで、修理は外部業者が行う体制を整備している。学内無線 LAN やパソコン関連機器の維持、管理はネットワーク管理者や学生課で行っている。

また、横長の教室において、両端の座席からスクリーンが見え難いという学生からの意見や遠隔授業等にも対応するため、6 教室にプロジェクターとスクリーンを 2 台ずつ増設するなど、常に学生の要望や社会情勢に配慮した施設維持管理を心掛けている。

2-5-② 実習施設、図書館等の有効活用

(ア) 実習施設

医療職を養成する本学では、全ての学科で各養成施設指定規則等に基づき必要な演習・実習室が完備されている。演習・実習室の管理は各学科が行っている。

(イ) 図書館・図書室の整備

1 号館 1 階及び 2 階に図書館、4 号館 5 階及び 8 階に図書室が整備されている。

1 号館図書館は床面積 800 m²、閲覧席数 174 席で、書架、書庫、閲覧スペース、グループ学習室等で構成されている。開館時間は月曜日から金曜日が 9 時～21 時、土曜日が 9 時～17 時となっており、学生が長時間学習及び研究ができるよう対応している。また、定期試験期間中には土日を除く開館日の開館時間を 8 時 30 分～21 時 30 分と延長することで、試験に備える学生へ学習場所の提供を行っている。4 号館図書室は 5 階、8 階合わせて床面積 92 m²、閲覧席数 48 席で、月曜日から金曜日の 9 時～21 時の開室時間となっている。学生及び教職員は 1 号館図書館及び 4 号館図書室共に自由に利用することができる。

附属図書館には図書館長（教員兼務）の他専任職員として司書が 1 人、非常勤職員が 3 人（うち 1 人司書）配置され、その運営と利用者サービスに努めている。専任の司書は業

務全般、非常勤職員は主に閲覧、雑誌受入などを担当している。また、通常業務以外に蔵書点検を1年に1度実施している。附属図書館では、群馬県大学図書館協議会、日本看護図書館協会に加盟しており、各協会が主催する研修に定期的に参加することで、職員の質を高め、図書館運営や学習、研究支援に役立てている。

蔵書数は図書館、図書室合わせて図書 55,855 冊、雑誌 5,165 誌（電子ジャーナル含む）、視聴覚資料 1,442 点であり、毎年教員や学生からの要望を基に購入し、提供を行っている。蔵書は全てシステムによってデータベース化されていて検索が可能である。その他電子リソースとして電子ジャーナル、文献検索データベースも体系的に整備している（表 2-5-2）。また、学内の入館者数や貸出点数などの利用実績は、表 2-5-3 の通りである。

表 2-5-2 電子ジャーナル・文献検索データベース一覧

電子ジャーナル	文献検索データベース
メディカルオンライン(1,533 誌)	医学中央雑誌 Web 版
医書.jp オールアクセス(96 誌)	最新看護索引 Web
CINAHL Plus with Full Text(770 誌)	CiNii Articles
MEDLINE with Full Text(1,470 誌)	
外国雑誌個別購読誌 46 誌	

表 2-5-3 過去 3 年間の図書館利用実績

	入館者数		貸出冊(点)数	
	延べ人数	学外利用者 (実数)	学内利用者	学外利用者
令和元(2019)年度	73,107	224	14,195	201
令和 2(2020)年度	31,465	0	7,543	0
令和 3 (2021) 年度	49,711	0	17,738	0

※令和 2 (2020) 年度、令和 3 (2021) 年度はコロナ禍のため学外者向けサービス休止

電子リソース（電子ジャーナル、文献検索データベース、電子書籍）や蔵書検索システムはインターネット環境があれば学内外を問わず利用することが可能である。学生への図書館・図書室利用ガイダンスは、教員と連携し、初年次教育の一環として1年次全員を対象とした授業「大学の学び入門」の1コマで、レポート作成のための初歩的な情報検索の方法も含め、講義として行っている。また、教員からの依頼によって看護学科3年次を対象とした授業「看護研究概説」の1コマで論文執筆のために、初年次と比較しより高度な文献検索の演習を行っている。その他、個別のガイダンスや他館からの資料貸借、文献複写の取り寄せなども含めたレファレンスの希望にも対応している。附属図書館ホームページも開設しており、学内外に利用案内や各種情報収集ツールのガイドを行っている。

(ウ) ICT 環境の整備

本学では、全館無線 LAN 環境を整備し、学習・情報収集環境を整えている。

また、学生サービスの一環として、IC 機能付学生証を利用して印刷したいデータをインターネットで送信して印刷することができる学内プリンタを 1 号館 4 階及び 7 階、1 号館 ANNEX（別館）2 階及び 3 階、2 号館 3 階、4 号館 6 階及び 10 階に設置し、学習成果や収集した情報をアウトプットできるようにしている。また、デスクトップ PC を図書館に 2 台設置し、学生がインターネットによる情報収集や各種作業が可能な環境を整備している。

(エ) アクティブ・アカデミーの整備活用

アクティブ・アカデミーとは、インターネットを利用して休講・補講情報など大学から発信された情報をパソコン・スマートフォン等で確認したり、履修登録や成績表の閲覧をしたりすることも可能なシステムで、学生が主体的に日々の学習活動に取り組めるようサポートすることを目的として導入された（表 2-5-4）。

表 2-5-4 アクティブ・アカデミーの機能名称と内容

機能名称	内容
個人へのお知らせ・連絡事項	大学・教員からの連絡事項の確認
休補講情報	授業変更の確認（休講・補講・教室変更）
履修登録	履修科目の登録
レポート提出	<p>【講義資料の事前配付】</p> <p>各授業科目について、事前配付資料がある場合はここからダウンロード・印刷</p> <p>【課題提出】</p> <p>各授業科目について、課題（レポート等）が課される場合はここから内容を確認し、適宜作成した課題をここからアップロードして提出</p>
シラバス	シラバスの閲覧
修学ポートフォリオ	<p>学生自身の基本情報の確認、履修状況の確認、成績（修得単位・GPA 等）の確認、欠席率の確認</p> <p>【修学記録】</p> <p>学修目標にそって自己評価を入力、反省点を記録</p>
キャリア相談予約	キャリア相談の予約
企業検索	求人票の検索 ※大学に届いている求人
授業評価アンケート	学生による授業アンケートへの回答 ※学期末に実施

アンケート	その他アンケートへの回答
Web フォルダ	各種届出用紙や操作マニュアル等のダウンロード・印刷

(オ) 施設・設備の安全性（耐震など）の確保

本学の校舎は、平成 22（2010）年 4 月に完成した 1 号館（看護学科・理学療法学科・図書館棟）、平成 25（2013）年 2 月に完成した 2 号館（検査技術学科棟）、同年 10 月に完成した 3 号館（体育棟）、平成 29（2017）年 3 月に完成した 4 号館（放射線学科・臨床工学科棟）に加え、令和 2（2020）年 9 月に 5 号館（学生支援センター、健康管理センター等、学生専用マンション）が完成し、令和 3（2021）年 1 月に 1 号館に ANNEX（別館）（作業療法学科・言語聴覚学科棟）を増築した。各校舎の設計は昭和 56 年（1981 年）6 月 1 日の建築基準法改正（新耐震基準）を満たし設計されている。安全性に関しては震度 7 の地震に耐えうる構造で耐震性が確保され、十分な構造安定性を備えている。

2-5-③ バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性

本学では、障害を有する学生や講師、高齢者等の来校を想定し、障害者・高齢者に配慮した環境を整備している。

バリアフリー環境の確保のために、1 号館は段差のない構造、手すりの設置、車いす用エレベータの設置（1 基）、1 階・2 階・4 階・6 階・8 階に車いす用トイレを設置、ANNEX（別館）においても、同様に車いす用エレベータの設置（1 基）、1 階に車いす用トイレが設置され、車いす用駐車場の整備をしている。2 号館は段差のない構造、手すりの設置、車いす用エレベータの設置（1 基）、2 階に車いす用トイレの設置、車いす用駐車場の整備をしている。3 号館は段差のない構造、手すりの設置、車いす用エレベータの設置（1 基）、1 階に車いす用トイレの設置、車いす用駐車場の整備をしている。4 号館は段差のない構造、手すりの設置、車いす用エレベータの設置（1 基）、2 階に車いす用トイレの設置、車いす用駐車場の整備をしている。5 号館も段差のない構造、手すりを設置し、車いす用エレベータを設置（1 基）している。

2-5-④ 授業を行う学生数の適切な管理

(ア) 学部

学科、学年ごとに講義を行う上での適切なクラスサイズを確保した上で、実施されるよう努めている。複数学科にまたがる合同講義においては、1 号館 8 階大講義室や 4 号館 12 階大講義室を使用している。また、英語と情報処理科目はクラスを分割し、少人数教育を実施している。各講義室の収容定員及び収容定員充足率を表 2-5-5 に示す。

表 2-5-5 講義室の収容人数と在籍者数（学部）

学部学科・学年		在籍者数	校舎	使用教室	面積	収容人数	充足率	
看護学部	学部合計	87人	-	-	-	-	-	
	看護学部	学科合計	87人	-	-	-	-	-
		1年生	87人	1号館	403講義室	143.0m ²	90人	0.97倍
		2年生	-人		402講義室	143.9m ²	90人	-
		3年生	-人		401講義室	145.6m ²	90人	-
		4年生	-人	-	-	-	-	-
学部合計	278人	-	-	-	-	-		
リハビリテーション学部	理学療法学科	学科合計	146人	-	-	-	-	
		1年生	78人	1号館	801講義室	145.6m ²	70人	1.11倍
		2年生	68人		802講義室	143.9m ²	70人	0.97倍
		3年生	-人		803講義室	143.0m ²	70人	-
		4年生	-人	-	-	-	-	-
	作業療法学科	学科合計	69人	-	-	-	-	-
		1年生	34人	1号館 別館	311講義室	85.2m ²	40人	0.85倍
		2年生	35人		312講義室	83.6m ²	40人	0.88倍
		3年生	-人		313講義室	84.4m ²	40人	-
		4年生	-人	-	-	-	-	-
	言語聴覚学科	学科合計	63人	-	-	-	-	-
		1年生	34人	1号館 別館	211講義室	85.2m ²	40人	0.85倍
		2年生	29人		212講義室	83.6m ²	40人	0.73倍
		3年生	-人		213講義室	84.4m ²	40人	-
		4年生	-人	-	-	-	-	-

学部学科・学年		在籍者数	校舎	使用教室	面積	収容人数	充足率		
医療技術学部	学部合計	819人	-	-	-	-	-		
	検査技術学科	学科合計	275人						
		1年生	80人	2号館	221講義室	129.4m ²	70人	1.14倍	
		2年生	66人		322講義室	129.6m ²	70人	0.94倍	
		3年生	64人		321講義室	124.0m ²	70人	0.91倍	
		4年生	65人	-	-	-	-	-	
	放射線学科	学科合計	323人	-	-	-	-	-	
		1年生	78人	4号館	4501講義室	142.0m ²	80人	0.98倍	
		2年生	93人		4502講義室	145.0m ²	80人	1.16倍	
		3年生	83人		4601講義室	145.0m ²	80人	1.04倍	
		4年生	69人	-	-	-	-	-	
	臨床工学科	学科合計	221人	-	-	-	-	-	
		1年生	60人	4号館	4901講義室	118.6m ²	55人	1.09倍	
		2年生	53人		4902講義室	118.6m ²	55人	0.96倍	
		3年生	52人		4903講義室	121.0 m ²	55人	0.95倍	
		4年生	56人	-	-	-	-	-	
	保健科学部	学部合計	401	-	-	-	-	-	
		看護学科	学科合計	-	-	-	-	-	-
			1年生	1人	1号館	403講義室	143.0m ²	90人	0.01倍
			2年生	90人		402講義室	143.9m ²	90人	1.00倍
3年生			93人	401講義室		145.6m ²	90人	1.03倍	
4年生			83人	-	-	-	-	-	
理学療法学科		学科合計	134人	-	-	-	-	-	
		1年生	-	1号館	801講義室	145.6m ²	70人	-	
		2年生	-		802講義室	143.9m ²	70人	-	
		3年生	69人		803講義室	143.0m ²	70人	0.99倍	
	4年生	65人	-	-	-	-	-		
-	-	1号館	大講義室	361.3m ² *	230人	-			
-	-	4号館	大講義室	292.5m ² *	240人	-			

*控室、調整室、倉庫の面積も含まれた数値である。

(イ) 保健科学研究科

保健科学研究科で使用する講義室は1号館3階の301講義室及び302講義室となっている。各講義室に対する大学院生数の充足率は0.65倍以下であり、使用環境として適切に活用されている。また、大学院生には個別の調査研究活動に使用可能な大学院生室1(22.8㎡)、大学院室2(22.8㎡)が3階に設けられている。各講義室の収容定員及び収容定員充足率を表2-5-7に示す。

表2-5-7 講義室の収容人数と使用学生数(保健科学研究科)

研究科	使用学年	在籍者数	使用教室	面積	収容人数	充足率
保健科学研究科	合計	20人	-	-	-	-
	博士前期 1年生	4人	301講義室	47.0㎡	20人	0.20倍
	博士前期 2年生	13人	302講義室	46.5㎡	20人	0.65倍
	博士後期 1年生	2人	302講義室	46.5㎡	20人	0.10倍
	博士後期 2年生	1人	302講義室	46.5㎡	20人	0.05倍
	博士後期 3年生	0人	302講義室	46.5㎡	20人	一倍

(3) 改善・向上方策(将来計画)

リハビリテーション学部の新設に伴い、1号館にANNEX(別館)を増築、また、学生の厚生補導業務の拠点として5号館を新築したり、学友会館を新たに賃貸したりするなど学習環境や学生生活支援に向けて整備してきた。授業を行う環境整備は適切であるため、全学的に収容定員を適切に保持する努力が必要となる。また、通学時の自転車利用率の高まりに対し、駐輪場の増設を行ったが、今後も学生の通学方法の把握など、学生の状況変化に注視する。

2-6 学生の意見・要望への対応

2-6-① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

2-6-② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

2-6-③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

(1) 2-6の自己判定

「基準項目2-6を満たしている。」

(2) 2-6の自己判定の理由(事実の説明及び自己評価)

2-6-① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

2-6-② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

2-6-③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

学生の意見をくみ上げる仕組みの一つとして、学生委員会が実施している「学生生活実態・満足度調査」がある。この調査は毎年実施し、学科、学年問わず全ての学生を対象として意見、要望を集約している。令和3（2021）年度に実施した同調査は、在籍している1,512人のうち888人が回答（回答率59%）した。この調査で集めた意見、要望については学生委員会で協議し、回答が必要と判断されたものについてはQ&A方式で学生にフィードバックしている。

また、前年度に続き、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止に関する本学の感染症対策の対応の改善に生かすべく、学生から意見、要望を聞く項目を設けて実施した。

（ア）学修支援に関する意見をくみ上げるシステム構築とその反映状況

前述の「学生生活実態・満足度調査」が学修支援に関する学生の意見・要望をくみ上げるものとして挙げられる。調査では自主学習、履修、講義、国家試験対策など様々な学修関連の意見・要望が寄せられるため、それらの分析や改善の検討を学生委員会が中心に行っている。

また、例年実施している「卒業時アンケート」と、「卒業後アンケート（令和3（2021）年3月実施）」では、在学中に受けた教育やサービス等に関する設問があり、今後の本学における学生の意見・要望への対応における重要な基礎資料となると同時に、「学生生活実態・満足度調査」と同様に学修支援及び学習環境の改善と向上に寄与する調査であると考える。

（イ）心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する意見をくみ上げるシステム構築とその反映状況

学生生活の意見や要望については、日常的に各学科の担任やチューター、及び事務室（学務部）で受け付け、適宜対応している。聞き入れた学生の意見や要望の中で、専門的な対応が必要とされる場合には、学生支援センター、健康管理センターを経てキャリア支援室、保健室、学生相談室などの機関で適切な対応が可能な仕組みを構築している。

学生相談室運営委員会が全学生に行っている、学生の心に関する「学生生活アンケート」や、健康管理センター管理のもと行っている新入生対象の「健康ミニガイドのアンケート」は、学生の心身に関する把握に役立てている。

学生支援センターでは、経済的支援として奨学金の業務も含まれており、日本学生支援機構の奨学金や、国の修学支援新制度の対応、市区町村や施設等の奨学金の周知や本学独自の奨学金等の業務も行っている。奨学金の周知は本学のアクティブ・アカデミーと掲示で行っており、知りたい情報は学内外問わず得ることが可能である。

また、アクティブ・アカデミーでは修学支援ツールとして学生個々の成績や履修の状況、教員から学生への指導記録等の項目が確認でき、これを教職員で共有することができる。このシステムを利用し、教職員全体で学生の生活改善の反映に役立てている。

(ウ) 学修環境に関する意見をくみ上げるシステム構築とその反映状況

施設・設備に対する学生の意見などのくみ上げも前述の「学生生活実態・満足度調査」を中心に行っている。調査で集めた意見・要望をもとに、必要に応じた学内の施設・設備の改善を行っている。

(3) 2-6の改善・向上方策（将来計画）

学生の支援については、学生委員会や、学生支援センター及び健康管理センターに設けられている専門性が求められるキャリア支援室等の施設とともに、学科にチューターや学年担任、副担任を設け、学生に対して多角的、且つ重層的な支援体制を整備している。

令和3（2021）年度、作業療法学科及び言語聴覚学科開設に伴い1号館にANNEX（別館）が増設された。学生の増加に対応すべく、学生委員会、学生支援センター、健康管理センターを中心としたきめ細やかな配慮、問題意識への共有等、学生目線に立った学生生活の安定のための支援を継続する。

【基準2の自己評価】

教育目的（教育目標）を踏まえ、各学部と保健科学研究科ごとに求められる人物像を示すアドミッション・ポリシーを策定して周知し、それらに応じた多様な入試を公正かつ適切に実施し、収容定員を満たす学生を確保している。

TA等の活用をはじめとする学修支援は教務委員会、博士前期・後期課程運営委員会を中心に、検討・実施している。

学生生活支援及びキャリア支援は、学生支援センターにおいて教職員が協働し、学生の満足度を高める努力を行っている。特にキャリア支援については、キャリアサポートセンターの業務の一部を本学のグループ会社の職業紹介部門「メディカルサフラン」に委託することにより、国家試験不合格者や、中途退学者へのフォローを行っている。

経済的な理由で学びが困難な学生に対しては、学外の奨学金に加え、本学独自の奨学金制度である特待生奨学金、神戸奨学金、兄弟姉妹奨学金、同窓生奨学金（大学院生対象）を制定している。

課外活動の支援は、1つの公認部活動と12の公認サークル、2つの任意団体の支援、及び学園祭や学内スポーツ大会、私立大学スポーツ大会など学内外で行われる行事の支援を積極的に行っている。令和4（2022）年度は新型コロナウイルス感染症の状況にもよるが、年末に音楽祭を予定している。

学生への心身に関する援助として、5号館保健室と学生相談室に専門員を配置し、即時対応と予約対応が行われている。学生相談室運営委員会では、7学科の学科長と学生相談室のカウンセラーが毎月行われる会議で情報交換を行い、実効性の高い相談活動を行っている。

教員の日々の学生指導は、学部、学科、担任、チューターと段階的に且つきめ細かな対応をしている。

校舎、各施設設備の維持、管理等については、新たに学友会館を設けるなど、その状況に応じて見直し、点検・修理、また法令等に遵守した日常管理や定期点検を実施している。

学生の要望に応えるために、毎年「学生生活実態・満足度調査」を実施し、大学の対応をフィードバックしている。

平成30（2018）年から実施している卒業予定者及び卒業生を対象とした「卒業時アンケート」と「卒業後アンケート」では、在学中の学生生活支援、キャリア支援、学修環境の整備、学生サービス等について調査することにより、在学生を対象とした「学生生活実態・満足度調査」と併せて学生の意見・要望へのきめ細やかな対応はできていると考える。

以上のことから、基準2を満たしていると判断できる。

基準 3. 教育課程

3-1 単位認定、卒業認定、修了認定

3-1-① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知

3-1-② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知

3-1-③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の厳正な適用

(1) 3-1 の自己判定

「基準項目 3-1 を満たしている。」

(2) 3-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

3-1-① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知

ディプロマ・ポリシーは、「豊かな教養と人間愛を備えた質の高い保健医療専門職を育成し、保健・医療・福祉サービスとの協働及び知の創造を通じて、国際社会、地域社会に貢献する」という大学の目的と、それを具現化する教育目的を踏まえ策定され、以下に示すとおり本学 HP 及び学生便覧を通じて周知している。

(ア) 看護学部 ディプロマ・ポリシー

大学の目的のもとに定められた教育課程にそって研鑽に努め、卒業に必要な単位を修得し、以下の要件を満たすと認められた者に学位を授与します。

1. 社会人の基盤となる豊かな感性、倫理観、幅広い教養を備え、看護職としての態度を身につけている。
2. 看護の対象を身体的・心理的・社会的側面からとらえることができる。
3. 対象の健康課題を適切にとらえ、科学的根拠（知識・技術）に基づいた看護が実践できる。
4. チーム医療の中で多職種と協調し、調整することができ、リーダーシップを発揮できる。
5. 生涯にわたって専門分野を探究し、その発展に貢献する意欲と姿勢を身につけている。
6. 社会の変化や地域の特性をふまえ、多様な人や環境に積極的かつ柔軟に対応できる。
7. 世界で生じている保健医療の問題に関心をもち、看護職の役割を考えることができる。

(イ) リハビリテーション学部 ディプロマ・ポリシー

リハビリテーション学部の教育目的に基づき、学生が卒業時まで身に付けるべき知識や能力を次のように定めています。これらを身につけたことを卒業要件とし、学位を授与します。

1. 倫理観を持って障害の有無にかかわらず、人間の個性と尊厳を尊重する姿勢
2. 人間や社会に関する幅広い教養に根差し、リハビリテーションを取り巻く諸問題を認識できる能力
3. リハビリテーションにおける専門領域に必要な基本的知識と技術
4. 多様化する地域社会の諸問題を理解し、多職種と連携してリハビリテーションを実践できる能力

5.自己研鑽に励み、人格的成長を目指す姿勢

(ウ) 医療技術学部 ディプロマ・ポリシー

医療技術学部の教育目的に基づき、学生が卒業時に身につけるべき知識や能力を次のように定めています。これらを身につけたことを卒業要件とし、学位を授与します。

- 1.人権を尊重し、高い倫理観をもって社会に貢献する姿勢
- 2.チーム医療を実践するための、コミュニケーション能力と協調性
- 3.医療技術専門職としての基礎的知識と技術、及び社会人としての教養
- 4.医療技術分野の諸課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる能力
- 5.生涯にわたって専門分野を探究し、その発展に貢献する意欲と姿勢

(エ) 保健科学研究科

保健科学研究科のディプロマ・ポリシーは、博士前期課程、博士後期課程それぞれの目的、及びそれらを具現化する教育目標を踏まえ、課程ごとに策定され、以下のとおり本学HP及び学生便覧を通じて周知している。

1) 博士前期課程のディプロマ・ポリシー

群馬パース大学大学院保健科学研究科の博士前期課程を修了し、次に該当するものに修士（保健学）の学位を授与します。

1. 保健医療専門職としての基礎的知識、科学的根拠及び高い倫理観に基づいて問題の探求・解決を図る高度な研究能力を有する
2. 保健医療分野の諸課題に関して、科学的な手続きと洞察に基づく的確な判断能力を有する
3. 先進・高度化する専門分野の基本的技術を提供する実践能力を有する
4. 地域保健医療の実践現場で他の分野と連携して社会に貢献できる教育能力を有する

2) 博士後期課程のディプロマ・ポリシー

群馬パース大学大学院保健科学研究科保健科学専攻（博士後期課程）を修了し、次に該当するものに博士（医療科学）の学位を授与します。

1. 独創性・創造性に優れ国際的に通用する研究能力を備えた人材
2. 医療・保健科学分野の教育を行う大学あるいは大学院における教育・研究指導ができる人材
3. 医療現場において、高い倫理観と高度な専門知識に基づいた実践能力を持ち、自立的な研究ができる人材
4. 科学的エビデンスを構築しながら研究開発ができる人材

3-1-② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知

(ア) 学部

各学部における単位認定基準は、各科目の目的を指標化した「学修到達目標」に対する到達度が6割以上であることとしている。各科目の目的はディプロマ・ポリシーを踏まえて定め、その対応はシラバスに明示している。また、医療職を養成するという教育課程の性質上、学修は段階を追って積み上げていく必要があるため、各学年の進級基準を満たすことを進級の要件としている。進級基準は各学科、各学年で開講される必修科目の単位を全て修得することである。卒業認定基準は、本学に4年以上在学し、学則に定める授業科目を履修して所定の単位を修得することとしている。これらの定めは学生便覧に明記し、学生へ周知の上、厳正に適用している。

(イ) 保健科学研究科

保健科学研究科の単位認定基準は、ディプロマ・ポリシーを踏まえて定められた各科目の目的を指標化した「学修到達目標」に対する到達度が、6割以上であることとしている。修了認定基準は、博士前期課程にあつては2年以上、博士後期課程にあつては3年以上、本大学院に在学し、大学院学則に定める所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上で学位論文の審査及び最終試験に合格することとしている。学位論文等の審査基準は「群馬パース大学学位規程」に詳細を定め、学生便覧への掲載により学生へ周知の上、厳正に適用している。

3-1-③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の厳正な適用

(ア) 学部

各学部の単位認定は、「群馬パース大学履修規程」第11条（単位認定）に基づいて行われている。成績評価方法は、シラバスに示す学修到達目標及び成績評価方法に従って点数化し、成績評価基準に基づいて評価している。編入学を除き他大学等での既修得単位は60単位を上限に、教務委員会の審議を経て学長が認定している。

進級及び卒業認定は、学科ごとに定められた基準に基づき、学科別の進級判定会議、教務委員会、教授会の議を経て学長が承認する形で厳正に適用されている。

表 3-1-1 学部成績評価基準

点数区分	評価の表示方法	GP (グレード・ポイント)	可否
100 ～ 90 点	A+	4.0	合格
89 ～ 80 点	A	3.0	
79 ～ 70 点	B	2.0	
69 ～ 60 点	C	1.0	
59 点以下	F	0	不合格

(イ) 保健科学研究科

保健科学研究科の単位認定は、「群馬パース大学大学院履修規程」第12条（単位認定）

に基づいて行われている。評価方法については学部と同様シラバスに示す学修到達目標及び成績評価方法に従って点数化し、成績評価基準に基づいて評価している（表3-1-2）。

保健科学研究科における進級基準は定めていないが、大学院生の実情を勘案し弾力的に指導している。修了認定は、定められた基準に基づき、修了判定会議、研究科委員会の議を経て学長が承認する手続きにより、厳正に適用されている。

表 3-1-2 保健科学研究科成績評価基準

点数区分	評価の表示方法	合否
100 ～ 90 点	A+	合格
89 ～ 80 点	A	
79 ～ 70 点	B	
69 ～ 60 点	C	
59 点以下	F	不合格

(3) 3-1 の改善・向上方策（将来計画）

ディプロマ・ポリシーは本学の目的と使命から導き出されたものであり、学部及び研究科それぞれ学内外に向けて適切に周知されており、厳正に適用されている。本学が養成する医療職は、直接的対人サービスの頻度が高い看護師、理学療法士、作業療法士及び言語聴覚士、主としてテクノロジーを使って診断に従事する臨床検査技師及び診療放射線技師、工学の知識を駆使しつつ人とも接する臨床工学技士と多岐に渡る。今後は、中長期計画に基づく学部再編に合わせて慎重に改正することも検討する。

3-2 教育課程及び教授方法

3-2-① カリキュラム・ポリシーの策定と周知

3-2-② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性

3-2-③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成

3-2-④ 教養教育の実施

3-2-⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施

(1) 3-2 の自己判定

「基準項目 3-2 を満たしている。」

(2) 3-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

3-2-① カリキュラム・ポリシーの策定と周知

3-2-② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性

(ア) 学部

各学部のカリキュラム・ポリシーは、各学部ディプロマ・ポリシーを受けて策定され、ディプロマ・ポリシーの各構成要素とカリキュラム・ポリシーを体現した各学科の教育課程の関係を明記したカリキュラム・マップにより、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの関係性に基づき一貫性を示している。

これらは、本学 HP 及び学生便覧を通じて以下のとおり周知している。

1) 看護学部カリキュラム・ポリシー

看護学部看護学科は、ディプロマ・ポリシーを実現するために、教育課程を以下のように編成します。

- 1.大学初年次教育を充実させ、在学中の成長を学生・教員が共に確認しあうために、修学ポートフォリオを活用します。
- 2.豊かな感性と倫理観、幅広い教養を身に付けるために、思想・表現・環境・情報に関連する科目を教養科目群に配置します。
- 3.看護の対象となる人間を理解するために、発達や生活及び社会に関連する科目を教養科目群に配置します。
- 4.看護学を理解する上で基盤となる知識を獲得するために、人体の構造と機能、疾病の成り立ちと回復の促進、健康支援と社会保障制度などに関連する科目を専門基礎科目群に配置します。
- 5.専門科目群は看護学の概要を理解し、具体的な看護の方法を段階的に学べるよう科目を配置します。授業は講義・演習・実習を有機的に連動させて展開します。
- 6.授業では、能動的学習を充実させ、自ら考え、解決する力を養うために、多様なアクティブ・ラーニングの方法を積極的に取り入れます。
- 7.実習は、看護実践能力を身に付けるために、多様な場を活用して、入学後早期から段階的に実施します。
- 8.チーム医療に対する理解を深めるために、多職種連携・協働を学ぶ科目を配置します。
- 9.看護に対する関心や意欲を高め、更に探求できるための科目を適切な時期に配置します。
- 10.助産師または保健師の国家資格取得希望者には、各国家試験受験に必要な科目を選択できるように配置します。
- 11.人の多様性を理解し、国際的視野を広げるために、コミュニケーション、外国語、国際看護および看護の各専門領域における国際的な課題について学ぶ科目を初年次より段階的に配置します。

2) リハビリテーション学部カリキュラム・ポリシー

リハビリテーション学部では、ディプロマ・ポリシーに沿って、その専門性に応じ、次の趣旨を盛り込んだ科目によってカリキュラムを編成しています。特に、多職種連携の基礎となる科目と、国際生活機能分類（ICF）の概念に基づくリハビリテーションに対応できるよう授業科目を工夫しています。

1. 豊かな教養、コミュニケーション能力の育成、人工知能や情報社会に対応する能力、人間を多側面から理解するために、『人と社会及び自然の理解』と『情報と言語の理解』に区分した教養科目を配置しています。
2. 『大学の学びの基盤』として、学び方入門、専門への導入、多職種理解と連携の科目を配置しています。

3. 人間の運動や行動を解剖学、生理学、運動学、心理学、発達学的観点から分析・考察でき、リハビリテーション専門職として必要な医学的知識を学ぶための科目を配置しています。
4. リハビリテーションにおける専門領域に必要な基本的知識と技術を身につけるため、各学科に『評価学』『治療学』『支援学』の該当科目を配置しています。
5. 保健医療チームとして、連携・協働を図りながら、社会参加、健康増進、障害予防の見方ができるように、「チーム医療とリハビリテーション」、「地域リハビリテーション学」を配置しています。
6. 学内で学んだ知識と実践との経験を統合できる機会として、対象者との人間関係の構築、施設内外における多職種連携の構築を経験し、将来の人間像を形成する場として、『臨床実習』を配置しています。
7. 専門職として基盤となる科学的思考や自己研鑽力を身につけるため、研究の基礎につながる科目を配置しています。

3) 医療技術学部 カリキュラム・ポリシー

医療技術学部では、ディプロマ・ポリシーに沿って、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科のそれぞれの専門性に応じてカリキュラムを編成しています。その教育課程は、教養科目群・共通基盤科目群、専門基礎科目群、専門科目群から構成されています。

1. 教養科目群は社会人としての教養、問題解決能力、コミュニケーション能力を身につけるため、「人と社会及び自然の理解」の科目群と「情報と言語の理解」の科目群に大別された広範な科目を3学科共通科目として配置しています。
2. 共通基盤科目群は、「大学の学びの基盤」として、大学の学び入門、大学の学び一専門への誘い、多職種理解と連携の科目を3学科共通必須科目として配置しています。
3. 専門基礎科目群は、医療技術専門職を養成する3学科それぞれに展開される専門領域の理論、技能の習得のための学術的基盤となる科目を配置しています。
4. 専門科目群は各学科の専門領域とそれに関連する理論、技能を学ぶ科目を配置し、さらに高い実践力を獲得するため、臨地実習の科目を配置しています。

(イ) 保健科学研究科

大学院博士前期課程のカリキュラム・ポリシーは、ディプロマ・ポリシーに掲げる研究能力、判断能力、実践能力、教育能力の4つの要素ごとにその達成に必要な教育課程編成の方針を明示している。同カリキュラム・ポリシーは、大学HP及び学生便覧を通じて以下のとおり周知している。

1) 大学院博士前期課程カリキュラム・ポリシー

群馬パース大学大学院は学位授与の方針（ディプロマポリシー）に掲げる人材を養成するため、以下のとおり教育課程を編成し、実施します。

1. 研究者としての基盤の涵養

研究能力の基盤を形成するために、共通科目に「研究方法特論」、「研究方法論Ⅰ～Ⅴ」、「応用英語」、「保健医療統計学特論」などの科目を設置する。又、専門の領域における研究実践の方法、すなわち研究テーマの設定から学位論文の完成までを段階を追って教育するために、専門科目に各領域の「特論」、「演習」、「特別研究」を設置する。

2. 高度な実践力とリーダーシップの涵養

保健医療分野におけるリーダーに必要な、専門領域の枠を超えた総合的・学際的な教育を行うために、共通科目に「医療倫理学特論」、「医療経営・管理学特論」、「人体の構造と機能学特論」、「加齢医学特論」、「家族社会学特論」、「保健学特別セミナー」などの科目を設置する。特に、「保健学特別セミナー」は幅広い視野の育成という目的に加え、協働（チームアプローチ）の重要性に鑑み必修科目として設置する。

3. 専門領域における教育能力の涵養

教育機関での教育志向だけでなく、保健医療の様々な場面における教育活動を想定した医療専門領域における教育学の教育を行うために、共通科目に「教育学」を設け、さらに専門科目の「特論」、「演習」のなかで領域ごとに、より実践的な内容を盛り込む。

履修計画では、体系化された所属専門領域の「特論」、「演習」、「特別研究」を基本に置く。並行して学ぶ共通科目は一部を除き、学習ニーズ、学習進度に合わせて年次にかかわらず柔軟に履修できるように配置する。また、家庭や職場など社会的事情により標準修業年限（2年）での修業が困難な場合に、標準修業年限を超えて履修可能な長期履修制度を設ける。以上のように、少人数教育の利点を活かし、学習者の志向・ニーズに対応できる柔軟で特色のある大学院プログラムを提供する。

大学院博士後期課程のカリキュラム・ポリシーは、ディプロマ・ポリシーに掲げる創造性、高い倫理観、国際的に通用する研究能力、研究開発・研究指導能力の涵養という主旨を踏まえ、その達成に必要な教育課程の編成方針を定めており、本学 HP 及び学生便覧を通じて以下のとおり周知している。

2) 大学院博士後期課程カリキュラム・ポリシー

群馬パース大学大学院保健科学研究科保健科学専攻（博士後期課程）は学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる人材を養成するため、以下のとおり教育課程を編成し、実施します。

1. 高い倫理性と強い責任感、課題遂行力の涵養

共通科目において、社会的理解を得るための生命倫理に則った研究デザインと倫理的行動能力を修得することを目的とした「生命研究倫理論」と、自らの研究分野以外の幅広い知識と課題に適した研究法を選択できる能力を修得することを目的とした「医療科学研究法」の科目を設置する。

2. 創造性豊かな優れた研究・開発能力の涵養

専門科目において、科学的エビデンスを構築するための高度解析技術や最新評価法などを修得することを目的とした「特講科目」と、各領域の解決すべき課題を広

く探求し、課題解決思考を発展させるため、英文文献講読と教員との討論により、研究の評価・応用能力を養い、国際的な情報発信ができることを目的とした「演習科目」、さらに、医療科学における新たな知見を得るための研究を行い、英文論文として公表できることを目的とした「特別研究」を設置する。

3-2-③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成

(ア) カリキュラム・マップの作成

各学部の教育課程は、学則第 24 条（授業科目）において学科ごとに定められており、各学科の教育課程はカリキュラム・ポリシーに従って体系的に編成され、効果的に教授が展開されるよう工夫されている。このことは、学科ごとに定めるカリキュラム・マップにより説明されている。カリキュラム・マップは、アクティブ・アカデミー上で公開し、学生に周知している。

(イ) シラバスの適切な整備

各科目の授業内容が、ディプロマ・ポリシー及び学科の教育目標から導出される学習到達目標を体現したものとなるよう、シラバスの記載項目に改良を重ねている。各科目の単位認定者により作成されたシラバスは、各学科教務委員によりその適切性について点検・確認作業が行われ、必要に応じて単位認定者へ加筆修正を求めている。

また、シラバスに沿った授業展開がなされているか毎学期末に実施する「学生による授業アンケート」により検証を行っている。

(ウ) 履修登録単位数の適切な上限設定と単位制度の実質を保つための工夫

単位制度の実質を保つため CAP 制を導入し、履修登録可能な単位数の総数を年間 48 単位と定めている。ただし、成績優秀者（前期 GPA が 3.50 以上の者）には後期の履修登録時に、定められた履修登録単位数の上限以上の履修を認めることとしている。

本学部の全ての学科は、国家資格を要する医療職の養成課程であることに鑑み、医学的知識と医療技術を段階的に修得させる進級制度をとっている。進級制度では、上位学年へ進級するために取得すべき科目を指定しているが、進級に必要な科目の単位数は CAP 制で指定する上限の範囲内であり、実際の履修単位数を見ても年間 48 単位以内に収まっており、学修の質が担保されている点から単位制の実質が保たれている。

3-2-④ 教養教育の実施

組織規程第 11 条に基づき、本学では全学的視点に立って、教養教育に関する教育活動を円滑かつ有効に実施する組織として教養部を学科と同等に位置付けている。構成員は教養科目の担当教員で、そのうち 1 人の教員が教養部責任者として教養部を統括している。

本学では大学生にふさわしい教養、知識を身につけ、将来豊かな教養と人間性を兼ね備えた医療人を育成するために、教養教育を教養科目群と共通基盤科目群の 2 つの科目群に分けている。ただし、看護学部においては教養科目群 1 つで、「大学の学びの基盤」は教養科目群に含まれている。

教養科目群では、基礎的教養、問題解決能力、コミュニケーション能力を身につけるために、「人と社会及び自然の理解」、「情報と言語の理解」の2つの上位区分とそれを構成する7つの下位区分から満遍なく学べるよう授業科目を配置し、多様な知識、思考力を身に付けられるように多種多様な科目を提供している。また、学科によって多少の差異はあるが、選択と必修のバランスにも配慮している。学科合同で開講する科目も多く設定し、幅広い授業科目で扱う多様な知識を他学部、他学科の学生と共に学ぶことにより、学生が様々な考え方の違いを理解し、柔軟な思考力を身につけるよう図っている。

3学部7学科とも、初年次教育として、大学での学びに必要な姿勢やスキルを学ぶ科目を1年前期に全学科必修科目として開講し、大学での学びへの円滑な移行を促すとともに、学科合同で学ぶことにより、学科の壁を越えた学生間の交流を図っている。また、看護学部を除く2学部6学科において、入学後早期から専門科目への関心・意欲を高めるための科目を同じく1年次に開講し、専門教育の導入部分を提示することにより、或いは、実務者をゲストスピーカーとして招き卒後の職業人としてのイメージの具体化を促す等の工夫をすることにより、学生の学習意欲の向上を図っている。さらに、異なる医療職種を養成する学科を擁する本学の特徴を活かし、2年次には、学科の教員がそれぞれの職種の立場からチーム医療に関する話題を提示する科目を開講し、専門性、役割、立場等の違いを理解して協働していく力の基礎を育てている。

看護学部においては上記の「入学後早期から専門科目への関心・意欲を高めるための科目」と「チーム医療に関する話題を提示する科目」は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則に専門科目として対応することが求められていることから、専門科目群に分類されている。しかしながら、内容は他学部、他学科が共通基盤科目群の科目として配置しているものとほぼ同じである。したがって、科目群は学部により異なることはあっても、医療職を育てる理念、目的、手段は共通であることが確認されている。

幅広い教養を身につけることと同時に、群馬パース大学の学生として学部・学科の専門にとらわれない共通の意識を身につけるといことも教養教育の目指すところである。そのために大学の学びの姿勢やスキルを学ぶ科目において、教養部が企画・実施している、本学の理事長と学長、本学のグループ病院の院長による新入生への講義では、理事長からは本学設立の歴史、建学の精神、教育理念、学長からは教育理念と教育目標、PAZの表す意味と目標、病院長からはグループ病院での医療、及びチーム医療についての内容を含んだ講義を行っている。これらの講義を通じて、学部・学科を超えた全学共通の意識、連帯感、医療職としての基本的姿勢の養成を目指している。これらを通じて教養部が専門基礎教育と専門教育への接続の一翼を担っている。

今年で3年目になる新型コロナウイルス感染症に対する教養教育の実施については、万全の感染症防止策を講じつつ、昨年度同様新学期のスタート時点から対面授業を行っており、学生の学修の質を保つよう対応している。

3-2-⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施

(ア) 授業内容・方法などの工夫

1) 学部

各学部では、保健医療専門職としての能力を育成するため、カリキュラム・マップに示

すように4年間の学修進度において、講義、演習・実技、実習をバランスよく配置するよう工夫がなされている。特に、実習科目は認知、行動、情意を統合する機会として重視し、学内実習から学外実習へと学修の進度に応じて段階的、体系的に配置している。また、問題解決能力の育成のため、各学科が演習科目においてグループワーク等による課題解決型の学習方法を多用している。

以下、学科ごとの授業内容・方法などの工夫を示す。

①看護学科

1 学年前期に「看護学への誘い」を開講し、小グループに分かれてテーマ設定、情報収集・整理、発表を行う PBL（課題解決型学習）を実施している。また、1 年次から 4 年次まで各学年で開講される専門科目群の各演習科目においても、実践能力を高める授業展開としてシミュレーション教育や小グループによる PBL を多用している。

②理学療法学科

あらゆる科目を通じて「身体的に弱い立場におかれた人たちが満足する援助を行うために必要なこと」の理解につながることを基本にして教授方法を工夫している。教授方法として、知識伝達方式の講義だけではなく、討論と発表を通じたアクティブ・ラーニングを初学年より行っている（大学の学びー専門への誘いー）。また患者様を想定し、アプローチの手順を学ぶ PBL を行い、実際の患者様との治療場面を想定した立ち居振る舞いや適切なボディコンタクト、患者様の立場を実感する練習のために OSCE を実施している。臨床実習後には振り返りのセミナーを討論形式で実施し、臨床体験を定着させる工夫を行っており、令和 3（2021）年度リハビリテーション学部開設以降においては、臨床実習後の OSCE も取り入れ、学生が成果を確認できるようにしている。また、「チーム医療と地域リハビリテーション」、「国際保健」、「人工知能及びロボティクスに関する学び」を追加し、これらの科目にもアクティブ・ラーニングの方法を取り入れ、学習が主体化する取り組みを行っている。

③作業療法学科

1 学年（後期）に「大学の学びー専門への誘いー」を開講し、専門職を目指し、臨床で働き、現在に至るまでを学科教員のすべてが講義し、質疑応答形式の中からキャリア教育としての位置づけを行っている。当該授業では各教員が最初に集団討議のための方法として KJ 法、フィッシュボーン分析、マインドマップなどのツールを紹介し、グループディスカッション、発表といった小グループでの PBL を取り入れている。

④言語聴覚学科

言語聴覚療法領域は急速に発展・変化しており、従来の知識詰め込み型の教育ではこれに対応できない。そこで言語聴覚学科では学生自らが情報を収集し、アイデアを発展させ、発表・報告を行い、表現力を高めていくアクティブ・ラーニング（AL）を積極的に導入している。その実践においては、少数の学生で構成されるアクティブ・ラーニング・ゼミ形式を導入している。ゼミ担当教員は学生の自発的な学修を尊重し、その成果を最大限評価

する方針で指導にあたっている。

⑤検査技術学科

1 学年に PBL テュートリアル教育に準じたグループ学習「大学の学び—専門への誘い—」を開講し、医療や臨床検査に関連付けた課題を小グループにて実施し、自ら問題を発見・設定し解決できるよう工夫している。3 学年には「臨床検査解析学 (Reversed CPC)」を開講し、患者データをグループ内で討論し、患者の病態を推測する実践的なトレーニングを行っている。4 学年では小グループで「卒業研究」を行い、科学的な評価能力と研究能力を養っている。

⑥放射線学科

医療専門職としての知識を修得し、その能力を現場で発揮させるために4年間に於いて基礎知識の理解から思考力、判断力、技術力の養成へと重点を移しながら教育を行えるよう教育課程を配慮している。1年後期に「大学の学び—専門への誘い—」を開講し、チーム医療や専門職志向をテーマに、小グループによる PBL、プレゼンテーションによる情報発信、グループディスカッションによるコミュニケーション能力の醸成を行っている。また、3年時には、学内実習を展開し、従来の実験系科目から、より臨床系実習に重点を置き、実践的体験型教育を実施している。

⑦臨床工学科

1 学年では「チームとは何か」をテーマとして、グループワークによる協調学習を行い、コミュニケーションや協調の動機付け、さらに競争と協調作業による学習の動機付けを行っている。2 学年以降では、現職の臨床工学技士や医師、医工学に関するスペシャリストなど多彩な非常勤講師（またはゲストスピーカー）を招いた講義や小グループによる PBL を実践し、社会を知るとともに自発的な学習能力を引き出せるよう取り組んでいる。

2) 保健科学研究科

保健科学研究科は少人数教育の利点を活かし、共通科目の多くを各専門領域に所属する学生が合同で履修できる内容とし、それぞれの専門性を基盤に共同活動によって課題を探究するよう授業を展開している。このことは、保健医療分野においてリーダーシップを発揮する実践者・指導者の育成という教育目的の達成のために有効に機能している。

(イ) 教授方法の改善を進めるための組織体制の整備と運用

教育方法の改善を進めるため、FD 委員会を設置し、計画的に FD (Faculty Development) の推進を図っている。例年、相互授業見学 (ピア・レビュー)、各種研修会及びワークショップ、「学生による授業アンケート」を実施している。授業アンケートについては、結果を受けて各教員が授業改善計画を立案し、FD 委員会が取りまとめている。

保健科学研究科においては、学部とは独立した FD 委員会を設置し、大学院独自の FD に関する事項を協議し、FD (Faculty Development) の推進を図っている。令和 3 (2021)

年度は研修会、「学生による授業アンケート」を実施した。

(3) 3-2 の改善・向上方策（将来計画）

カリキュラムとそれを実行する授業の展開は、社会の要請と学生の実態に応じて発展させなければならない。医療職を養成する本学において検討すべき点は、一般教養科目の構成内容と学年配当、専門基礎科目及び専門科目の学習内容の精選と学習時間の担保、国家試験受験準備学習と卒業研究の比重按分、養成施設指定規則等の変更などがある。今後、これらの点を注視し、社会に貢献できる人材養成を目指す。

また、令和 3（2021）年度は、新型コロナウイルス感染症に注意を払いつつ通常の形態で対面授業を実施した。今後も、学生の学修機会の確保と感染対策の徹底の両立を図るとともに、学生が安心し、また十分納得した形で学修できるような対応を講じていくよう努めていく。

3-3 学修成果の点検・評価

3-3-① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用

3-3-② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック

(1) 3-3 の自己判定

「基準項目 3-3 を満たしている。」

(2) 3-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

3-3-① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用

三つのポリシーを踏まえた学修成果の達成状況について、学修成果を点検・評価したものを以下に明示する。

(ア) 学生の学修状況

学部における令和 3（2021）年度の学生の修得単位数は、1 年次では 31～40 単位を修得した者が 32.6%、41 単位以上を修得した者が 65.1%であった。2 年次では 31～40 単位を修得した者が 75.4%、41 単位以上を修得した者が 20.5%であった。3 年次では 21～40 単位を修得した者が 95.5%、4 年次では 11～20 単位を修得した者が 85.8%であった。当該年次に必要な単位を修得し、進級又は卒業した学生は、1 年次 436 人中 419 人、2 年次 366 人中 343 人、3 年次 349 人中 329 人、4 年次 346 人中 334 人であり、1～3 年次の進級率は 94.5%、4 年次の卒業率は 96.6%であった。

学部では、前掲「表 3-2 学部成績評価基準」の GP 基準に則り GPA を算出している。この結果は、アクティブ・アカデミー上の修学ポートフォリオの頁に掲載することにより、学年担任、チューター等教員が随時閲覧し、個々の学生の学習成果の点検・評価及び学習支援に活用している。さらに、学科・学年ごとの学習成果の点検・評価のため、学科ごとに全在籍者の GPA を各学科の学科長及び学科教務委員が学内グループウェア・システム上で閲覧できる仕組みをつくっており、過年度からの推移や学年による特徴を比較検討し、教育活動の改善に活用している。学年進行に応じた適切な単位取得状況、良好な進級状況及び高い卒業率及び妥当な成績分布の状況は、良好な学修状況を示しており、ディプロマ・ポリシーに基づく教育が適切に進められている証左である。

(イ) 学生の資格取得状況

令和 3 (2021) 年度の保健科学部卒業生の資格取得状況は、看護学科卒業生 74 人のうち看護師国家試験合格者は 74 人 (合格率 100%)、保健師課程履修者 18 人のうち保健師国家試験合格者は 17 人 (合格率 94.4%)、助産師課程履修者 6 人のうち助産師国家試験合格者は 6 人 (合格率 100%)、理学療法学科卒業生 67 人のうち理学療法士国家試験合格者は 61 人 (91.0%)、検査技術学科卒業生 66 人のうち臨床検査技師国家試験合格者は 64 人 (97.0%)、放射線学科卒業生 71 人のうち診療放射線技師国家試験合格者は 55 人 (合格率 78.6%)、臨床工学科卒業生 56 人のうち臨床工学技士国家試験合格者は 51 人 (合格率 91.1%) であった。看護師国家試験、保健師国家試験、助産師国家試験、理学療法士国家試験、臨床検査技師国家試験、臨床工学技士国家試験のいずれにおいても合格者率の全国平均を上回っている。

(ウ) 就職状況

令和 3 (2021) 年度保健科学部卒業生の就職状況は、看護学科卒業生の就職率 100%、理学療法学科卒業生の就職率 98.5%、検査技術学科の就職率 98.4%、放射線学科の就職率 73.1%、臨床工学科の就職率 85.7%であった。保健科学研究科修了生 3 人は、在学中から勤務していた医療機関又は教育機関等で就労している。また、看護学科助産師課程卒業生のうち助産師として就職した学生は 6 人であり、その取得資格を活かして就職している。検査技術学科や臨床工学科では一般企業等への就職もみられるが、医療に関連する企業への就職が多い。

(エ) 学生による授業アンケート

学生自身による学修状況の評価を把握するために、「学生による授業アンケート」の結果も活用している。アンケートは、授業の内容・教員の教える姿勢・学生の学ぶ姿勢の三つの視点からなる 18 項目の質問に対して、学生の感じたことを、そう思う・どちらかというところ思う・どちらかというところ思わない・そう思わない、の 4 段階で答えるもので、4 点満点で降順に点数化されるものである。自由記載項目も配置されている。

授業の内容については計画性・興味・構成・理解し易さ・進度の 5 項目、担当教員の教える姿勢については、内容の準備・学生の観察・時間遵守・質問への対応・教材選定・声の大きさ・板書とプレゼンテーション・課題提示・学修環境管理の 9 項目、学生自身の学修姿勢は、出席・態度・予復習・質問の 4 項目であるが、それぞれの領域について 4 点満点平均点で評価している調査である。

アンケートの 3 つの領域の平均点及び自由記載項目の抄録は授業科目ごとに、学年学科別に本学 HP にて公開されている。学生の主観的評価の総体ではあるが、全科目の平均で見れば、4 点満点中で授業の内容は平均 3.5 点、教員の教え方は 3.5 点、学生の姿勢は 3.5 点であり、教育水準及び満足度ともよい水準に保たれていると考える。この学生による評価が比較的高い点は、ディプロマ・ポリシーによる教育が実行されている経過にあることを示している。

(オ) 就職先機関のアンケート

就職先機関のアンケートは、ディプロマ・ポリシーに沿って知識・理解、思考・判断、技能・表現、意欲・関心、態度の各側面についての評価を受ける内容とし、大学が主催する合同進路相談会の機会を利用して実施した結果、卒業生の評価は概ね良好であった。この点はディプロマ・ポリシーの良好な達成度合いを示している。

(カ) 卒業時アンケート

卒業時アンケートは4年間の大学生活を振り返って感じられる学修の充実度合いを計る10項目の設問で構成されており、充実度は強い肯定、弱い肯定、弱い否定、強い否定の4段階及びその他の5つの選択肢から一つを選ぶ方式である。令和3(2021)年度の卒業生の回答率は96.1%で、全ての設問において約90%以上が肯定的な回答であり、ディプロマ・ポリシーの達成度が高いことを示している。

3-3-② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック

(ア) 教育内容・方法及び学修指導方法改善へ向けてのフィードバック

学生の学修状況については、年度末に各学科の進級判定会議及び卒業判定会議において学部長、学科長、教務委員に報告され、学科の学習指導方針等に関する協議の機会となっている。また、各学生の単位取得状況及びGPAはアクティブ・アカデミー上の修学ポートフォリオの頁に掲載され、学年担任、チューター等、学生指導を行う教員が随時閲覧し、個々の学生の学習成果の点検・評価及び学習支援に活用している。

学生の資格取得状況は国家試験対策委員会、就職状況はキャリア支援室運営委員会が各学科と協力して集約・分析し、教授会、学科会議を通して全教員にフィードバックされている。

「学生による授業アンケート」の集計結果については、集計表はアクティブ・アカデミー、自由記載の内容はグループウェア・システムを用いて各教員にフィードバックされている。各教員は、前年度のアンケート結果を受けて行った工夫・留意点の振り返り、また当該年度のアンケート結果に対する今後の改善計画を「授業アンケート教員コメント用紙」に記載して提出することとしており、各授業科目のPDCAサイクルに学生自身による学習成果の評価を反映させる仕組みとなっている。さらに、同用紙はFD委員会への提出を義務づけることにより実施が担保されている。

また、「教育研究年報」として本評価書の巻末に年度ごとの各授業科目の開講状況、授業の方法、使用した教材、素点平均等の記録や研究活動の記録を掲載したり、アクティブ・アカデミーのWebフォルダページ上に成績分布状況を公開したり、教員間で共有することにより、教授方法改善の資料としている。

(イ) 学生に対する学修状況評価のフィードバック

個々の学生の学修状況は、担任またはチューターがアクティブ・アカデミーで確認し、学生にフィードバックし、学修の振り返りを促している。加えて、科目担当者による試験後の解答解説や正答開示など学修到達状況のフィードバック、学生が確認できるアクティ

ブ・アカデミーで公開された成績分布状況により学生が到達度を自己評価できるよう支援している。学修の到達目標に達しない学生に対しては対面による直接指導も行っている。

また、必要に応じて保護者に対しても個々の学生の学修状況をフィードバックし、家庭における学修環境の整備等について相談・助言を行っている。

(3) 3-3の改善・向上方策（将来計画）

アクティブ・アカデミーの導入により学修状況を一元管理し、学修指導に活用できる環境が整いつつあるが、学修に関する情報を教職員・学生間で共有するための修学ポートフォリオの活用は未だ途上である。今後、修学ポートフォリオ上で教職員・学生間が共有する情報の種類と双方向コミュニケーションの在り方を検討し、学生自身が学修状況を随時確認して自己の学修課題とその後の取り組みについて教員の助言を得ながら自主的・主体的に学習を進めるための、合理的かつ汎用性の高い修学指導システムを確立する予定である。

平成25(2013)年度から導入したGPAを修学支援の実質的で合理的な指標とするため、教務委員会とIR推進室との連携により、現行の進級基準、卒業認定基準との関連等について検証を進め、適正な評価基準や運用方法を検討していく。

「学生による授業アンケート」の結果を直ちに授業改善に反映させるため、アンケート実施方法を検討する。

[基準3の自己評価]

学部及び大学院の教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーと、それを達成するためのカリキュラム・ポリシーを編成し、広く公開している。教育課程はカリキュラム・ポリシーに基づき、一般教養を重視して編成され、カリキュラム・マップによりディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとの一貫性がわかり易く示されている。教育課程を実践する授業にあっては、保健医療専門職として必要な能力を育成するための様々な工夫がなされ、明確な成績評価基準、単位認定基準によって評価されている。学年進行にあたっては、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等が学則等で明示され厳正に適用されている。学修成果の点検・評価は、学修状況、資格取得状況、就職状況、「学生による授業アンケート」、就職先機関アンケート、卒業時アンケートを用いて多面的に行われ、教育内容・方法及び学修指導の改善のために適切にフィードバックされている。

以上のことから、基準3を満たしていると判断できる。

基準 4. 教員・職員

4-1 教学マネジメントの機能性

4-1-① 大学の意思決定と教学マネジメントにおける学長の適切なリーダーシップの確立・発揮

4-1-② 権限の適切な分散と責任の明確化に配慮した教学マネジメントの構築

4-1-③ 職員の配置と役割の明確化などによる教学マネジメントの機能性

(1) 4-1 の自己判定

「基準項目 4-1 を満たしている。」

(2) 4-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

4-1-① 大学の意思決定と教学マネジメントにおける学長の適切なリーダーシップの確立・発揮

学長がリーダーシップを適切に発揮するための補佐体制として、平成 26 (2014) 年度に「群馬パース大学・群馬パース大学大学院大学協議会規程」（以下、「協議会規程」という。）を整備し大学協議会を毎月 1 回のペースで開催している。大学協議会は学長を議長と定め（協議会規程第 5 条）、その構成メンバーは学長、副学長、研究科長、学部長、学科長、教養部責任者、事務局長、各部長、IR 推進室長、（協議会規程第 4 条）である。

審議事項は法人運営会議への提案事項及び教授会と研究科委員会へ審議を要請する事項（全学的な教育課程の編成方針、本学の将来構想、本学の予算、競争的資金の獲得に関すること及び学長が必要と認める事項）であることが協議会規程第 6 条に定められており、大学協議会での審議を経て学長が審議要請を決定し、法人運営会議への提案及び教授会への審議要請指示は学長が直接行っている。また、大学協議会の下部会議として教学マネジメント会議と財務マネジメント会議が定められており（協議会規程第 3 条）、それらに特化しかつ十分な協議の必要性を学長が認めた場合、必要な人材を加えて（協議会規程第 4 条 2 項）会議が開催されている。

群馬パース大学 委員会等組織図

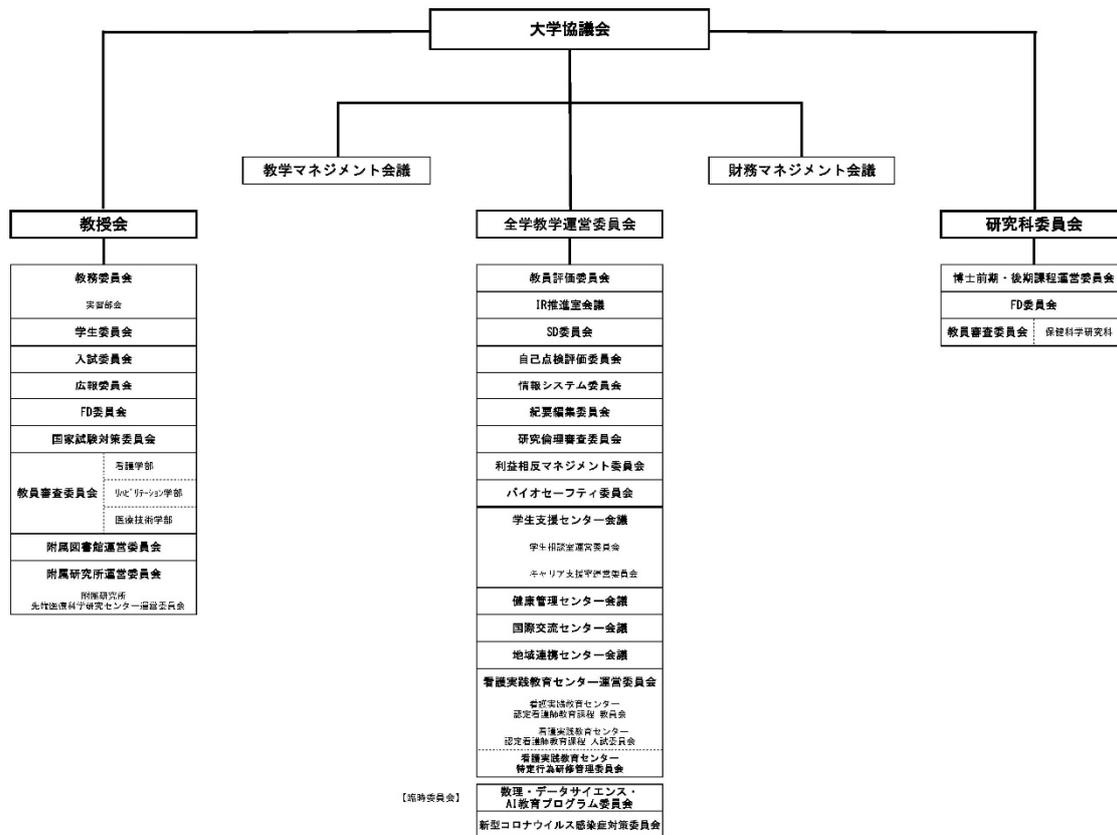


図 4-1-1 群馬パース大学・群馬パース大学大学院組織図

4-1-② 権限の適切な分散と責任の明確化に配慮した教学マネジメントの構築

学則に定めた使命・目的の達成のために、学則第 8 条に基づき、学長・教授及び事務局長をもって構成される教授会を設置し、大学における学生の入学、卒業及び課程の修了、学位の授与、教育に関する重要事項（①教育課程の編成、②教員の教育研究業績等の審査、③中長期目標・中長期計画）を審議すると同時に学長による決定が下される場として位置付けられている。教授会は毎月 1 回開催されている他、学長が必要と認めたときは臨時教授会を開くことができる。

また、教授会は教学マネジメントを適切に行う上で必要な事項を調査・審議するために各種委員会（教務委員会等）を置き、各委員会規程において、全ての審議結果を学長に報告し承認を受けることを定めている。各委員長は教授会開催に先立ち、学内グループウェア・システムを通じて審議結果を学長及び教授会メンバーに報告・公表し、教授会において学長の一括承認を得ている。

なお、本学大学院については、大学院学則第 12 条に基づき、同大学院の教授にて構成される研究科委員会を設けている。

学長は、組織規程第 15 条により、「教育、研究に関する校務をつかさどり、所属職員を

監督して学内の教育運営全般を管理し、大学を代表する」と規定されている。

また、学長は（後述の）法人運営会議の構成員であるとともに理事・評議員を兼任しており、大学及び法人の意思決定と執行責任を負っている。

以上に示したとおり、大学の意志決定及び教学マネジメントは大学の使命・目的に沿って、適切かつ円滑に行われている。

4-1-③ 職員の配置と役割の明確化などによる教学マネジメントの機能性

本学・本学大学院におけるすべての会議には、必ず事務職員を配置し、教職協働を実施している。各種委員会等の規程においても職員の担当課を明確にしている。教職員は常に学内における問題点・検討課題を共有し、その解決・実施のために協働している。

(3) 4-1 の改善・向上方策（将来計画）

3 学部 7 学科への再編による学生数・教職員の増加等、拡大・発展する中で、さらに強い学長のリーダーシップを確立するために、IR 推進室のさらなる有効活用を行う。今後は教職員の協働強化のため、FD・SD 活動の全体参加や職員の個々の職能開発のための研修にも教員参加を促すなど、教職員それぞれの立場の相互理解に力を入れる。

4-2 教員の配置・職能開発等

4-2-① 教育目的及び教育課程に即した教員の採用・昇任等による教員の確保と配置

4-2-② FD(Faculty Development)をはじめとする教育内容・方法等の改善の工夫・開発と効果的な実施

(1) 4-2 の自己判定

「基準項目 4-2 を満たしている。」

(2) 4-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

4-2-① 教育目的及び教育課程に即した教員の採用・昇任等による教員の確保と配置

本学においては大学設置基準上の教員数はもとより、各指定規則に定められた教員数を上回るよう確認しながら、独自に学科別の教員採用上限である「学科別・職位別教員定数」を「学校法人群馬パース大学 人事規則」に基づき、人事委員会において定め、教育の質が担保されるよう努めている。人事委員会の構成員は、理事長、学長、校長、研究科長、学部長、事務局長、事務局各部長及び理事長が必要と認めた者としている。

本学大学院においては、大学院設置基準上の教員数を満たすよう適切に配置している。

教員の採用・選考にあたっては、公募（本学 HP・JREC-IN 等）を基礎として応募された中から、各学科長等が推薦する教員を教員審査委員会に諮り、「群馬パース大学教員選考規程」に基づき審査され、教授会・大学協議会の議を経て人事委員会で採用が決定され、法人運営会議に報告される。ただし、教授の任命においては理事会に報告される。

また、教員の昇任や特別昇給等は、「群馬パース大学教員評価規程」（以下、「教員評価規程」という。）に基づき、評価対象教員全員に自己評価報告書・教員個人調書（履歴書）・教育研究業績書を提出させ、教員評価委員会で審議される。教員評価委員会では、特に優れた活動を行ったと評価された教員の昇任について、教員審査委員会の審査を経て人事委

員会で昇任を決定する仕組みとしている（令和 3（2021）年度実績：昇任 10 人、特別昇給 1 人）。

4-2-② FD (Faculty Development) をはじめとする教育内容・方法等の改善の工夫・開発と効果的な実施

本学では、群馬パース大学 FD 委員会（以下、「学部 FD 委員会」という。）、群馬パース大学大学院 FD 委員会（以下、「大学院 FD 委員会」という。）をそれぞれ独立の委員会として設置している。

学部教員を対象とする FD は、学部 FD 委員会が年間活動計画に基づき、学生による授業アンケート、教員間の相互授業見学・評価、教育研修、ワークショップ等の活動を組織的、計画的に展開している。研修については、集合研修と OJT を連動させた段階的、持続的研修体系「群馬パース大学教育研修体系」を平成 30（2018）年度に構築し、定期的な内容の見直しを行いながら運用している。活動実績と評価は学部 FD 委員会定例会議に随時報告し検討を行い、次年度の活動計画立案の資料とすると共に、本学 HP に掲載し、内外へ周知している。

また、平成 29（2017）年度まで「(旧) 群馬パース大学年報」に収録してきた教員の教育活動の記録のうち、各授業科目の開講状況、授業方法、使用教材等の記録を、平成 30（2018）年度分から「群馬パース大学教育研究年報」に移行し、毎年発刊することにより、自己評価と関係者への説明の機会としている。また、同じく「(旧) 群馬パース大学年報」に収録してきた各授業科目の成績分布、素点平均を、アクティブ・アカデミーをとおして、学生及び全教員の閲覧に供し、教授方法改善の資料としている。

この他、各学科、又は教育研究領域ごとの取り組みとして、新任教員、若手教員の教育能力育成のため、補助者としての授業への参加、教壇に立つ前の模擬授業等のトレーニング、指導案の点検・検討会等の活動を行っている。また、同じく新任教員、若手教員の研究能力向上のため、共同研究組織内での指導、新任教員、若手教員が単独で行う研究への助言、科学研究費補助金応募の支援をはじめとする内外の研究費獲得の支援等を行っている。

大学院の教員を対象とした FD については、学生による授業アンケートの継続実施に加え、大学院 FD 委員会のもとで活動している。

(3) 4-2 の改善・向上方策（将来計画）

本学では、大学（院）設置基準を満たす教員編成であることはもとより、全ての学科が職業資格関連の指定基準に定められた教員数を上回るよう配置している。今後もそれらの基準及び学内における基準を意識しながら教員採用に努める。また、指定規則の改正や学生数の増減等、推測される状況を意識しながら、特に若手教員（助手を含む）の採用を積極的に推進し、教員の年齢構成が永続的に保たれるよう注視する。

年間活動計画を見直し、FD 関係各事業を充実させていく。特に、「群馬パース大学教育研修体系」に基づく体系研修の年次計画を円滑に進め、完成を目指す。また、教員間の相互授業見学・評価の結果を授業改善に活用するための方策に重点を置く。

また、FD 研修については、FD 委員会にて企画して実施しており、SD 研修とは分けて

行っているが、今後はFD・SDに関する教職員の研修等については、一体的に規定することを検討していく。

4-3 職員の研修

4-3-① SD(Staff Development)をはじめとする大学運営に関わる職員の資質・能力向上への取組み

(1) 4-3の自己判定

「基準項目 4-3 を満たしている。」

(2) 4-3の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

全学教職員を対象とするSDの推進は、SD委員会が全教職員のSDを統括する委員会として大学協議会の基に設置され、年間活動計画に基づき教職員SD研修、ワークショップ、事務職員研修等の活動を組織的、計画的に展開している。また、教職員研修の体系化を図るため、平成30(2018)年6月に「群馬パース大学教職員研修の概要」を作成、2021年3月には概要を一部修正した(図4-3-1)。今後も定期的に見直しを行い、社会情勢や本学の実情に応じた教職員研修を実施していく。

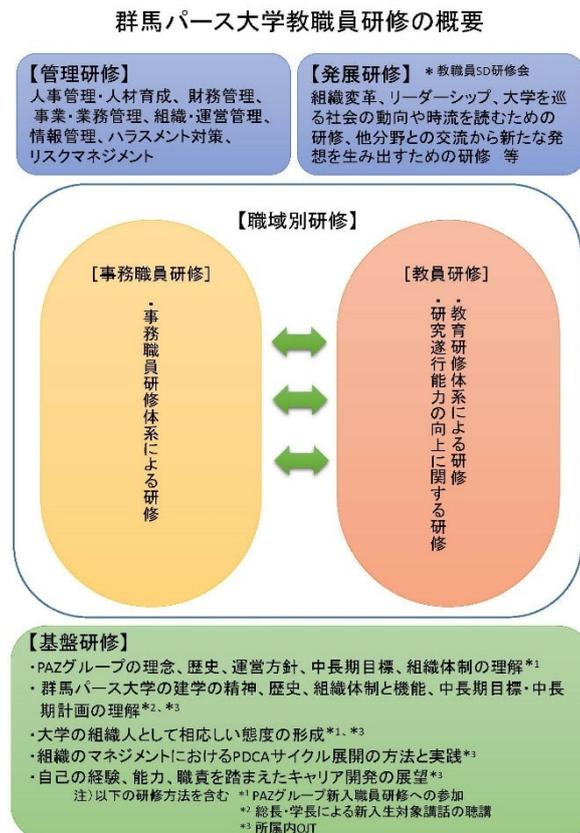


図 4-3-1 群馬パース大学教職員研修の概要

また、SD委員会ではSD研修等の実績に基づき、今後の研修計画の見直しを行っている。教職員SD研修・ワークショップは、事後アンケートにより研修内容及び企画に対す

る参加教職員の満足度を評価すると共に、SD 活動に対するニーズを把握し次期企画に反映させている。令和 3（2021）年度については、3 月に「アンガーマネジメントについて」をテーマに全教職員対象の研修会を開催した。

事務職員研修については、時事の話題や本学の運営上の課題を取り上げ年度ごとに企画・実施してきた従来の方法を見直し、階層別、部門別研修を含む研修体系「群馬パース大学事務職員研修体系」を構築し、平成 30（2018）年度より運用を開始している。令和 3 元（2021）年度は、「広報活動の基本と SNS 等の効果的な活用について」をテーマに研修会を開催し、全事務職員が受講するとともに一部の教員も受講した。

（3）4-3 の改善・向上方策（将来計画）

現行の SD 関係研修を継続の上、充実させていく。特に、教職員それぞれの職責に応じた職務遂行能力に係る研修（教職員研修・事務職員研修）の一部共有により、大学の諸活動に対する教職員の理解を促進する。また、教職員共通の大学運営・経営能力の開発に関する研修の充実、強化を図る。

また、SD 研修については、SD 委員会にて企画して実施しており、FD 研修とは分けて行っているが、今後は SD・FD に関する教職員の研修等については、一体的に規定することを検討していく。

4-4 研究支援

4-4-① 研究環境の整備と適切な運営・管理

4-4-② 研究倫理の確立と厳正な運用

4-4-③ 研究活動への資源の配分

（1）4-4 の自己判定

「基準項目 4-4 を満たしている。」

（2）4-4 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

4-4-① 研究環境の整備と適切な運営・管理

研究環境の整備として、大学における研究活動の一層の発展と地域貢献を促進することを目的に群馬パース大学附属研究所を設置し、「群馬パース大学附属研究所規程」を定め、主として、研究者に対する研究活動支援及び研究活動に基づく社会連携、地域貢献を行っている。

運営に関しては、附属研究所運営委員会にて、個人研究費や学内課題応募型研究費（特定研究費、附属研究所研究助成費）、研究予算に関する事項を審議し、適切な運営・管理を行っている。また、本学に交付された公的研究費は、管理・監督体制を明確にするため、「群馬パース大学研究費の管理・監督に関する規程」を制定し、研究費を有効かつ円滑に運営・管理している。

教職員等の研究活動について不正行為の防止、不正行為が生じた場合又はその恐れがある場合の措置等に関しても、「群馬パース大学研究活動上の不正行為の防止及び対応に関する規程」にて必要な事項を定めている。

また、国際的な平和及び安全の維持を妨げることはないよう、教育研究活動等における技術の提供及び貨物の輸出について「群馬パース大学安全保障輸出管理規程」を定め、適切で確実な輸出管理体制の整備に務めている。

《各学科における取組》

①看護学科

学科内は、9つの領域（基礎看護学、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、在宅看護学、公衆衛生看護学、助産学）に分かれており、それぞれの領域内において共同研究の取り組みなどを通し、領域責任者を中心に若手研究者の研究支援を行っている。

②理学療法学科

学科の教育で使用する測定機器類及びその設置空間は、研究にも対応できる水準のものを備えている。また、科研費への応募を支援する中で今年度は新たに2人が採用され（継続と延長を含めると6人）、外部資金の導入と学内での研究費での増加に一定の成果を得ることができた。学科内の研究推進委員会も設置し、英文購読やリハビリテーション学部を通じての研究会活動などが始められ、研究啓発についても取り組んでいる。

③作業療法学科

教員未経験者に対して学内研究助成、若手科研の応募に対して相談にのり、学科内教員相互による外部研究資金への応募支援体制を整備している。科研費への応募を支援する中で今年度は新たに4人が採用され（うち、1人は研究活動スタート支援）、外部資金の導入と学内での研究費での増加に一定の成果を得ることができた。

④言語聴覚学科

学科として教員の研究活動を支援するため、臨床の場・時間の確保、研究内容の相互共有や研究論文作成支援のための勉強会、学会発表の支援ための予演会を実施している。また、学会、研修会の参加機会を積極的かつ平等にするため、参加者による伝達講習を行う。若手教員に対しては、学内研究助成への応募を支援している。

⑤検査技術学科

細胞・タンパク質機能解析室（質量分析装置）、生体試料分析室（フローサイトメーター）、分析化学準備室（バイオインフォマティクス）、遺伝子解析室（リアルタイムPCR装置）などの研究を行う実験室が各階にあり、それぞれに必要な装置が整備されている。卒業研究や大学院生の研究に使用しており、教員の研究に関しても有効に活用している。また、検査技術学科研究支援・大学院進学対策委員会を通して、研究支援、研究活動基盤の整備を行っている。

⑥放射線学科

学科内で大学院研究指導担当者会議、放射線学研究指導者会議を開催し、学生の研究指

導を通して、研究環境の整備を実施している。また放射線学科連携委員会を通して、学術・国際交流・海外連携大学等、研究活動基盤の拡充を模索している。

⑦臨床工学科

実験室には、各種分析機器を配置し、教員及び卒業研究対象学生が中心となり活用している。実験室は、主に血液を中心とした検体を扱う「実験室 1」、及びクリーンベンチを設置し清潔区域とする「実験室 2」の 2 部屋に仕切られており、実験内容に応じて利用している。また基礎医学実習室・臨床工学実習室・基礎工学実習室には、各種医療機器及び計測機器を配置しており、学内実習以外に医療機器を用いた実験や工学的基礎実験として有効利用している。各実験室及び実習室は、管理責任者、各種機器類の管理担当者、薬品管理担当者、感染管理担当者を取り決め、教員による管理を行っている。

4-4-② 研究倫理の確立と厳正な運用

個人の尊厳、人権の尊重・個人情報保護、その他倫理的観点から研究者等がより円滑に研究を実施することができるよう、本学では、平成 17（2005）年「群馬パース大学・群馬パース大学大学院 研究倫理審査委員会規程」（以下、「研究倫理審査委員会規程」という。）を定め、研究の的確な推進を図ってきた。

また、本学では、「科学者の行動規範」（日本学術会議 平成 18 年 10 月 3 日（平成 25 年月 25 日改正））に準拠し、「群馬パース大学研究活動に関する行動規範」を平成 27（2015）年 4 月に定め、研究者の責任・行動、説明・公開、法令順守など研究者の倫理的な行動と判断とともに説明責任を果たすことを求めてきた。研究倫理に関する学内審査機関については、本学及び本大学院に所属する教員や教員の指導のもとに学生が「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」（令和 3 年 3 月 23 日（令和 4 年 3 月 10 日一部改正）文部科学省・厚生労働省・経済産業省）に該当する研究及び関連する研究を実施する場合の適否について、倫理面からの正当性を審査するため、研究倫理審査委員会規程に従い、研究倫理審査委員会で審査している。研究倫理審査委員会は、「臨床研究・疫学研究倫理審査」の場合、委員長、副委員長、看護学部・リハビリテーション学部・医療技術学部の代表（社会学者を含む）、学外学識経験者（弁護士）、一般人、事務系職員で構成している。さらに、「ヒト遺伝子解析倫理審査」の場合は、他大学の遺伝子学研究者を加え審査に当たっている。

研究倫理審査は、教員等からの申請に基づき、実施計画の内容等を、主として（1）研究等の対象となる個人の権利擁護、（2）研究等の対象となる者に理解を求め同意を得る方法、（3）研究等によって生ずる個人への不利益並びに危険性並びに医学上の貢献の予測等から、説明書と同意書の提出を求めた上で、その内容や表現に至るまで審査を行っている。審査の判定は、「群馬パース大学・群馬パース大学大学院研究倫理審査委員会規程」に基づき、厳正に行われている。

研究倫理審査は、基本的に「研究倫理審査フローチャート」に従い審査される。審査を希望する教員及び学生は、各自、「群馬パース大学における研究倫理審査に関するチェックシート」（以下、「チェックシート」という）を含む申請書類一式を研究倫理審査委員会に提出する。

研究倫理審査申請は、随時受け付けており、記載されたチェックシートを参考に、申請された案件ごとに、研究倫理審査委員長から指名された担当委員 2 人により、指針に基づき事前審査が行われる。事前審査の結果、侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する場合などは、迅速審査として審査される。迅速審査は、予め指名された委員 2 人が審査を行う。迅速審査によることが不相当と判断された場合は、年 4 回（4 月・7 月・10 月・1 月）の通常審査において審査・判定される。

通常審査の結果、改訂が必要な場合は意見書を作成し、申請者に送付し、改訂を求める。改訂後の再申請書類を、迅速審査の場合は予め指名された委員 2 人、通常審査の場合は委員長・副委員長が検討し必要があれば再度改訂を求める。必要な改訂を経た後、委員長は審査結果を学長に報告し、学長は、承認の是非を判定し判定結果通知書を発行する。

本学に所属する教員が研究を実施する場合の適否その他の事項について、利害関係が想定される企業等との関わり（利益相反）を含めて調査審議し、適当な管理措置について検討することを目的として利益相反マネジメント委員会を設置し、利益相反に関する審査を行っている。

4-4-③ 研究活動への資源の配分

教員の研究費については、教育研究の成果を上げることを目的に「群馬パース大学研究費規程」を定め、個人研究費、学内課題応募型研究費（特定研究費、附属研究所研究助成費）、及び研究旅費が配分されている。

また、学外からの研究費を獲得するため、科学研究費補助金及び各種団体等が募集する助成金の申請を奨励するとともに、共同研究の受入れを積極的に行っている。

個人研究費は、教員 1 人あたり一律 10 万円（年間）に加え、科学研究費への申請・採択・継続によって個人へ増額分が配分される。これは各教員の研究活動を支援するための基礎となる費用で、主に通信費、消耗品費等に充てられる。学内研究支援費としては学内課題応募型研究としての「特定研究費」・「附属研究所研究助成費」がある。「特定研究費」は主に若手研究者を育成し、その研究費を使い実績を作ることにより、科学研究費又は外部の助成金に申請し、採択に繋げることが目的である。特定研究費に応募する教員は、原則として申請年度から 2 年以内に科学研究費又は外部の助成金に申請することを条件とする。

「附属研究所研究助成費」は著しい研究成果が期待でき、社会貢献につながる研究課題に対して助成することとし、研究期間終了後 1 年以内に助成対象となった研究課題に関する論文発表及び、申請年度から 2 年以内に公的研究費に申請することを条件とする。

学内課題応募型研究費は個人研究費等で不足となる必要研究経費を補充し、実績を作ることにより、科学研究費等の外部助成金への申請及び採択率向上に繋げることを目的とする。また、研究旅費を予算化し、利用方法の詳細を定め、全教員に周知している。国内外問わず学会発表や情報収集など、教員が研究活動を遂行する際に使用可能とする。実際の運用に当たっては、個人研究費、学内課題応募型研究費（特定研究費、附属研究所研究助成費）、研究旅費とも「学内研究費利用の手引き」に従って運用されている。

(3) 4-4 の改善・向上方策（将来計画）

専門業務型裁量労働制を導入し研究時間の確保についての自己管理を薦めている。学内の教育研究体制とその環境については改めて整備し、科学研究費を始めとした外部研究費の獲得に向け取り組みをさらに強化していきたい。

特に、文部科学省等の科学研究費への全教員における応募率は 46.5%、採択率も 14%と決して高い水準にあるとは言えないことから、学科ごとに科研費採択推進プロジェクトチームを編成し学科内の申請書のチェック体制などを強化しながら採択率の向上にさらに努力していきたい。また、若手研究者に対する支援が必ずしも十分ではなく、外部資金の獲得による研究の活性化を図るため、研究費の配分比率を見直すなど、各学科内における協力共同体制の構築を推進するよう努力したい。

研究倫理では「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」の制定（令和 3 年 3 月 23 日）及び同指針改正（令和 4 年 3 月 10 日）に即した審査体制の見直しを段階的に進めている途上にあり、早期の完遂を目指し、審査のさらなる質向上と効率化を図っていききたい。具体的には、本学 HP への問題事例集の掲載などの検討も必要である。また、卒業研究や大学院生による研究などでも研究計画書、説明と同意等基本的な倫理事項で課題があり、教員に対して倫理に関する指導法を教授するなどの FD 研修会（研究倫理の基本的な理解、研究計画書の作成方法、説明と同意の手続き、個人情報保護等）や、学生向け講習会も開催していきたい。

【基準 4 の自己評価】

教学マネジメントは、学長のリーダーシップのもとで複層に機能と責任が分担された実行体制を有している。学科会議を除き、すべての会議体には事務職員が配置され教職員の協働により日常的な業務が円滑に進んでいる。

教員の採用にあっては、公募を基本に教員審査委員会、人事委員会が行う。昇任にあっては、教員評価規程に基づき公平・適切に評価される仕組みとなっている。

教員配置については、大学設置基準だけでなく、各養成施設の指定規則を上回ることを確認しながら、本学で定めた教員上限数までの範囲で管理している。

学部及び大学院 FD 活動については、学生による授業アンケートをはじめ、教育研修、ワークショップ等の活動を組織的、計画的に展開している。

大学協議会のもとに設置された SD 委員会は、年間活動計画に基づき教職員 SD 研修、ワークショップ、事務職員研修等の活動を組織的、計画的に展開している。また、平成 30（2018）年 6 月に作成された「群馬パース大学教職員研修の概要（図 4-3-1）」に従い、教職員研修の体系化を図っている。

主として研究支援を行う附属研究所が、研究倫理審査委員会と連携して研究のコンプライアンスを強化保障している。研究資金については、個人研究費、学内課題応募型研究費及び研究旅費が配分されている。外部資金の導入については、科学研究費の獲得にあたって啓発を行っている。

以上のことから、基準 4 を満たしていると判断できる。

基準 5. 経営・管理と財務

5-1 経営の規律と誠実性

5-1-① 経営の規律と誠実性の維持

5-1-② 使命・目的の実現への継続的努力

5-1-③ 環境保全、人権、安全への配慮

(1) 5-1 の自己判定

「基準項目 5-1 を満たしている。」

(2) 5-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

(ア) 組織倫理に関する規程に基づいた適切な運営

本法人の組織の基本となる「学校法人群馬パース大学寄附行為」（以下、「寄附行為」という。）第 3 条及び本学の組織の基本となる学則第 1 条において教育基本法及び学校教育法に従うことを明確に定めている。なお、「学校法人群馬パース大学理事会の運営に関する規程」（以下、「理事会運営規程」という。）第 6 条に基づき年 4 回の定例理事会を、毎月 1 回の法人運営会議を開催している。また、本学においては、協議会規程に基づき毎月 1 回の大学協議会を、教授会規程に基づき毎月 1 回の教授会を開催している。

(イ) 使命・目的を実現するための継続的な努力

大学運営を円滑に行うため、将来計画の資金として第 2 号基本金の組入れ、常時かつ継続的に保持すべき運転資金として、第 4 号基本金の組入れを行っている。

(ウ) 環境や人権への配慮

地域社会や自然環境との共存を目指し東京電力初となるオール電化キャンパス（1 号館及び 4 号館）を建築、また、保健医療専門職を目指す学生を養成する教育機関として敷地内全面禁煙（県より禁煙認定施設として認定）とし、禁煙教育等を併せて実施することにより、環境保全のみならず学生の健康管理も促している。

「学校法人群馬パース大学個人情報保護に関する規程」、「学校法人群馬パース大学ハラスメント防止規程」、「学校法人群馬パース大学危機管理規程」、「学校法人群馬パース大学安全衛生管理規程」、「学校法人群馬パース大学ストレスチェック制度実施規程」を制定し、人権・安全への配慮に努めている。

(エ) 学内外に対する危機管理体制の整備とその機能

学生、教職員及び近隣住民等の安全等を図るため「学校法人群馬パース大学危機管理規程」を設け、危機事象への対処が必要と判断した場合には危機対策本部を設置することとしている。危機事象への対応については危機管理基本マニュアルに記載している。なお、危機管理の対象となる事象を以下に示す。

表 5-1-1 危機管理対象

大 区 分	小 区 分	具 体 例
(1)教育研究活動の遂行に 重大な支障のある事態	海外渡航等	海外研修、海外留学、海外出張
	教育、実験、実習業務	教育・実験・実習等の事故
(2)学生等の安全に関わる 重大な事態	地震	地震による人的・物的被害
	火災、爆発	火災・爆発による人的・物的被害
	台風、豪雨、落雷等	台風・豪雨・落雷等による人的・物的被害
	有害物質	毒・劇物・放射性物質等紛失・流出
	廃棄物	廃棄物による汚染
(3)施設管理上の重大な事 態	不審者侵入	不審者侵入による盗難・傷害
	施設の管理	施設に起因する事故
	危険有害業務	危険作業・有害作業での事故
	労働災害	労働災害
	コンピューターネッ トワーク	ネットワーク障害、ハッキング、 ウィルス感染
(4)社会的影響の大きな事 態	機密情報	機密情報漏洩
	個人情報	個人情報漏洩
	入試業務	入試ミス
(5)本法人に対する社会的 信頼を損なう事態	セクシュアルハラス メント	セクシュアルハラスメント
	その他のハラスメン ト	パワーハラスメント、アカデミッ クハラスメント、差別、いじめ
	知的財産権侵害	著作権侵害、特許侵害
	ねつ造、盗用	実験結果のねつ造、論文盗用
	横領	保管金等の横領
	不正使用	研究費等の不正使用
	不祥事、犯罪	学生・教職員の不祥事・犯罪
(6)前各号と同等以上の重 大な事態	一般疾病	学生・教職員の病気
	メンタルヘルス	学生・教職員精神的病気
	感染症	学生・教職員の感染症
	食中毒	学生・教職員の食中毒

上記、危機管理の対象となる事象で、学生等の安全にかかわる重大な事態のうち、発生する可能性が高い地震については、「地震発生からの行動マニュアル」を全講義室に掲示するとともに教職員へ配付・周知している。また、火災については毎年11月に避難訓練を実施している。

その他、学生におよぶ可能性のある様々な危険等に対する事象について、毎年度、学生部が主体となりセミナーや講習会を以下の通り開催している（表5-1-2）。教職員についても、FD研修やSD研修に加えて、本学が所属するPAZグループが関連法人の職員を対象に定期的に行う研修に参加させている（教員は教授以上、事務職員は課長以上）。令和4（2022）年度は、「ハラスメント防止研修」が実施され、本学の教職員も参加した。

表 5-1-2 セミナー・講習会一覧

内容	対象学年（全学科）			
	1年	2年	3年	4年
交通安全教室	○			
女性向け防犯教室	○			
健康教育・禁煙教育	○			○
薬物乱用防止教室			○	
情報モラル講習（サイバーセキュリティー）		○		
SNSに係わる防犯教室		○		

(3) 5-1の改善・向上方策（将来計画）

大学を取り巻く社会情勢や法令、社会的責任やニーズの変化に対し、各種規程の制定・改廃や積極的な情報公開等、今後とも柔軟に対応する。

環境への配慮として、学内のペーパーレス化をさらに強化する。具体的には、平成27（2015）年度後期より、講義資料を学生ヘデータで配信することを全教員に周知している。さらに、学内における各委員会等の資料においても、iPadを活用しペーパーレス化に努めている。

5-2 理事会の機能

5-2-① 使命・目的の達成に向けて意思決定ができる体制の整備とその機能性

(1) 5-2の自己判定

「基準項目5-2を満たしている。」

(2) 5-2の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

(ア) 使命・目的の達成に向けて意思決定ができる体制の整備と機能

本法人の運営管理は私立学校法に基づき理事会、評議員会が行っている。理事会は業務の決定とその執行にあたり、評議員会は諮問機関として置かれている。理事長は本法人を代表して、法令及び寄附行為に規定する職務を行い、内部の業務を統括する。

学校法人（理事会・評議員会）と大学（大学協議会・教授会・研究科委員会）との意思

疎通、連携、協議を円滑にすることによって「豊かな教養と人間愛を備えた質の高い保健医療専門職を育成し、保健・医療・福祉サービスとの協働及び知の創造を通じて、国際社会、地域社会に貢献する」という本学の目的の追求・実現に資するため、学校法人（理事会・評議員会）と大学（大学協議会・教授会・研究科委員会）の間に法人運営会議を設置（理事会運営規程第 3 条 2 項・組織規程第 7 条・学校法人群馬パース大学運営会議規程（以下、「法人運営会議規程」という。）し、機動的な意思決定がなされている。

（イ）理事会の適切な運営（選任、事業計画の執行など）

寄附行為第 15 条により設置される理事会は、同寄附行為第 5 条に規定される役員（理事 6 人以上 8 人以内、監事 2 人又は 3 人）にて組織されており、理事の選任条項は以下のとおりである。

- （1）学長（大学長） 1 人
- （2）校長（専門学校長） 1 人
- （3）評議員のうちから評議員会において選任した者 2 人
- （4）学識経験者のうち理事会において選任した者 2 人以上 4 人以内

また、「学校法人群馬パース大学 理事職務分担等に関する内規」で示してあるとおり、本学専任理事の職務に関しては、財務担当・教学担当・広報担当・地域連携推進担当が理事長から委嘱される。理事長に事故があるとき、又は、理事長が欠けたときは、その職務を代理する順序は、財務担当・教学担当・広報担当・地域連携推進担当の順としている。職務分担においては適宜見直すことができる仕組みとし、円滑に業務が遂行できるように規定している。

理事会の開催については、理事会運営規程第 6 条に規定されたとおり、毎年度 5 月、9 月、12 月及び 3 月に定例理事会を開催する他、必要に応じて臨時理事会を開催している。5 月の定例理事会においては、前年度決算について、12 月は補正予算、3 月は次年度事業計画及び予算に関する事項が主な審議事項である。

（ウ）理事の出席状況及び欠席時の委任状など

過去 2 年間の理事会における理事の出席状況は表 5-2-1 のとおりで、適切な運営がなされている。なお、委任状には、議案に対する賛否及び意見がある場合は、記して提出することとしている。

表 5-2-1 過去 2 年間の理事会における理事の出席状況

		開催年月日等		出席者数			開催年月等		出席者数
令和 2 年度		5/28	第 91 回	7	令和 3 年度		5/27	第 96 回	7
		5/28	第 92 回	7			5/27	第 97 回	7
		8/18	臨 時	7					
		9/17	第 93 回	7			9/16	第 98 回	6
		11/26	第 94 回	7			11/25	第 99 回	7
	3/25	第 95 回	7		3/24	第 100 回	7		

(3) 5-2 の改善・向上方策（将来計画）

理事会は寄附行為等に定められているとおり適切に運用されているが、今後もこれを維持することはもちろん、理事の職務分担における責任体制を明確にし、変化する大学を取り巻く環境に法人全体で対応する。

5-3 管理運営の円滑化と相互チェック

5-3-① 法人及び大学の各管理運営機関の意思決定の円滑化

5-3-② 法人及び大学の各管理運営機関の相互チェックの機能性

(1) 5-3 の自己判定

「基準項目 5-3 を満たしている。」

(2) 5-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

5-3-① 法人及び大学の各管理運営機関の意思決定の円滑化

(ア) 法人及び大学の各管理運営機関の意思疎通と適切な連携

理事会運営規程第 3 条第 2 項、組織規程第 7 条及び法人運営会議規程により、法人の組織（理事会・評議員会）と大学の組織（大学協議会・教授会・研究科委員会）の意思疎通を図り協議及び意思決定を行うとともに教職員の提案などをくみ上げることを目的とした法人運営会議を設置し、毎月 1 回開催している。法人運営会議の構成員は、理事長、学長、副学長、研究科長、学部長、専門学校長、事務局長、事務局各部長及び理事長が必要と認められた者としている。構成員のほか、監事は会議に出席し、意見を述べることにしている（法人運営会議規程第 3 条）。

また、法人運営会議の審議事項は、理事会・評議員会から執行を委任された事項、理事会・評議員会に提案する事項、法人業務の執行に関する重要な事項、教育及び研究に関する事項、教員人事に関する事項、大学協議会への諮問事項、大学協議会からの理事会・評議員会への建議事項などである（法人運営会議規程第 4 条）。

(イ) 理事長のリーダーシップと内部統制環境

理事長は学校法人を代表し、法令及び寄附行為に規定する職務を行い、法人内部の業務を統括している（寄附行為第 11 条）。学校法人の最高意思決定機関である理事会、その諮問機関である評議員会を通じて本法人の業務を決定し、執行にあたっている。大学組織に対しては、「寄附行為第 6 条 1 項(1)」により学長を第 1 号理事として選任していることなどからも理事長の運営方針など意思の疎通が図られている。また、法人運営会議を設置していることにより、学長をはじめとする教学の各責任者及び事務部門の責任者に対しても理事長の意向が伝えられ、その意思の疎通が図られており、理事長のリーダーシップと理事長の意思を反映する体制を整えている。

5-3-② 法人及び大学の各管理運営機関の相互チェックの機能性

(ア) 監事の適切な選任、管理運営機関の相互チェック体制と機能、監事の理事会及び評議員会への出席状況

本法人は2人又は3人の監事（寄附行為第5条）を置き、その選任は、寄附行為第7条にこの法人の理事、職員（学長（大学長）、校長（専門学校長）、教員その他の職員を含む）、評議員又は役員の配偶者若しくは三親等以内の親族以外の者であつて理事会において選任した候補者のうちから、評議員会の同意を得て、理事長が選任した者と規定している。ただし、選任に当たっては、監事の独立性を確保し、かつ、利益相反を適切に防止することができる者を選任することとしている。これに則り、本法人の監事2人は金融機関の監査業務の経験者を選任している。

監事の職務については、寄附行為第14条及び監事監査規程に規定しており、本法人の業務若しくは財産及び理事の業務執行状況について適正かつ効率的な運営に資するため、監事は監査計画書及びそのスケジュールを作成し、教学・学生支援を含む業務監査、財務関係を含む会計監査を実施している。監査の結果について、監事は監査調書を作成し、法人運営会議で報告しており、法人及び教学組織の相互チェック体制を整えている。

また、監事は法人の運営に関する重要事項についての諮問機関である評議員会、方針を決定する理事会、決定された方針に基づいて業務を執行する理事長が適切に機能するよう理事会及び評議員会に出席し、法人業務並びに財務状況等に関する意見等発言している。

過去2年間の理事会及び評議員会における監事の出席状況は表5-3-1のとおりで、積極的な参加がなされ、有効に機能している。

更に、理事長のもとに内部監査室を設置し、（内部監査規程）内部監査機能の充実を図るとともに、監事が行う監査を支援するほか、公認会計士（監査法人を含む）が行う監査の実施に関し協力している。

表 5-3-1 過去2年間の理事会及び評議員会における監事の出席状況

開催年月日等		出席者数	開催年月等		出席者数		
令和 2 年度	5/28	第91回	2	令和 3 年度	5/27	第96回	2
	5/28	第92回	2		5/27	第97回	2
	8/18	臨時	2				
	9/17	第93回	2		9/16	第98回	2
	11/26	第94回	2		11/25	第99回	2
	3/25	第95回	2	3/24	第100回	2	

（イ）評議員の選任と出席状況並びに評議員会の適切な運営

「寄附行為」第18条により、法人の運営に関する重要事項についての諮問機関である評議員会を設置、「学校法人群馬パース大学評議員会規程」第6条に規定のとおり、各年度5月、9月、12月及び3月に定例評議員会を開催し、適切に運営されている。

同寄附行為第22条に規定される評議員の選任条項は以下のとおりである。

1. この法人の職員で理事会において推薦された者のうちから、評議員会において選任した者 5人以上8人以内
2. この法人の設置する学校を卒業したもので年齢25歳以上のものうちから、理事会において選任した者 3人
3. 学識経験者のうちから、理事会において選任した者 5人以上8人以内

過去2年間の評議員会における評議員の出席状況は表5-3-2のとおりで、積極的な参加がなされ、有効に機能している。

表5-3-2 過去2年間の評議員会における評議員の出席状況

開催年月日等			出席者数	開催年月等			出席者数
令和 2 年度	5/28	第90回	16	令和 3 年度	5/27	第94回	17
	9/17	第91回	17		9/16	第95回	17
	11/26	第92回	16		11/25	第96回	17
	3/25	第93回	17		3/24	第97回	17
				3/24	第98回	17	

(ウ) 教職員の提案などをくみ上げる仕組み

評議員18人の中には、第1号評議員として教職員8人が含まれており、教職員等の意見を反映させる体制を築いている。

(3) 5-3の改善・向上方策（将来計画）

学校法人の公共性を高めるとともに、学校法人の運営に多様な意見をより反映させていくために評議員を増員した。

法人運営会議の開催により、成し得ている法人の組織と大学の組織の連携・協働を今後も継続、発展させていく。

監事の監査報告は法人運営会議にて口頭で行われているが、今後、提出された報告書に基づき、改善の余地がある事項等は理事会に諮るよう努める。

5-4 財務基盤と収支

5-4-① 中長期的な計画に基づく適切な財務運営の確立

5-4-② 安定した財務基盤の確立と収支バランスの確保

(1) 5-4の自己判定

「基準項目5-4を満たしている。」

(2) 5-4の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

5-4-① 中長期的な計画に基づく適切な財務運営の確立

財務運営については、各委員会等から提出された予算申請を集計、進行年度の予算・実績対比の確認と調整して中長期計画を基に予算案を編成し、理事会・評議員会の承認を受けている。また、実際の予算執行時には起案書を作成・回覧し、改めて使用内容等の詳細について確認・検討を行うこととしている。

5-4-② 安定した財務基盤の確立と収支バランスの確保

平成22（2010）年4月、群馬県の中心部である高崎市問屋町に校舎新築及び移転以後、学生募集状況は順調であり、平成25（2013）年度には検査技術学科（入学定員60

名、収容定員 240 名) を設置、また平成 29 (2017) 年度には放射線学科 (入学定員 70 名、収容定員 280 名) 及び臨床工学科 (入学定員 50 名、収容定員 200 名)、令和 3 (2021) 年度には作業療法学科及び言語聴覚学科 (各学科入学定員 30 名、収容定員 120 名) を 2 学科同時に設置し、学生数は増加の一途を辿っている。大学の収容定員充足率についても各年度 100%超で安定的に推移しており、学生生徒等納付金を主たる収入源とする本学の財務体制は健全に保たれている (表 5-4-1)。また、教育活動収支差額比率及び経常収支差額比率ともに日本私立学校振興・共済事業団発行の「令和 2 年度版 今日の私学財政」内で公表されている令和 2 (2020) 年度の財務比率平均値を大きく上回っている (表 5-4-2)。

表 5-4-1 収容定員に対する現員及び学生生徒等納付金収入の推移一覧

年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度
収容定員	932 名	1,056 名	1,180 名	1,302 名	1,362 名
現員 ※5 月 1 日現在	1,071 名	1,213 名	1,346 名	1,452 名	1,537 名
収容定員 充足率	114.9%	114.8%	114.0%	111.5%	112.8%
学生生徒等納 付金 (単位: 千円)	1,699,033	1,939,207	2,157,735	2,349,175	2,567,789
備 考	放射線学科 臨床工学科 設置	博士後期課程 設置			作業療法学科 言語聴覚学科 設置

表 5-4-2 事業活動収支計算書関係財務比率の比較一覧

比 率	計 算 式	「令和 3 年度版 今日の私学財政」より		
		系統別	規模別	ブロック別
		(単一学部) 保健系学部平均	1~2 千人平均	北関東平均
経常収支 差額比率	経常収支差額 ／ 経常収入	5.2% (前年度比 +2.4%)	-8.6% (前年度比 +2.4%)	-2.5% (前年度比 +2.5%)
教育活動収支 差額比率	教育活動収支差額 ／ 教育活動収入計	4.8% (前年度比 +2.4%)	-9.0% (前年度比 +2.4%)	-2.8% (前年度比 +2.5%)

比 率	計 算 式	群馬パース大学		
		令和元年度	令和2年度	令和3年度
経常収支 差額比率	経常収支差額 ／ 経常収入	26.8%	28.0%	26.3%
教育活動収支 差額比率	教育活動収支差額 ／ 教育活動収入計	28.1%	28.9%	27.0%

各新学科設置に係る施設設備取得資金については、高崎市より校舎新築・増築事業に対する補助金交付を受けている（表 5-4-3）。

また、寄付金額 10,000 円以上の寄付者につき葉をモチーフとしたメモリアルプレートを作成・校舎内に展示する等、寄付意欲に繋がるような工夫を図るとともに、平成 23(2011)年の税制改正時当初から税額控除法人としての証明を受け、日本私立学校振興・共済事業団の受配者指定寄付金制度と併せて、寄付者に対する税的優遇措置に関する情報提供を積極的に行っている。

表 5-4-3 高崎市からの校舎等新築事業に係る補助金交付一覧

年度	平成 21 年度	平成 25 年度	平成 28 年度	令和 2 年度
補助金 対象 事業	校舎新築 (1 号館)	校舎新築 (2 号館) ※検査技術学科 体育棟 (3 号館)	校舎新築 (4 号館) ※放射線学科、 臨床工学科	校舎増築 (1 号館) ※リハビリテーシ ョン学部
補助 金額	24,000 千円	20,000 千円	20,000 千円	10,000 千円

(3) 5-4 の改善・向上方策（将来計画）

学生生徒等納付金を主たる収入源とする本学の、安定した財務基盤を確立するためには、引き続き堅調な学生確保を維持することが必要である。令和 4（2022）年 4 月の中長期計画の大きな見直しに対応するため、新たな基本金組入れ計画を着実に実施していくことが課題である。

また、収入財源の多様化を図るべく、科学研究費補助金を始めとする外部競争的研究資金の獲得に向け、研究施設・設備の整備等支援強化の取り組みに着手している。

5-5 会計

5-5-① 会計処理の適正な実施

5-5-② 会計監査の体制整備と厳正な実施

(1) 5-5 の自己判定

「基準項目 5-5 を満たしている。」

(2) 5-5 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

5-5-① 会計処理の適正な実施

本法人の会計処理については、学校法人会計基準に準拠し、「学校法人群馬パース大学 経理規程」、「学校法人群馬パース大学 経理規程施行細則」に則した上、適宜、公認会計士の指導・助言を仰ぎながら実施している。

また、日本私立学校振興・共済事業団や群馬県、その他の外部団体が開催する実務研修等へ参加することにより、学校法人会計基準への理解を深め、スキルアップと会計処理の適正化を図っている。

前年度 3 月に承認された予算に対し、4 月から 10 月の半期決算に基づき補正予算を編成し、11 月の理事会で承認を得ている。

5-5-② 会計監査の体制整備と厳正な実施

本法人の会計監査については、(ア) 公認会計士による外部監査、及び(イ) 監事による学内監査、から成っている。

(ア) 公認会計士による外部監査

平成 14 (2002) 年度から現在まで、加藤会計事務所による期中監査及び決算監査を受けている。なお、監査契約書に定められている監査従事者の監査見積時間数は以下のとおりである。

監査責任者	50時間	
公認会計士	80時間	
その他	80時間	※合計210時間

(イ) 監事による学内監査

「学校法人群馬パース大学 監事監査規程」に基づき作成された監査計画に沿った監査が行われている。

理事会及び評議員会への出席に加え、学校法人の管理運営を適正に行うため、理事会と教学間の意志疎通を図ることを目的として毎月 1 回開催される法人運営会議に監事も出席しており、学校法人の業務全般を状況把握した上で、期中・期末には決算等概要について、会計課及び公認会計士より概況聴取及び意見交換を実施している。

(3) 5-5 の改善・向上方策（将来計画）

監事や公認会計士の監査は適正に実施されているが、学内における会計担当者の更なる知識の向上や技能の習得のため、学内 SD 研修等への積極的参加を促す。また、外部研修にも積極的に参加させ、学校法人会計への更なる理解を深める。

今後も公認会計士及び監事との連携を密にしながら、適正な会計処理の継続を図る。

[基準 5 の自己評価]

本法人では組織倫理に関する規程に基づいた適切な運営を行うため、各種会議を適切に

開催している。また、大学運営を円滑に行うため、将来計画の資金として第2号基本金の組入れ、常時かつ継続的に保持すべき運転資金として、第4号基本金の組入れを行っている。

環境への配慮としてオール電化キャンパス及び敷地内全面禁煙を、人権への配慮は「学校法人群馬パース大学個人情報保護に関する規程」をはじめ諸規程を整備している。

危機管理については、学生等の安全にかかわる重大な事態を中心として、各種マニュアルの整備やセミナー・講習会を実施している。

理事会は理事・監事がほぼ毎回全員が出席法人の重要事項の審議と決議を行っている。評議員会は評議員がほぼ毎回全員が出席し理事会に意見を述べている。なお、監事は理事会での監査だけでなく、学内監査も一年かけて順次行い、管理体制チェックを保障している。また、令和2（2020）年4月1日の改正私立学校法施行に伴い、寄付行為が改正され、役員の職務及び責任の明確化が規定され、本法人においては、運営基盤の強化・教育の質の向上・運営の透明性の確保のための取り組みとして、役員の定数（理事は6人以上8人以内、監事は2人又は3人）を改めることとした。

予算は中長期計画等を基に編成され、理事会・評議員会の承認を受けている。

大学の収容定員充足率が各年度100%超で安定的に推移する中で学生生徒等納付金は十分に確保されており、経常収支差額比率をはじめとする各種の財務、比率も概ね良好で、財務基盤は安定している。また、科学研究費補助金を始めとする外部競争的研究資金への申請促進や、グループ内企業の株式取得を中心にした資産運用により、外部資金の獲得が図られている。

法人の会計処理は、「学校法人群馬パース大学 経理規程」「学校法人群馬パース大学 経理規程施行細則」に則して行い、公認会計士の指導・助言及び外部監査、監事による内部監査を経る形で誠実に適正に実施している。

以上のことから、基準5を満たしていると判断できる。

基準 6. 内部質保証

6-1 内部質保証の組織体制

6-1-① 内部質保証のための組織の整備、責任体制の確立

(1) 6-1 の自己判定

「基準項目 6-1 を満たしている。」

(2) 6-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

6-1-① 内部質保証のための組織の整備、責任体制の確立

本学では、自ら掲げる目標に向けて教育研究活動を行う中で、定期的な自己点検・評価の取り組みを踏まえた自主的・自律的な質保証への取り組みが基本であることを踏まえ、「群馬パース大学・群馬パース大学大学院自己点検評価委員会規程」における目的及び審議事項ならびに自己点検評価書の作成の公表を通じて内部質保証の方針を全学に示している。

その実行体制として、大学組織のみならず、法人全体として自律的な改革サイクルとしての質保証に関与する組織体制を整備している（図6-1-1 群馬パース大学・大学院 内部質保証組織図及び責任体制）。

大学全体の内部質保証に責任を負う組織として、大学協議会の下に、学生のエンロールメント・マネジメントの支援を主業務とする IR 推進室、本学の教職員が必要な知識及び技能を習得し、その能力及び資質を向上させるために必要な取り組みを行うことを目的とする SD 委員会、本学における教育・研究上の活動及び運営について、自ら点検評価するとともに、第三者評価に付すことを通じて、本学の教育・研究に係る適切な水準の維持及びその向上を図ることを目的とする自己点検評価委員会を置く。

大学協議会では上記組織の活動の詳細を報告・協議し、必要に応じ教授会及び研究科委員会に審議を要請している。審議された事項のうち、重点的な課題については最終的に外部監事が参画する法人運営会議で承認される。

群馬パース大学／群馬パース大学大学院 内部質保証組織図及び責任体制

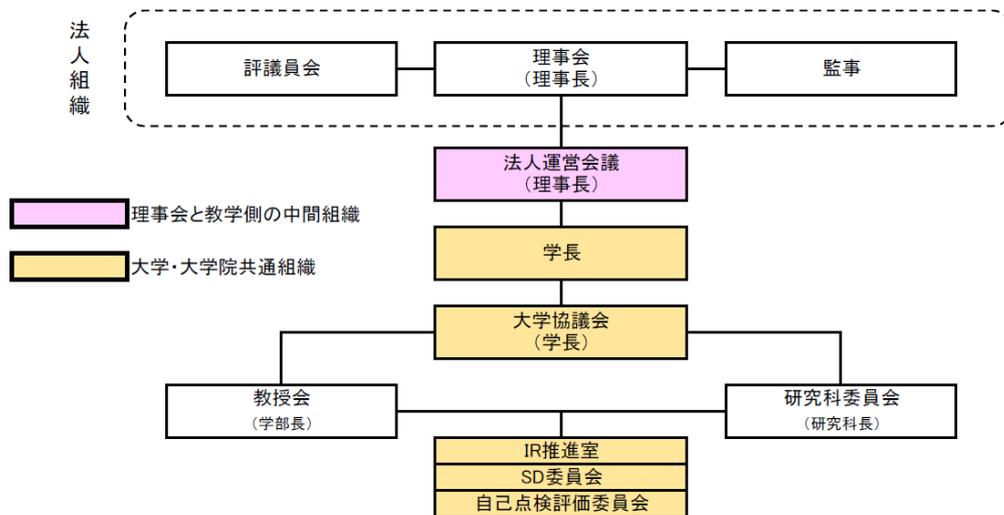


図6-1-1 群馬パース大学・大学院 内部質保証組織図及び責任体制

(3) 6-1 の改善・向上方策（将来計画）

内部質保証のための組織は整備され、その責任体制も確立されつつあるが、組織体制やその仕組みを外部に向けてさらに理解しやすく公表するよう努める。また、学内でもその認識を高めるために、示されている全学的な方針に基づき、日本高等教育評価機構が示す6つの基準に沿いつつ、中長期計画の視点を意識してPDCAを実施することとするが、

「PDCAの諸過程の可視化による意識化」に取り組んでいく。

ホームページやソーシャルメディアを利用し、本学の内部質保証への取り組みを分かりやすく、さらに、外部の意見も取り入れることができる仕組みを今後確立させていく予定である。

6-2 内部質保証のための自己点検・評価

6-2-① 内部質保証のための自主的・自律的な自己点検・評価の実施とその結果の共有

6-2-② IR(Institutional Research)などを活用した十分な調査・データの収集と分析

(1) 6-2 の自己判定

「基準項目 6-2 を満たしている。」

(2) 6-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

6-2-① 内部質保証のための自主的・自律的な自己点検・評価の実施とその結果の共有

(ア) 内部質保証のための自主的・自律的な自己点検評価の実施とその体制

1) 自己点検評価の実施体制

自己点検評価を恒常的に実施するため、自己点検評価委員会では、自己点検評価・認証評価に関する報告書の作成及び公表と自己評価・認証評価の実施に係る作業を行う。委員会は、教授会において選出された教員、企画部長、企画課長、事務職員で構成されている。

2) 自己点検・評価項目

自己点検評価活動とその結果を確実・最大限本学の教育研究水準の改善・向上に還元するため、以下のとおり自己点検・評価項目を設定し、それらが常に最適・最善のものであるよう見直す体制としている。

評価項目は、認証評価受審と有効に連動させるため、認証評価機関の評価項目を用い、これに本学の使命・目的の追求達成に必要な項目を独自に設定する（表 6-2-1）。

表 6-2-1 自己点検・評価項目

① 使命・目的等	② 学生	③ 教育課程
④ 教員・職員	⑤ 経営・管理と財務	⑥ 内部質保証
⑦ 地域への貢献	⑧ 国際交流の推進	

3) 評価結果の共有と社会への公表

自己点検評価書は本学 HP に掲載して公表するとともに、学内では、グループウェア・システムを通じて全教職員に配布し、全員が内容を共有している。

また、評価の結果、良好順調と判断された点を成熟・伸長させ、不十分・課題ありと判断された点を改善するための取り組みを、自己点検評価委員会の取りまとめのもと、各項を所掌する委員会・部門で検討し、教授会、大学協議会の審議、学長の承認を経て、実行に移している。

(イ) エビデンスに基づく、自己点検評価の定期的な実施

自己点検評価の結果を自己点検委員会がエビデンスに基づいて集約し、毎年度自己点検評価書を実施し、まとめる形で進め、毎年7月にその内容を大学HPで公表することで、評価の継続性と公開性を保っている。

平成23（2011）年度に受審した初回の機関別認証評価の3年後の平成26（2014）年度に中間評価として自己点検評価書をまとめ、その後平成30（2018）年に2度目の審査を受け、平成31（2019）年3月に日本高等教育評価機構が定める大学評価基準に「適合している」と認定された。

6-2-② IR(Institutional Research)などを活用した十分な調査・データの収集と分析

現状把握のための十分な調査・データの収集と分析を行う体制として、平成 26（2014）年より IR 推進室を整備している。

IR 推進室では、年度ごとの全体的な指標データとして、各学科の入試区分別合格者数及び入学者数と入学率、各学科の収容定員数及び充足率と学年別在籍者数、各学科の学年別の留年者数と休学者数及び退学者数、各学科の卒業生数及び4年間での卒業率、各学科の

国家試験合格者数及び合格率、各学科の就職率を収集している。

また、学生個々の年次データとしては、性別、入学時年齢、出身地域、入試区分、入試成績、各セメスターの素点平均及び GPA、留年と休学及び退学などの学籍異動、課外活動、奨学金受給、賞罰、国家試験合否、就職先と種別について収集している。

IR 推進室では、データ収集活動が主であるため、IR 推進室会議は年に数回の開催となっているが、集積されたデータ情報を学長のみならず学科や委員会などから要請があれば開示可能とし、要望に沿った解析も行えることを周知している。実際に、毎年入試制度の策定においては、過去の入学生の入試区分と入学後の成績や学籍異動の状況を詳細に検討し、現行入試で適正に選抜を行えていることを検証するなどの活動を行っている。

(3) 6-2 の改善・向上方策（将来計画）

自己点検評価委員会が収集したデータと IR 推進室が集積したデータを集約・検証することで、学生が感じている問題の背景を分析できる仕組みを構築する。

IR 推進室では、学長がエンrollment・マネジメントにおける懸案事項等を直接指示し、各種データ解析を実施しているが、今後は教育課程及び成績評価の検証や、各委員会等が抱える問題を段階的に解決するために積極的に IR 推進室を活用できるよう周知する。

6-3 内部質保証の機能性

6-3-① 内部質保証のための学部、学科、研究科等と大学全体の PDCA サイクルの仕組みの確立とその機能性

(1) 6-3 の自己判定

「基準項目 6-3 を満たしている。」

(2) 6-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

本学では前述のとおり、学部教育においてはディプロマ・ポリシーと、その達成のための学部全体及び学科ごとのカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを一体的に定めている。そして、あらゆる教育活動はこれをより高度な水準で達成することを目指して組織的、かつ継続的に改善が図られている。

ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーは本学 HP 及び学生便覧への掲載により教職員に共有され、教員個人及び学科、学部の教育活動の評価に活用されている。各教員による授業改善は FD 委員会が実施する FD 諸活動（詳細は基準 4 に記載）により、組織的に支援されている。また、各学科は学科会議を通じて多様な大学の諸委員会の機能を学科に応じて実践・実行し、教育課程、教育方法の持続的な点検・評価と改善を行っている。さらに、学部全体としては教務委員会の主導によりディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを踏まえて教育課程、成績評価、学籍、その他の教育活動をモニタリングし、学部に通ずる課題について決定し、具体策を遂行している。

大学院教育においては、保健科学研究科博士前期課程、後期課程それぞれにディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを一体的に定め、それらは本学 HP 及び学生便覧への掲載により教職員に共有され、教員個人及び研究科の教育活動の評価に活用されている。

平成 30（2018）年度に受審した日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価において、改善を要する点、又は参考意見として付された事項については、教授会において項目ごとに担当部署を割り当てて取り組みの進捗を監視し、概ね改善が確認された。その改善結果は「改善報告書」としてまとめ、令和 2（2020）年 7 月に HP に公開し、日本高等教育評価機構より承認された。

令和元（2019）年度より毎年作成している自己点検評価書は学内グループウェア・システムに登録され、全教職員の閲覧に随時供されている。記載された改善・向上方策は、担当する委員会等の活動計画に適宜盛り込み、持続的に改善を図っている。また、これに基づく PDCA サイクルの展開を大学運営全体の取り組みとして位置づけ、機能させるため、中長期計画に自己点検評価に関する目標を大項目として明記している。

（3）6-3 の改善・向上方策（将来計画）

本学は、令和 4（2022）年度に看護学部を新設し、組織の大幅な再編を行ったところである。今後、新たな組織体制が円滑に機能し、PDCA サイクルが個人レベル、組織レベルともに適正に展開されるよう、教職員全体による現状と課題の共有及び、更なる向上を目的とした組織的取り組みを強化していく。そのために、日本高等教育評価機構が示す 6 つの基準に加え、中長期計画の視点からも PDCA を実施できるロードマップとそれに基づくフォーマットを作成することや、その内容を本学 HP に掲載することで「可視化による意識化」に取り組み、自己点検評価が持続的に進む環境を整えていく。

【基準 6 の自己評価】

内部質保証のための自己点検・評価の体制は、責任が明確にされて整備されている。学内の様々なエビデンス（データ）に基づく自主的・自律的な自己点検・評価を定期的実施しており、それらの結果を学内グループウェア・システムで共有し、本学 HP で広く社会に公表している。現状把握のための十分な調査・データの収集と分析を行う組織としては IR 推進室を整備している。

また、内部質保証は三つのポリシーを起点として行われ、自己点検・評価、認証評価及び設置計画履行状況等調査などの結果を大学運営の改善・向上に活用している。

以上のことから、基準 6 を満たしていると判断できる。

基準 A. 地域への貢献

A-1 地域への貢献

A-1-① 高崎市への地域貢献にむけた取り組み

A-1-② 渋川市への地域貢献にむけた取り組み

A-1-③ 近隣市町村への地域貢献にむけた取り組み

(1) A-1 の自己判定

「基準項目 A-1 を満たしている。」

(2) A-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

本学は、学則 1 条（目的）で「地域社会に貢献する」ことを目的としている。その目的達成に向け、「群馬パース大学地域連携センター規程」に基づき、地域連携センターを設置している。同センターでは、本学の所在地である高崎市と、本法人が運営する群馬パース大学福祉専門学校が所在する渋川市を主とし、群馬県内各市町村への地域連携活動を行っている。

A-1-① 高崎市への地域貢献にむけた取り組み

高崎市は本学がキャンパスを置く地域であり、地域の各種団体や行政との接点を持ち以下の地域貢献活動を行っている。

(ア) 新型コロナウイルスワクチンの大学拠点接種を通じての地域貢献

本学は、新型コロナウイルスワクチン接種に関する政府の発表方針に沿い、令和 3(2021)年 7 月と 8 月、本学が所在する周辺地域の負担を軽減し、ワクチン接種の加速化を図っていくため、本学学生・教職員だけでなく、近隣短期大学の学生・教職員、学内業務委託関係者等を対象として約 1,700 人にワクチン接種を行い、地域の新型コロナウイルス感染症拡大防止に貢献した。

(イ) 高崎市との連携による「群馬パース大学 新型コロナウイルス検査センター」を通じての地域貢献

本学は、検査技術学科における高度な実験・研究環境を活用し、令和 2 (2020) 年 5 月に、衛生検査所として「群馬パース大学 新型コロナウイルス検査センター」が高崎市より認可を受けた。感染症学の専門家である教員が民間企業と共同開発した従来の半分以下の時間（開発当時）で判定できる PCR 検査キットを用い、高崎市をはじめ、群馬県や医師会などとも緊密に連携して新型コロナウイルス感染症にかかわる PCR 検査業務を行い、県内の感染拡大防止や診断補助等、公衆衛生行政ならびに医療に積極的に貢献した。令和 3 (2021) 年度においても引き続きその役を担い、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のために貢献した。

(ウ) 高崎卸商社共同組合との連携による「まちづくり委員会」を通じての地域貢献

本学が所在する高崎市問屋町は、昭和 42 (1967) 年に全国に先駆けて完成した卸商業団地を主とする地域である。時代の推移によって生ずる産業構造の変化により卸商業団地が

従来の姿から変化する中で、平成 22 (2010) 年に本学が高崎市問屋町に移転設置された。本学は設置当初より地域の活性化のために貢献する立場から、高崎卸商社街協同組合に業界側委員として参加し、活動を進めてきた。

主に、同組合の組織である「まちづくり委員会」の活動（詳細は「団地再整備事業報告書」）に参加し、駅前開発、共同駐車場整備、セントラルパーク整備、本学が接する道路を含むシンボルロード景観形成、そして大学との連携について建設的な意見交換等を重ねてきた。本学との連携にあたっては、本学学生からアンケートをとったところ、「多くの学生や若者が行き交う賑わいのあるまち」という意見が多く寄せられた。そのような中で、大学の課外活動と組合の活動が同時に実現できる「課外活動支援プロジェクト」として、平成 30 (2018) 年には、学園祭である「流星祭」と群馬県の名産品を一同に集めるイベントである「上州どっと楽市」を同日に連携させて開催した。

(エ) 高崎市との連携による防災活動による地域貢献

高崎市との防災協定の締結により、本学は地域住民及び労働者の一次非難の区域・施設となっている。緊急時には避難場所を提供するだけでなく、備蓄してある食糧も地域住民・労働者に提供する。

(オ) 高崎市の各種事業を通じての地域貢献

本学理学療法学科の専門性を活かし、平成 29 (2017) 年度より高崎市介護予防事業として高崎市の「高齢者あんしんセンター希望館」で地域貢献活動を行っている。春夏期には浜尻地区に、秋冬期には塚沢地区にて開催される「希望館運動教室」へ理学療法士である教員がそれぞれ月 1 回程度出向き、運動方法指導、腰痛予防体操、骨盤底筋群トレーニング、ボール体操、自主運動マネジメント、ウォーキング、バランストレーニング等の指導を行っている。令和 2 (2020) 年度は、当初年間で 13 回の実施が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症の影響から実施を見送ったが、令和 3 (2021) 年度は、感染拡大防止対策を講じて合計 13 回実施された。

また、平成 29 (2017) 年度より、高崎市が支援する高齢者の自主グループである「高崎市いきいきサロン」へ理学療法士である教員が出向き、腰痛予防体操、骨盤底筋群トレーニング、ストレッチ等の指導を行っている。令和元 (2019) 年度には、継続した支援を 5 回行った。令和 2 (2020) 年度から令和 3 (2021) 年度は新型コロナウイルス感染症の影響から実施ができなかった。

(カ) 大学の企画したイベントを通じて発信する高崎市への地域貢献

平成 30 (2018) 年に「音とダンスの祭典 2018」を大学が主催して、高崎卸商社街協同組合のイベント施設である「ビエント高崎」で開催した。大学の学生サークルの一つである舞踏研究会の研究成果を市民に公開することに加え、「日本介護予防ダンス協会」との連携により介護予防ダンスも知ることができ、大学も呼応してダンスと介護予防の関連性について講話も行った。このイベントは大学と地域の交流、楽しくできる介護予防の啓発という点で地域貢献に資するものとなった。このイベントには地域の方々が 300 人集まり地元紙でも報道された。

また、本学では地域連携センターが企画・主催して公開講座を実施している。令和元（2019）年度は計3回開催し、第1回は「医療専門職の特徴とそれぞれの歩み」をテーマに、看護師、理学療法士、臨床検査技師、診療放射線技師、臨床工学技士である本学教員5人が講演を行った。第2回は「その人らしく生きるための摂食嚥下リハビリテーションー安全に食を楽しむー」をテーマに外部講師2人を招いて講演を行った。第3回は「Quality of Life を考える」をテーマに、生理学、心理学、生命倫理をそれぞれ専門とする本学教員3人により講演を行った。令和2（2020）年度は計2回開催し、第1回は「新型コロナウイルスの医療現場を知る」をテーマに、感染症学、生体医工学をそれぞれ専門とする本学教員2人により、PCR検査、ECMOを題材にした講演を行った。第2回は「コロナ禍時代を生きるために」をテーマに、自分らしく社会生活を送ることを支援する立場から作業療法士である本学教員2人が講演を行った。令和3（2021）年度は計4回開催し、第1回は「新型コロナウイルスの現状と対策」をテーマに、感染症学を専門とする本学教員1人が講演を行った。第2回は「輝く自分であるために～前向きに生きることで必ず道は開ける～」と題して、東京2020パラリンピック開会式にも出演された義手のバイオリニストとして国内外で活躍する伊藤真波氏を講師にお迎えして特別講演を行った。合わせて「障がい者スポーツの起源を考える」をテーマに、障害者スポーツを専門とする本学教員1人が講演を行った。第3回は「新型コロナウイルス感染症の現状・予防・治療の最前線シンポジウム」をテーマに、外部講師3人と本学教員2人により講演とパネルディスカッションを行った。第4回は「産後クライシス予防は産まれる前から～夫婦の親密性を育む秘けつ～」をテーマに、母性看護学、助産学が専門の本学教員1人が講演を行った。

（キ）企業・団体を対象としたオープンレクチャー（出前講義）実施による地域貢献

保健医療専門職や医療について関心を持ってもらえるよう、高等学校向けに案内・実施しているオープンレクチャーを、平成30（2018）年度、企業・団体を対象に、（イ）に記載されている「まちづくり委員会」へ提案した結果、開催依頼が1件あり理学療法士である教員が出向いて、肩こり解消についての講座を行った。

また、令和元（2019）年度には、高崎卸商社街共同組合より年10回の講座依頼があり、4回の健康にかかわる講座を実施した。小学校のキャリア教育の一環として、看護学科の教員が出向き看護師の仕事について小学生に伝える活動なども行っている。

令和2（2020）年度には、高崎市より「企業等関係者人権啓発研修会」として感染症予防に関する講座依頼があり、感染症学が専門である検査技術学科の教員が出向き講演を行った。

令和3（2021）年度には、高崎市内にある「おひさま倉賀野保育園園内研修」として幼児期の性教育に関する講義依頼があり、小児看護学が専門である看護学科の教員が出向き講演を行った。

A-1-② 渋川市への地域貢献にむけた取り組み

渋川市は、群馬パース大学福祉専門学校（以下、「専門学校」という。）の所在地でもあり、行政や地域の諸団体と接点を持ち、以下の地域貢献活動を行っている。

(ア) 渋川市との業務協定に基づく地域貢献

専門学校が「渋川市渋川総合病院」の移転にあたって生ずる跡地に移転するにあたり、「渋川市渋川総合病院跡地利用事業協定書」を平成 28 (2016) 年に締結している。この協定の第 15 条には、本法人は、地域活性化のために法人の人材・情報・資源を活用し、市民や地域と連携や協働により実効性の高い地域貢献・地域連携方策を講ずることが明示されており、次の (イ) (ウ) に示す地域貢献に取り組んでいる。

(イ) 渋川市赤城地域いきいきサロンへの地域貢献

平成 29 (2018) 年よりそれぞれ 3 回、渋川市の赤城地域にある「宮田地区いきいきサロン」及び、「勝保沢地区いきいきサロン」の 2 箇所、本学及び専門学校教員にて訪問し、指導を行っている。宮田地区では体組成測定に加えて健康維持のためのロコモティブシンドローム、心理的健康、食生活の講話を行っている。勝保沢地区では体組成測定に加えて健康維持のためのストレッチ、ウォーキング、骨盤底筋群の講話を行っている。また、赤城地区全体に対して、健康運動推進員主催の健康教室に介護予防に関する講演を行っている。令和元 (2019) 年度には、渋川市の社協及び地域包括支援センターの関連組織に対して理学療法学科の教員が出向き 3 回の健康増進に関する講演を行った。

「渋川市赤城地域いきいきサロン」としての活動は令和元 (2019) 年度をもって終了したが、この地域貢献活動による同市との良好な関係構築により、令和 2 (2020) 年度は、渋川市より「介護予防教室ーお家でできるリフレッシュ体操ー」として講師派遣依頼があり、理学療法士である教員が出向いて、高齢者の健康指導・体操指導を行った。

(ウ) 地域連携センター企画の公開講座を通じての地域貢献

平成 30 (2018) 年より「子育て支援に関する公開講座」を地域連携センターが主催し、保育学科のある専門学校 (渋川市) で開催している。直近 3 か年の実績としては、令和元 (2019) 年度に、「発達障がい療育ー地域で一緒に楽しく育つー」をテーマに公開講座を行い、理学療法士の教員及び外部講師 2 人を招いて講演を行い、50 人の保育・福祉関係者、保護者が参加した。令和 2 (2020) 年度は、令和元 (2019) 年度のテーマが好評であったことから「発達障がい療育ー乳幼児期からの継続的な支援のためにー」をテーマに公開講座を行い、理学療法士の教員及び外部講師 2 人を招いて講演を行い、25 人の保育・福祉関係者、保護者が参加した。令和 3 (2021) 年度においても令和元 (2019) 年度からのシリーズで「発達障がい療育ー広く継続的な支援のためにー」をテーマに公開講座を行い、理学療法士の本学教員及び外部講師 2 人を招いて講演を行った。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため YouTube によるオンラインライブ講演とし、開催日以降のオンデマンド配信の視聴も含めて、181 人の視聴があった。

A-1-③ 近隣市町村への地域貢献にむけた取り組み

本法人が設置する大学及び専門学校の所在地である高崎市と渋川市への地域貢献の取り組みが、徐々に近隣市町村や地域の諸団体へも広がりを見せ、令和 3 (2021) 年度には以下の地域貢献活動を行っている。

- ・感染症の基礎知識と予防法（みどり市） 2021年7月
講師派遣（検査技術学科教員）
- ・小児看護の基礎知識講座（安中市） 2021年10月
講師派遣（看護学科教員）
- ・下川淵いきいき生活講座「耳が2つある理由って何だろう」（前橋市） 2021年11月
講師派遣（言語聴覚学科教員）
- ・群馬県健康保険組合連合会研修会（群馬県健康保険組合連合会） 2021年11月
講師派遣（検査技術学科教員）

（3）A-1の改善・向上方策（将来計画）

「地域社会に貢献する」ことを目的とする本学では、今後も更なる地域貢献活動を推進する。本法人が設置する大学及び専門学校の所在地である高崎市と渋川市を対象地域の中心としながら、徐々に広がりを見せている近隣市町村への地域貢献活動を充実させる。そして、地域連携センターを令和2（2020）年10月に完成した5号館に構え、レクチャーホールを活用して公開講座を充実させていく。

【基準Aの自己評価】

令和3（2021）年度は、令和2（2020）年度に続いて新型コロナウイルス感染症の影響により、高崎市、渋川市だけでなく、群馬県内各地域からの講師派遣等の依頼が減少したが、そのような中でも令和2（2020）年度には中止となった高崎市の「高齢者あんしんセンター希望館」での介護予防事業が再開できた。また、令和2（2020）年度に群馬県の衛生検査所の1つとして高崎市より認可を受けた本学の新型コロナウイルス検査センターでのPCR検査業務を令和3（2021）年度においても継続して行ってきたこと、さらに、令和3（2021）年度には新型コロナウイルスワクチンの大学拠点接種を実施したことは、国のワクチン接種推進のため、地域の感染拡大防止のため、大きな地域貢献活動となった。

本学における地域貢献活動は、組織的にも実践的にも、緒に就いた段階であるが、地域連携を実行する体制の強化と具体的活動を着実に進めている。

以上のことから、基準Aを満たしていると判断できる。

基準 B. 国際交流の推進

B-1 国際交流の推進

B-1-① 国際交流にむけた取り組み

(1) B-1 の自己判定

「基準項目 B-1 を満たしている。」

(2) B-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

(ア) 概要

「群馬パース大学国際交流センター規程」に基づき、本学に国際交流センターを置いている。国際交流センターは、海外の高等教育機関・医療機関等との学術・文化の交流及び国内での国際交流を通じて教育研究の充実・発展を図り、国際的視野を持ったリーダーシップのとれる保健医療専門職の育成を目的とする。

「群馬パース大学海外研修補助規程」第 2 条に基づき、本学が許可した研修に限り海外研修費用の一部を補助する。補助については、学生一人当たり在学中一回限りとし、本学が許可したプログラム費用の 4 分の 3（上限 20 万円まで）としている。

本学の目的に「豊かな教養と人間愛を備えた質の高い保健医療専門職を育成し、保健・医療・福祉サービスとの協働及び知の創造を通じて、国際社会、地域社会に貢献することを目的とする」とあり、本学では学生の国際交流を積極的に推進している。しかしながら、新型コロナウイルス感染症感染拡大のため、予定していた海外に赴く研修ができなくなり、令和 3（2021）年度の国際交流は、前年度に引き続き協定を締結している以下の大学とオンラインによる研修を実施した。

1) 海外の大学との協定

①ハワイ大学（アメリカ ハワイ）との協定

協定名「STUDENT CONFERENCE ON HEALTH PROFESSIONS IN USA Gunma paz College John A.Burns School of Medicine（JABSOM）」

②リンカーン大学（マレーシア クアラルンプール）との協定

協定名「AGREEMENT FOR ACADEMIC EXCHANGES AND COOPERATION BETWEEN Lincoln University college,Malaysia AND Gunma Paz University,Japan」

(イ) 協定を締結している大学への訪問

1) ハワイ大学

ハワイ大学との協定に基づき、希望者を募りアメリカ ハワイ研修を例年実施している。しかしながら、新型コロナウイルス感染症のため、令和 2（2020）年度の訪問による研修は前年度に引き続き中止とした。

2) リンカーン大学

リンカーン大学との協定に基づき、理学療法学科の希望者（2～3 学年）を対象にマレー

シア クアラルンプール研修を例年実施している。しかしながら、新型コロナウイルス感染症のため、令和3（2021）年度の訪問による研修は前年度に引き続き中止とした。

（ウ）協定を締結している大学とのオンライン研修の実施

新型コロナウイルス感染症のため、令和3（2021）年度は、上記（イ）の訪問による研修の代替えとして、オンラインによる研修を前年度と同様に実施した。

1）ハワイ大学とのオンライン研修

日時：令和4（2022）年3月2日（水）9:00～12:00

場所：1号館8階 PAZ Hall 又はオンライン参加（Zoom）

※ハワイ大学からライブ中継（相互通信）

講師：町 淳二氏、Yuka Hazam 氏

テーマ：Global Nursing for Global Patients 未来の医療と異文化対応看護

参加者：Ns2 69人、教職員5人

内容：・国際交流センター長挨拶

・ハワイの現状・一般情報について（GLNEC TOKYO）

・アメリカ看護学生との交流

・講義「異文化対応看護について」 Yuka Hazam 氏

・講義「With Corona & Beyond：未来の医療について」 町 淳二氏

・質疑応答

オンライン研修終了後、学生に実施したアンケート結果（回答者数：43人 回答率：62.3%）は、「非常に良かった」22票（51.2%）、「まあまあ良かった」21票（48.8%）、海外の活動に対する関心について、「非常に関心が高まった」14票（32.6%）、「まあまあ関心が高まった」25票（58.1%）、今後の国際交流に係わる講演の参加希望については、「強く希望する」8票（18.6%）、「やや希望する」26票（60.5%）であった。

2）リンカーン大学とのオンライン研修

日時：令和4（2022）年3月9日（水）13:00～15:30

場所：1号館8階 801 講義室又はオンライン参加（Zoom）

※リンカーン大学からライブ中継（相互通信）

講師：Ravi Kumar 氏

テーマ：ANTENATAL & POSTNATAL PHYSIOTHERAPY

出産における産前・産後の理学療法

参加者：PT2 4人、PT3 4人、RS3 1人、教職員 12人

内容：・国際交流センター長挨拶

・リンカーン大学挨拶（リンカーン大学）

・リンカーン大学の説明（リンカーン大学）

・講義「出産における産前・産後の理学療法」 Ravi Kumar 氏

・質疑応答

・リンカーン大学の学生との交流

オンライン研修終了後、学生に実施したアンケート結果(回答者数:7人 回答率:77.8%)は、「非常に良かった」4票(57.1%)、「まあまあ良かった」2票(28.6%)、研修受講後の海外の活動に対する関心について、「まあまあ関心が高まった」6票(85.7%)、今後の国際交流に係わる講演の参加希望については、「強く希望する」1票(14.3%)、「やや希望する」5票(71.4%)であった。

(カ) 国際交流センター主催特別講演

国際交流センターでは、国内においても保健医療分野の国際的な繋がりを学生に意識させるため、平成 28 (2016) 年度より国際交流センター主催の特別講演を例年開催しており、以下の特別講演は 6 回目の開催となる。コロナ禍のため、パレスチナと本学間でオンラインによる講演を実施した。

令和 3 (2021) 年度に実施した佐藤 太一郎 氏 (国境なき医師団所属) による講演の詳細について以下に示す。

日 時：令和 3 (2021) 年 10 月 24 日 (日) 13:00~14:15

場 所：1 号館 8 階 801 講義室 (パレスチナからのライブ中継)

※会場での参加とオンライン参加

講 師：佐藤 太一郎氏 (国境なき医師団)

テーマ：「戦禍の残る首都バグダッドの集中治療室」

～国境なき医師団としてのバグダッドでの医療活動～

参加者：61 人

- ・学 生 17 人 (Ns9 人、MT3 人、RS2 人、CE1 人、PT1 人、OT1 人、ST0 人)
- ・教職員 40 人
- ・その他 4 人 ※オンライン参加者のうち、個人の特定できず

講演終了後、学生に実施したアンケート結果(回答者数:15人 回答率:88.2%)は、「非常に良かった」15票(100%)、海外の活動に対する関心について、「非常に関心が高まった」11票(73.3%)、「まあまあ関心が高まった」4票(26.7%)、今後の国際交流に係わる講演の参加希望については、「強く希望する」11票(73.3%)、「やや希望する」4票(26.7%)であった。

(3) B-1 の改善・向上方策 (将来計画)

「国際社会・地域社会に貢献する」ことを目的とする本学は、今後も国際交流活動を推進する。国際交流センターは、平成 28 (2016) 年度に設立された学内組織であり、センター長の強いリーダーシップのもと本学の国際交流活動を推進している。

本学と海外の大学との協定について、学術交流や学生間交流等の協定を締結している大学は、現在 2 大学という状況である。主に看護学科と理学療法学科を対象とした協定校であるため、他学科の学生も参加できる研修プログラムを作成しなければならない。また、

海外に赴く研修だけではなく、海外からの学生を受け入れる体制も今後構築する必要がある。単位互換や教員間の研究に係わる交流も推進する必要がある。

【基準 B の自己評価】

海外研修においては、大学間協定を締結している大学の訪問を中心とした研修プログラムを実施しているが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のため、令和 3（2021）年度は前年度と同様に全ての研修プログラムを中止した。しかしながら本学の国際交流事業が衰退することのないよう、本学と協定を締結しているアメリカのハワイ大学と、マレーシアのリンカーン大学の両校とオンラインによる研修を実施した。

令和 3（2021）年度のオンラインで行われた国際交流センター主催の特別講演は、学園祭（流星祭）2 日目に開催され、学生、教職員併せて 61 人が出席した。演者である佐藤太郎氏（国境なき医師団所属）による講演は、派遣先であるパレスチナから群馬パース大学とライブ中継で行い、イラクの首都バグダッドへ渡り、様々な国籍の医療従事者と共に、主として COVID-19 感染症患者へ医療活動を行った「戦禍の残る首都バグダッドの集中治療室 国境なき医師団としてのバグダッドでの医療活動について」が題材とされ、コロナ禍ではあるが学生の海外の知見を広める良い機会となった。

以上のことから、基準 B を満たしていると判断できる。

第2部
教育研究年報
(2021年度)

教育研究年報の背景

本学においては 2005 年度より、医療系高等教育機関としての質の向上を図る活動の一環として、本学の教育活動と研究活動の実績を社会に公表し、社会的責任を果たすことを目的に「群馬パース大学年報」を年 1 回発行してきた。

この年報については、発行以来何度か見直しを行い、(1) 各領域の教育活動の総括、(2) 教育活動の諸記録、(3) 研究活動の諸記録、(4) FD 活動の記録、(5) 学生サービスの記録、の内容を掲載してきた。

2018 年度からは上記 (1) (4) (5) の内容を自己点検評価書に組み入れ、(2) (3) の内容を「群馬パース大学教育研究年報」として、「教育活動の記録」及び「研究活動の記録」の 2 部で構成し、自己点検評価書とともに毎年度作成・公表している。

I. 教育活動の記録

教育活動の記録は、各専任教員が担当した科目において実施内容とシラバスとの対応性、授業の方法、使用した教材、成績評価における学習目標の到達度の測定などを教育実績として収集したデータである。

個人、また各学科で毎年教育実績を振り返ることで改善の促進をはかり、PDCA サイクルを機能させることで、大学に求められる役割の一つである「学生の教育の充実」に対する継続的な教育活動の質の向上に繋げ、教育面での自己点検の一環として、一つの指標となっている。

本年度、各専任教員が担当した学部、大学院の各科目の実施内容とシラバスの対応性は、コロナ禍においても全体で 86.6%の科目でシラバス通りに講義が進められており、成績評価における学習目標の到達度の測定においては全体で 98.9%の科目において的確に測定できているという結果となった。

保健科学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）

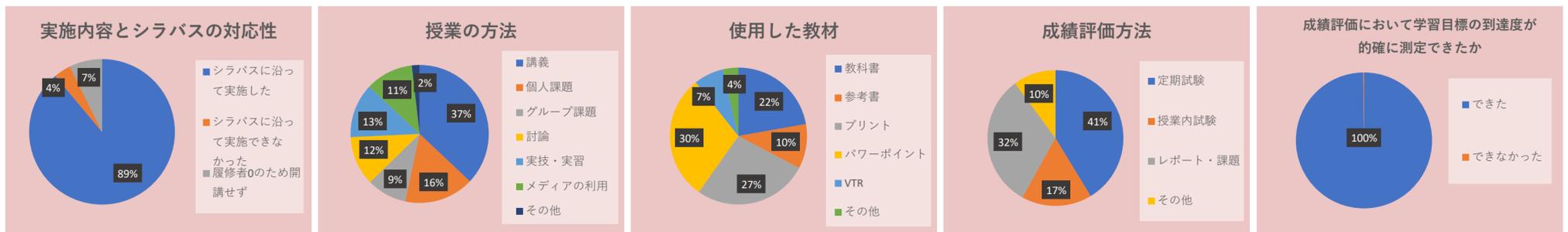
授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか																						
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考																				
心理学	1	後期	必修	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○									○		○			○			○										○						できた					
教育心理学	1	後期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○									○		○							○																できた				
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○										○	○							○															できた					
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施できなかった	呼吸が大きく乱れる運動の回避(コロナ)			○		○		○					○								○															できた				
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○			○							○							○																できた				
物理学A	1	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○									○								自作ノートによる板書	○																できた			
物理学B	1	後期	選択	1	山崎 真	履修者0のため開講せず																																								
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○				○									○	○														プレゼンテーション	できた				
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○				○									○	○															プレゼンテーション	できた			
囲碁で学ぶ情報戦略	1	後期	選択	1	土屋 仁	履修者0のため開講せず																																								
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○								○	○																									できた		
大学の学びー専門への誘いー	1	前期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○	○																									できた		
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○											○																									できた		
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○	○																	できた			
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○	○																	できた			
臨床解剖学	4	後期	選択	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○										○	○						○	○																	できた			
生理学Ⅰ	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○					○	○																		できた		
生理学Ⅱ	1	後期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○					○	○																		できた		
臨床生理学	4	後期	選択	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○					○	○																		できた		
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○					○	○																		できた		
病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○										○	○						○	○																		できた		
臨床病理学	4	後期	選択	1	湯本 真人	履修者0のため開講せず																																								
免疫・感染症学	2	前期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○	○																		できた		
臨床検査学	2	前期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○	○																		できた		
発達心理学	2	前期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○	○																		できた		
臨床心理学	2	前期	選択	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○	○																		できた		
社会福祉・社会保障制度論	2	後期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○	○																		できた		
地域保健行政	3	前期	選択	2	小林亜由美	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○	○	○				○	模造紙	○	○																	できた		
リハビリテーション概論	1	前期	選択	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○						○				○	○	○					○	○																		できた		
カウンセリング	2	後期	必修	1	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○							○	○																		できた	
看護学概論Ⅰ	1	前期	必修	1	上星 浩子	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○	○					○	○																	ミニッツペーパー	できた		
看護学概論Ⅱ	1	後期	必修	1	上星 浩子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○	○	○					○	○																	ミニッツペーパー	できた		
看護援助学概論	1	前期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○					○	○																		できた		
日常生活援助学演習	1	後期	必修	2	佐藤 晶子	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○	○	○				○	○																			できた	
治療援助学演習	2	前期	必修	2	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○	○					自作の動画を活用	○																ミニッツペーパー・ワークシート・技術チェック	できた		
看護援助学総合演習	2	後期	必修	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○	○				web電子カルテの使用	○																ミニッツペーパー・ワークシート・GWによるケア計画	できた			
看護過程論	1	後期	必修	1	佐藤 晶子	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○					○	○																		できた		
看護過程論演習	2	前期	必修	1	佐藤 晶子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○	○	○	○					○	○																			できた	
基礎看護学特論	4	後期	選択	1	上星 浩子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○	○																										できた	
成人看護学概論	1	後期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○	○						○	○																			できた	
成人看護学総論	2	前期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○	○	○					○	○																			できた	
成人看護方法論Ⅰ	2	後期	必修	1	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○	○					○	○																			できた	
成人看護方法論Ⅱ	3	前期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○	○					○	○																			できた	
周手術期看護論	3	前期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○	○					○	○																			できた	
クリティカルケア看護論	3	前期	必修	1	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○	○					○	○																			できた	
成人看護学演習	3	前期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○	○	○	○					○	○																			できた	
救急法	3	前期	選択	1	小池菜穂子	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○	○																			できた	
成人看護学特論	4	後期	選択	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○	○																										できた	

保健科学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか													
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考											
老年看護学総論	2	前期	必修	1	関 妙子	シラバスに沿って実施した		○	○				○	○	実技＝高齢者疑似体験	○	○	○	○	○		○	○	○			○	○	○			できた					
老年看護方法論 I	2	後期	必修	1	星野 泰栄	シラバスに沿って実施した		○	○					○		○	○	○	○	○		○	○	○			○	○	○			できた					
老年看護方法論 II	2	後期	必修	1	清水美和子	シラバスに沿って実施した		○	○					○		○	○	○	○	○		○		○			○					できた					
老年看護学演習	3	前期	必修	1	清水美和子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○				○	○	○	○			○		○								できた					
老年看護学特論	4	後期	選択	1	関 妙子	シラバスに沿って実施した	受講人数の関係にて若干内容調整あり	○		○	○				音楽CD・厚労省の動画			○	○	○	厚労省の動画				○	発表内容						できた					
小児看護学総論	2	前期	必修	1	中下 富子	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○			○	○									できた					
小児看護方法論	2	後期	必修	1	内山かおる	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○			○	○										できた				
小児看護学演習	3	前期	必修	2	内山かおる	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○				○	○	○	○					○									できた				
小児看護学特論	4	後期	選択	1	中下 富子	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○							○	プレゼンテーション							できた				
母性看護学総論	2	前期	必修	1	中島久美子	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○			○											できた				
母子の健康支援	2	前期	必修	1	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○	○	○			○											できた				
母性看護方法論	3	前期	必修	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○			○	○										できた				
母性看護学演習	3	前期	必修	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○				○	○	○	○			○	○	○		技術試験								できた			
母性看護学特論	4	後期	選択	1	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○	○	○					○									できた				
精神保健	2	前期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○	○	配布資料はAAにてPDF添付	○											リフレクションシート	できた			
精神看護学総論	2	前期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○	○	配布資料はAAにてPDF添付	○											リフレクションシート	できた			
精神看護方法論	2	後期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○	○	配布資料はAAにてPDF添付	○											リフレクションシート	できた			
精神看護学演習	3	前期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○	○	○	○	配布資料はAAにてPDF添付	○												リフレクションシート	できた		
精神看護学特論	4	後期	選択	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○	○	○	○	配布資料はAAにてPDF添付													リフレクションシート	できた		
在宅看護方法論 I	2	後期	必修	1	反町 真由	シラバスに沿って実施した		○		○	○			○	ゲストスピーカー	○		○	○	○			○	○										できた			
在宅看護方法論 II	3	前期	必修	2	反町 真由	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○			○	ゲストスピーカー	○		○	○	○			○	○											できた		
臨床看護管理学	4	前期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施できなかった		○	○							○	○	○	○			○												できた			
災害看護論	3	前期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○		○	○			○												できた		
公衆衛生看護学概論	2	後期	必修	2	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○		○	○			○												できた		
公衆衛生看護方法論	2	後期	選択	2	廣田 幸子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○	○	○	○			○												できた		
公衆衛生看護技術演習	4	前期	選択	1	桐生 育恵	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○				○	○	○	○	○					○	○									できた		
公衆衛生看護活動展開論	4	前期	選択	2	小林亜由美	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○	○			○	○	○	○		PC,プロジェクト・政府刊行物	○														できた	
対象別公衆衛生看護活動論 I	3	前期	選択	1	桐生 育恵	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○	○															できた		
対象別公衆衛生看護活動論 II	3	前期	選択	1	廣田 幸子	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○	○															できた		
公衆衛生看護管理	4	前期	選択	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○	○	○	○	○																できた	
助産学概論	4	前期	選択	1	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○		○																	できた	
助産基礎医学	4	前期	選択	1	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○		○																	できた	
母子と家族の心理・社会学	4	前期	選択	1	中島久美子	シラバスに沿って実施した		○	○	○						○	○	○	○			○														グループ課題	できた
妊娠期助産診断技術学	4	前期	選択	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○	○	○																	できた	
分娩期助産診断技術学	4	前期	選択	2	中島久美子	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○	○	○																	できた	
産褥期助産診断技術学	4	前期	選択	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○	○	○																	できた	
新生児・乳幼児期助産診断技術学	4	前期	選択	1	堀越 摂子	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○	○	○																	できた	
助産診断技術学演習	4	前期	選択	2	中島久美子	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○				○	○	○	○	○															実技試験	できた	
基礎看護学実習 I	1	前期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した			○	○	○					○	○	○																	評価表	できた	
基礎看護学実習 II	2	前期	必修	2	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した	COVID-19流行により病院実習日程や内容の一部に変更が生じた。								○																				実習記録及び取り組む姿勢を総合的に評価	できた	
成人看護学慢性期実習	3	後期	必修	3	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した			○		○	○				○	○	○	○																	できた	
成人看護学急性期実習	3	後期	必修	3	萩原 英子	シラバスに沿って実施できなかった	新型コロナウイルス感染症拡大により、病院実習が中止となったため。			○	○	○	○				○	○	○	○															実習目標の到達度、実習姿勢等	できた	
老年看護学実習	3	後期	必修	4	清水美和子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○				○	○	○	○																	できた	
小児看護学実習	3	後期	必修	2	内山かおる	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○				○	○																		実習前全体からの評価	できた	

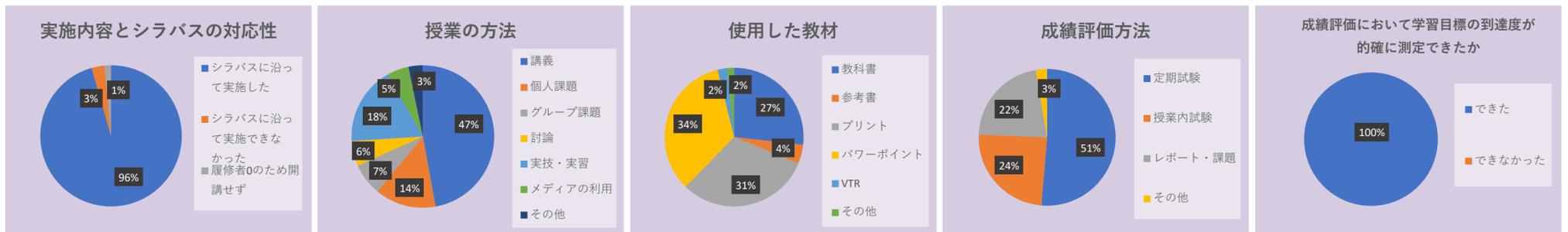
保健科学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか					
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考			
母性看護学実習	3	後期	必修	2	堀越 慎子	シラバスに沿って実施できなかった	COVID-19拡大のため、実習スケジュールを一部変更した。		○	○	○	○	○		○	○	○		○							○		できた	実習評価項目
精神看護学実習	3	後期	必修	2	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	学内実習に伴う認定看護師からの講義およびオンライン指導	○	○	○	○	○							○	実習到達目標に基づいた評価表	できた	
在宅看護学実習	4	前期	必修	2	反町 真由	シラバスに沿って実施した	コロナ対策のため一部方法を変更した。		○	○	○	○	○				○	○	○						○	実習評価項目	できた		
総合実習	4	前期	必修	2	中島久美子	シラバスに沿って実施した			○		○	○			○	○	○		○						○	実習への取り組み	できた		
公衆衛生看護学実習	4	後期	選択	5	小林亜由美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○				○	○	○	PC,プロジェクト・政府刊行物					○	口頭試問	できた		
助産学実習	4	後期	選択	11	中島久美子	シラバスに沿って実施した			○		○	○			○	○	○								○	実習への取り組み	できた		
看護研究概説	3	前期	必修	1	小林亜由美	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○						○		○		できた		
卒業研究	4	通年	必修	4	中島久美子 他	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○			○	○									○	文献	できた		



保健科学部 検査技術学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか														
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考												
機器分析化学	1	後期	必修	2	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○				○					○		できた								
臨床化学検査学	2	通年	必修	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○							ミニテスト実施(計10回)	○		○	○				○	○					○		できた							
臨床化学検査学実習	3	後期	必修	2	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○		○		○				○		○	○				○	○	○					○		できた						
健康食品学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○							ミニテスト1回実施	○		○	○				○	○							○		できた					
食品衛生学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○							ミニテスト1回実施	○		○	○				○	○								○		できた				
遺伝子検査学	2	前期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○				○	○								○		できた				
遺伝子検査学実習	2	後期	必修	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した			○				○					○	○				○		○							○		できた				
遺伝子工学	3	前期	選択	1	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○				○										○		できた			
RI検査学	3	後期	必修	1	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○							ミニテスト1回実施	○		○	○				○	○									○		できた			
血液検査学	2	通年	必修	2	小河原はつ江	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○				○	○									○		できた			
血液検査学実習	3	前期	必修	2	林 由里子	シラバスに沿って実施した			○				○			○		○	○				○		○									○		できた		
病理細胞検査学	2	通年	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○				○											○		できた		
病理細胞検査学実習	3	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○				○		○									○		できた		
医動物学	1	後期	必修	2	藤本 友香	シラバスに沿って実施した		○	○				○			○		○	○				○	○	○										○		できた	
生殖医療技術学	2	後期	選択	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○				○	○				○					○		○										○		できた	
臨地実習	4	前期	必修	7	長田 誠	シラバスに沿って実施した	新型コロナウイルス感染症のため、日程を変更した。								○								○												○		できた	
卒業研究	4	通年	必修	8	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した				○	○	○						○	○																	発表・論文	できた	

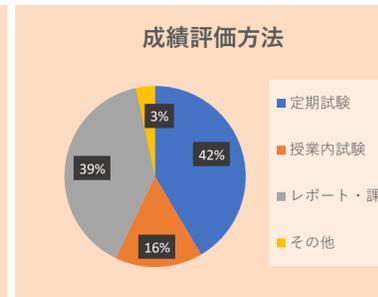
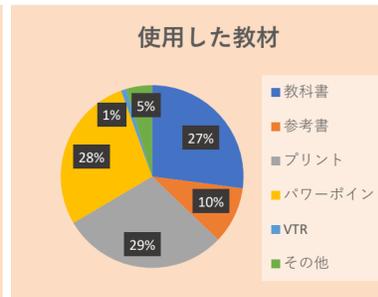
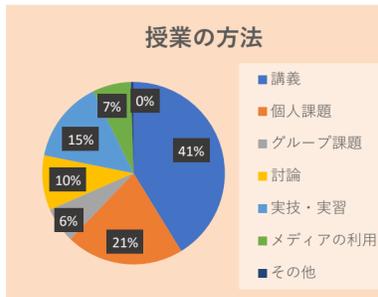
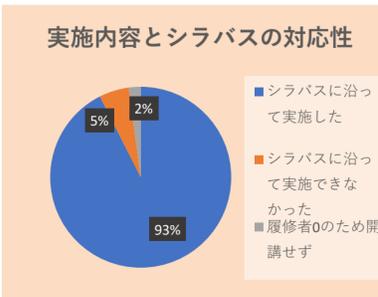


保健科学部 放射線学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか																			
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考																
心理学	1	後期	必修	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○				○	○				○						○											できた							
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○												○	○														できた							
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施できなかった	呼吸が大きく乱れる運動の回避(コロナ)		○	○			○																							できた						
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○															○										できた						
数学A	1	前期	選択	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																	自作教科書	○										できた						
数学B	1	後期	選択	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○										できた						
化学A	1	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																		○	○	○									できた					
化学B	1	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																		○	○	○									できた					
物理学A	1	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○																	自作ノートによる板書	○											できた					
物理学B	1	後期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○																	自作ノートによる板書	○											できた					
英語リーディング	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○																CD・Web教材	○			○		多読						できた					
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○														○	○					プレゼンテーション				できた					
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○																CD・Web教材	○			○		多読						できた					
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○																	○	○					プレゼンテーション					できた				
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○																													できた				
情報処理	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○																						できた				
情報リテラシー	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																																				
囲碁で学ぶ情報戦略	1	後期	選択	1	土屋 仁	シラバスに沿って実施した		○	○																			○	○										できた			
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○																													できた			
大学の学びー専門への誘いー	1	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○																												できた			
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	土屋 仁	シラバスに沿って実施した		○	○																														できた			
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○																			○	○										できた				
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○																				○	○										できた			
生化学	1	前期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○																				○											できた			
公衆衛生学	1	後期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○																				○											できた			
看護技術論	2	後期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○																															できた			
臨床心理学	2	前期	選択	1	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○																														できた			
画像診断学Ⅰ	2	後期	選択	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○																				○											できた			
画像診断学Ⅱ	3	前期	選択	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○																					○										できた			
医療基礎数学	1	前期	選択	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○																					○										できた			
医療基礎化学	1	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																					○										できた			
医療基礎物理学	1	前期	必修	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○																		自作ノートによる板書	○													できた		
医療電気・電子工学Ⅰ	1	前期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○																				○											できた			
医療電気・電子工学Ⅱ	1	後期	選択	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○																					○											できた		
医療電気・電子工学演習	2	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○																		自作ノートによる板書														できた		
医療電気・電子工学実験	2	後期	必修	1	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した																																	できた			
医療統計学	2	後期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施できなかった	理解度を確認しながら進めたため。	○	○																					○										できた		
放射線医療学概論	1	前期	必修	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○																					○											できた		
放射線救急医学	2	後期	選択	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○																					○	○	○									できた		
放射線文献講読Ⅰ	3	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																																できた		
放射線文献講読Ⅱ	3	後期	選択	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○																																できた	
放射線物理学Ⅰ	2	前期	必修	2	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○																		自作ノートによる板書	○													できた		
放射線物理学Ⅱ	2	後期	必修	2	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○																		自作ノートによる板書	○													できた		
放射線物理学演習	3	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○																		自作ノートによる板書														できた		
放射化学	2	前期	必修	2	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																					○											できた		
放射化学演習	2	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○			○																													できた		
放射線生物学	1	後期	必修	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○																																できた		
放射線生物学演習	2	前期	選択	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施できなかった	理解度を確認しながら進めたため。	○																						○										できた		
放射線計測学Ⅰ	2	後期	必修	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施できなかった	理解度を確認しながら進めたため。	○	○																					○										できた		
放射線計測学Ⅱ	3	前期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○																					○											できた	

保健科学部 放射線学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
放射線計測学演習	3	後期	選択	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施できなかった	理解度を確認しながら進めたため。	○	○			○	○								○		○			○		できた				
放射線計測学実験	3	前期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した					○	○	○														○		できた			
診療放射線学概論	1	前期	必修	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した					○	○									○		○				○		できた			
診療画像検査学概論	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○	○					○	○	○							○	○	○	できた			
診療放射線学実習直前演習	3	後期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した					○		○	○													○		できた			
診療放射線学総合臨床実習	4	前期	必修	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した																					○		できた			
診療画像解析学Ⅰ	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○	○					○	○	○							○		できた				
診療画像解析学Ⅱ	2	前期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○	○					○	○	○							○		できた				
診療画像解析学Ⅲ	2	後期	必修	2	谷口 杏奈	シラバスに沿って実施した					○	○					○	○								○		できた				
診療画像解析学演習	3	前期	選択	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○	○					○		○							○	○	できた				
診療画像解析学実習Ⅰ	3	前期	必修	1	谷口 杏奈	シラバスに沿って実施した					○	○	○	○	○													○		できた		
診療画像解析学実習Ⅱ	3	前期	必修	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○	○															○		できた			
診療画像解析学実習Ⅲ	3	後期	必修	1	谷口 杏奈	シラバスに沿って実施した					○	○	○	○	○												○		できた			
診療画像解析学特論	3	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○	○															○		できた			
医療放射線機器学Ⅰ	1	後期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した					○						○	○	○							○		できた				
医療放射線機器学Ⅱ	2	前期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した					○															○		できた				
医療放射線機器学Ⅲ	2	後期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した					○						○	○	○							○		できた				
診療画像解剖学Ⅰ	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○	○					○	○	○							○	○	○	できた			
診療画像解剖学Ⅱ	2	前期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○	○					○	○	○							○	○	○	できた			
診療画像解析学臨床実習Ⅰ	4	前期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した											○											○		できた		
診療画像解析学臨床実習Ⅱ	4	前期	必修	2	谷口 杏奈	シラバスに沿って実施した					○	○					○											○		できた		
核医学検査技術学Ⅰ	2	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した					○	○					○		○							○	○	できた				
核医学機器工学	3	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した					○	○														○	○	できた				
核医学検査技術学演習	3	前期	選択	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した					○	○															○	○	○	できた		
核医学検査技術学実習	3	後期	必修	1	島崎 綾子	シラバスに沿って実施できなかった					○	○	○														○		○	できた		
核医学検査技術学臨床実習	4	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																						○		できた		
放射線治療技術学Ⅰ	2	前期	必修	2	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した					○						○		○							○		○	できた			
放射線治療技術学Ⅱ	2	後期	必修	2	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した					○						○		○								○		○	できた		
放射線治療機器工学	3	前期	必修	2	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した					○						○		○								○		○	できた		
放射線治療技術学演習	3	前期	選択	1	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した					○	○															○		○	できた		
放射線治療技術学実習	3	後期	必修	1	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した																					○		○	できた		
放射線治療技術学臨床実習	4	前期	必修	2	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した											○											○		できた		
医療画像情報学Ⅰ	2	前期	必修	2	丸山 星	シラバスに沿って実施した					○						○		○							○	○	できた				
医療画像情報学Ⅱ	2	後期	必修	2	丸山 星	シラバスに沿って実施した					○						○		○								○	○	できた			
放射線情報システム学	3	前期	必修	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した					○						○	○								○		○	できた			
医療画像情報学演習	3	後期	選択	1	丸山 星	シラバスに沿って実施した					○	○					○		○									○		できた		
放射線安全管理学	3	前期	必修	2	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した					○																○		○	できた		
診療放射線技師の義務と役割	2	後期	必修	1	小川 清	シラバスに沿って実施した					○	○	○	○														○		できた		
放射線関係法規	2	後期	必修	1	小川 清	シラバスに沿って実施した					○	○															○		○	できた		
医療安全管理学	3	前期	必修	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した					○	○					○		○								○	○	○	できた		
放射線科学特別講義	4	前期	選択	1	倉石 政彦	履修者0のため開講せず																										
診療放射線学総合演習	4	通年	必修	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した					○	○					○	○	○								○		○	できた		
診療放射線技術と研究	3	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した					○	○																○		○	できた	
診療放射線学研究Ⅰ	3	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した					○	○																○		○	できた	
診療放射線学研究Ⅱ	4	通年	必修	4	星野 修平	シラバスに沿って実施した					○	○																○		○	できた	

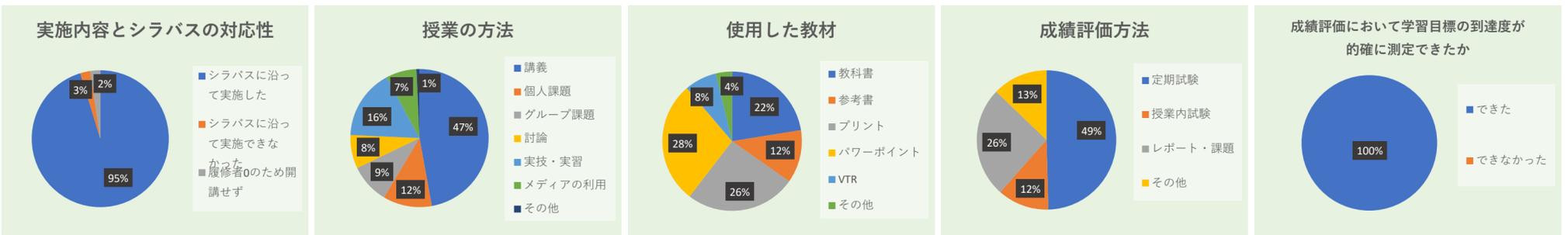


保健科学部 臨床工学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか							
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考					
心理学	1	後期	必修	2	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○					○	○			○	○							○			できた		
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○																		○	○		できた		
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施できなかった	呼吸が大きく乱れる運動の回避(コロナ)			○																	○	○		できた	
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○																	○			できた		
数学A	1	前期	必修	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
数学B	1	前期	選択	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
化学A	1	前期	必修	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
化学B	1	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
物理学A	1	前期	必修	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
物理学B	1	後期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○																	○			できた		
英語リーディング	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○																	○			多読	できた	
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○																○	○		プレゼンテーション	できた	
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○																	○			多読	できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○																○	○		プレゼンテーション	できた	
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○																				○	できた	
情報処理	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○																				○	できた	
情報リテラシー	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																									
囲碁で学ぶ情報戦略	1	後期	選択	1	土屋 仁	履修者0のため開講せず																									
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○																			○	できた	
大学の学びー専門への誘いー	1	後期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○		○	○																		○	できた	
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○																					○	できた	
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○																		○	○		できた		
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○																		○	○		できた		
生化学	1	前期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
公衆衛生学	1	後期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
基礎医学実習	2	後期	必修	1	尾林 徹	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
看護学概論	2	後期	必修	1	上星 浩子	シラバスに沿って実施した			○	○	○																	○	ミニッツペーパー	できた	
臨床生理学	2	前期	必修	1	尾林 徹	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
臨床病理学	2	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた	この学年から臨床科目に苦手意識を醸成しないよう、平均点を高く設定し定期試験を行った。	
臨床薬理学	2	後期	必修	1	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
臨床免疫学	2	後期	必修	1	尾林 徹	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
臨床心理学	2	前期	選択	1	鎌田 依里	シラバスに沿って実施した		○	○																			○	できた		
臨床検査学総論	2	後期	選択	2	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
応用数学	1	前期	必修	2	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
応用数学演習	1	後期	必修	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○	○																				発表・討論で40点	できた	
医用電気工学	1	通年	必修	2	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○			自作教科書	できた	
医用電気工学実習	1	後期	必修	1	西本 千尋	シラバスに沿って実施した																					○		授業態度	できた	
医用電子工学	2	前期	必修	2	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
医用電子工学実習	2	後期	必修	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した																					○		できた		
計測工学	1	後期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
医用材料工学	2	後期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
医用機械工学	2	前期	必修	2	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
医用機械工学演習	2	後期	必修	1	鈴木 博子	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
医療情報処理工学	2	前期	必修	2	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
医療情報処理工学演習	2	後期	必修	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○	○																			○	できた		
システム工学	3	前期	必修	2	西本 千尋	シラバスに沿って実施した		○																		○			できた		
システム工学演習	3	後期	必修	1	西本 千尋	シラバスに沿って実施した		○	○																	○			できた		
医用情報通信工学	3	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○																		○		○	できた		
基礎工学実験	1	後期	必修	1	鈴木 博子	シラバスに沿って実施した																						○	できた		
医用工学概論	1	前期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○																		○	○		できた		

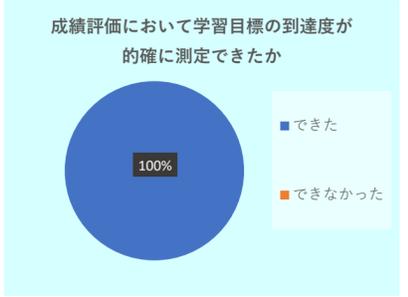
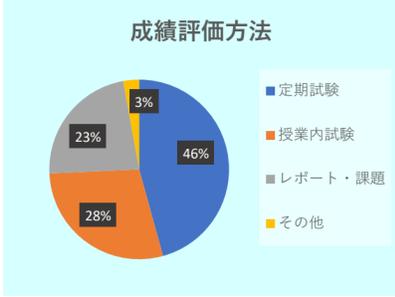
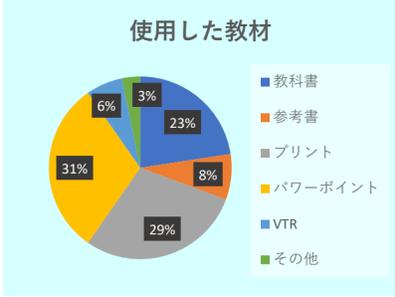
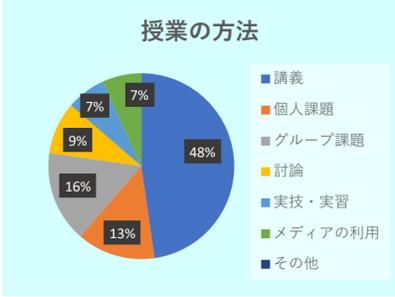
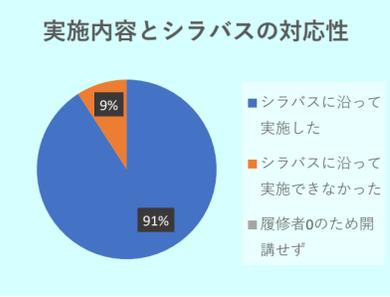
保健科学部 臨床工学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
医用超音波工学	2	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○										○										できた				
放射線工学概論	2	後期	必修	1	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○									○	○										できた				
医用レーザー工学	3	前期	選択	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○										○										できた				
医用画像処理工学	3	前期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○										○										できた				
生体物性工学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○						○	○			○										できた				
人間工学	2	後期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○		○	○																グループワーク・発表	○	できた			
医用機器学概論	1	後期	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○										○										できた				
医用治療機器学	3	前期	必修	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○								できた				
医用治療機器学実習	3	後期	必修	1	草間 良昌	シラバスに沿って実施した				○	○	○	○					○	○	○								○	○	できた		
生体計測装置学	2	前期	必修	2	島崎 直也	シラバスに沿って実施した		○										○	○									できた				
生体計測装置学実習	2	後期	必修	1	島崎 直也	シラバスに沿って実施した													○	○							○	レポート+プレゼンテーション	できた			
生体機能代行装置学 I	3	前期	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○										○										できた				
生体機能代行装置学 II	3	前期	必修	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○	○					○	○	○								○	○	できた		
生体機能代行装置学実習	3	後期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した				○									○	○									できた			
呼吸療法装置学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○										○	○									できた				
呼吸療法装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施した				○	○	○						○	○	○								○	○	実技試験	できた	
体外循環装置学	3	前期	必修	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○									できた			
体外循環装置学実習	3	後期	必修	1	草間 良昌	シラバスに沿って実施した				○	○	○	○						○	○									○	○	できた	
血液浄化療法装置学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○											○	○									できた			
血液浄化療法装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施した				○	○	○							○	○								○	○	実技試験	できた	
医用機器安全管理学 I	2	前期	必修	2	島崎 直也	シラバスに沿って実施した		○											○	○									できた			
医用機器安全管理学 II	2	前期	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○											○										できた			
医用機器安全管理学実習	2	後期	必修	1	島崎 直也	シラバスに沿って実施した														○	○							○	レポート+実技試験+プレゼンテーション	できた		
医療安全工学	2	後期	選択	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○											○	○	○								できた			
臨床医学総論 I	2	前期	必修	2	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○												○									できた			
臨床医学総論 II	2	後期	必修	2	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○												○									できた			
臨床医学総論 III	3	前期	必修	2	尾林 徹	シラバスに沿って実施した		○												○									できた			
救急救命医学	3	前期	選択	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○											○	○	○								できた			
臨床実習 I	3	後期	必修	4	大濱 和也	シラバスに沿って実施した	一部感染にて学内実習施行												○	○									施設評価	できた		
臨床実習 II	3	後期	必修	3	大濱 和也	シラバスに沿って実施した	一部感染にて学内実習施行													○	○								施設評価	できた		
臨床工学総合演習 I	3	通年	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○												○	○								できた			
臨床工学総合演習 II	4	通年	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した															○								できた			
臨床工学英文講読	3	後期	選択	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施できなかった	急遽担当が決まり、予定教員が作成済みのシラバスを変更できなかったため。																					○	臨床工学に関する公開英語論文・CDCのホームページ等の英語素材	できた		
臨床工学研究セミナー	4	前期	選択	2	近土 真由美	シラバスに沿って実施した		○																				○	できた			
卒業研究	4	通年	必修	4	大濱 和也	シラバスに沿って実施した																							学内発表	できた		



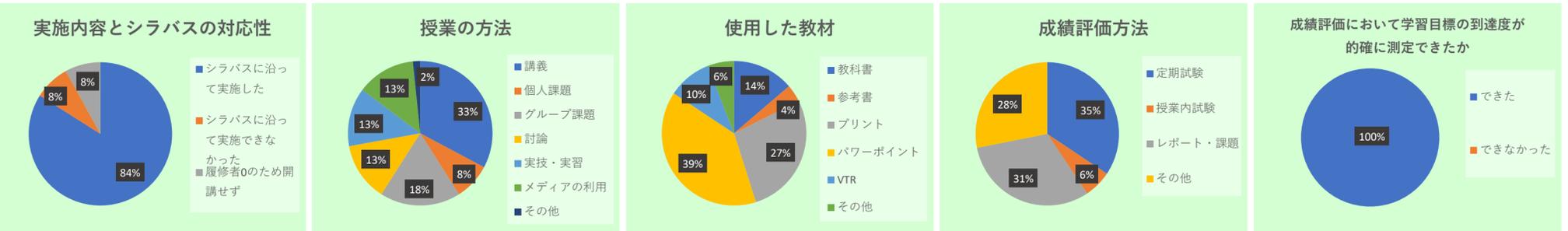
リハビリテーション学部 作業療法学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
心理学	1	後期	必修	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○									○		○			○				○			○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○										○	○							○	○			できた		
健康スポーツ実技	1	後期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した												○								○				できた		
基礎物理学	1	前期	選択	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○									○					自作教科書	○							できた		
物理学	1	前期	選択	1	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○									○					自作教科書	○							できた		
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○				○						○	○			プレゼンテーション			できた		
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○									○	○							○			できた		
大学の学びー専門への誘いー	1	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○																○			できた		
運動器解剖学	1	前期	必修	2	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した		○									○		○				○	○						できた		
臓器解剖学	1	後期	必修	2	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した		○									○		○				○	○						できた		
生理学Ⅰ	1	前期	必修	2	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○			○	○						できた		
生理学Ⅱ	1	後期	必修	2	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○			○	○						できた		
運動学	1	後期	必修	2	高橋 正明	シラバスに沿って実施できなかった	体幹の運動が半分残った。運動学実習でカバーする。	○									○	○	○	○				○	○					できた		
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○				○						できた		
病理学	1	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○										○	○					○						できた		
公衆衛生学	1	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○									○		○					○						できた		
リハビリテーション概論	1	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○					○					○	○	○				○						できた		
チーム医療とリハビリテーション	1	後期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○		○	○		○					○	○								○			できた		
作業療法学概論	1	前期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○										○	○					○						できた		
基礎作業学	1	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○	○	○				○						できた		
基礎作業学演習	1	後期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○	○	○				○						できた		
作業療法評価学	1	後期	必修	2	南 征吾	シラバスに沿って実施できなかった	分担の先生より編成依頼があった。	○	○	○			○	○			○	○	○	○				○	○	○				できた		



リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修 / 選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか																					
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考																			
心理学	1	後期	選択	2	榎本 光邦	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○				○		○			○		○		○		○		できた										
健康スポーツ理論	1	前期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○									○	○								○		○		○		○		できた											
健康スポーツ実技	1	後期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した											○									○								できた											
基礎物理学	1	前期	選択	1	佐藤 求	履修者0のため開講せず																																							
物理学	1	前期	選択	1	佐藤 求	履修者0のため開講せず																																							
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○		○											○	○								プレゼンテーション	○	できた								
大学の学び入門	1	前期	必修	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○																	○	できた									
大学の学び-専門への誘い-	1	後期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施できなかった				○	○	○	○				○	○																	ビデオカメラ	○	できた								
医学概論	1	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○							○			○								○										○	できた								
解剖学総論	1	前期	必修	1	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した		○										○	○							○											○	できた							
局所解剖学（言語・聴覚・発声・嚥下）	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○			○	○							○	○										○	できた							
基礎生理学	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○			○	○	○						○												○	できた						
基礎病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○										○	○							○												○	できた						
医療危機管理（窒息・誤嚥・吸引含む）	1	後期	必修	1	佐田 充	シラバスに沿って実施した		○											○							○												○	できた						
リハビリテーション関連領域実技実習	1	前期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施できなかった 複数教員の日程調整と時間割の空きコマの関係で、順番を入れ替えた。		○	○	○			○	○																							車いす・松葉杖・T字杖	○			実技試験	○	できた		
生涯発達心理学	1	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○						○				○	○	○						○													○	できた					
言語学	1	後期	必修	2	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○		アンケート調査	○			○	○								○													○	できた				
ICFとリハビリテーション	1	前期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○							○	○																						○	できた			
チーム医療とリハビリテーション	1	後期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施した				○	○								○																						○	できた			
社会福祉制度・関連法規	1	後期	必修	1	金谷 春代	シラバスに沿って実施した		○	○						○			○	○							○																	○	できた	
言語聴覚障害学概論	1	前期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○			○	○	○	○																							○	できた			
言語聴覚障害学演習	1	前期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施した ICFとリハビリテーションと統合して実施。		○		○	○	○	○						○	○																						○	できた		
言語聴覚障害学診断学	1	後期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施した		○		○	○								○	○																					○	できた			
地域リハビリテーション学	1	前期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○								○	○																					○	できた			
見学実習	1	後期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した	一部学内実習	○	○									○	○	○	Zoom																				○	できた			

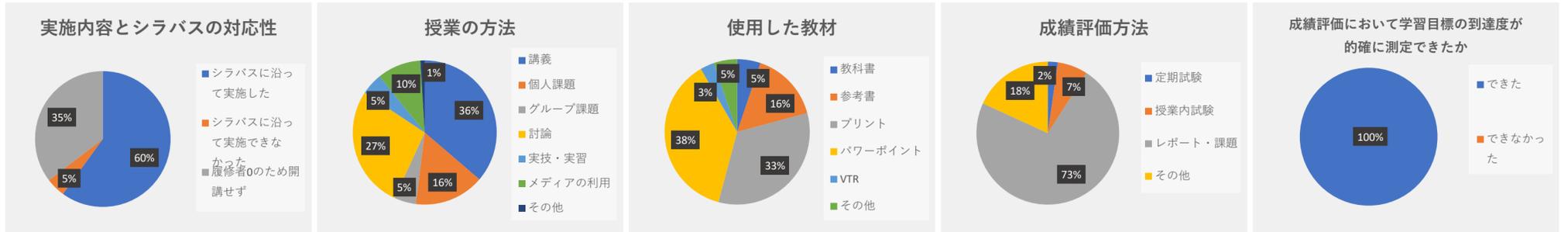


保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか						
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考			
医療倫理学特論	1・2	前期	選択	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○	○					○	○			できた	
医療運営・管理学特論	1・2	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○								○		できた	
人体の構造と機能学特論	1・2	前期	選択	2	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○	○	○						○	○		できた	
生殖補助医療技術学概論	1・2	前期	選択	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施できなかった		○	○		○						○	○								○		できた	
応用英語	1・2	前期	選択	2	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○											毎回の授業での発表	できた	
研究方法特論	1	前期	必修	1	中 徹	シラバスに沿って実施した		○					○			○	○									○		できた	
研究方法論Ⅰ	1	前期	選択	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○									○		できた	
研究方法論Ⅱ	1	前期	選択	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○	○				○									○		できた	
研究方法論Ⅲ	1	前期	選択	1	小河原はつ江	シラバスに沿って実施した		○								○	○									○		できた	
研究方法論Ⅴ	1	前期	選択	1	大濱 和也	履修者0のため開講せず																							
保健学特別セミナー	1	後期	必修	1	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○	○								○		できた	
基礎看護学特論	1	前期	選択	2	上星 浩子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○	○								○		できた	
基礎看護学演習	1	後期	選択	2	上星 浩子	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○			文献						○	研究計画書	できた	
基礎看護学特別研究	2	通年	選択	10	上星 浩子	シラバスに沿って実施した			○		○			研究・論文指導		○				文献						○	研究・論文作成	できた	
成人看護学特論	1	前期	選択	2	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○									○		できた	
小児看護学特論	1	前期	選択	2	中下 富子	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○	○								○		できた	
小児看護学演習	1	後期	選択	2	中下 富子	履修者0のため開講せず																							
小児看護学特別研究	2	通年	選択	10	中下 富子	履修者0のため開講せず																							
母性看護学・助産学特論	1	前期	選択	2	早川 有子	履修者0のため開講せず																							
母性看護学・助産学演習	1	後期	選択	2	早川 有子	履修者0のため開講せず																							
母性看護学・助産学特別研究	2	通年	選択	10	早川 有子 中島久美子	履修者0のため開講せず																							
公衆衛生看護学特論	1	前期	選択	2	矢島 正栄	履修者0のため開講せず																							
公衆衛生看護学演習	1	後期	選択	2	矢島 正栄	履修者0のため開講せず																							
公衆衛生看護学特別研究	2	通年	選択	10	中下 富子	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○												
精神看護学特論	1	前期	選択	2	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○	○	○	配布資料はAAにてPDF添付						○		できた	
基礎理学療法学特論	1	前期	選択	2	高橋 正明	履修者0のため開講せず																							
基礎理学療法学演習	1	後期	選択	2	高橋 正明	履修者0のため開講せず																							
基礎理学療法学特別研究	2	通年	選択	10	高橋 正明	履修者0のため開講せず																							
臨床神経学療法学特論	1	前期	選択	2	中 徹	シラバスに沿って実施した		○								○	○									○		できた	
臨床神経学療法学演習	1	後期	選択	2	中 徹	シラバスに沿って実施した		○								○	○									○		できた	
臨床身体活動学特論	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○					○		○	○			Web						○		できた	
臨床身体活動学演習	1	後期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○					○		○	○									○		できた	
臨床理学療法学特別研究	2	通年	選択	10	中 徹 木村 朗	履修者0のため開講せず																							
高齢者理学療法学特論	1	後期	選択	2	浅田 春美	履修者0のため開講せず																							
地域理学療法学特論	1	後期	選択	2	目黒 力	履修者0のため開講せず																							
病態検査解析学	1	前期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○								○		できた	
病態免疫化学検査学特論	1	前期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○									○		できた	
病態免疫化学検査学演習	1	後期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した			○		○					○	○									○		できた	
遺伝子情報検査学特論	1	前期	選択	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○								○	○									○		できた	
遺伝子情報検査学演習	1	後期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																							
病態血液検査学特論	1	前期	選択	2	小河原はつ江	履修者0のため開講せず																							
病態血液検査学演習	1	後期	選択	2	小河原はつ江	履修者0のため開講せず																							
生体分子情報検査学特論	1	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○	○									○		できた	
生体分子情報検査学演習	1	後期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○	○									○		できた	
病原体ゲノム検査学特論	1	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○				○		○										討論内容	できた	
病原体ゲノム検査学演習	1	後期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○				○		○										討論内容	できた	
生殖補助医療技術学特論	1	前期	選択	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施できなかった		○			○	○				○	○			youtube						○		できた	
生殖補助医療技術学演習	1	後期	選択	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施できなかった		○			○					○	○									○		できた	
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した			○		○					○	○									○	発表・論文審査	できた	
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○	○									○		できた	
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	長田 誠	シラバスに沿って実施した					○																修士論文	できた	

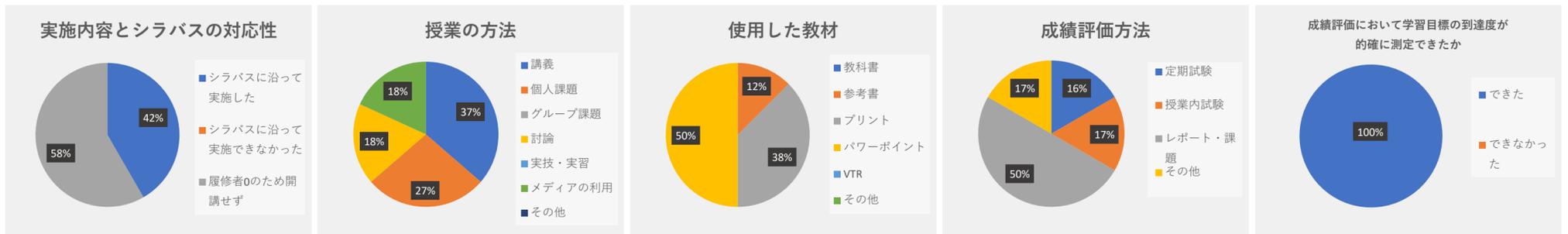
保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達が的確に測定できたか									
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考							
放射線情報学特論	1	前期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○				○						○	○	○					○				○		できた		
放射線情報学演習	1	後期	選択	2	星野 修平	履修者0のため開講せず																											
放射線教育学特論	1	前期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○			○	○							○	○							○			できた			
放射線教育学演習	1	後期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○			○	○								○	○						○			できた			
放射線防護学特論	1	前期	選択	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○													○									受講内容評価	できた		
放射線防護学演習	1	後期	選択	2	渡邊 浩	履修者0のため開講せず																											
放射線利用学特論	1	前期	選択	2	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○				○								○	○	○					○			できた			
放射線利用学演習	1	後期	選択	2	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○				○									○	○	○					○			できた		
放射線学特別研究	2	通年	選択	10	星野 修平 倉石 政彦 渡邊 浩 酒井 健一	履修者0のため開講せず																											
放射線学特論	1	後期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○				○									○	○	○					○			できた		
放射線情報システム特論	1	後期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○				○										○	○	○					○			できた	
生体医学特論	1	前期	選択	2	大瀧 和也	履修者0のため開講せず																											
生体医学演習	1	後期	選択	2	大瀧 和也	履修者0のため開講せず																											
臨床工学特別研究	2	通年	選択	10	大瀧 和也	履修者0のため開講せず																											



保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
生命研究倫理論	1	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○	○							○	○			できた			
医療科学研究法Ⅰ	1	前期	選択	2	藤田 清貴	履修者0のため開講せず																										
医療科学研究法Ⅱ	1	前期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																										
医療科学研究法Ⅲ	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○				○														○		できた			
特講Ⅰ（生体分子・病原体遺伝子）	1	前期	選択	2	藤田 清貴	履修者0のため開講せず																										
特講Ⅱ（細胞機能・生殖補助技術）	1	前期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																										
特講Ⅲ（生体機能）	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○				○														○		できた			
演習Ⅰ（生体分子・病原体遺伝子）	1	後期	選択	2	藤田 清貴	履修者0のため開講せず																										
演習Ⅱ（細胞機能・生殖補助技術）	1	後期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																										
演習Ⅲ（生体機能）	1	後期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																										
医療科学特別研究	1・2・3	通年	必修	6	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた			
医療科学特別研究	1・2・3	通年	必修	6	長田 誠	シラバスに沿って実施した																									博士論文（日本語のみ、英文は今後）	できた



Ⅱ. 研究活動の記録

研究活動の記録は、専任教員の研究活動状況について収集したデータである。

研究活動状況を広く社会へ公表することにより、地域の方々と連携した生涯学習や課題解決に取り組んだり、企業等との受託研究や共同研究などのかたちで研究成果の社会還元を促進したりすることを通じて、大学の目的である「地域社会への貢献」を恒常的に実施し、定着させることを目的としている。また、個人で毎年研究実績を振り返ることによりPDCA サイクルを機能させ、研究活動の推進と質の向上を図っている。

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 矢島正榮

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
保健学講座3 公衆衛生看護活動展開論	共著	令和3年12月	メヂカルフレンド社	保健師学生向け教科書シリーズのうちの1冊として、対象別及び職種別の公衆衛生看護活動の展開方法について論じている。 全392頁 (編集：岸恵美子、村島幸代) (分担執筆：西嶋真理子、都築千景、有本梓、表志津子、田高悦子、影山正子、 矢島正榮 、他11名) 本人担当部分「第5章 障害者(児)保健福祉活動」(p.151-177)

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
産業看護職による発達障害を抱える労働者支援(査読付)	共著	令和3年4月	医療看護研究 第17巻2号p.13-23	産業看護職の発達障害をかかえる労働者に対する支援内容を明らかにし、援助の示唆を得ることを目的とし、産業看護職10名に半構成的なインタビュー調査を行い、質的帰納的に分析した。産業看護職の支援5コアカテゴリ【職場の困りごとを明らかにするアセスメント】、【困りごとに対処する本人の力を伸ばす援助】、【困りごとに対処する職場の力を伸ばす援助】、【本人と職場の支援者による実現可能な対処策への調整】、【事業場内外の支援者との連携による支援環境の整備】が抽出され、発達障害の特性に対応する働きかけを含む支援のプロセスが明らかになり、本人と支援者の合意形成を図る調整力と事業場内外の支援者との連携と協働を円滑にする体制整備の必要性が示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (廣田幸子、矢島正榮、奥野みどり、桜井しのぶ)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 看護学科 氏名 早川 有子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
49. マタニティハラスメント被害の現況と妊婦の心身の自覚症状の変化	共著	令和3年	群馬パース大学紀要第26号	職場のマタニティハラスメントについて、妊娠中に被害を受けた女性の被害前後の心身の自覚症状の変化、尾被害状況を明らかにすることとした。被害前後の自覚症状で有意差があったものは15項目中、身体的症状の腹部の締め付け感、食欲倦怠感、動機、疲労感、全身倦怠感、心理的症状の抑うつ気分、自己過評価、満足感、イライラ感、無気力の計10項目だった。 (共同研究により本人担当部分抽出不可能) (広瀬文乃、中島久美子、早川有子)
50. 親への移行期における高年初産婦の夫婦が認識する夫婦の関係性の変化(査読付)	共著	令和3年	群馬パース大学紀要第26号	近年増加している高年初産婦は妊娠から産後の心身の健康リスクが高く、新たに親役割への課題を担うことから良好な夫婦の関係性が重要となる。本研究の目的は、高年初産婦が認識する親への移行期における夫婦の関係性の変化を事例研究によって明らかにすることである。その結果、親への移行期の夫婦の関係性の様相は5つに分類された。 (共同研究により本人担当部分抽出不可能) (中島久美子、臼井淳美、早川有子)
51. 助産学実習への効果的な移行を目指した妊娠期シュミレーション教育の学習効果と課題(査読付)	共著	令和3年	群馬パース大学紀要第26号	妊娠期シュミレーション教育を通じた学びの内容、助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指した妊娠期シュミレーション教育の学習効果と今後の課題を検討する。その結果、妊娠期シュミレーション教育は、妊娠期の基本的助産技術の獲得と必要な知識の再確認後、コミュニケーション技術の向上が期待でき、助産師としてのアイデンティティの基礎が形成され、助産学実習前の準備性を高めることができることが示唆された。 (共同研究により本人担当部分抽出不可能) (中島久美子、広瀬文乃、臼井淳美、早川有子)
52. 産後1ヶ月及び3ヶ月の高年初産婦の心身の健康状態と妻が満足と感じる夫の関わりに対する夫婦の認識(査読付)	共著	令和3年11月	日本助産学会誌35巻2号 2021年	産後1ヶ月及び3ヶ月の高年初産婦の心身の健康状態と妻が感じる夫婦の認識を明らかにすることを目的とした。研究デザインは質的記述的研究である。その結果、高年初産婦は、産後1ヶ月は心身の回復の遅れや育児の負担感、産後3ヶ月は慢性的な睡眠不足や疲労感を感じる一方、育児と生活リズムの安定と高年齢ゆえの精神的な余裕を認識していた。妻が満足と感じる夫の関わりは、妻の心身への気づかい、夫婦の家庭内役割の協同、夫の父親としての態度であった。特に、妻の心身への気づかいは夫婦で異なる認識が認められ、夫婦の認識の一致が得られ難いと言える。妻の心身の健康状態を安定に保つためには、夫婦の良好なコミュニケーションと意識の共有を図り、妻が満足と感じる夫の関わりを高めることが重要である。 (共同研究により本人担当部分抽出不可能) (中島久美子、早川有子、臼井淳美)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
53 ソフロロジー式分娩と出産ストレスの関連 -初乳中IgA濃度測定と出産ストレス感情測定スケールの活用- (査読付)	共著	令和3年12月	日本母乳哺育学会 2022年 1号 6月刊行 (2021年12月26日アクセプト)	初乳中sIgA濃度と出産ストレス感情測定スケールを活用し、ソフロロジー式分娩と出産ストレスの関連について明らかにすることが目的である。方法は、正常分娩した産褥3日目の初産婦で、ソフロロジー式分娩実施群と未実施群の各30名を対象にした。sIgAはELISA法で測定、出産ストレス感情は立岡が作成した「出産ストレス感情測定スケール」を用いて質問紙を作成し回答を得た。その結果、初乳中sIgAは実施群の方が未実施群に比べて低い傾向にあった。出産ストレス感情測定は、実施群と未実施群の総得点に有意差は見られなかった。結論、ソフロロジー分娩は、初乳中sIgA濃度の低い傾向が示され、出産ストレスの少ない分娩方法である可能性が示唆された。 (共同研究により本人担当部分抽出不可能 (池下貴子、早川有子、中島久美子))

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
86.コロナ禍の中、オンラインで如何に質の高い授業を行うか	—	令和3年1月29日 & 令和3年2月28日 2回実施	一般社団法人 看護・助産教育支援フォーラム(第12回目、オンライン2回目となる)	看護-助産教育支援フォーラムは、全国の看護・助産学の教員が活用する動画、イラスト、ムービーなどを含めた教材の開発に努め、それらをフォーラムサイトに登録し、会員が自由にダウンロードし、教育の質的向上を図っていくことを目的に活動している。今回はコロナが蔓延しているため実習等にいけない状況が長期に続いていることに鑑み、登録されたデータを活用して少しでも臨場感があふれる・講義・演習につなげて行くための方法について発表した。参加者が予測を上回り、当日参加できない人が多数いたため、再度同じテーマで2月28日にも行った。 (早川有子、松原まなみ)
87.在留外国人への母乳育児支援	—	令和3年9月18日	第35回日本母乳哺育学会学術集会 群馬バース大学(ライブ配信・オンデマンド配信)	第35回日本母乳哺育学会学術集会で会長講演を行った。テーマは「在留外国人の母乳育児支援」である。在留外国人が増えている中、母乳育児の国別の価値観の違いも考慮した母国語による母乳育児支援教材を作成することは、在留外国人の安心した母乳育児支援につながり、医療者にとっても在留外国人との言葉、価値観との壁を最小限にした母乳育児を推進していくことにつながると考える。方法は、9ヶ国語でアンケートを作成し、群馬県内の病院とインターネット上で在留外国人を対象に調査を実施した。会長講演ではその結果を発表した。また、現在、調査結果をもとに9ヶ国語の母乳育児支援の冊子を作成中である(8ヶ国語が完成したところである)。

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 小林 亜由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
日本人女性の大豆食品摂取習慣と更年期に見られるほてりとの関連	—	令和3年11月6日-令和3年11月7日	第36回日本女性医学学会学術集会	大豆製品摂取習慣と更年期のほてりとの関連を明らかにすることを目的に、日本ナースヘルス研究に参加している年齢40～59歳の女性看護職者の「豆腐」「納豆」「味噌汁」「豆乳」の個々の食品、「豆腐、納豆、味噌汁の3食品」「4食品全て」の摂取状況とほてりとの関連をみた。納豆（1日以下/週）に対し、（2-5日/週）摂取している人の発症リスクは0.78倍（0.62-0.97）、「4食品全てが1日以下/週」に対し「それ以外」は0.71倍（0.51-1.00）、「豆腐、納豆、味噌汁の3食品全てが1日以下/週」では0.70倍（0.51-0.96）の発症リスクが認められた。閉経状態別では、閉経後のみ大豆製品と強いほてりとの関連が認められた。（研究代表者）小林亜由美、安井敏之、宮崎有紀子、井手野由季、大塚恵美子、陳愛珍、林邦彦

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 中下富子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
児童生徒の健康課題解決のための養護教諭とスクールソーシャルワーカーとの連携支援	共著	令和3年9月	埼玉大学紀要, 教育学部, 70(2), pp303-323, 2021	本研究は、児童生徒の健康課題解決に向けた支援における養護教諭とSSWとの連携の実態について明らかにした。養護教諭及びSSWによる支援事例は40事例について連携支援データを質的帰納的に分析した。結果、養護教諭とSSWが相互に学校内外の【子供や家族の情報共有】をして【学校内外関係者との支援方法の検討】を行う。養護教諭とSSWが【つなぎ役となってチームアプローチによる支援の実施】し、子供や家族の状況から支援を評価し【支援の評価及び調整】を行うことであった。不登校や虐待等、児童生徒の問題に家庭の背景が多々起因している場合は、SSWとの連携した支援を視野に入れ校内外関係者へ働きかけていく必要性が示唆された。(門井亭子、中下富子、齋藤千景)
外国につながる児童生徒に対する養護教諭の健康支援プロセスに関する質的研究	共著	令和3年10月	学校保健研究63, pp160-174, 2021	本研究は、養護教諭が外国につながる児童生徒の文化的多様性と社会・経済背景の多様性をどのように理解し、受け止めの支援経験を健康支援に取り組んできたのか、養護教諭の支援経験の語りや支援内容のみでなく対象者や健康課題に対する認識面からも分析し、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。結果、そのプロセスは【文化の違いや滞り生活の不安定さと健康・行動・就学の関連を認識する】【言語の壁や病気やけがの認識の違いに直面し対応し戸惑い苦慮する】【言語と文化の違いに配慮・工夫した保健指導や教育・医療・福祉の連携により支援する】【社会的包摂に向けた教育の面での支援体制整備の課題を実感する】という4つのカテゴリーで構成されていることが示された。 (中下富子, 朝倉隆司, 上原美子, 武井佑真, 内藤美穂, 松本愛梨)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 西川 薫

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
医療観察法入院対象者の主体的なクライシスプランの作成を支援する看護実践	—	2021年6月	第17回日本司法精神医学会（オンライン）	本研究の目的は、医療観察法入院対象者の主体的なクライシスプランの作成を支援する看護師の実践内容を明らかにすることである。Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の医療観察法指定入院医療機関に所属する看護師1,012名に質問紙を配布し、317名から回答を得た。その結果、医療観察法入院対象者の主体的なクライシスプランの作成を支援する看護師の実践を表す37カテゴリが形成された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：佐藤和也，西川 薫

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 萩原英子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
模擬患者参加型演習における看護学生の学びに関する文献検討	—	2021年8月	第47回日本看護研究学会学術集会 宮城(web開催)	<p>模擬患者参加型演習における看護学生の学びを明らかにするために文献検討を行った。分析対象となった文献は18件であり、看護学生の学びとして、83コード、12サブカテゴリー、[対象者を尊重する姿勢][対象者に適した技術の必要性][適切な判断に基づく対応][モチベーションの高まり][自己研鑽の必要性]の5カテゴリーが抽出された。模擬患者からのフィードバックは、学生の自信の獲得や学習意欲の向上につながっていた。また、学生は模擬患者参加型演習を通して、自分自身の知識や技術の不足に気付き、自己の課題を明確にしていた。臨床実習開始前に、臨床に即した状況設定や事例設定に基づいた模擬患者参加型演習を実施することの重要性が示唆された。</p> <p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (小池菜穂子、湯澤香緒里、安田弘子、高橋翔、金子吉美、堀越政孝、萩原英子)</p>

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 廣田 幸子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
産業看護職による発達障害をかかえる労働者支援（査読付）	共著	2021年3月	医療看護研究、17(2)、p13-p23	産業看護職における発達障害をかかえる労働者に対する支援の内容を明らかにして、適切な援助に向けた示唆を得ることを目的とし、産業看護職10名に半構成的なインタビュー調査を行い、質的帰納的に分析した。その結果、産業看護職の支援は5のコアカテゴリが生成され、【職場の困りごとを明らかにするアセスメント】と、アセスメントに基づいた本人に対する【困りごとに対処する本人の力を伸ばす援助】、重要な役割を担う職場の支援者に対する【困りごとに対処する職場の力を伸ばす援助】がなされ、困りごとに対する対処策の方向性は【本人と職場の支援者による実現可能な対処策への調整により検討されていた。また、【事業場内外の支援者との連携による支援環境の整備】により最適な支援者の選定と円滑な支援体制の構築を導いていた。すべての援助は発達障害の特性に対応する働きかけを含み、課題解決の手段として看護過程を展開していた。発達障害をかかえる労働者を支援する産業看護職には、発達障害の特性に関する専門知識と対応のスキル、本人と支援者の合意形成を図る調整力が求められ、事業場内外の支援者との連携と協働を円滑にする体制整備の必要性が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (廣田幸子、矢島正榮、奥野みどり)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 看護学科 氏名 中島久美子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Development and Evaluation of a Program to Improve Understanding of Physical and Mental Health of Older Primiparas and Strengthen Marital Relationships: A Semi-Experimental Study without Control Groups (高年初産婦の心身の健康の理解を高め夫婦の関係性を強化するプログラムの開発と評価—対照群をもたない準実験的研究—) 「査読付」	共著	2021	Annals of Depression and Anxiety vol. 8, no. 1, pp01-06.	Objectives: Older primiparas are more likely to be at risk for physical and mental health problems. The purpose of this study is to develop and evaluate a program to understand the physical and mental health of older primiparas and strengthen their marital relationship. Conclusions: Findings indicate that this program improves mutual understanding and sharing of thoughts and feelings between couples. It was suggested that a postnatal program be held so that the couple could continue learning after childbirth. <u>Kumiko Nakajima</u> , Ayano Hirose and Tomoko Nameda.
産後1カ月及び3カ月の高年初産婦の心身の健康状態と妻が満足と感じる夫の関わりに対する夫婦の認識 「査読付」	共著	2021	日本助産学会 Vol. 35, No. 2, pp. 166-177	産後1カ月及び3カ月の高年初産婦の心身の健康状態と妻が満足と感じる夫の関わりに対する夫婦の認識を明らかにした。高年初産婦は、産後1カ月は心身の回復の遅れや育児の負担感、産後3カ月は慢性的な睡眠不足や疲労感を感じる一方、育児と生活リズムの安定と高年齢ゆえの精神的な余裕を認識していた。妻が満足と感じる夫の関わりは、妻の心身への気づかい、夫婦の家庭内役割の協同、夫の父親としての態度が明らかとなった。 中島久美子, 早川有子, 臼井淳美.
ソフロロジー式分娩と出産ストレスの関連—初乳中s-IgA濃度と出産ストレス感情測定スケールの活用— 「査読付」	共著	2022	日本母乳哺育学会 vol. 16, no. 1, (印刷中)	初乳中 s-IgA濃度と出産ストレス感情測定スケールを活用し、ソフロロジー式分娩と出産ストレスの関連について明らかにした。結果、ソフロロジー式分娩は、初乳中s-IgA濃度の低い傾向が示され、出産ストレスが少ない分娩方法である可能性が示唆された。 池下貴子, 早川有子, 中島久美子.
死産に関わる看護者の感情に関する文献検討 「査読付」	共著	2022	群馬パース大学紀要 no. 27 (12/14受理)	死産に関わる看護者の感情の特徴を文献検討から明らかにし、看護者の精神的安定が図れるような死産の看護を検討した。 吉野めぐみ, 中島久美子.
助産学実習への効果的な移行を目指した母乳育児支援のシミュレーション教育の学習効果と課題 「査読付」	共著	2022	群馬パース大学紀要 no. 28 (12/14受理)	産褥期の母乳育児支援のシミュレーション教育を通じた学びの内容と助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の学習効果と今後の課題を検討した。 臼井淳美, 中島久美子, 吉野めぐみ, 廣瀬文乃.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
助産学生による看護学生へのピアエディケーションを用いた性教育の学習効果—助産学生の学びを通して—	—	2021年3月20日	第35回日本助産学会WEB学会	助産学生による看護学生へのピアエディケーションを用いた性と生殖に関する講義の学習効果を明らかにした。 中島久美子, 廣瀬文乃, 早川有子.
死産に関わる看護師の感情に関する文献検討	—	2021年5月22日	第23回日本母性看護学会WEB学会	日本における死産の看護を行う看護師の感情を文献検討から明らかにし、看護師の精神的安定が図れるような死産の看護を検討した。 吉野めぐみ, 中島久美子.
保育所における母乳育児支援に対する保育士の考えや役割への思い	—	2021年9月17日	第35回日本母乳哺育学会WEB学会	保育所に勤務する保育士の母乳育児支援に対する考えや、母乳育児を継続したい母親に対する保育士としての役割に対する思いを明らかにした。臼井淳美, 中島久美子.
看護師の死産に対する感情の変化—グリーフケアツール記入による感情の前後比較—	—	2021年10月15日	第62回日本母性衛生学会WEB学会	グリーフケアツールに看護師が死産の症例について記入することによる死産に対する看護師の感情の変化を明らかにした。 吉野めぐみ, 中島久美子.

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 堀越 政孝

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
術後膵臓がん患者が苦悩をかかえながら生きるプロセス（査読付）	共著	2021年4月	日本がん看護学会, 35:102-111	安田弘子, 二渡玉江, 堀越政孝 目的) 術後膵臓がん患者が苦悩をかかえながら生きるプロセスを明らかにする. 方法) 17名の患者に半構成面接を行い, 得られたデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づき分析した. 結果) 対象者は膵臓がん告知後に動揺したが, 『手術に命を懸けるしかない』と手術を受けた. 術後【生と死の不確実性に翻弄されるが【自己コントロール感覚を取り戻す】ことができていた. (共同研究のため担当部分抽出不可能)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
模擬患者参加型演習における看護学生の学びに関する文献検討	-	2021年8月	第47回日本看護研究学会学術集会	小池菜穂子, 湯 香緒里, 安田弘子, 高橋 翔, 金子吉美, 堀越政孝, 萩原英子 【目的】看護学領域におけるSP参加型演習に関する文献検討を通して, SPの属性, 実施時期, 教育内容, 看護学生の学びを明らかにすることとし, SP参加型演習の教育内容と課題を検討した. 【方法】SP演習方法や学生の学びが記述されている文献18件. 各文献からSP参加型演習の実施学年, SPの属性, 教育内容, 看護学生の学びに関する記述を抽出し, 質的帰納的に分析した. 【結果】SP参加型演習の実施学年は, 3年次8件, 2年次4件, 1年次6件であった. SPの属性は, 一般市民5件, 教職員4件, 学生4件, SP訓練受講者2件, 記載なし3件であった. 教育内容は, 看護技術11件, 観察とアセスメント4件, コミュニケーション3件であった. 看護学生の学びは, 【対象者を尊重する姿勢】【状況に応じた適切な対応】【学習への動機づけ】【自己研鑽の必要性】の4カテゴリが抽出された.

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 金子吉美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
模擬患者参加型演習における看護学生の学びに関する文献検討	—	2021年8月21, 22日	日本看護研究学会 第47回学術集会, Web開催.	より効果的なSP参加型演習を検討するために、文献検討を通して、SP参加型演習における看護学生の学びを明らかにすることを目的とした。18文献を対象とし、質的帰納的に分析を行い、看護学生の学びとして5つのカテゴリーが抽出され、発表した。 (小池菜穂子、湯澤香緒里、安田弘子、高橋翔、金子吉美、堀越政孝、萩原英子)

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 関 妙子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 萩原 一美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 小池 菜穂子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
模擬患者参加型演習における看護学生の学びに関する文献検討	—	2021年8月	日本看護研究学会 第47回学術集会 オンライン開催	<p>模擬患者 (Simulated Patient ; 以下SP) を導入した教育は、リアリティとそれに伴う緊張感のある学習環境を提供することができると言われている。また、SPからのフィードバックは、患者の心情理解に繋がるなどの効果があると言われている。より効果的なSP参加型演習を検討するために、文献検討を通して、SP参加型演習における看護学生の学びを明らかにすることを目的とした。看護学生の学びとして83コード、12サブカテゴリー、[対象者を尊重する姿勢] [対象者に適した技術の必要性] [適切な判断に基づく対応] [モチベーションの高まり] [自己研鑽の必要性] の5カテゴリーが抽出された。[対象者を尊重する姿勢] から学生は、臨床現場を再現したSPとの関わりから「患者」であるという意識が湧き、対象者の立場に立って考えるということが促進され、対象者の心情に寄り添い、思いを傾聴することの大切さを学んでいた。SPからのフィードバックは、学生の自信の獲得に繋がり、学習意欲を向上させ、知識の不足や自己の未熟さに気付き、自己の課題の明確化の促進に繋がっていた。看護実践への適応能力の育成を目指す臨地実習前に、臨地実習を想定した臨床に即した状況の設定や実習病棟の特徴的な疾患のSPを設定することで、実習前教育として有効なSP参加型演習となる可能性が示唆された。学生の学習意欲を維持するためにも、実習後など継続的にSP参加型演習を取り入れていく必要がある。(小池菜穂子・湯澤香緒里・安田弘子・高橋翔・金子吉美・堀越政孝・萩原英子)</p>

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 看護学科 氏名 星野泰栄

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Mental health and trace minerals: A review of association between magnesium, selenium, zinc deficiency and fatigue/mental health disorder/depression in working generations. メンタルヘルスと微量ミネラル：勤労世代におけるマグネシウム、セレン、亜鉛欠乏と疲労・メンタルヘルス不調・うつ病との関連に関するレビュー(査読付)	共著	2021	Journal of Magnesium Research, Vol. 40, No. 1, 2021, 1-10.	Mental health problems and fatigue have become a major social problem in recent years for various generations, especially young people and working generations. Accumulation of physiological fatigue, which leads to mental health problems, may leads to further pathologic depression. In previous studies, there are many reports on the association of minerals, especially zinc, with depression and mental health problems. The purpose of the present review is to introduce the association between mental health and micronutrient (minerals: magnesium, selenium, zinc). In this report, we focus on zinc deficiency and mental health disorder. Furthermore, we report our study the relationship between minerals and fatigue surveys which conducted at night shifts by nurse and care staff in a hospital. The plasma zinc concentration and the fatigue evaluation index flicker value showed a significant positive correlation. This result indicates that the lower the plasma zinc level, the higher the degree of fatigue. On the other hand, for copper and selenium, no significant correlation was found with the flicker value. We would like to recommend the importance of adequate consumption of micronutrients, especially dietary intake of zinc in order to prevent mental health problems for young people and working generations. Further epidemiological studies are required about association between mental health disorder and minerals especially zinc intake. (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) Satomi Kameo, Yasue Hoshino, Nobuyoshi Harada, Ken Inoue, Hiroshi Koyama,

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Association between fatigue evaluations and microminerals of blood plasma in the medical staff during the nighttime shift. (医療スタッフの夜間勤務における疲労評価と血漿中微量ミネラルの関連)	共著	2021. Nov. 20 (Sat),	The Japanese Society for Magnesium and Calcium Research / International Society for Minerals, Date : 2021. Nov. 20 (Sat), Venue: On-line (第40回日本マグネシウム学会 / 国際ミネラル学会) (2021年11月20日、オンライン開催)	(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) Satomi Kameo, Yasue Hoshino, Nobuyoshi Harada, Yasuyuki Kondo, Chiho Yamazaki, Ken Inoue, Hiroshi Koyama

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科

氏名

堀込由紀

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
該当無し				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
病床規模別の看護師採用状況及び採用活動の実態	共著（共同）	2021年10月	日本医療・病院管理学会 Vol. 58 No4	国内の看護師採用状況及び採用活動について全国の病院に対して質問紙調査を実施した。992施設から回答を得た。100～199床の施設で募集人員を下回っていた。特殊人材の採用は役職者では99床以下で、認定看護師らは200床以上で、60歳以上は100～199床規模が多かった。特に小規模病院への採用活動支援と効果的なマッチングシステムが必要であることがわかった。木田亮平, 國江慶子, 佐々木美奈子, 堀込由紀, 米倉佑貴, 武村雪絵
医療安全管理者が抱える業務遂行上の困難—フォーカス・グループ・インタビューの分析から—	共著（筆頭）	2021年12月	日本医療マネジメント学会 Volume22 Number3	機縁法で集めた東京都近郊の病院で勤務する医療安全安全管理者19名に対して、医療安全活動の課題についてフォーカスグループインタビューを実施した。その結果、病院規模で課題の傾向が多少変わり、小中規模病院では主に組織体制や管理に、大規模病院では、医療安全管理の関わる職種の多様化、活動の質の追求等の課題が明確となった。堀込由紀, 佐々木美奈子, 中山純果, 末永由理, 本谷園子, 駒崎俊剛, 菅野雄介, 山元友子, 坂本すが, 宮崎久義

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護補助者との効果的な協働に必要な看護師の認識や判断、行動に関する文献レビュー	-	2021/8/28～8/29	第25回日本看護管理学会 パンフィコ横浜ノース+web開催	看護師に対する看護補助者との協働に関する教育への示唆を得ることを目的とした。医学中央雑誌Webにおいてキーワード検索を実施し、抽出された57件の文献のうち、看護師を対象にした文献4件を分析対象とした。32のコード、14のサブカテゴリー、8のカテゴリーが抽出された。8つとは「役割の認識」、「協働者としての関係調整と尊重」、「情報共有と自由な協議」、「患者中心性志向の共有」、「看護補助者への教育的支援」、「看護師自身の成長」、「安全な業務遂行体制の確立」であり、を獲得するための看護師向けの看護基礎教育あるいは体系的な現任教育が不可欠である。堀込由紀
COVID-19禍における国際看護教育オンライン研修の取り組みと課題	-	2021/9/4	日本国際看護学会第5回 学術集会 web開催	日本国際看護学会 教育活動・研修委員会を実施した、ZOOMを活用した国際看護教育に関する研修について、実施後アンケート結果を分析し、その効果・課題等について分析した。オンライン形式でも、感染予防を実現した上で講義・グループワークが可能であり、一定の満足感を得られていた。課題はグループワークについての満足感が低く、テーマ等を再考する必要がある。横山詞果, 江角伸吾, 大植崇, 堀込由紀, 呉小玉

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護基礎教育で考える大規模災害時の在日外国人支援	-	2021/9/4	日本国際看護学会第5回学術集会 教育活動・研修委員会企画シンポジウム web開催	災害大国である日本において災害時の在日外国人支援をテーマとして。研究者・実践家を迎えシンポジウムを企画し開催した。大植崇，呉小玉，堀込由紀，横山詞果，江角伸吾
Nurse behaviors required for direct care directions to nursing assistants.	-	2021/11/2～11/4	ICN Congress Nursing Around the World Virtual Congress	The aim of this study is clarifying the recognition/behaviors of the nurses when delegating direct patient care to nursing assistants. After confirming written consent to non-managerial nurses with five or more years of experience working in an acute care hospital , semi-structured individual interviews were conducted based on an interview guide. The interview results were qualitatively analyzed. The results of qualitative analysis revealed eight actions that ensure good collaboration. It is necessary to develop the educational system for nurses to collaborate with nursing assistants. Yuki Horiogme, M. Sasaki, Y. Suenaga, S. Sakamoto
終末期がん患者の在宅移行の現状と課題—緩和ケアチームへの調査から	-	2021/12/4～12/5	第41回日本看護科学学会学術集会 Web開催	病院の緩和ケアチームが抱える終末期がん患者の在宅移行の現状と課題を明らかにすることを目的とし関東圏で500床以上の病院で、緩和ケアチームで活動する看護師23名に質問紙調査を実施した。その結果、終末期がん患者の在宅移行は、療養病棟等を経由した症例が多くあり、その背景には、家族の介護力や希望、情報不足等がある。また、地域の医療機関における在宅医療の理解や受け入れ等に格差があることが分かった。今後は、がん末期患者の地域連携ネットワークの課題等に関して調査していく必要があると考える。堀込由紀，反町真由

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 桐生 育恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
外国につながる児童生徒の健康課題解決に向けた養護教諭による支援プロセス～M-GTAを用いた分析～	—	2021年11月	日本学校保健学会第67回学術大会、学校保健研究(63) p.157、オンデマンド	外国につながる児童生徒の健康課題解決に向けた養護教諭の支援プロセスについて明らかにすることを目的に、A県で在日外国人の多い地域の公立小・中学校に所属し、外国につながる児童生徒への支援経験を持つ養護教諭10名に半構造化面接を行った。その結果、養護教諭は、<国は違っても子どもは同じ>という考えに基づいて、子ども一人ひとりの違いを捉え、保護者に粘り強く対応することが必要であった。また、在日外国人のネットワーク、地域の健康管理システム等、学校外からの間接的な働きかけに支えられていることが示された。（中下富子、 <u>桐生育恵</u> 、内山かおる、佐藤由美）

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 堀越 摂子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 湯澤（池田）香緒里

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
看護学教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因（査読付）	共著	2021年3月	群馬県立県民健康科学大学紀要第16巻	看護学教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を明らかにすることを目的に、実習指導を担当する教員623名を対象とし、質問紙法を用いてデータを収集した。データ分析には、Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を用いた。303記録単位を分析した結果、【援助実施に必要な学生の準備状態不足】【クライアントの状態変化】など教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を表す36カテゴリが形成された。結果の考察より、教員の日々の実習指導計画の実施は《授業成立要件の未充足》《学習機会確保に向けた看護師からの支援獲得困難》などの状況の中で阻害されやすい。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (湯澤香緒里、松田安弘、山下暢子、服部美香)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9. 模擬患者参加型演習における看護学生の学びに関する文献検討	—	2021年8月～9月	日本看護研究学会第47回学術集会 (Web開催)	模擬患者参加型演習に関する文献を精読し、結果から学生の学びを抽出し、質的帰納的に分析した。模擬患者参加型演習における看護学生の学びを明らかにした。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (小池菜穂子、湯澤香緒里、安田弘子、高橋翔、金子吉美、堀越政孝、萩原英子)

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 反町真由

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
新型コロナウイルス感染拡大下での在宅看護実習における学内代替実習の取り組み(査読付き)	共著	2022.3	群馬パース大学紀要 第27号	共著者;林恵・反町真由

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
終末期がん患者の在宅移行の現状と課題	-	2021.12	第41回日本看護科学学会学術集会、オンライン	共著者；堀込由紀・反町真由

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 保健科学部看護学科 氏名

長嶺めぐみ

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
11. A systematic review of conceptual and competency contents of baccalaureate global nursing education in countries for referring further development in Japan (査読あり)	共著	令和3年12月 (未刊・掲載確定)	International Journal of Nursing Education, 14(2)	11. 国際看護学の分野は多岐に渡り全ての国際看護分野を網羅できる人材の層は薄く、外部講師に科目をゆだねざるを得ないという状況もある。各校の独自性は当然尊重されるべきであるが、専門職の少ない国際看護学においてはカリキュラム構成要素の基本的共通理解を得ておくことは必要と考える。そこで日本の国際看護学教育の質向上のため海外ではこの学問をどのように捉えどのような能力を付与しようとしているのかを調べ、日本の国際看護学教育に関する知見を得ることを目的とした。 研究代表者：Chieri Yamada 共同研究者：Megumi Nagamine, Takashi Ohue, Hiromi Tsujimura, Yoshie Mori 共同研究により担当箇所抽出不可能
12 国際看護学に関する教科書の構成要素の分析	共著	令和4年2月 (未刊・掲載確定)	日本国際看護学会誌 5巻2号	12. 1996年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則改定では初めて国際看護教育の必要性が示された。本研究では1996年以降に国際看護（学）の教科書として使用されることを念頭に刊行されたと考えられる書籍の構成要素を明らかにし、内容の標準化への示唆を得る。 研究代表者：辻村弘美 共同研究者：森淑江、長嶺めぐみ、山田智恵里、大植崇 共同研究により担当箇所抽出不可能
13 日本における国際看護学教育で強化及び補完が必要な教育内容に関する文献検討 (査読あり)	共著	令和4年2月 (未刊・掲載確定)	日本国際看護学会誌 5巻2号	13. 本研究では、日本における国際看護学教育に関する文献の検討を行い、その研究動向から、国際看護学がどのように教育がされてきたのかを分析し、国際看護学教育で強化・補完が必要な教育内容の示唆を得ることを目的とした。 研究代表者：大植崇 共同研究者：長嶺めぐみ、森淑江、山田智恵里、辻村弘美 共同研究により担当箇所抽出不可能

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
14. Structuring Communication Difficulties of Foreign Residents When Visiting a Medical Institution in Japan (査読あり)	共著	令和4年2月 (未刊・掲載 確定)	北関東医学会 第72巻 1号	14. 本研究は以下の2つを目的に行った：①日本語が母国語でない在留外国人患者が日本の医療機関を受診した際の経験から、コミュニケーションに起因した困難さを明らかにして構造化する、②在留外国人患者への適切な医療提供のためのコミュニケーション上の方策を検討する。 研究代表者： Megumi Nagamine 共同研究者：Yoshie Mori、Yoshio Ohyama 共同研究により担当箇所抽出不可能

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
31 EXAMINATION OF THE USEFULNESS OF MACHINE TRANSLATION WHEN COMMUNICATING WITH OVERSEAS PATIENTS (外国人患者とのコミュニケーションにおける機械翻訳の有用性の検討)	共著	2021年4月	24nd East Asian Forum of Nursing Scholars	31. Due to the increase in non-Japanese residents and visitors from overseas, there is a higher opportunity for foreigners to visit hospitals. To provide medical care and treatment without language barriers, an interpreter is necessary for people who do not speak Japanese. However, it is difficult to have a medical interpreter in every situation like receptions or daily observations. We believe that using machine translation, which is less expensive, is more realistic. Therefore, in this study we examined the usefulness of machine translation in clinical use. 研究代表者： Megumi Nagamine 共同研究者：Yoshie Mori 共同研究につき担当箇所抽出不可能
32 国際看護学の教育において強化が求められている内容の実態調査	共著	2021年9月	第5回日本国際看護学会学術集会	32. 国際看護の分野は、世界共通の健康目標、国家・地域間の健康格差、在留外国人の保健医療課題と看護、国際機関の役割、国際協力活動における看護の役割など多岐に渡っている。教授する人材が不足する中、一定のレベルを満たす教育を行うには、我が国の特徴を踏まえ、かつ国際社会のニーズに合った国際看護を担う人材の教育プログラムの開発が必要と言える。本研究は、全国で共有できる国際看護学講義補完システムの構築を行うための基礎調査として、全国の看護系大学及び看護専門学校、高等学校の看護師養成課程（5年一貫教育）等での「国際看護学」教育の実態を明らかにすることを目的に行った。 研究代表者： 長嶺めぐみ 共同研究者：大植崇、辻村弘美、山田智恵里、森淑江 共同研究につき担当箇所抽出不可能

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 日下田那美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 廣瀬文乃

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 Development and Evaluation of a Program to Improve Understanding of Physical and Mental Health of Older Primiparas and Strengthen Marital Relationships: A Semi-Experimental Study without Control Groups (高年初産婦の心身の健康と夫婦の親密性を強化するプログラムの実践-介入群に着目した研究-) (査読付)	共著	2021年	Annals of Depression and Anxiety	妊娠・分娩・出産においてハイリスクになりやすいと言われている高年初産婦の夫婦に対し、出産準備クラスを開催し夫婦の親密性を高め協力して児を迎えられるよう介入した研究である。妊娠期から産後1か月、産後3か月まで経過を追った。結果、夫婦は互いに理解しあい気持ちを共有しながら育児を進めることに繋がっていた。 (共同研究につき、本人担当抽出不可) 共著者：中島久美子、廣瀬文乃、行田智子
2 助産学実習への効果的な移行を目指した母乳育児支援のシミュレーション教育の学習効果と課題 (査読付)	共著	2021年	群馬パース大学紀要第27号	学内での母乳育児支援のシミュレーション教育を通じた学びの内容と助産学実習に活かされた内容から、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育のあり方を検討した。デザインは、質的記述的研究デザインである。学生は、シミュレーション教育で実践場面を想定した母乳育児支援を実践し理解することにより、コミュニケーション技術や知識不足等に気づきを得ていた。助産診断能力の向上に向けた教育の必要性が明らかになった。 (共同研究につき、本人担当抽出不可) 共著者：中島久美子、吉野めぐみ、廣瀬文乃

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
助産学生による看護学生へのピアエデュケーションを用いた性教育の学習効果-助産学生の学びを通して-	-	2021年3月	第35回日本助産学会学術集会	助産学生から看護学生に対し、性感染症と避妊についてのピアエデュケーションを実施した。実施後、助産学生を対象としたアンケート調査を行い学習効果を見出した。学生は、ピアを通し、他者への指導を行う際の注意点や難しさを学び、指導の際の媒体や言葉の選択等の工夫に活かされていた。

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 佐藤 和也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 看護学実習中の学生自身による問題解決を支援する教員の教授活動（査読付）	共著	2021年3月	群馬県立県民健康科学大学紀要 16, 81-96	本研究の目的は、看護学実習中の学生自身による問題解決を支援する教員の教授活動を明らかにすることである。Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の看護基礎教育機関に所属する教員974名に質問紙を配布し、229名から回答を得た。その結果、看護学実習中の学生自身による問題解決を支援する教員の教授活動を表す43カテゴリが形成された。 発表者：佐藤和也 共著者：佐藤和也、松田安弘、山下暢子、服部美香、金谷悦子 本人担当部分：研究計画の遂行、考察、執筆を担当した。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
医療観察法入院対象者の主体的なクライシスプランの作成を支援する看護実践	—	2021年6月	第17回日本司法精神医学会（オンライン）	本研究の目的は、医療観察法入院対象者の主体的なクライシスプランの作成を支援する看護師の実践内容を明らかにすることである。Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の医療観察法指定入院医療機関に所属する看護師1,012名に質問紙を配布し、317名から回答を得た。その結果、医療観察法入院対象者の主体的なクライシスプランの作成を支援する看護師の実践を表す37カテゴリが形成された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：佐藤和也、西川薫

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 佐藤美保

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 保健科学部
看護学科 氏名 吉野めぐみ

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 死産に関わる看護職の肯定的感情を高めるグリーフケアツールの試作と評価ーグリーフケアツールの使用による看護者の感情ー（学位論文）	単著	2021年3月	2020年度群馬パース大学大学院 学位論文	本研究は、試作したグリーフケアツールを使用し、死産の看護を想起することによる看護者の死産に対する感情を明らかにすることである。ツールへの記入後に看護者の死産に対する感情について半構成的面接調査を行い、質的帰納的に分析を行った。看護者の感情は、夫婦の思いを理解し、夫婦や死児に寄り添って支えたい感情と、死産の看護に対する困惑はあるが、使命感を抱き、より良い看護の探求心、チーム医療への期待感であった。
2 死産に関わる看護者の感情に関する文献検討（査読付）	共著	2022年3月	群馬パース大学紀要第27号（印刷中）	本研究の目的は、死産に関わる看護者の感情の特徴を文献検討から明らかにし、看護者の精神的安定が図れるような死産の看護を検討することである。看護者の感情の特徴は、【夫婦や死児に対する感情】と【死産の看護に対する感情】であった。看護者の精神的安定を図れ、積極的な看護の実践のためには、看護者自身の感情や死産の看護を表出する機会を設け、看護者間の死産に対する感情や看護を臨床において共有できるツールが必要である。（分析、本文作成）（筆頭論文） 共著者：吉野めぐみ、中島久美子
3 助産学実習への効果的な移行を目指した母乳育児支援のシミュレーション教育の学習効果と課題（査読付）	共著	2022年9月	群馬パース大学紀要第28号（印刷中）	本研究では、助産師学生を対象にシミュレーション教育後及び助産学実習後の2時点で調査を行い、シミュレーション教育の学習内容と実習に向けた課題、シミュレーション教育が助産学実習に活かされた内容とシミュレーション教育で学びたかった内容を明らかにした。そして、シミュレーション教育の効果および課題が示唆された。 （データ分析を担当） 共著者：臼井淳美、中島久美子、吉野めぐみ、廣瀬綾乃

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 死産に関わる看護者の感情に関する文献検討	—	2021年5月	第23回日本母性看護学会学術集会（オンライン開催）	本研究の目的は、死産に対する看護者の感情の特徴を文献検討により明らかにし、看護者の精神的安定が図れるような死産の看護を検討することである。看護者の感情の特徴は、「夫婦や死児に対する感情」と「死産の看護に対する感情」であった。死産に関わる看護者の精神的安定を図るためには、看護者自身の感情を表出する機会を与え、看護者間の死産の看護の共有やサポート体制が必要である。（データ分析、まとめ、発表を担当） 共同発表者：吉野めぐみ、中島久美子
4 看護者の死産に対する感情の変化—グリーフケアツール記入による感情の前後比較—	—	2021年10月	第62回日本母性衛生学会学術集会（オンライン開催）	本研究の目的は、試作したグリーフケアツールに死産の症例について看護者が記入することによる、看護者の死産に対する感情の変化を明らかにすることである。死産の症例1事例を想起し、ツールの記入前後に自作の死産に対する感情スケールを用いて看護者の感情の変化を比較した。夫婦や死児に積極的な関わりができたという感情に変化し、死産の看護への戸惑いの減少と辛さの軽減につながることが示唆された。（データ分析、まとめ、発表を担当） 共同発表者：吉野めぐみ、中島久美子

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 林 恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
新型コロナウイルス感染拡大下での在宅看護学実習における学内代替実習の取り組み（査読有）	共著	2022年3月	群馬パース大学紀要第27号（論文掲載証明書発行済）	2020年度の新型コロナウイルス感染拡大下での在宅看護実習を振り返り、学内代替実習の課題を明らかにした教育実践報告である。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 看護学科 氏名 生方 明日香

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. 院外臨床研究コーディネーターの作業環境とストレス(1) —派遣先医療機関における作業環境—	-	2021年8月	日本看護研究学会第47回学術集会（オンライン開催）	院外臨床研究コーディネーターが働く派遣先医療機関の作業環境について明らかにするために、治験施設支援機関(SMO)に所属する院外CRCを対象とした無記名のwebアンケート調査を行った。その結果、自分なりにキーパーソンを見つけて人的環境を整えていること、作業スペースの整備の程度は様々であること、などの作業環境の実態が明らかになった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：生方明日香、水野正之、小澤三枝子
2. 院外臨床研究コーディネーターの作業環境とストレス(2) —派遣先医療機関におけるストレスに関連する作業環境—	-	2021年8月	日本看護研究学会第47回学術集会（オンライン開催）	院外臨床研究コーディネーターの派遣先医療機関におけるストレスに関連する作業環境を明らかにするために、治験施設支援機関(SMO)に所属する院外CRCを対象とした無記名のwebアンケート調査を実施した。その結果、作業環境（執務環境及び人的環境）はストレスに関連を認めた。良い執務環境は院外CRCのストレスを軽減する可能性があること、人的環境は実務的キーパーソンが院内CRCである方がストレスは低いことが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：生方明日香、水野正之、小澤三枝子

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 検査技術学科 氏名 木村 博一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概	要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概	要
1. COVID-19のウイルス学的特徴 (査読付)	共著	2021年1月	内科 Vol. 127, No. 1 pp. 11-15	2019年末、新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) は、中国武漢市に突然出現し、その後パンデミックを引き起こし、各国に重大な健康被害を与えている。本稿においては、現時点におけるSARS-CoV-2のウイルス学的知見を中心に概説した。(責任著者として、研究企画・論文執筆を行った)	共著者: 木村博一, 岡山香里, 藤本友香, 林由里子.
2. Detailed Structure and Pathophysiological Roles of the IgA-Albumin Complex in Multiple Myeloma. (多発性骨髄腫におけるIgA-アルブミン複合体の詳細な構造と病態生理学的役割) (査読付)	共著	2021年2月	Int J Mol Sci Vol. 22, No. 4 pp. 1766	多発性骨髄腫の病態生理を解明するため、免疫グロブリンA (IgA) -アルブミン複合体の構造をさまざまな電気泳動、質量分析ならびにin silicoの手法を用いて解析した。(責任著者として研究企画、論文執筆を行った)	共著者: Kawata Y, Hirano H, Takahashi R, Miyano Y, Kimura A, Sato N, Morita Y, <u>Kimura H</u> , Fujita K.
3. Relationships between Viral Load and the Clinical Course of COVID-19. (COVID-19のウイルス量と臨床経過との関係) (査読付)	共著	2021年2月	Viruses Vol. 13, No. 2 pp. 304	COVID-19の臨床結果を予測するために、疫学的データ、ウイルス排泄量ならびに疾患重症度の関係をリアルタイムPCR (RT-qPCR) による研究を行った。(主要著者として研究企画、論文執筆を行った)	共著者: Tsukagoshi H, Shinoda D, Saito M, Okayama K, Sada M, <u>Kimura H</u> , Saruki N.
4. Molecular and clinical characterization of the equine-like G3 rotavirus that caused the first outbreak in Japan, 2016. (2016年、日本で最初のアウトブレイクを引き起こした馬に類似したG3ロタウイルスの分子のおよび臨床的特徴) (査読付)	共著	2021年3月	J Gen Virol Vol. 102, No. 3	eG3株は、DS-1様G1P[8]株と不特定動物のG3株との間で組替体としてアジアで最近発生したことが示唆された。今回の結果は、ポストワクチン後のロタウイルスサーベイランスには、全ゲノム解析が必要であることを示している。(主要著者として研究企画・論文執筆を行った)	共著者: Akane Y, Tsugawa T, Fujii Y, Honjo S, Kondo K, Nakata S, Fujibayashi S, Ohara T, Mori T, Higashidate Y, Nagai K, Kikuchi M, Sato T, Kato S, Tahara Y, Kubo N, Katayama K, <u>Kimura H</u> , Tsutsumi H, Kawasaki Y.
5. Google Classroom を用いたリモート国家試験対策の評価. (査読付)	共著	2021年3月	臨床検査学教育 Vol. 13, No. 1 pp. 1-7	Google Classroomを用いた国家試験対策を実施し、アンケート調査にて自宅学習の効果を評価した。(主要著者として論文執筆を行った)	共著者: 岡山香里, 川田悠貴, 宮野ゆかり, 高橋蓮, 古田島伸雄, 木村博一, 藤田清貴.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
6. Molecular characterization of the first human G15 rotavirus strain of zoonotic origin from the bovine species. (ウシ種に由来する人獣共通感染症由来の最初のヒトG15 ロタウイルス株の分子特性) (査読付)	共著	2021年4月	J Gen Virol Vol. 102, No. 4	小児科外来でのロタウイルスサーベイランスにおいて、日本で検出された遺伝子型 G15P [14] を持つ新たな RVA 株 Ni17-46 の分子進化学的解析に関する研究を行った。 (主要著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: Tsugawa T, Fujii Y, Akane Y, Honjo S, Kondo K, Nihira H, <u>Kimura H</u> , Kawasaki Y.
7. A longitudinal study on enteric virus contamination in bivalves along the coast of Ibaraki Prefecture, Japan. (茨城県沿岸の二枚貝における腸管ウイルス汚染に関する縦断的研究) (査読付)	共著	2021年6月	J Food Prot Vol. 84, No. 6 pp. 946-952	茨城県で収穫された天然カキやアサリなどの二枚貝を対象に腸管ウイルスのサーベイランスを含む長期的な研究を行った。(責任著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: Motoya T, Nagata N, Kashimura R, Ohashi K, Saito A, Osawa S, Goto K, Iwama S, Yanaoka T, Okayama K, Hirai S, Sugai T, Murakami K, Ishioka T, Ryo A, Katayama K, <u>Kimura H</u> .
8. Ruxolitinib inhibits poly(I:C) and type 2 cytokines-induced CCL5 production in bronchial epithelial cells: A potential therapeutic agent for severe eosinophilic asthma. (ルキソリチニブは、気管支上皮細胞におけるポリ (I : C) および2型サイトカイン誘発性のCCL5産生を阻害します: 重症好酸球性喘息の治療薬として期待される) (査読付)	共著	2021年6月	Immun Inflamm Dis Vol. 9, No. 2 pp. 363-373	ルキソリチニブが代替薬物療法として好酸球性喘息の治療薬としての可能性を探索する研究を行った。(主要著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: Sada M, Watanabe M, Inui T, Nakamoto K, Hirata A, Nakamura M, Honda K, Saraya T, Kurai D, <u>Kimura H</u> , Ishii H, Takizawa H.
9. Highly specific monoclonal antibodies and epitope identification against SARS-CoV-2 nucleocapsid protein for antigen detection tests. (SARS-CoV-2のヌcleoカプシドタンパク質に対する高特異性モノクローナル抗体とエピトープの同定。ヌcleoカプシドタンパク質に対する高特異性モノクローナル抗体とエピトープの同定を行い、抗原検出試験に使用します) (査読付)	共著	2021年6月	Cell Rep Med Vol. 2, No. 6 pp. 100311	現在の抗原検査は核酸検査に比べて感度が低い。本研究では、新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) とのみ反応し、SARS-CoVを含む他のヒトコロナウイルスとは交差反応を示さないモノクローナル抗体 (mAb) を作製する研究を行った。(主要著者として研究企画・論文執筆を行った) 共著者: Yamaoka Y, Miyakawa K, Jeremiah SS, Funabashi R, Okudela K, Kikuchi S, Katada J, Wada A, Takei T, Nishi M, Shimizu K, Ozawa H, Usuku S, Kawakami C, Tanaka N, Morita T, Hayashi H, Mitsui H, Suzuki K, Aizawa D, Yoshimura Y, Miyazaki T, Yamazaki E, Suzuki T, <u>Kimura H</u> , Shimizu H, Okabe N, Hasegawa H, Ryo A.
10. Effect of Compounds from Moringa oleifera Lam. on in Vitro Non-Alcoholic Fatty Liver Disease (NAFLD) Model System. (モリンガ・オレインフェラ・ラムの化合物がインビトロ非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) モデルシステムに及ぼす影響) (査読付)	共著	2021年7月	Chem Biodivers Vol. 18, No. 7 pp. e2100243	ワサビノキの糖尿病に対する効果に着目し、非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) を制御する化合物単離に関する研究を行った。 (主要著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: Ukiya M, Motegi K, Sato D, <u>Kimura H</u> , Satsu H, Koketsu M, Ninomiya M, Myint LM, Nishina A.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
11. Whole genome analysis detects the emergence of a single Salmonella enterica serovar Chester clone in Japan's Kanto region. (全ゲノム解析により、日本の関東地方におけるサルモネラ菌血清型チェスターの単一クローンの出現が検出された) (査読付)	共著	2021年7月	Front Microbiol Vol. 12 pp. 705679	全ゲノム解析により、日本関東地域におけるサルモネラ・チェスタークローンの出現頻度に関する研究を行った。 (主要著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: Ando N, Sekizuka T, Yokoyama E, Aihara Y, Konishi N, Matsumoto Y, Ishida K, Nagasawa K, Jourdan-Da Silva N, Suzuki M, <u>Kimura H</u> , Le Hello S, Murakami K, Kuroda M, Hirai S, Fukaya S.
12. Profiles of human papillomavirus detection of the multinucleated cells in the cervical smears. (子宮頸部塗抹標本における多核細胞のヒトパピローマウイルス検出のプロファイル) (査読付)	共著	2021年7月	Microorganisms Vol. 9, No. 8 pp. 1575	マイクロダイセクション法を用いて、子宮頸部の多核細胞 (MNC) におけるHPV遺伝子型を包括的にプロファイリングした。 (主要著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: Okayama K, Sasagawa T, Teruya K, Oda M, Fujii M, <u>Kimura H</u> , Okodo M.
13. One year into the pandemic: Short-term evolution of SARS-CoV-2 and emergence of new lineages. (パンデミックへの1年: SARS-CoV-2の短期進化と新系統の出現) (査読付)	共著	2021年8月	Infect Genet Evol Vol. 92 pp. 104869	新型コロナウイルスが出現して、1年後の進化的知見を総説化した。 (主要著者として論文執筆を行った) 共著者: González-Candelas F, Shaw MA, Phan T, Kulkarni-Kale U, Paraskevis D, Luciani F, <u>Kimura H</u> , Sironi M.
14. All-Trans Retinoic Acid Exhibits Antiviral Effect against SARS-CoV-2 by Inhibiting 3CLpro Activity. (オールトランス型レチノイン酸は、3CLpro活性を阻害することにより、SARS-CoV-2に対して抗ウイルス効果を示す) (査読付)	共著	2021年8月	Viruses Vol. 13, No. 8 pp. 1669	オールトランスレチノイン酸 (ATRA) によるSARS-CoV-2の3CLpro活性の阻害に関する研究を行った。(主要著者として論文執筆を行った) 共著者: Morita T, Miyakawa K, Jeremiah SS, Yamaoka Y, Sada M, Kuniyoshi T, Yang J, <u>Kimura H</u> , Ryo A.
15. Transmission of extended-spectrum cephalosporin-resistant Salmonella harboring a bla _{CMY-2} -carrying IncA/C ₂ plasmid chromosomally integrated by ISEcp1 or IS26 in layer breeding chains in Japan (ISEcp1またはIS26によって染色体統合されたbla _{CMY-2} 担持IncA/C ₂ プラスミドを保有する拡張スペクトルセファロスポリン耐性Salmonellaの日本のレイヤー飼育チェーンにおける伝播) (査読付)	共著	2021年9月	J Vet Med Sci Vol. 83, No. 9 pp. 1345-1355	拡張型セファロスポリン耐性サルモネラ菌に関与するプラスミドの網羅解析に関する研究を行った。(主要著者として論文執筆を行った) 共著者: Shigemura H, Maeda T, Nakayama S, Ohishi A, Carle Y, Ookuma E, Etoh Y, Hirai S, Matsui M, <u>Kimura H</u> , Sekizuka T, Kuroda M, Sera N, Inoshima Y, Murakami K.
16. 新型コロナウイルス感染症の疫学とSARS-CoV-2 Sタンパクの分子進化に関する最新知見. (査読付)	共著	2021年9月	感染制御と予防衛生 Vol. 5, No. 1 pp. 5-9	新型コロナウイルス感染症の疫学とSARS-CoV-2 Sタンパクの分子進化に関する最新知見を概説した。(責任著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: 岡山香里, 佐田充, 来栖広夢, 砂川爽代香, 林由里子, 藤本友香, 藤田清貴, 木村博一.
17. 新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) の分子疫学・分子進化に関する最新知見. (査読付)	共著	2021年4月	感染制御と予防衛生 Vol. 5, No. 2 pp. 4-7	新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) の分子疫学・分子進化に関する最新知見を概説した。(責任著者として論文を執筆した) 共著者: 木村博一, 岡山香里, 佐田充, 赤川真緒, 林由里子, 藤本友香, 白井達也, 原田和彦, 藤田清貴.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
18. Detailed Evolutionary Analyses of the F Gene in the Respiratory Syncytial Virus Subgroup A. (呼吸器合胞体ウイルスサブグループAのF遺伝子の詳細な進化的分析) (査読付)	共著	2021年12月	Viruses Vol. 13, No. 12 pp. 2525	RSウイルスサブグループA (RSV-A) の膜融合 (F) 遺伝子の進化・系統力学ならびに詳細な分子進化学的研究を行った。(責任著者として研究企画・論文執筆を行った) 共著者: Saito M, Tsukagoshi H, Sada M, Sunagawa S, Shirai T, Okayama K, Sugai T, Tsugawa T, Hayashi Y, Ryo A, Takeda M, Kawashima H, Saruki N, <u>Kimura H</u> .
19. Development of highly sensitive and rapid antigen detection assay for diagnosis of COVID-19 utilizing optical waveguide immunosensor. (光学導波管免疫センサを用いたCOVID-19の診断のための高感度かつ迅速な抗原検出アッセイの開発) (査読付)	共著	2021年12月	J Mol Cell Biol Vol. 13, No. 10 pp. 763-766	新規バイオセンサー技術によるSARS-CoV-2抗原測定法開発に関する研究を行った。(主要著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: Funabashi R, Miyakawa K, Yamaoka Y, Yoshimura S, Yamane S, Jeremiah SS, Shimizu K, Ozawa H, Kawakami C, Usuku S, Tanaka N, Yamazaki E, <u>Kimura H</u> , Hasegawa H, Ryo A.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 検査技術学科 氏名

長田 誠

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
1. 染色法のすべて	共著	2021年3月	医歯薬出版	水口 國雄 編集代表. 全446頁, 担当: 酵素抗体染色 (ウエスタンブロッティング法) (428頁～432頁). ウエスタンブロッティングの原理と実施するための試薬や手技をわかりやすく解説した.

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. Phos-tag diagonal electrophoresis precisely detects the mobility change of phosphoproteins in Phos-tag SDS-PAGE. (フォスタグ対角線電気泳動は、フォスタグSDS-PAGEにおけるリン蛋白質の移動度変化を正確に検出する) (査読付)	共著	2021年5月	J Proteomics. 2021 Jan 16;231:104005.	SDS-PAGEおよびフォスタグSDS-PAGEパターンが単一のゲル上に提供されるフォスタグ対角電気泳動を用いてヒトと酵母の26Sプロテオソームのサブユニットを解析したところ全てのサブユニットがリン酸化されていた。フォスタグ対角電気泳動はタンパク質のリン酸化状態を同定するのに有用な方法である。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) Okawara Y, Hirano H, Kimura A, Sato N, Hayashi Y, <u>Osada M</u> , Kawakami T, Ootake N, Kinoshita E, Fujita K
2. 「COVID-19のPCR検査について」アンケート調査結果 (査読付)	共著	2021年5月	日本染色体遺伝子検査学会雑誌. 39(1) : 67-79.	COVID-19について、全国のPCR検査の実態を調査するため、検査機器・試薬や検査に関わる人材等の環境についてアンケート集計した。 園山 政行, 大星 航, 藤巻 慎一, 柿島 裕樹, 南木 融, 佐藤 悦子, 郡司 昌治, <u>長田 誠</u> , 若井 進, 藤澤 真一, 奥山 虎之
3. 染色体遺伝子検査の品質保証のための指針 (解説)	共著	2021年6月	日本染色体遺伝子検査学会雑誌 39 (1), 80-123	遺伝子検査の倫理原則, 遺伝子検査の安全管理, 遺伝子検査の教育活動について最新情報を加え解説した。 石黒晶子, 上野 一郎, 奥山虎之, 大星航, <u>長田誠</u> , 柿島裕樹, 郡司昌治, 佐藤悦子, 佐藤謙一, 柴田典子, 鈴木翔太, 園山政行, 高橋裕之, 南木融, 福塚勝弘, 藤澤真一, 藤巻慎一, 吉田繁, 若井進

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. 新型コロナウイルス感染症の最新知見.	-	2021年3月	日本循環器学会	コメディカルの教育講演にて，新型コロナウイルス感染症の最新知見を講演した．木村 博一，林 由里子，岡山 香里，長田 誠，梁 明秀，藤田 清貴
2. Phos-tag対角線電気泳動を用いた血清中リン酸化タンパク質の解析法の検討	-	2021年7月	電気泳動学会	大川原 佑季，木村 鮎子，林 由里子，平野 久，長田 誠.
3. 生活習慣が血清中サイトカイン濃度(IL-4、IL-6)に及ぼす影響	-	2021年8月	・メディカル形態機能学	藤本 友香，浅見 知市郎，林 由里子，岡山 香里，長田 誠，亀子 光明，古田島 伸雄，小河原 はつ江

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 検査技術学科 氏名 亀子 光明

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
臨床検査データブック LABO DATA 2021-2022	共著	2021年1月	医学書院	全1059頁，高久文麿 監修．担当：検査各論 生化学検査（106頁～108頁）．この章でア ミノ酸分析2種類（チロシン，フェニルア ラニン）の測定法，基準値，疾患との関連 性について解説した．
新版 臨床化学 第3版	共著	2021/8月	講談社	全307頁，片山善三・柏森裕三・長村洋一（編） 担当：Chapter 3（3.3.1；50頁～52頁，3.3.2； 52頁～54頁）．3.3.1では，免疫学的測定法の免 疫化学分析法の特徴について，3.3.2では，免疫 比濁法，免疫比濁法について解説した．

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
中国臨床研究所実践博覧会 (CACLP)	筆頭	2021/3/29	Zoomによる招待講演（中 国上海～東京）	日本における，免疫血清反応検査の歴史につい て，古典的な手法から現代における機械化によ る自動化学分析法への変遷を解説した．

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 検査技術学科 氏名 小河原 はつ江

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
最新臨床検査学講座 血液検査学第2版第1刷	共著	2021年3月	医歯薬出版	全313頁，分担執筆：奈良信雄，小山高敏，東 克巳，近藤 弘，三村邦裕，小河原はつ江，西岡淳二著，担当：第8章 I（159頁～167頁），V（200頁～205頁），第8章では I 血小板機能検査と V 凝固・線溶系の分子マーカーについて解説した。本書は2021年に臨床検査技師国家試験出題基準の改訂にあわせて第2版として改訂することとし、「最新臨床検査学講座血液検査学第2版」として刊行された。小河原の分担した第8章 I では血小板凝集能検査について最近の凝集メーターに合わせた凝集曲線のパターンに変更し、血小板関連IgG（PAI g G）を新たに追加した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 生活習慣が血清中サイトカイン濃度（IL-4，IL-6）に及ぼす影響	-	2021年9月	第19回コ・メディカル形態機能学会学術集会・総会（WEB開催）	IL-4やIL-6は免疫細胞に影響を与えるサイトカインである。同意の得られた健常者36名（27～87歳）を対象として血清中IL-4およびIL-6濃度について検討した。その結果、血清中IL-6濃度は生活習慣との関連はなかったが、血清中IL-4濃度は休養の項目と負の相関が認められ、休養が不足すると液性免疫系に影響する可能性が示唆された。 藤本友香、浅見知市郎、林由里子、岡山香里、長田誠、亀子光明、古田島伸雄、小河原はつ江

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 血清中サイトカイン(IL-4とIL-6)濃度と生活習慣の関連について	-	2021年11月	第28回日本未病学会学術総会 (大阪)	IL-4やIL-6は様々な生理作用を有するサイトカインである。我々は同意の得られた健常者35名(27~87歳)を対象として血清中IL-4およびIL-6濃度について検討した。その結果、血清中IL-4濃度において、運動習慣のある群の中央値は運動習慣がない群に比して有意に低下していた。激しい運動直後は血清中IL-4濃度やIL-6濃度が増加するとの報告があるが、適度な運動習慣はIL-4濃度を低下させ、アレルギーのリスクを低減する可能性があると考えられた。 藤本友香、浅見知市郎、柳川益美、時田佳治、古田島伸雄、林由里子、小河原はつ江、村上正巳
3. 新型コロナウイルスワクチンが免疫細胞に及ぼす影響	-	2021年11月	第28回日本未病学会学術総会 (大阪)	シンポジウム2「若手が議論！ポストコロナ時代の未病対策」において、新型コロナウイルスワクチンを受け、書面による同意が得られた86名(年齢21.7±5.7歳、男女比15/71名)について、キラーT細胞(CD3+CD8+CD28+細胞)比率や未熟NK細胞(CD3-CD56brightCD16-)比率および成熟NK細胞(CD3-CD56dimCD16-)比率の接種前後の変化を検討し、その結果を報告し、話題提供した。 藤本友香、木村博一、小河原はつ江
4. 胸腺刺激が及ぼすT細胞免疫応答への影響	-	2021年11月	第28回日本未病学会学術総会 (大阪)	T細胞の分化・成熟を誘導する臓器である胸腺を刺激する「ノック式胸腺刺激法」(開発者福生吉裕氏)が及ぼす末梢血ヘルパーT細胞(CD4+細胞)や細胞傷害性T細胞(CD8+T細胞)の細胞動態を中心に検討した。同意の得られた健常者17名に対してノック式胸腺刺激を毎日実施してもらったところ、胸腺刺激の実施回数に応じてCD8+T細胞と比較し、CD4+T細胞において増加傾向が認められた。さらにがん細胞や感染細胞の認識に関わる活性化レセプターであるNKG2D(CD314)の発現にも注目し、NKG+CD4+細胞あるいはNKG+CD8+細胞、制御性T細胞の変動についても検討し報告した。 佐藤拓朗、白土佳子、大原史帆、島崎真菜、矢作友花、小河原はつ江、福生吉裕
5. 胸腺刺激法が及ぼすNKT細胞への影響	-	2021年11月	第28回日本未病学会学術総会 (大阪)	胸腺刺激が及ぼすNatural Killer T(NKT)細胞への影響を検討するため、CD3+CD56+NKT細胞と細胞障害性を有する活性化NKT細胞(CD8+CD69+CD56+細胞)、さらにTh1Th2タイプの免疫応答を制御するとされるヒトVa24インバリエントNKT細胞(iNKT)細胞について検討し報告した。その結果、胸腺刺激によりNKT細胞も増加する傾向が認められた。 島崎真菜、白土佳子、大原史帆、佐藤拓朗、矢作友花、小河原はつ江、福生吉裕
6. 胸腺刺激に伴うNK細胞による免疫応答への影響	-	2021年11月	第28回日本未病学会学術総会 (大阪)	胸腺刺激に伴う末梢血中NK細胞(CD3-CD16+CD56dim)や活性化NK細胞(CD8+CD69+/CD3-CD16+CD56dim)及びリンパ球中に存在するCD3+CD56+NKT細胞に発現するNKG2Dの変化について検討した。その結果、胸腺刺激3~9週間後のNK細胞や活性化NK細胞の割合は有意に増加し、これらのNK/NKT細胞上にNKG2Dの発現が認められた。 大原史帆、白土佳子、佐藤拓朗、島崎真菜、矢作友花、小河原はつ江、福生吉裕
7. 胸腺刺激に伴う抑制性免疫応答誘導に関する検討	-	2021年11月	第28回日本未病学会学術総会 (大阪)	胸腺刺激により過剰な免疫応答を抑制する制御性T(Treg)細胞について、胸腺由来の内在性Treg(nTreg)細胞とその免疫抑制機能に寄与するCTLA-4(CD152)の発現について検討した。その結果、CTLA4+nTreg細胞は胸腺刺激に伴い増加傾向を示した。さらに、末梢血中でサイトカインにより誘導される誘導性Treg(iTreg)細胞の動向も検討し報告した。 矢作友花、白土佳子、大原史帆、佐藤拓朗、島崎真菜、小河原はつ江、福生吉裕

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 検査技術学科

氏名

高橋 克典

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
臨床検査学講座 検査機器総論	共著	2021年1月	医歯薬出版	藤田清貴、高橋克典 他 担当：3章－E。臨床検査分野で使用する様々な分析機器の原理や最新の知見を紹介する教科書。免疫系の機器の部分を担当。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 検査技術学科 氏名

岡山香里

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. ポケットマスター臨床検査知識の整理 病理学/病理組織細胞学 第2版	共著	2021年3月	医歯薬出版, 170-281.	病理組織細胞学の固定、包埋、特殊染色法、免疫組織化学染色法について分担執筆した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. COVID-19のウイルス学的特徴	共著	2021年1月	内科, 127, 1, 11-15.	<p>2019年末、新型コロナウイルスは中国武漢市に出現し、その後世界中でパンデミックを引き起こし、各国に重大な健康被害を与えている。本稿では、現時点における新型コロナウイルス感染症のウイルス学的知見を中心に概説した。</p> <p>共著者：木村博一、岡山香里、藤本友香、林由里子（共著者としてデータの収集、解析を行った。）</p>
2. Relationships between Viral Load and the Clinical Course of COVID-19 (査読付き)	共著	2021年2月	Viruses, 13(2), 304	<p>COVID-19の臨床転帰を予測するために、疫学データ、ウイルス量、および疾患の重症度間の関係を調べた。各年齢の比較は、致命的な症例が生存した症例および無症候性の患者よりも高かったことを示した。特に、致命的な症例のウイルス量は、症候性または無症候性の症例よりも有意に高かった ($p < 0.05$)。これらの結果は、疾患の初期段階にある高齢患者におけるSARS-CoV-2の高いウイルス量が悪い結果をもたらすことを示唆した。</p> <p>共著者：Tsukagoshi H, Shinoda D, Saito M, Okayama K, Sada M, Kimura H, Saruki N. (共著者としてデータの収集、解析を行った。)</p>
3. Human papillomavirus infection status of single cells isolated from cervical cytology specimens by simple manual microdissection (査読付き)	共著	2021年2月	Journal of Medical Virology.	<p>この研究の目的は、simple manual microdissection (MMD) を検証し、パピニコロウ塗抹標本から分離された単一細胞のHPV感染状態を明らかにすることである。単一型感染の61例でパピニコロウ塗抹標本からの119のMMDサンプルを使用したHPV陽性率は81.5%であった。HPV重複感染を示した29例からの119のMMDサンプルのうち、HPV陽性率は42.9%であり、ほとんど(96.1%)のMMDサンプルは1つの遺伝子型のみを示した。本研究のMMD操作にて、細胞診標本から分離された単一細胞を使用したHPV遺伝子型の特異性が可能であった。また、HPV重複感染例から検出した単一の上皮内病変細胞の大部分は、1つの遺伝子型のみを含んでいた。</p> <p>共著者：Noji N, Okayama K, Oda M, Shimada A, Okodo M. (共著者としてデータの収集、解析を行った。)</p>

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
4. A longitudinal study on enteric virus contamination in bivalves along the coast of Ibaraki Prefecture, Japan Enteric virus contamination in bivalves (査読付き)	共著	2021年2月	Journal of Food Protection. 84(6), 946-952.	<p>2014年から2018年に、茨城県で収穫された天然の二枚貝の腸内ウイルスサーベイランスに関する縦断的調査を実施した。カキで検出されたNoVは、遺伝子型GII.4およびGII.6であり、これらは、ヒトに蔓延しているNoV株と遺伝的に密接に関連しています。この結果は、腸内ウイルスによる二枚貝の汚染が人間の下痢や病気の蔓延に依存している可能性を示唆した。</p> <p>共著者：Motoya T, Nagata N, Kashimura R, Ohashi K, Saito A, Osawa, Goto K, Iwama S, Yanaoka T, <u>Okayama K</u>, Hirai S, Sugai T, Murakami K, Ishioka T, Ryo A, Katayama K, Kimura H. (共著者としてデータの収集、解析を行った。)</p>
5. Google Classroomを用いたリモート国家試験対策の評価 (査読付き)	共著	2021年3月	日本臨床検査学教育学会誌. 13 (2) 69-74.	<p>Google Classroomを用いたリモート国家試験対策を実施し、アンケート調査にて自宅学習の効果を評価した。対策実施期間中は70%以上の学生が午前7時までに起床しており、規則正しい生活に変化していた。勉強時間に関しては、約半数の学生が本対策によって増えたと回答しており、教員のフィードバックは約90%の学生が役に立ったと回答していた。今後、高い国家試験合格率を維持するためには、WEBシステムによる勉強法を講義の確認試験や補講に活用し、対策を充実させることが重要であると考え。</p> <p>共著者：岡山香里、川田悠貴、宮野ゆかり、高橋蓮、古田島伸雄、木村博一、藤田清貴(筆頭者としてデータの収集、解析と論文執筆を行った。)</p>
6. 新型コロナウイルス感染症の疫学とSARS-CoV-2 Sタンパクの分子進化に関する研究 (査読付き)	共著	2021年4月	感染制御と予防. 5(1), 5-9.	<p>世界各地に拡散した新型コロナウイルスは、感染を重ねながら進化し続けている。ウイルスの主要抗原であり、ワクチンの標的にもなっているSタンパク質にも経時的な分子進化がみられている。本稿では新型コロナウイルス感染症の疫学・分子疫学とSタンパクの分子進化の知見について概説した。</p> <p>共著者：岡山香里、佐田充、来栖広夢、砂川爽代香、林由里子、藤本友香、藤田清貴、木村博一 (筆頭者としてデータの収集、解析と論文執筆を行った。)</p>
7. HPV Genotyping by Molecular Mapping of Tissue Samples in Vaginal Squamous Intraepithelial Neoplasia (VaIN) and Vaginal Squamous Cell Carcinoma (VaSCC) (査読付き)	共著	2021年6月	cancers, 13(13), 10.3390	<p>Vaginal Intraepithelial Neoplasia (VaIN)とCervical Intraepithelial Neoplasia (CIN)が独立して発生していること、組織材料のmicrodissectionにより、1つの病変に1つのHPVタイプが存在していることを明らかにした。本研究により、膣はあらゆる粘膜型HPVのリザーバーであると考えられた。</p> <p>共著者：Zhang S, Saito M, <u>Okayama K</u>, Okodo M, Kurose N, Sakamoto J and Sasagawa T. (共著者としてデータの収集と解析を行った。)</p>

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
8. Profiles of Human Papillomavirus Detection of the Multinucleated Cells in Cervical Smears (査読付き)	共著	2021年7月	Microorganisms, 9(8), 1575.	HPV遺伝子型と多核細胞との関係は正確に明らかになっていない。この研究では、microdissection法を使用して、多核細胞のHPV遺伝子型を包括的にプロファイリングした。その結果、多核細胞に関連している可能性のある特定のHPV遺伝子型として、HPV16、34、56が検出された。この結果は、HPV16や56などの高リスクHPV遺伝子型が、正常な子宮頸部細胞から多核細胞の変化に関連していることを示唆している。 共著者：Okayama K, Sasagawa T, Teruya K, Oda M, Fujii M, Kimura H, Okodo M. (筆頭者としてデータの収集、解析と論文執筆を行った。)
9. ハイブリッド形式の国家試験対策におけるリモート講義の評価 (査読付き)	共著	2021年9月	日本臨床検査学教育学会誌	対面講義とリモート講義を併用したハイブリッド形式の国家試験対策補講を実施し、アンケート調査にて講義の評価を行い、改善点を検討した。無記名アンケートの結果より、受講場所について「リモートのみ」の学生の多くは自宅であり81% (13/16) であった。また、以前と変わらず生活習慣が規則正しいと回答した学生は「リモートのみ」で81%であり、「リモートもしくは対面」では38%であった。リモート講義を実施する上で、教員側は講義資料を滞りなく配布することの再確認する必要性が示唆された。 共著者：岡山香里、川田悠貴、古田島伸雄、木村博一、藤田清貴(筆頭者としてデータの収集、解析と論文執筆を行った。)
10. 新型コロナウイルスの分子疫学・分子進化に関する最新知見 (査読付き)	共著	2021年12月	感染制御と予防. 5(2), 4-7.	SARS-CoV-2によって引き起こされる新型コロナウイルス感染症は進化を遂げ様々なバリエーションを引き起こしている。現在の分子疫学研究において、SARS-CoV-2は約20に分類されている。本報告ではワクチンの効果も含め、SARS-CoV-2の分子進化と分子疫学に関する新たな知見を述べた。 共著者：木村博一、岡山香里、赤川真緒、林由里子、藤本友香、白井達也、原田和彦、藤田清貴 (共著者としてデータの解析を行った。)
11. Detailed Evolutionary Analyses of the F Gene in the Respiratory Syncytial Virus Subgroup A (査読付き)	共著	2021年12月	Viruses, 13(12)	バイオインフォマティクス手法を用い、RSV-A F遺伝子の進化、系統力学、および再感染関連の抗原性分析を実行した。系統発生距離分析は、菌株の遺伝距離が比較的短いことを示唆した。Fタンパク質の3D構造マッピングおよび配座エピトープ分析は、配座エピトープがFタンパク質の中和抗体結合部位に対応していないことを示唆していた。これらの結果は、RSV-A F遺伝子が比較的保存されており、Fタンパク質の配座エピトープと中和抗体結合部位の間のミスマッチがウイルスの再感染の原因であることを示唆している。 共著者：Saito M, Tsukagoshi H, Sada M, Sunagawa S, Shirai T, Okayama K, Sugai T, Tsugawa T, Hayashi Y, Ryo A, Takeda M, Kawashima H, Saruki N and Kimura H. (共著者としてデータの解析を行った。)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. シンポジウム COVID-19の基礎知識	—	2021年3月	第85回日本循環器学会	COVID-19の最新知見について主に臨床症状や分子疫学、分子進化学を重点的に概説した。 木村博一，林由里子，岡山香里，長田誠，梁明秀，藤田清貴.
2. COVID-19感染症：SARS-CoV-2の分子疫学・分子進化	—	2021年5月	マイコプラズマ研究会	COVID-19について分子疫学、分子進化学を中心に概説した。 木村博一，岡山香里，林由里子，藤田清貴.
3. 特別講演 HPV First 検診導入によって細胞検査士に求められるスキルは何か.	—	2021年9月	第102回山口県臨床細胞学会学術講演会，山口	Primary HPV検診における細胞検査士の役割についてHPV感染細胞の見方を中心に概説した。 大河戸光章，岡山香里，笹川寿之
4. ワークショップ1 HPV genotypeに特異的なHPV感染細胞の同定とHPV Primary検診への応用	—	2021年10月	第30回日本婦人科がん検診学会総会・学術講演会	HPV遺伝子型に特異的な細胞所見について、ワークショップで概説した。 岡山香里，笹川寿之，大河戸光章.
5. HPV感染による形態学的変化に意味はあるか	—	2021年11月	第60回日本臨床細胞学会秋期大会，米子	HPV感染細胞を注視することによって、HPV感染状態や上皮内病変消退の予測が可能になることことをシンポジウムにて概説した。 大河戸光章，岡山香里，笹川寿之

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 検査技術学科 氏名 木村 鮎子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
17 Detailed Structure and Pathophysiological Roles of the IgA-Albumin Complex in Multiple Myeloma (多発性骨髄腫におけるIgA-アルブミン複合体の詳細構造と病態生理学的機能) (査読付)	共著	2021年2月	International Journal of Molecular Science, 10:22(4):1766.	多発性骨髄腫患者血清中のIgA-アルブミン複合体について、電気泳動・質量分析およびin silicoでの構造解析を行った。結果として、患者血清中IgAがJ鎖を介して二量体を形成し、これがさらにアルブミンと複合体を形成していること、結果としてIgAの半減期が延長されて血中IgAの増加と糖鎖修飾の増加が生じていることが分かり、このことが多発性骨髄腫と併発して起こる過粘着性症候群の要因の一つとなることも考えられた。 共著者：Kawata Y, Hirano H, Takahashi R, Miyano Y, <u>Kimura A</u> , Sato N, Morita Y, Kimura H, Fujita K.
18 Effects of microgravity exposure and fructo-oligosaccharide ingestion on the proteome of soleus and extensor digitorum longus muscles in developing mice (加重力およびフラクトオリゴ糖摂取が発育途中のマウスのヒラメ筋および長指伸筋のプロテオームに及ぼす影響) (査読付)	共著	2021年9月	NPJ Microgravity, 17:7(1):34.	フラクトオリゴ糖(FOS)などの難消化性炭水化物が骨格筋や酸化的代謝能の維持に関与することが知られていることから、微小重力下マウスにおけるFOS摂取の有無によるタンパク質発現パターン変化の解析を行った。結果として、FOS摂取により、微小重力環境下での酸化的代謝能の低下が緩和され、ヒラメ筋ではグルタチオンによる抗酸化作用が増加していることが分かった。これらの結果から、FOSが宇宙飛行中に生じるヒラメ筋における酸化的代謝能の低下や酸化ストレスを緩和する効果があることが分かった。(JAXAとの共同研究：【MHU-2】「きぼう」を利用した骨粗鬆症に係わる蛋白質の臨床プロテオーム研究の成果) 共著者：Ohira T, Ino Y, Kimura Y, Nakai Y, <u>Kimura A</u> , Kurata Y, Kagawa H, Kimura M, Egashira K, Matsuda C, Ohira Y, Furukawa S, Hirano H
19 Phosphorylation of Ser1452 on BRG1 inhibits the function of the SWI/SNF complex in chromatin activation (BRG1の1452番目のセリンにおけるリン酸化は、クロマチン活性化におけるSWI/SNF複合体の機能を阻害する) (査読付)	共著	2021年9月	Journal of Proteomics, 15:247:104319.	悪性度の高い癌細胞で顕著なリン酸化レベル低下が確認されている、SWI/SNFクロマチン再構成複合体のコア因子BRG1に存在する、ヒストン結合ドメインのN末端の1452番目のセリンにおけるリン酸化修飾の機能を解明するため、修飾部位に変異導入した細胞株を用いて、プロテオーム解析と表現型解析を行った。結果として、本修飾は、クロマチン不活性化に関わるリンカーヒストンやヒストンメチル化酵素など、種々のタンパク質の発現レベルやリン酸化レベルを低下させ、細胞遊走能や増殖能など、がんの悪性度と関連の深い表現型変化や薬剤耐性を引き起こすことが分かった。 共著者： <u>Kimura A</u> , Arakawa N, Kagawa H, Kimura Y, Hirano H.

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 検査技術学科 氏名

荒木泰行

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
次世代シーケンサーを用いた3前核由来胚盤胞の染色体解析	共著	2021年1月	日本IVF学会雑誌, 24(1), 4-9, 2021	ARTにおける3前核(3PN)胚の染色体を次世代シーケンサー(NGS)で調査したところ、三倍体胚は21.4%、三倍体を疑う胚は21.4%、二倍体を疑う胚は14.3%、判別困難胚は42.9%と推定できた。三倍体胚ではPNの大きさが均等かつ2PBを認めず、二倍体を疑う胚ではPNの大きさが不均等かつ2PBを認めた。NGSによる三倍体の判定が困難な時は、2PBの有無およびPNの大きさの均等性を評価項目に加えることで、3PN由来胚盤胞における倍数性評価の補助となる可能性が示された。兼子由美, 松井有紀, 土屋翔太郎, 板倉和也, 和田淳史, 尾崎智哉, 田村結城, 三東光夫, 荒木泰行, 荒木康久, 西村満

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
各種コニカルチューブ内のVOC濃度と精子運動性への影響	-	2021年11月11日(木)～12日(金)	第66回日本生殖医学会学術講演会・総会	5種類の15mL遠心チューブが各条件によって揮発性有機化合物(VOC)残存量に違いがあるか測定して検討した結果、チューブによってVOC濃度に違いを認めた。また、運動精子低下率、直線速度、曲線速度、直進性、頭部振幅、頭部振動数はチューブ間において有意差は認められなかったが、直線速度、曲線速度、直進性の平均VOC値が低いほど精子運動機能は良好な値を示した。藤村佳子, 中楯真朗, 神沢典子, 剣持智恵美, 加藤喜愛, 大村生和子, 荒木泰行, 志村隆行, 久保祐子, 佐藤 雄一
血中フェリチン値が体外受精および胚培養成績に与える影響についての検討	-	2021年11月11日(木)～12日(金)	第66回日本生殖医学会学術講演会・総会	血中フェリチン値12ng/mL未満, 12ng/mL以上かつ30ng/mL未満, 30ng/mL以上の3群に分け、採卵周期における卵採取率およびC-IVF およびICSI における培養成績について比較検討した結果、血中フェリチン値が低いとC-IVF において受精率が低い結果となった。また、血中フェリチン値が低いとC-IVF において多核率が高い結果となった。さらに、血中フェリチン値が高いとD2 良好胚率が低い結果となった。剣持智恵美, 藤村佳子, 神沢典子, 中楯真朗, 加藤 喜愛, 大村生和子, 荒木泰行, 志村隆行, 久保祐子, 佐藤 雄一

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 検査技術学科 氏名 林 由里子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 新型コロナウイルス感染症の疫学とSARS-Cov-2 Sタンパクの分子進化に関する最新知見 (査読付)	共著	2021年4月	感染制御と予防衛生 Vol. 5(1)	【概要】新型コロナウイルス感染症について、疫学的な観点から解説した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著：岡山香里, 佐田充, 来栖広夢, 砂川爽代香, 林由里子 , 藤本友香, 藤田清貴, 木村博一
2. COVID-19のウイルス学的特徴	共著	2021年9月	内科 Vol. 127(1)	【概要】新型コロナウイルス感染症について、疫学的な観点から解説した。 共著：木村博一, 岡山香里, 藤本友香, 林由里子
3. Protein tyrosine phosphatase Shp2 positively regulates cold stress-induced tyrosine phosphorylation of SIRP α in neurons (タンパク質チロシンホスファターゼShp2によるニューロンにおけるSIRP α の低温ストレス誘発性チロシンリン酸化の調節) (査読付)	共著	2021年9月	Biochem. Biophys. Res. Commun. 428:475-481, 2021 (IF=3.575)	【概要】in vitro, in vivo におけるSIRP α の低温ストレス誘発性チロシンリン酸化はサークファミリーキナーゼSFKsではなくタンパク質チロシンホスファターゼShp2によって積極的に調節されることを報告した。 (共著者として実験の遂行, データ解析を担当) 共著：Jingu D., Iino M., Kawasaki J., Urano E., Kusakari S., Hayashi Y. , Matozaki T., Ohnishi H.
4. Detailed Evolutionary Analyses of the F Gene in the Respiratory Syncytial Virus Subgroup A (RSウイルスサブグループAのF遺伝子の進化的分析) (査読付)	共著	2021年12月	Viruses 15:13(12):2525, 2021 (IF=4.911)	【概要】バイオインフォマティクス手法を用いてRSウイルスサブグループA (RSV-A) 融合 (F) 遺伝子の進化、系統力学、および再感染関連の抗原性を分析し、Fタンパク質の配座エピトープと中和抗体結合部位の間のミスマッチがウイルスの再感染の原因である可能性を報告した。 (共著者として実験の遂行, データ解析を担当) 共著：Saito M., Tsukagoshi H., Sada M., Sunagawa S., Shirai T., Okayama K., Sugai T., Tsugawa T., Hayashi Y. , Ryo A., Takeda M., Kawashima H., Saruki N and Kimura H.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. Phos-tag対角線電気泳動を用いた血清中リン酸化タンパク質の解析法の検討	—	2021年7月	日本電気泳動学会第72回総会	【概要】 SDS-PAGEとPhos-tagSDS-PAGEパターンが単一のゲル上に提供されるPhos-tag対角電気泳動により、塩基性7Sグロブリン、26Sプロテアソームサブユニットなどのさまざまなタンパク質のリン酸化状態を特定し、報告した。 共著：大川原佑季，木村鮎子， 林由里子 ，平野久，長田誠
2. ミクログリア特異的SIRP α 欠損マウスにおける加齢性運動学習能低下の改善	—	2021年9月	第64回神経化学学会大会	【概要】 脳機能の加齢に伴う低下に対するミクログリア特異的SIRP α 遺伝子ターゲットングの効果を検討し、SIRP α 欠損ミクログリアが加齢に伴う脳機能の低下を防ぐ可能性について報告した。 共著：Takeshi Imai, Asuka Tomiyama, Sayoko Matsushita, Rui Mizutani, Daisuke Yokota, Yuriko Hayashi , Takashi Matozak, Hiroshi Ohnishi
3. 加齢による運動学習能低下に耐性を示すミクログリア特異的遺伝子改変マウスの解析	—	2021年9月	第67回北関東医学会	【概要】 SIRP α 欠損ミクログリアの脳損傷への作用を検討することを目的に、ミクログリア特異的SIRP α 欠損マウスにおける加齢による脳機能低下への影響を報告した。 共著：富山飛鳥，今井武史，水谷瑠依，松下紗世子，横田大輔，森谷晃，森田紋子，浦野江里子，橋本美穂， 林由里子 ，大西 浩史
4. 生活習慣が血清中サイトカイン濃度（IL-4, IL-6）に及ぼす影響	—	2021年9月	コ・メディカ形態機能学会 第19回学術集会・総会	【概要】 生活習慣が血清中サイトカイン濃度（IL-4, IL-6）に及ぼす影響を報告した。 共著：藤本友香，浅見知市郎， 林由里子 ，岡山香里，長田誠，亀子光明，古田島伸雄，小河原はつ江
5. 血中サイトカイン濃度と生活習慣の関連について	—	2021年11月	第28回日本未病学会	【概要】 血中サイトカイン濃度と生活習慣の関連について検討し、報告した。 共著：藤本友香，浅見知市郎，柳川益美，時田佳治，古田島伸雄， 林由里子 ，小河原はつ江，村上正巳

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 検査技術学科 氏名 石垣 宏尚

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
15. Significance of serum branched-chain amino acid to tyrosine ratio measurement in athletes with high skeletal muscle mass (骨格筋量の多いアスリートにおける血清分枝鎖アミノ酸とチロシンの比率測定の重要性) (査読有)	共著	2021年1月	BMC Sports Sci Med Rehabil. 13(1), 1-8.	Tsunekawa K, Matsumoto R, Ushiki K, Martha L, Shoho Y, Yanagawa Y, <u>Ishigaki H</u> , Yoshida A, Araki O, Nakajima K, Kimura T, Murakami M. 若年日本人アスリートを対象にアルブミン、RTP、BTR、および甲状腺機能を評価した。その結果、骨格筋量の増加は、循環アミノ酸の不均衡を高め、甲状腺ホルモンによって促進された。血清BTRは、高レベルの骨格筋を持つアスリートの代謝亢進状態を評価するための有用なバイオマーカーである可能性が示唆された。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)
16. Konjac Glucomannan Attenuated Triglyceride Metabolism during Rice Gruel Tolerance Test (トレーランG試験においてコンニャクグルコマンナンはトリグリセライド代謝に関与する) (査読有)	共著	2021年5月	Nutrients 2021, 13(7), 1-10	Nagasawa T, Kimura T, Yoshida A, Tsunekawa K, Araki O, Ushiki K, <u>Ishigaki H</u> , Shoho Y, Suda I, Hiramoto S, Murakami M. 健常者を対象にこんにゃく粉入り粥の摂取を行い、OGTTにより血中成分の変化を測定した。その結果、血中の中性脂肪が低下する効果が認められ、さらに中性脂肪代謝の中心的な役割を担っているリポ蛋白リパーゼの血中濃度が上昇することが明らかとなった。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 検査技術学科 氏名 藤本 友香

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
新型コロナウイルスの分子疫学的・分子進化に関する最新知見 (査読あり)	共著	2021年12月	感染制御と予防衛生. Vol15 No.2 4-7	新型コロナウイルスのS蛋白抗原変異とワクチンの効果について解説をした。コンフォーメーションエピトープ配列中に複数の置換が確認されたが、 α 、 β 、 γ ならびに κ 株に対してはワクチン接種後に誘導された抗体が高い感染防御効果を果たすことが明らかになった。 (木村博一、岡山香里、佐田充、赤川真緒、林由里子、藤本友香、白井達也、原田和彦、藤田清貴) (共同研究につき抽出不可)
新型コロナウイルスのウイルス学的特徴 (査読あり)	共著	2021年1月	内科. 127(1), p11-15	新型コロナウイルスの概要(ウイルス学的、パンデミック様式)、疫学(分子疫学等)、構造について解説を行った。 (木村博一、岡山香里、藤本友香、林由里子) (共同研究につき、本人抽出不可能)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
生活習慣が血清中サイトカイン濃度（IL-4、IL-6）に及ぼす影響	—	2021年 9月	コ・メディカル形態機能学会 第 19 回学術集会・総会	IL-4 や IL-6 は免疫細胞に影響を与えるサイトカインである。本研究では、生活習慣が血清 中サイトカイン濃度（IL-4、IL-6）に及ぼす影響について検討した。同意の得られた健常者 36 名（27～87 歳）を対象として採血し、血清を分離した。生活習慣は「健康度・生活習慣診断検査（DIHAL. 2）」にて評価した。IL-6 は生活習慣との相関はなかったが、IL-4 は休養、睡眠の規則性及び、睡眠の充足度の項目で有意な負の相関が認められた。一方、ストレス回避では負の相関傾向があった。IL-4 は休養の項目と負の相関が認められたことから、休養が不足すると液性免疫系に影響する可能性が示唆された。 藤本友香、浅見知市郎、林由里子、岡山香里、長田誠、亀子光明、古田島伸雄、小河原はつ江 (共同研究につき本人抽出不可能)
シンポジウム 新型コロナウイルスワクチンが免疫細胞に及ぼす影響	—	2021年 11月	第28回日本未病学会学術総会	新型コロナウイルスワクチン接種1、2回目接種後に採血を行い、CD3、CD4、CD8細胞比率並びにNK細胞、キラーT細胞について検討を行い発表した。 藤本友香、木村博一、小河原はつ江 (共同研究につき抽出不能)
血清中サイトカイン（IL-4とIL-6）濃度と生活習慣の関連について	—	2021年 11月	第28回日本未病学会学術総会	スポーツクラブに所属する高齢者、学生を対象に生活習慣によってIL-4、IL-6濃度がどのような影響を受けているのか検討を行った。運動習慣のある群のIL-4濃度は運動習慣のない群のIL-4濃度に比して有意な低下が認められた。適切な運動習慣はIL-4濃度を低下させアレルギーのリスクを低減する可能性があると考えられた。 藤本友香、浅見知市郎、柳川益美、時田佳治、古田島伸雄、林由里子、小河原はつ江、村上正巳 (共同研究につき抽出不可能)

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 検査技術学科 氏名 三浦 佑介

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Serum 25-hydroxyvitamin D3 Levels and Diabetes in a Japanese Population: The DOSANCO Health Study (日本人の血清中25-ヒドロキシビタミンD3と糖尿病の関係性) (査読付)	共著	2021年9月	Journal of Epidemiology Online ahead of print	質量分析を用いて測定した日本人の血清中の25-ヒドロキシビタミンD3について、糖尿病との関係性を統計学的に解析した。抗糖尿病薬を服用していない35～79歳の480人の参加者を対象とした。25-ヒドロキシビタミンD3は空腹時の血糖値とインスリン値から算出されるHOMA-IR指数と逆相関を示した。ビタミンD3の不足が血糖値の恒常性を損ない、糖尿病を引き起こす可能性があることが示唆された。(実験の遂行を担当) 著者: Nakamura K, Hui SP, Ukawa S, Okada E, Nakagawa T, Imae A, Okabe H, Chen Z, Miura Y , Chiba H, Tamakoshi A.
2. Comparison of dimension reduction methods on fatty acids food source study (食品由来の脂肪酸における次元削減を用いた比較) (査読付)	共著	2021年9月	Scientific Reports 11 Article number: 18748	次元削減の手法である主成分分析、独立成分分析、因子分析、共通主成分分析について、血清脂肪酸の由来食品の分析に適する統計手法の検討を行った。35歳から79歳までの健康者545人について、血清をHPLCや質量分析で測定して得られた脂質中の脂肪酸比率と、アンケートによる食習慣について分析した。独立成分分析は動物性脂質由来の脂肪酸と内因性の脂肪酸を区別するのに適した分析方法であることが明らかとなった。(実験の遂行、執筆を担当) 著者: Chen Y, Miura Y , Sakurai T, Chen Z, Shrestha R, Kato S, Okada E, Ukawa S, Nakagawa T, Nakamura K, Tamakoshi A, Chiba H, Imai H, Minami H, Mizuta M, Hui SP

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. Application of independent component analysis on dietary sources of human serum fatty acids	-	2021年11月	第61回日本臨床化学会年次学術集会 福岡国際会議場 (福岡)	脂肪酸は疫学研究において食事と病気を関連付けるために利用されているが、分析に広く用いられる食物摂取頻度質問票は参加者の記憶によるため精度に課題がある。血清中の脂質画分を測定し、独立成分分析を実施することで、動物性脂質由来の脂肪酸と内因性の脂肪酸を区別できることが明らかとなった。 ○Yifan Chen, Yusuke Miura , Toshihiro Sakurai, Zhen Chen, Rojeet Shrestha, Emiko Okada, Shigekazu Ukawa, Takafumi Nakagawa, Akiko Tamakoshi, Hitoshi Chiba, Hideyuki Imai, Hiroyuki Minami, Masahiro Mizuta, Shu-Ping Hui

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科 氏名 星野修平

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
診療放射線技師教育における臨床実習の実施状況に関する調査	共著	2021. 4	日本診療放射線技師会誌 Vol. 68 No822 33-40	本研究では、全国診療放射線技師陽性施設（学士課程）及び臨床実習施設を対象とし、臨床実習の内容と実態について質問紙を用いて実施した。回答率は、養成機関45.7%、実習機関41.8%で、現在の臨床実習は、見学型が多い実態がわかった。近年、参加観察型実習が望まれる中、設備、教員の人員配置、業務量の調整などの実習環境の整備が求められた。 本人担当部分：共同研究のため抽出不可 徳重佑美子、 <u>星野修平</u> 、
画像診断報告書未読問題における危険因子の検討	共著	2021. 7	医療の質・安全学会誌 Vol. 16 No. 3 343-350	大学病院の1年間に発行された画像診断報告書を後ろむきに調査し、報告書未読の危険因子を明らかにし、その対策に生かすことを目的とした。結果として、作成までの時間の中央値は2時間41分であり、54.0%が3時間以内であった。参照までの時間は中央値1日で、未読率は12.8%であったが、中央値は0-3日、未読率は2.0-61.9%と、診療科間で大きな差があった。報告書総数とは関連がなかった。 本人担当部分：共同研究のため抽出不可 島崎綾子、平澤裕美、対馬義人、 <u>星野修平</u> 、田城孝雄

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Google Appsを利用した国家試験対策システムの開発	-	2021年9月	第15回日本診療放射線学教育学会総会	国家試験合格率を上げるため国家試験対策講座システムを構築し、その運用上の課題を明らかにする。対策講座システムはデイリーテストと夏季集中講座からなる。デイリーテストでは2層式（○×）の10 - 30問（教科により変わる）とし、毎朝、6:30 - 9:00まで解答を行う。夏季集中講座は午前中に講義、午後5時に5択20問の確認テストを全問正解するまで行うことにした。システム開発では補講コンテンツの有無により教員の負担がおおきく異なり、教員の経験、力量の差により感じ方が変わっていた。 本人担当部分：共同執筆のため抽出不可 共同研究者：齋藤祐樹、今尾仁、徳重佑美子、谷口杏奈、倉石政彦、 <u>星野修平</u>

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科 氏名 倉石 政彦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
〈口述発表〉 Google Appsを利用した国家試験対策システムの開発	共同	2021年9月18日	第15回 日本診療放射線学教育学会 学術集会	1991年の大綱化により各大学で特色あるカリキュラムが展開されている一方、診療放射線技師など医療系の大学では、国家試験合格は、入学者の大きな目標であり、教育機関に対応が求められる。本学は、2017年に開学し最初の卒業生を送り出したが、国家試験合格率は全校平均を大きく下回ったことから、国家試験対策を充実させることが急務となった。対策として本学が開発したプログラムを紹介し、その運用から考察したことを報告した。 本人担当部分：共同研究のため担当部分抽出不可能 共同発表者：齋藤祐樹，今尾仁，徳重佑美子，谷口杏奈，倉石政彦，星野修平

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科 氏名 渡邊 浩

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
16 令和2年度医療機関における放射線業務従事者に対する放射線管理に関する調査研究	共著	2021年3月31日	令和2年度労災疾病臨床研究事業費補助金：医療分野の放射線業務における被ばくの実態と被ばく低減に関する調査研究「医療機関における放射線業務従事者に対する放射線管理に関する調査研究」分担研究報告書	2020年4月1日、職業被ばくの線量限度の一つである水晶体の等価線量限度を国際放射線防護委員会（ICRP）の勧告に基づいて改正した。従来の等価線量限度よりも約1/7も低くなり、医療従事者、特にIVRを実施する医師の線量を大幅に低減する必要がある。そこで、医療分野の放射線業務における被ばくの実態と被ばく低減に関する調査研究の分担研究として「医療機関における放射線業務従事者に対する放射線管理に関する調査研究」を2019年度に実施した結果をまとめた報告書である。令和2年度は全国の放射線管理状況について調査した結果を中心に報告した。医療従事者の職業被ばく低減に寄与することが期待されている。（渡邊浩、坂本 肇、山本和幸）（共同執筆のため担当部分抽出不可能）

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
29 医療被ばくの適正管理に関する医療法施行規則改正の理解度と施行日までの達成可能性（査読付）	共著	2021年1月	日本診療放射線技師会雑誌 2021；68（819）：30-37	2019年4月1日、医療法施行規則を改正し医療被ばくの規制について適正に管理することを義務付けた。特に、CT、核医学診療、循環器用X線透視装置については医療被ばく線量の管理と記録を義務付けた。しかし、今回の法改正は放射線部門に限定されず、診療科医を含めた医療機関全体を網羅する大幅なものであった。そのため、法改正の内容の理解度と施行日までの達成可能性を全国の医療機関を対象に調査した。その結果、理解度が十分ではなく、施行日までに達成できない可能性が高いことを明らかにした。本論文によって、改正法の施行の監査は段階的に行う必要があることを示した。（渡邊 浩、目黒靖浩、北山早苗、矢部智、佐々木健、長谷川健、福住徹、川崎英生、佐藤洋一、荒井一正。）（共同執筆のため担当部分抽出不可能）
核医学検査室への入退出における患者のスリッパ履き替えの現況に関する調査報告	共著	2021年12月	核医学技術 2021；41：442-447	非密封放射性同位元素を取り扱う核医学検査室においては、管理区域内の放射能汚染を拡大させないために、管理区域内外の履物を取り換えることが慣例的に行われてきた。しかし、患者の高齢化に伴って管理区域内に立ち入る際に、スリッパに履き替えることによって患者の転倒事故が生じることが報告された。そのため、関係学会よりガイドラインが発出され、患者の安全が優先されることになった。しかし、ガイドライン公開後の状況は明らかになっていなかった。そこで、群馬県、埼玉県ならびに栃木県の核医学検査を実施する医療機関を対象に調査を行った。その結果、ガイドラインを知らない医療機関が存在することと患者の安全のための方策を実施していることが分かった。本論文によって、核医学検査の安全管理の向上が期待される。（渡邊浩、伊波大輝、小池優介、照井諒真、内林由香）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
121 Japan DRL s 2020改訂—CTについて	共著	2021年1月	かながわ放射線だより 73(5);4-8:2021	医療被ばくの防護の最適化のために国際放射線防護委員会 (ICRP) や国際原子力機関 (IAEA) は診断参考レベルの策定を推奨している。わが国では医療放射線に関わる関係学会等が組織する医療被ばく情報研究ネットワーク (J-RIME) が2015年にわが国で最初の診断レベルを策定した。その後5年が経過し、J-RIMEが診断参考レベルを改訂した。そこで、放射線診療の主要モダリティの一つであるCTについてその概要を解説した。特に、医療被ばくの主因はCTであるため、この概要を医療機関が理解することは重要である。本解説によって医療被ばくの適正管理が進展することが期待される。(小川泰良、渡邊 浩、稲垣直之、新田正浩、前原善昭)
122 核医学診療における放射線管理	単著	2021年1月	核医学技術 2021 ; 41(1) : 109-112	核医学診療は非密封放射性同位元素を取り扱う医療技術である。そのため、気体や液体の放射性同位元素による空気や水が汚染し、それを人体に取り込むと内部被ばくの原因となる。そのため、様々な放射線管理が求められている。そこで、現在の核医学診療に必要な放射線管理について具体例を示しながら執筆した。
123 研究計画方法	—	2021年1月	神奈川放射線技師会主催 研究・発表・論文支援セミナー 2ndシーズン (3回目/全6回) (Web開催) 2021年1月14日 (木)	医療機関に勤務する診療放射線技師ならびに診療放射線技師養成機関の学生に対して放射線診療の課題を改善するための研究テーマの見つけ方について概説した。(講演 渡邊 浩)
124 Japan DRL s 2020改訂—血管造影・IVR領域—	共著	2021年3月	かながわ放射線だより 73(6);5-8:2021	医療被ばくの防護の最適化のために国際放射線防護委員会 (ICRP) や国際原子力機関 (IAEA) は診断参考レベルの策定を推奨している。わが国では医療放射線に関わる関係学会等が組織する医療被ばく情報研究ネットワーク (J-RIME) が2015年にわが国で最初の診断レベルを策定した。その後5年が経過し、J-RIMEが診断参考レベルを改訂した。そこで、放射線診療の主要モダリティの一つである血管造影・IVRについてその概要を解説した。特に、X線透視を伴う検査は患者だけでなく医療従事者の被ばくにも影響するため、この概要を医療機関が理解することは重要である。本解説によって医療被ばくの適正管理が進展することが期待される。(岩崎真之、山本和幸、渡邊 浩、前原善昭、坂野智一、芹田 樹、田島隆人)
125 データのまとめ方	—	2021年3月	神奈川放射線技師会主催 研究・発表・論文支援セミナー 2ndシーズン (4回目/全6回) (Web開催) 2021年1月14日 (木)	医療機関に勤務する診療放射線技師ならびに診療放射線技師養成機関の学生に対して放射線診療の課題を改善するための研究結果のデータのまとめ方について概説した。(講演 渡邊 浩)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
126 Japan DRLs 2020改訂—診断透視について	共著	2021年5月	かながわ放射線だより 74(1);5-8:2021	医療被ばくの防護の最適化のために国際放射線防護委員会 (ICRP) や国際原子力機関 (IAEA) は診断参考レベルの策定を推奨している。わが国では医療放射線に関わる関係学会等が組織する医療被ばく情報研究ネットワーク (J-RIME) が2015年にわが国で最初の診断レベルを策定した。その後5年が経過し、J-RIMEが診断参考レベルを改訂した。そこで、放射線診療の主要モダリティの一つである胃透視を含む診断透視についてその概要を解説した。X線透視を伴う検査は全国に普及し一般的に行われているため、この概要を医療機関が理解することは重要である。本解説によって医療被ばくの適正管理が進展することが期待される。(佐川知宏、渡邊 浩、稲垣直之、関 将志、山本和幸)
127 これまでの総括&論文投稿ルール	—	2021年5月	神奈川県放射線技師会主催 研究・発表・論文支援セミナー 2ndシーズン (5回目/全6回) (Web開催) 2021年1月14日 (木)	医療機関に勤務する診療放射線技師ならびに診療放射線技師養成機関の学生に対して放射線診療の課題を改善するための研究について、このシリーズの総括的内容と論文投稿ルールについて概説した。(講演 渡邊 浩)
128 歯科領域のX線撮影	共著	2021年7月	かながわ放射線だより 74(2);5-8:2021	医療被ばくの防護の最適化のために国際放射線防護委員会 (ICRP) や国際原子力機関 (IAEA) は診断参考レベルの策定を推奨している。わが国では医療放射線に関わる関係学会等が組織する医療被ばく情報研究ネットワーク (J-RIME) が2015年にわが国で最初の診断レベルを策定した。その後5年が経過し、J-RIMEが診断参考レベルを改訂した。そこで、放射線診療の主要モダリティの一つである歯科領域についてその概要を解説した。歯科領域は医療被ばくの管理が進んでいないため、この概要を医療機関が理解することは重要である。本解説によって医療被ばくの適正管理が進展することが期待される。(宇田川孝昭、渡邊 浩、新田正浩、関 将志、小川泰良)
129 核医学における被ばく管理について	—	2021年9月	第9回 秋田県核医学技術研修会 (Web開催)	放射線診療の主要なモダリティの一つとして世界的に普及している核医学検査の実施に伴う、患者の被ばくである医療被ばくと従事する医療従事者の被ばくである職業被ばくの管理方法を講演した。被ばく管理は世界的な課題になっており、その方策の理解度を高めて普及させることは社会的な意義がある。(講演 渡邊 浩)
130 改正法に基づく現場対応—医療被ばくと職業被ばく	—	7月中旬~9月末	公益社団法人 全国自治体病院協議会 2021年度放射線部会オンラインセミナー (動画配信)	放射線診療は患者の被ばくである医療被ばくと従事する医療従事者の被ばくである職業被ばくの両方が伴う。この被ばく管理は世界的な課題であり、医療被ばくについては国際機関 (ICRP) が診断参考レベルの策定を推奨している。そして、わが国では診断参考レベルに基づく医療被ばくの適正管理が法的義務になった。また、職業被ばくについては、法令で線量限度の改訂を行って低減を求めている。そこで、医療機関において改正法に基づいて医療被ばくと職業被ばくの管理方法を講演した。この講演は、全国の地方公共団体が経営するすべての医療機関に動画配信された。被ばく管理は世界的な課題になっており、その方策の理解度を高めて普及させることは社会的な意義がある。(講演 渡邊 浩)

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科 氏名 酒井健一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 放射線学科

氏名

加藤英樹

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
Analysing COVID-19 Infection Clusters Formed when Dining Together using a Time - Workflow Chart (Is this Infection Prevention Method Effective for Omicron-Type Corona ? COVID-19感染クラスターを時間軸で分析 (オミクロン型コロナにこの感染予防法は有効か?))	共著	2021年12月	Journal of Patient Care. Vol. 7 Iss. 6 No. 177	Hitoshi Tsuchiya, Taniguchi Anna, <u>Hideki Kato</u> , Tsugunori IWAI, Hiroki Saito, Masayuki Koike. オミクロン株タイムのCOVID-19の感染予防及び具体的な方策について、時間軸フローチャートを用いて、関連する項目を検討した。

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
シンポジウム 海外から見たJSRT:Japanese Society of Radiological Technology (海外から見た日本放射線技術学会)	単著	2021年4月	日本放射線技術学会第77回総合学術大会予稿集 pp. 99-99	シンポジウム シンポジスト、 <u>加藤英樹</u> シンポジウムテーマを「世界の放射線技術学と多様性」として、多様な学術研究のあり方、海外の研究者が何を期待しているかについて、東アジア、東南アジア、ヨーロッパの学術交流のある研究者らに聞き取りをして、日本の学術研究にどのような期待があるのかを示した。
群馬パース大学 保健科学部 放射線学科の紹介	単著	2021年4月	画像通信. Vol. 44, No. 1, (通巻86号) Pp72-74	<u>加藤 英樹</u> 日本放射線技術学会 画像部会雑誌において、新規に卒業生が輩出するタイミングで、群馬パース大学 保健科学部 放射線学科の紹介や取り組みについて、会員向け報告として執筆した。

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科 氏名 小池正行

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Analyzing COVID-19 infection clusters formed when dining together using a time-Workflow Chart	共著	Vol.7 Iss.6 No:177.2021	Journal of Patient Care	In this study, a large number of restaurant-derived infected clusters have occurred. Therefore, using the timework flowchart, we analyzed the COVID-19 infected cluster and proposed countermeasures. The misconception that individuals dining together are not infected with COVID-19 should be corrected. Hitoshi Tsuchiya, Taniguchi Anna, Hideki Kato, Tsugunori Iwai, Hiroki Saito, <u>Masayuki Koike</u>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 放射線学科 氏名 岩井 譜憲

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Analysing COVID-19 Infection Clusters Formed when Dining Together using a Time-Workflow Chart (Is this Infection Prevention Method Effective for Omicron-Type Corona?)	共著	2021年12月	Journal of Patient Care	<p>概要： COVID-19は、グローバルに重大な損害を与えた。基本的な経済活動を続けている間、数カ国はCOVID-19の広がりを遅くするために短期監禁を実行した；予防接種も進行中だった、しかし、予防接種の重要な影響はまだ見られていない。実際は、感染症は遅いペースで増加し続けている。</p> <p>営業時間に対する規則が実施されているが、まだレストラン等からのクラスターも発生している。そのような感染症集団の特定の原因を分析をおこなった。グループで食事をすると感染しないという保証がない。そのためマスクをつけなければならない。その上、マスクの効力は、種類によって変化するため効果的であるマスクが使われなければならない。</p> <p>共著者:Hitoshi Tsuchiya*, Taniguchi Anna, Hideki Kato, Tsugunori IWAL, Hiroki Saito, Masayuki Koike 本人担当部分:共同研究につき抽出不能</p>
放射線治療室における情報システムの一元化	共著	2022年1月	群馬パース大学紀要	<p>概要： 放射線治療室では2種類の情報システムが併用されていることが多く、操作やその習熟が煩雑となっている。放射線治療室の情報システムを一元化することで、操作の習熟が容易となり、データの一元管理も可能となり業務効率が改善された。</p> <p>共著者:岩井譜憲、秋山真之、加藤京一 本人担当部分:論文全般</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Webアプリケーションを使用したオンライン試験問題作成支援システムの構築	単独	2021/11/12	第37回日本診療放射線技師学術大会	<p>概要： Googleが提供するGoogleFormsはWebアプリケーションで無料で使用することができ、選択式のテスト問題を作成することが可能である。</p> <p>しかし、GoogleFormsで問題数の多いテストを作成するのはは煩雑であり、また過去問題をランダムに抽出することも煩雑である。</p> <p>そこでGoogleFormsで 過去問題を使用したオンライン試験問題の作成支援システムを構築した。</p> <p>発表者:岩井譜憲 本人担当部分:全般</p>

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 放射線学科 氏名 齋藤祐樹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
4 医用電気機器—第2-54部：撮影・透視用X線装置の基礎安全及び基本性能に関する個別要求事項 Z 4751-2-54:2021	共著	2021年5月	日本規格協会	IEC 60601-2-54 Amd. 2 Ed. 1.0:2018を基とした日本の産業規格としてJIS Z 4751:2021医用電気機器—第2-54部：撮影・透視用X線装置の基礎安全及び基本性能に関する個別要求事項についてJIS原案を検討し、作成した。この規格は診断用X線装置の基本的な安全規格になる。今回の改正によりより被ばく線量低減技術が取り込まれている。これらの動向を踏まえ定義および各種特性について記述した。 本人担当部分：付属書AAおよびJAAを含め、全域に渡り一で検討・作成したため抽出不可。 共著者：齋藤祐樹，宮崎茂，見本真一，他

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
12 乳房用X線装置の品質管理システムの開発 (査読付)	共著	2021年4月	日本乳癌検診学会誌 Vol. 30 No. 1	乳房用に簡易形線量計を開発し、臨床施設へ配布し、地域連携形品質管理連絡会を發足させ運用を開始している。これに合わせ品質管理データを収集する品質管理プログラムを開発した。提案するシステムはインターネット環境で動作するWebアプリケーションにより開発を行った。品質管理項目は6か月ごとに行う不変性試験（再現性、管電圧特性、管電流時間積特性、半価層測定）と、始業時に行う日常管理とした。使用者が、簡便に乳房用X線装置の品質管理を行えるため、臨床施設への普及を目指したい。 P. 113-119 本人担当部分：共同執筆のため抽出不可 共著者：齋藤 祐樹，小倉 泉，根岸 徹
13 Characterization of anti-scatter grids via a modulation transfer function improvement factor using an edge device (エッジ法によるMTF改善係数の散乱線除去用グリッドの特性) (査読付)	共著	2021年5月	Biomed. Phys. Eng. Express 7 045001	撮影条件の最適化において、散乱線による画質の変化は重要な評価対象である。本研究では、デジタルX線撮影において散乱線防止格子を用いて得られる画質改善特性の評価に着目し、新たな評価指標として周波数依存の変調伝達関数 (MTF) 改善係数 $MI_{F,G}(u)$ を提案した。その結果、 $MI_{F,G}(u)$ はグリッドの種類と散乱条件によって変化することを明らかにした。 P. 1-10 本人担当部分：共同執筆のため抽出不可 共著者：Sho Maruyama, Hiroki Saito, Masayuki Shimosegawa

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
14 Proposal of physique indices for paediatric imaging examination protocols of diagnostic X-ray equipment (診断用X線装置における小児画像検査の体格指標の提案) (査読付)	共著	2021年9月	The Journal of Japan Academy of Health Sciences Vol. 24 No. 2	2018年のIEC60601-2-54 Ed. 1. 2の改定は小児被ばくの低減のため、診断撮影用X線装置の検査プロトコルを3つの体格別に用意するように制定された。3つの体格指標を作るため、2018/01/01~2018/12/31に撮影された患者情報(年齢, 身長, 体重)を電子カルテから抽出し、教師なし機械学習の非階層型クラスタリングであるk平均法を用いてクラスタ分類を行った。X線装置の小児の3つの体格指標における検査プロトコルは乳児0.5, 幼児4.0歳, 学童8.5歳のモデルを提案する。 P. 120-127 本人担当部分: 共同執筆のため抽出不可 共著者: Saito Hiroki, Shin Nagamata, Izumi Ogura, Toru Negishi
15 Analysing COVID-19 infection clusters formed when dining together using a time-Workflow Chart (時間-ワークフロー図による、一緒に食事をした際に形成されるCOVID-19感染クラスターの解析) (査読付)	共著	2021年12月	J Pat Care, Vol. 7 Ise. 6 No:177	今回、飲食店由来の感染クラスタが大量に発生しました。そこで、タイムワークフローチャートを用いて、COVID-19感染クラスターを解析し、対策を提案した。一緒に食事をする個人はCOVID-19に感染しないという誤解を正す必要がある。 P. 120-127 本人担当部分: 共同執筆のため抽出不可 共著者: Hitoshi Tsuchiya, Taniguchi Anna, Hideki Kato, Tsugunori IWAI, Hiroki Saito, Masayuki Koike

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
48 診断用X線装置における多変数による異常検知	-	2021年4月	第77回日本放射線技術学会総合学術大会	X線装置の品質管理体制を確立し組織で品質管理を行っている。品質管理では基礎値を求めて、その変動を注視してきた。しかし、基礎値に異常データが含まれるとき、管理幅が曖昧になってしまう。そこで、1変数による異常検知を導入し、成果を上げている。この方法は我々が行っている複数の管理管電圧に対してはできない。そこで、今回、複数の管理管電圧に対応させるため多変数における異常検知を行い、1変数による異常検知と比較する。 本人担当部分: 共同執筆のため抽出不可 共同研究者: 齋藤祐樹, 小倉泉, 根岸徹
49 Google Appsを利用した国家試験対策システムの開発	-	2021年9月	第15回日本診療放射線学教育学会総会	国家試験合格率を上げるため国家試験対策講座システムを構築し、その運用上の課題を明らかにする。対策講座システムはデイリーテストと夏季集中講座からなる。デイリーテストでは2層式(○×)の10 - 30問(教科により変わる)とし、毎朝、6:30 - 9:00まで解答を行う。夏季集中講座は午前中に講義、午後5時に5択20問の確認テストを全問正解するまで行うことにした。システム開発では補講コンテンツの有無により教員の負担がおおきく異なり、教員の経験、力量の差により感じ方が変わっていた。 本人担当部分: 共同執筆のため抽出不可 共同研究者: 齋藤祐樹, 今尾仁, 徳重佑美子, 谷口杏奈, 倉石政彦, 星野修平

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
50 シンポジウム 法改正後に求められる診療用放射線機器の精度管理を考える「一般撮影装置に求められる精度管理」	-	2021年10月	第49回日本放射線技術学会秋季学術大会	2020年4月に医療法施行規則が改正され管理者の義務に医療被ばくの線量管理と記録が追加された。一方、JIS Z 4751-2-54: 2021が改訂され、装置管理および被ばく線量低減に向けた技術が取り込まれている。新たに検査プロトコルが制定され、線量測定を高精度に行う技術である。診断用X線装置の新技術を紹介し、これからの装置品質管理のあり方を教授した。 本人担当部分： 共同研究者：齋藤祐樹
51 Bluetooth対応簡易形線量計の開発	-	2021年10月	第49回日本放射線技術学会秋季学術大会	我々は半導体検出器の簡易形線量計を開発し、臨床施設へ普及してきた。その中で、臨床施設から検出部と表示部をつなぐケーブルに起因する医療安全の面で問題が上っている。この解決方法としてBluetoothを用いた簡易形線量計および表示プログラムを開発したので報告する。管電圧特性は60 ~ 100 kVまでは10 %以下相対誤差であった。各管電流において60 kV以下および120 kV以上は検出することはできなかった。これはESP32のノイズおよびフォトダイオード感度の影響である。これらを改善することで、臨床で使用するエネルギーに対応できる。 本人担当部分：共同執筆のため抽出不可 共同研究者：共同研究者：齋藤祐樹, 小倉泉, 根岸徹

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科

氏名

谷口 杏奈

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
質問紙を用いた乳がん検診の実施体制調査	共著	2021年4月	日本乳癌検診学会	本県群馬県の乳がん検診の実施体制の全容を解明すべく、実施状況について質問紙調査を行った。集団、個別検診ともに指針に基づく検診が実施されているものの、その割合は指針で推奨されない検診を下回る実施率であった。指針に沿った検診を行うことにより、受診者の拘束時間の短縮や検診費用削減が期待できる。共著者：内林 由香 星野修平 谷口杏奈

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
Google Appsを利用した国家試験対策システムの開発	共著	2021年9月	第15回日本診療放射線学教育学会・学術集会	診療放射線技師養成所のカリキュラムは指定規則によって定められ、各施設の特色ある教育が行われている。国家試験合格率を上げるため、国家試験対策講座システムを構築し、その運用上の課題を明らかにする。共同研究者：齋藤祐樹 今尾仁 徳重佑美子 谷口杏奈 倉石政彦 星野修平
大学教育に囲碁が取り入れられて	共著	2021年11月	第37回日本診療放射線技師学術大会	囲碁の大局観を養う手法を、大学教育の一環として取り入れた報告。大局観は実践を通して判断力、分析力集中力を養うことが出来る。授業毎にアンケートを取り、小テストを2回行った。授業以外での自己学習時間が長ければ長いほど、小テストの成績は良かった。授業を重ねるごとに意欲向上が見られた。共同研究者：土屋仁 谷口杏奈 徳重佑美子 島崎綾子

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科 氏名 山崎 真

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要
なし。				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
なし。				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
なし。				

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 放射線学科 氏名 今尾 仁

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 神奈川県CTアンケート調査における線量低減に対する逐次近似画像再構成法の寄与	共著	2021年4月1日	日本診療放射線技師会誌 J. J. A. R. T 2021. 4, vol. 68/No. 822, p. 25-32 (361-368)	2015年6月に公表された診断参考レベル (Japan DRLs2015) をうけ, 2017年の神奈川県内のCT装置を保有する医療施設に対してアンケート調査を行い, 頭部, 胸部, 腹部～骨盤腔ではDRLs2015と同等の線量レベルであり, 一部ではIR資料率が低いことが明確となった. (統計解析を担当した) 共著者: 小川泰良, 渡邊浩, 新田正浩, 今尾仁, , ほか

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 Google Appsを利用した国家試験対策システムの開発	-	2021年9月28日	第15回日本診療放射線学教育学会・学術集会	本学の国家試験の合格率は全国平均より大きく離れていたことから国家試験合格率を上げるため, 国家試験対策講座システムを構築した. 学生の参加率は成績下位層の学生が低い傾向があるが, 一部の成績上位層の参加率低下も見られた. 対策講座からは得られる情報が少なく, コンテンツの質に問題が示唆される. 国家試験対策システムを開発・運用から教員の労力および協力, 良質なコンテンツを開発するための相互確認が必要であることが示唆された. (共同研究のため担当範囲の抜粋不可) 共同研究者: 斎藤祐樹, 今尾仁, 徳重佑美子, 谷口杏奈, 倉石政彦, 星野修正
2 東京都における新型コロナウイルス感染症への対応調査	-	2021年11月13日	第37回日本診療放射線技師学術大会大会要旨集 p. 156	新型コロナウイルスのまん延により医療施設では様々な対応が実施されている. とりわけ業務形態における対応は各施設で独自の対応が多いため, 東京都の医療施設における新型コロナウイルス感染症への各施設で実施された対応を調査した. 感染症対策チームの編成は解答施設の半数が編成されず, 診療放射線技師が配置していない施設もみられた. 施設の規模に関わらず, 診療放射線技師が施設の感染症対策の運営に関わっていない事例があることが明らかとなった. (研究計画, 調査, 統計解析, 考察, 全体の構成を担当した) 共同研究者: 緒方達哉, 江田哲男, 斎藤政治, 今尾仁, 飯島文洋, 磯崎拓巳, 城尾俊

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科

氏名

徳重 佑美子

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. 流星祭企画オープン・スクールにおける展示テーマのアンケート調査結果報告（査読付）	共著	令和3年3月	群馬パース大学紀要 No. 26 pp. 59-63	本報告は、オープン・スクールのアンケート調査の結果をもとに来場者の意見や感想を整理し、実施内容の検証と今後の課題について、過去3年間分のアンケート調査結果との比較を行い、検討することを目的として実施した。結果として、展示内容によって来場者の関心の高さに差がみられ、来場者に興味を持ってもらえるような工夫が必要な展示が明確になった。今後も継続して調査を行い、オープン・スクールの満足度向上と放射線学科の認知度向上に貢献したいと考える。 著者：徳重佑美子、共著者：小池正行、丸山星
2. 診療放射線技師教育における臨床実習の実施状況に関する調査（査読付）	共著	令和3年4月	日本診療放射線技師会誌 Vol. 68 No. 822 pp. 33-40	本研究は、全国の診療放射線技師教育を行っている大学及び医療機関を対象として、診療放射線技師養成課程における臨床実習の内容について質問紙法により調査を行った。調査期間は2019年5月から6月である。 回答率は養成機関で45.7%、医療機関で41.8%であった。調査結果より、現在の臨床実習は見学型が多数を占めていた。よって診療参加型臨床実習を実現させるために、設備・人員配置・業務量・業務内容など養成機関と医療機関双方の環境整備が重要であり、今後の課題として詳細な検討に向けた更なる調査が必要である。 著者：徳重佑美子、共著者：星野修平

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. Google Appsを利用した国家試験対策システムの開発	-	令和3年9月	第15回日本診療放射線学教育学会・学術集会、オンライン開催	<p>本研究の目的は、国家試験合格率を上げるため、国家試験対策講座システムを構築し、その運用上の課題を明らかにすることである。</p> <p>方法として、まず対策講座システムは全科目に対してデイリーテストと夏季集中講座からなる。デイリーテストでは2層式（○×）の10-30問（教科により変わる）とした。夏季集中講座は午前に講義、午後5時20問の確認テストを行った。対象は、在校生78名と既卒生25名の計103名とした。これらのテストをgoogle formを使用し運用・管理した。</p> <p>結果および考察として、システムの開発として、プール問題、補講コンテンツの有無により教員の負担が大きく異なる。教員の経験、力量の差により感じ方が変わっている。国家試験対策システムを開発・運用から教員の労力および協力、良質なコンテンツを開発するための相互確認が必要である。</p> <p>発表者：齋藤祐樹，共同研究者：今尾仁，徳重佑美子，谷口杏奈，倉石政彦，星野修平</p>
2. 囲碁が大学教育に取り入れられて	-	令和3年11月	第37回日本診療放射線技師学術大会、東京都	<p>囲碁は日本の伝統文化だけでなく、国際的にも広く普及し親しまれているゲームである。このゲームに勝つには大局観が必要であり、この大局観を実践を通じて判断力、分析力、集中力を養うことが出来る。今回この囲碁を大学教育の一環として取り入れたので、その報告をする。</p> <p>方法として、群馬パース大学保健科学部5学科1年生を対象とし、後期15コマ1単位選択科目、1コマ90分の授業とした。授業の内容は1回目にガイダンスを行った。以後は回を追うごとに、少しずつレベルを上げていった。授業の後は毎回アンケートを取り、2回の小テストを行った。</p> <p>結果および考察として、アンケート結果および試験結果からも、自己学習時間が長いほど小テストの点数が良いことが明らかとなった。また、授業後の感想では、意欲的な感想が授業回数を重ねる毎に多くなった。授業後の感想をみると、意欲的な感想が回を重ねるごとに多くなった。</p> <p>発表者：土屋仁，共同研究者：谷口杏奈，徳重佑美子，島崎綾子</p>

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 放射線学科 氏名 島崎綾子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
画像診断報告書未読問題における危険因子の検討（修士論文）	単著	2021年3月	放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻（修士課程）	<p>CTやMRIなどの画像診断報告書を、検査を依頼した担当医が参照せず、患者に大きな負の影響をもたらす事例が報告されている。画像診断報告書の電子情報を用いて、報告書作成に要した時間、参照行動などについて後ろ向きに調査・分析し、画像診断報告書未読の危険因子を明らかとすることを目的とした。未読率や報告書参照までの所要時間には診療科によって大きな差があり、報告書数には依存しないことがわかった。未読の危険因子として①ある種の診療科②MRI検査③診療時間外検査よりも時間内検査、ただし、診療科の特性によっては診療時間外検査などがあることがわかった。</p> <p>本人担当部分：データの分析、全体の考察、執筆 島崎綾子</p>
画像診断報告書未読問題における危険因子の検討（査読付）	共著	2021年7月	医療の質・安全学会誌 Vol.16 No.3, 343-350	<p>大病院の1年間に発行された画像診断報告書を後ろむきに調査し、報告書未読の危険因子を明らかとし、その対策に生かすことを目的とした。結果として、作成までの時間の中央値は2時間41分であり、54.0%が3時間以内であった。参照までの時間は中央値1日で、未読率は12.8%であったが、中央値は0-3日、未読率は2.0-61.9%と、診療科間で大きな差があった。報告書総数とは関連がなかった。</p> <p>本人担当部分：データの分析、全体の考察、執筆（筆頭論文） 島崎綾子、平澤裕美、対馬義人、星野修平、田城孝雄</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
囲碁が大学教育に取り入れられて	—	2021年11月	第37回 日本診療放射線技師学術大会、東京	<p>囲碁は日本の伝統文化だけでなく国際的にも広く普及し親しまれているゲームである。このゲームに勝つには大局観が必要であり、この大局観を実践を通じて判断力、分析力、集中力を養うことが出来る。群馬パース大学保健科学部 5学科1年生を対象とし、後期15コマ1単位選択科目、1コマ90分の授業として行った。授業の内容は1回目にガイダンスを行い授業進行の説明をする。以後は回を追うごとに、少しずつレベルを上げていった。授業の後は、毎回アンケートを取り、2回の小テストを行った。アンケート結果および試験結果からも、自己学習時間が長いほど、小テストの点数が良い。また、授業後の感想では、意欲的な感想が授業回数を重ねるごとに多くなった。授業後の感想をみると、意欲的な感想が回を重ねるごとに多くなった。</p> <p>本人担当部分：授業補助</p> <p>土屋仁、谷口杏奈、徳重佑美子、島崎綾子</p>

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 臨床工学科 氏名 大濱和也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
日本在宅血液透析学会誌	共著	2021年12月	一般社団法人日本在宅血液透析学会	HHDにおける臨床工学技士の役割
在宅血液透析の現状/最前線	単著	2021年No2	日本人工臓器学会	日本人工臓器学会誌Vol150.No2. 2021 S-102

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
埼玉県臨床工学技士会設立30周年によせて	共著	令和4年1月	埼玉県臨床工学技士会誌30周年記念合併号 Vol142 : 2021 p41	公益社団法人埼玉県臨床工学技士会設立30周年記念にあたり寄稿した

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 臨床工学科 氏名 湯本 真人

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
51. Perceptual uncertainty modulates auditory statistical learning: A magnetoencephalography study (認知不確定性は音列統計学習を修飾する-脳磁図の研究) (査読付)	共著	令和3年8月	International Journal of Psychophysiology	音系列の統計学習効果は脳磁場応答P1m, N1m成分に反映されることを報告してきたが、本研究では遷移確率比がこれらの成分にどう影響するかを調べた。遷移確率比が乖離した音系列の方が、統計学習効果を反映するとされる誘発成分の振幅差が有意に大きくなり、N1mよりもP1mの方がこの振幅差が大きかった。このことから、統計学習において、遷移確率の違いに関する情報は比較的早期の認知過程において処理されるものと考えられた。 共著者：Okano T, Daikoku T, Ugawa Y, Kanai K, <u>Yumoto M</u>
52. Aphasia and a Dual-Stream Language Model in a 4-Year-Old Female with Landau-Kleffner Syndrome (ランダウ-クレフナー症候群の4歳女児における失語と言語処理の二重経路モデル) (査読付)	共著	令和3年12月	Neuropediatrics	非優位側の右上側頭回に主としてかん原性焦点のあるランダウ-クレフナー症候群の4歳女児で、聴力回復や言語理解の回復が遅れる中、運動性失語の早期回復が見られた。本症例の脳画像所見と運動失語と感覚失語の回復のずれは、非優位半球も言語理解に重要な役割を果たしているとする言語処理の二重経路モデルに矛盾しないと考えられた。成人の失語と異なり、小児期においては、右半球の障害は言語や身振りの理解の遅れの原因となると報告されており、言語獲得の時期における単語の意味理解の過程は、右半球における視覚、聴覚、文脈情報の統合によりなされると考えられる。 共著者：Kawai M, Abe Y, <u>Yumoto M</u> , Kubota M

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
51. Theoretical feasibility study on on-board magnetoencephalography with wearable magnetometers (ウェアラブル磁気センサによる車載脳磁計測の実現可能性に関する理論的研究)	—	令和3年6月	電気学会マグネティックス/リニアドライブ合同研究会	ブレイン・マシン・インターフェースを備えたインテリジェント自動車の開発に際し、脳活動を検出する手段として、脳波には電極装着の煩わしさが伴う。光ポンピング磁気センサ等を用いたウェアラブルな脳磁計を車載することを想定し、自動車内のノイズ環境下で視覚定常反応を記録する際のセンサアレイの位置と方向の最適化を検討した。(令和2年度文部科学省委託事業「光・量子飛躍フラッグシッププログラム(Q-LEAP)」助成 JPMXS0118067395) (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Cao X, Xin Z, Kuwahata A, Fushimi M, Chikaki S, Oyama K, Anno Y, Yoshida T, Shibata T, Shiota Y, <u>Yumoto M</u> , Sawamura H, Hatano M, Yatsui T, and Sekino M

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
52. Toward on-board magnetoencephalography with wearable magnetometers and active noise canceler (ウェアラブル磁気センサと能動ノイズキャンセラーによる車載脳磁計測へ向けて)	—	令和3年12月	The 4th International Forum on Quantum Metrology and Sensing	ブレイン・マシン・インターフェースを備えたインテリジェント自動車の開発に向け、ウェアラブルな脳磁計を車載することを想定し、自動車内のノイズ環境下で視覚定常反応を記録する際のセンサアレイの位置と方向の最適化および能動的ノイズ除去システムの効果を検討した。 (令和2年度文部科学省委託事業「光・量子飛躍フラッグシッププログラム(Q-LEAP)」助成 JPMXS0118067395) (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Cao X, Xin Z, Kuwahata A, Fushimi M, Chikaki S, Oyama K, Anno Y, Yoshida T, Shibata T, Shirota Y, <u>Yumoto M</u> , Sawamura H, Hatano M, Yatsui T, and Sekino M

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 臨床工学科

氏名

近土真由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 臨床工学科

氏名

草間 良昌

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 草間良昌：医療における臨床工学技士の展望－現状と未来における臨床工学技士像－	共著	令和4年1月	埼玉県臨床国学技士会誌30周年記念合併号 42：13-14, 2021	公益社団法人埼玉県臨床工学技士会設立30周年記念にあたり臨床工学技士像の現状と未来について寄稿した。

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 臨床工学科 氏名 佐田 充

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1 初めて握る人のための 気管支鏡入門マニュアル改訂第2版	共著	2021年3月	メジカルビュー社	編集：石井 晴之， 小林 史 分担執筆：小林 史， 藤原正親， 石井晴之， 宮岡智花， 佐田 充 他 担当：第Ⅱ章 検査前の必要事項 検査を行う環境

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Relationships between Viral Load and the Clinical Course of COVID-19. (COVID-19の臨床経過とウイルス排出の関係)(査読付き)	共著	2021年2月	Viruses.	COVID-19患者の診断時のウイルス排出量と重症化リスクについて検討し， 診断時のウイルス量が予後予測に役立つと考えられた。(考察と執筆の一部を担当) 共著者：Tsukagoshi H, Shinoda D, Saito M, Okayama K, Sada M, Kimura H, Saruki N.
2. Ruxolitinib inhibits poly(I:C) and type 2 cytokines-induced CCL5 production in bronchial epithelial cells: A potential therapeutic agent for severe eosinophilic asthma. (ルクソリチニブはpoly(I:C)とⅡ型サイトカインが誘導する気道上皮のCCL5産生を抑制する：重症好酸球性肺炎の治療薬の可能性)(査読付き)	共著	2021年6月	Immun Inflamm Dis.	重症好酸球性喘息のウイルス感染時の増悪モデルをin vitroで検討し， そのシグナル伝達の解析と既存の血液疾患治療薬であるJAK阻害薬であるルクソリチニブが新規喘息治療薬となる可能性を検討した。(筆頭著者) 共著者：Sada M, Watanabe M, Inui T, Nakamoto K, Hirata A, Nakamura M, Honda K, Saraya T, Kurai D, Kimura H, Ishii H, Takizawa H.
3. All-Trans Retinoic Acid Exhibits Antiviral Effect against SARS-CoV-2 by Inhibiting 3Clpro Activity. (SARS-CoV-2の3Clproに対するオールトランスレチノイン酸の抗ウイルス効果)(査読付き)	共著	2021年8月	Viruses	SARS-CoV-2のプロテアーゼに対して白血病治療で使用されるオールトランスレチノイン酸が結合することでCOVID-19に対する新規治療薬の候補となる事をin vitro及びin silicoで示した。(in silicoの解析の一部を担当) 共著者：Morita T, Miyakawa K, Jeremiah SS, Yamaoka Y, Sada M, Kuniyoshi T, Yang J, Kimura H, Ryo A.
4. Detailed Evolutionary Analyses of the F Gene in the Respiratory Syncytial Virus Subgroup A. (A群RSウイルスのF蛋白遺伝子の詳細な進化解析)(査読付き)	共著	2021年12月	Viruses.	A群RSウイルスのF蛋白遺伝子につき系統樹による進化の検討， 立体構造の比較， コンフォメーションエピトープ解析を行い再感染の機序について解析した。(解析の一部， 論文執筆の一部を担当) 共著者：Saito M, Tsukagoshi H, Sada M, Sunagawa S, Shirai T, Okayama K, Sugai T, Tsugawa T, Hayashi Y, Ryo A, Takeda M, Kawashima H, Saruki N, Kimura H.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 COVID-19に正しく立ち向かうために】COVID-19の予防 ワクチン開発の現状と課題	単著	2021年1月	内科 127巻1号 Page95-97	執筆当時開発中であった新型コロナウイルスワクチンについての種類・機序の解説と展望について
2 【新型コロナウイルス感染症UP-TO-DATE 2021】新型コロナウイルス感染症の疫学とSARS-CoV-2 Sタンパクの分子進化に関する最新知見	共著	2021年4月	感染制御と予防衛生 5巻1号 Page5-9	執筆当時の新型コロナウイルスの分子進化と表面抗原であるS蛋白のエピトープ解析及び受容体結合部位の総説 共著者：岡山 香里，佐田 充，来栖 広夢，砂川 爽代香，林 由里子，藤本 友香，藤田 清貴，木村 博一

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 臨床工学科 氏名 島崎直也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
9. Computational fluid dynamics analysis of venous air trap chamber geometry for reduction of blood coagulation (血液透析中の血液凝固を防ぐ静脈側エアトラップチャンバの最適形状に関するCFD解析)	共著	2021年6月	桐蔭論叢第44号	血液流入口と濾過網の組合せが異なる4種類の静脈側エアトラップチャンバの解析モデルに対するCFD解析を実施した。また、実際に解析モデルと同じ形状を有する静脈側エアトラップチャンバを作製し、PIVによる流れの可視化を実施することで、CFD解析の有用性について検討した。CFD解析とPIVによる流れの可視化結果を比較したところ、チャンバ内の流れがほぼ一致する結果を得ることができ、チャンバに対する基本的な解析手法を確立できる可能性が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：SHIMAZAKI Naoya, SHIN'E Yoshimasa, OKU Tomoko, YAMAUCHI Shinobu, MOTOHASHI Yuka, SATO Toshio

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 血液透析における血液凝固の発生低減を目的とした静脈側エアトラップチャンバの最適形状に対するCFD解析	-	2021年6月	第66回日本透析医学会学術集会・総会	静脈側エアトラップチャンバは、血液と空気の接触、流速の低下や滞留によって血液凝固が発生しやすい。そこで、静脈側エアトラップチャンバの各設計パラメータが血液凝固発生に及ぼす影響について検討するため、数値流体力学(CFD)解析を導入した。血液流入口形状(1:縦流入, 2:横流入)とコーン形状の濾過網の有無(1:有, 2:無)の組合せを変えた4種類の静脈側エアトラップチャンバの解析モデルを作成し、CFD解析を実施したところ、設計パラメータを理論検討することで血液凝固発生を低減できるチャンバ形状を実現できる可能性が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：島崎直也, 新江 義正, 奥 知子, 山内 忍, 本橋 由香, 佐藤 敏夫

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. Simultaneous assessment system of sticking to blood vessel and recirculation rate (人工血管を用いた血管へばりつきと再循環率の同時評価システム)	-	2021年6月	The 60th Annual Conference of Japanese Society for Medical and Biological Engineering	人工血管を用いた血管へばりつきを高い再現性で実現できる評価システムを作製し、市販されているサイドホール型、エンドホール型、コアクシャル型、パリンドローム型の4種類のDLCについて性能比較を試みた。それぞれのDLCの挙動を動画撮影したところ、へばりつきが発生する直前のDLCの振動はコアクシャル型が最も小さく、それに応じてへばりつきの発生頻度が最も小さかった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Yukino Sasaki, <u>Naoya Shimazaki</u> , Noriaki Nakane, Tomoko Oku, Shinobu Yamauchi, Yuka Motohashi, Toshio Sato
5. Computational fluid dynamics analysis of venous air trap chamber geometry (血液透析中の血液凝固を防ぐ静脈側エアトラップチャンバの最適形状に関するCFD解析)	-	2021年6月	The 60th Annual Conference of Japanese Society for Medical and Biological Engineering	静脈側エアトラップチャンバの各種設計パラメータが、血液凝固の発生に及ぼす影響について理論的な検討を行うために、血液流入方式と濾過網の有無の組合せが異なる4種類のチャンバについて検討したところ、CFDによる理論解析とPIVによる流れの可視結果を組み合わせることで、血液凝固が発生しにくいチャンバの最適形状について、定量的かつ個別に評価できる可能性が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者： <u>Naoya Shimazaki</u> , Yoshimasa Shin'e, Tomoko Oku, Shinobu Yamauchi, Yuka Motohashii, Toshio Sato
6. Theoretical analysis using computational fluid dynamics to determine the blood coagulation effects of the total length of the venous air trap chamber in dialysis circuits (静脈側エアトラップチャンバの全長が血液凝固の発生に及ぼす影響に関する理論的検討)	-	2021年11月	TOIN 16th International Symposium on Biomedical Engineering (Online)	血液流入口と血液濾過フィルタの組合せは同じで、チャンバの全長が血液凝固の発生に及ぼす影響について理論的に検討した。チャンバの全長を極端に長くしたチャンバと短くしたチャンバの解析モデルを作成し、数値流体力学 (CFD) 解析を実施した。その結果、静脈側エアトラップチャンバの全長が血液凝固の発生に及ぼす影響を、CFD解析によって理論的に明らかにすることができた。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者： <u>Naoya Shimazaki</u> , Hideki Ishigaki, Hiroki Makita, Yoshimasa Shin'e, Tomoko Oku, Shinobu Yamauchi, Yuka Motohashi and Toshio Sato
7. Particle image velocimetry investigation of the effect of the venous airtrap chamber blood inflow angle on the occurrence of blood coagulation (PIV を用いた静脈側エアトラップチャンバの血液流入角度が血液凝固発生に及ぼす影響に関する検討)	-	2021年11月	TOIN 16th International Symposium on Biomedical Engineering (Online)	血液流入角度の違いが、チャンバ内の血液の滞留や渦流の発生に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、血液流入角度の異なるチャンバ上部を 3D プリンタで試作するとともに、粒子画像流速測定法 (PIV) を用いてチャンバ内の流れの可視化を試みた。結果として、血液凝固塊生成の原因となる滞留領域が小さく、チャンバ内全体で常に水が流動しながら、チャンバから水が流れ出すためには、 θ だけではなく、濾過フィルタの形状など他の設計パラメータの影響も考慮した最適形状を見出す必要があることがわかった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Hideki Ishigaki, Hiroki Makita, <u>Naoya Shimazaki</u> , Tomoko Oku, Shinobu yamauchi, Yuka Morohashi, Toshio Sato

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. Assessment of performance of the newest DLCs with distinctive tip shapes focusing on recirculation rate and sticking (再循環率とへばりつきに着目した特徴的な先端形状を有する最新DLCの性能評価)	-	2021年11月	TOIN 16th International Symposium on Biomedical Engineering (Online)	脱血不良の原因となるへばりつきの発生を低減し、かつ再循環率 R も低いDLCの最適先端形状を実現するための検討を行った。今回は、先端形状の異なる複数の市販DLC におけるへばりつき発生と R を同時評価した。その結果、従来型のサイドホール型DLCと比較して、新しい設計概念に基づいた先端形状を有する3種類のDLC (パンドロームプレジジョン、MAHURKAR Elite カテーテル、パワートリアライシス)では再循環率Rが小さくなることがわかった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Yukino Sasaki, Naoya Shimazaki, Tomoko Oku, Shinobu Yamauchi, Yuka Motohashi and Toshio Sato
9. 静脈側エアトラップチャンバの各種設計パラメータが血液凝固発生に及ぼす影響	-	2021年11月	第59回日本人工臓器学会大会	チャンバ長や血液流入角度などの設計パラメータが血液凝固の発生に及ぼす影響について実験的に検討した。チャンバ長さ、血液流入角度、補足フィルタ形状の組み合わせを変更したチャンバを試作し、チャンバ内にカゼインナトリウム水溶液を循環し、チャンバの液面調整ラインからクエン酸水溶液を持続注入することで、血液凝固塊を模擬したカゼインミセルをチャンバ内で形成した。その結果、チャンバ本来の機能を維持しながら、各種設計パラメータを最適化することによって、チャンバ内での血液凝固発生を低減できる可能性が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：巻田 浩輝, 石垣 秀記, 島崎直也, 中根 紀章, 奥 知子, 山内 忍, 本橋由香, 佐藤 敏夫
10. 静脈側エアトラップチャンバの血液流入角度が血液凝固発生に及ぼす影響に関する検討	-	2021年11月	第59回日本人工臓器学会大会	チャンバの血液流入角度が血液凝固発生に及ぼす影響について粒子画像流速測定法 (PIV) と数値流体力学 (CFD) 解析を実施し、実験と理論解析の両面から検討した。その結果、流入角度が90° (血液流入方向と液面が垂直) に近づくにつれて、チャンバ中央に滞流や渦流を形成していた。したがって、血液流入角度を適切に設定することで、血液凝固発生を低減できる可能性が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：石垣 秀記, 巻田 浩輝, 島崎直也, 中根 紀章, 奥 知子, 山内 忍, 本橋由香, 佐藤 敏夫
11. へばりつきー再循環率同時評価システムを用いたダブルルーメンカテーテルの最適先端形状に関する検討	-	2021年11月	第59回日本人工臓器学会大会	ダブルルーメンカテーテル (DLC) の脱血不良の原因として、血管壁へのへばりつきが挙げられる。そこで、DLCの最適先端形状に関して実験的に検討を行った。DLCを留置した模擬血管内に人工心肺用ローラポンプを用いて、赤色食用色素を溶解した模擬血液を循環させながら模擬透析を行い再循環率を算出した。また、同時にDLC基部における脱血圧の経時変化を調べた。その結果、脱血孔の形状を変化させることでへばりつき発生を抑える構造が最適形状として適していると考えられた。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：佐々木 優貴乃, 島崎直也, 中根紀章, 奥 知子, 山内 忍, 本橋 由香, 佐藤敏夫

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科 氏名

高橋正明

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 理学療法学科 氏名 木村 朗

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
理学療法原論	共 著	2021年2月	日本理学療法士協会	日本における理学療法の成り立ちから、現在、将来の展望について、医療の中の理学療法と公衆衛生の中の理学療法のあり方について概説した。著者は、黒澤和生、木村朗、高倉保幸、他

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
A Propagation Model of Health Literacy Formation among the Very Elderly in Ogimi of Okinawa	共著	2021年12月	Japanese Journal of Public Health Physical Therapy	沖縄県大宜味村の90歳以上の高齢者の健康知識の伝搬モデルを現地調査の上、数理モデルによるシミュレーションによって示した。
Effect of Physical Inactivity on Pulse Wave Velocity during Covid 19 Epidemic in Visually Impaired Subjects	共著	2021年12月	Japanese Journal of Public Health Physical Therapy	2020年に発生したコロナ禍で身体不活動を疑われる草津町在住の視覚障害者の脈波伝搬速度を測定し、身体不活動の分析を試みた
Components of Specific Physical Activity Associated with Aortic-Radial Pulse Wave Velocity in the Very Elderly	共著	2021年12月	Japanese Journal of Public Health Physical Therapy	沖縄県大宜味村の90歳以上の高齢者の運動機能と脈波伝搬速度の関連性について現地調査の上示した。
The Usefulness of Low-Intensity Physical Activity Management for Malaise in Type 2 Diabetic Patients after Ablation	共著	2021年12月	Japanese Journal of Public Health Physical Therapy	2型糖尿病患者で心臓アブレーションを実施した症例の身体活動マネジメントに基づく、運動強度の設定、選択的身体活動の実施を試みた結果、全身疲労の改善を認めたことを報告した。
A Study on Factors that Improve Web Information Access Literacy by Speech Input among Blind People Living in Suburban Areas,	単著	2021年3月	SIG Technical Reports(研究報告アクセシビリティ (AAC))	郊外在住の失明者において音声入力によるスマートフォン操作能力の調査を、電話インタビューによって実施し、実際の利用率が20%であったことを示した。
Practical Expectations of AI as Influenced by the Experience of Emotional Expression Technology Added to Synthetic Speech in Visually Impaired People	単著	2021年7月	SIG Technical Reports(研究報告アクセシビリティ (AAC))	都市部在住の失明者において、AIによる音声合成技術をもとに、AI技術の体験前後で期待感の変化を測定した。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Components of Specific Physical Activity Associated with Aortic-Radial Pulse Wave Velocity in the Very Elderly	共	2021年5月30日-6月2日	EAS 2021 Congress	大宜味村の超高齢者における運動機能と脈波伝搬速度の関連性を調査報告した。Akira Kimura, Tatsuo Kitamura
The Influence of Health Literacy on Predictive Models of Arterial Pulse Wave Velocity in Very Old People Living in Longevity Areas in Japan	単	2021年10月24-27日	The 19th International Symposium on Atherosclerosis	沖縄県大宜味村の高齢者の健康寿命の予測を脈波伝搬速度と健康リテラシーとの関連性から推定するモデルの効用を報告した。
WHAT DRIVES ACTION IN PROGRAMS THAT HELP PREVENT PHYSICAL INACTIVITY IN VISUALLY IMPAIRED OLDER ADULTS?	単	2021年4月9-11日	World Physiotherapy Congress2021	視覚障害者の継時的データを利用した身体不活動予防プログラムの中で特異的な効果を示す要因を探索し、報告した。
Combination of Thresholds of Vascular Function Tests for Prediction of Continuation of Independent Living in Elderly People in Okinawa's Longevity Region	単	2021年9月28日	ACRM2021	沖縄県大宜味村の高齢者における血管機能テストと自立生活の至適予測基準値について報告した。
動画教材による理学療法行為中の逐次判断の存在への気づき促進効果の評価方法の実装性の検討	単	2021年12月4日	第10回日本理学療法教育学会学術大会	動画教材による理学療法行為中の逐次判断の存在への気づき促進効果の評価方法の実装性について報告した。
実装実験の参加経験が及ぼす郊外在住の視覚障害者におけるAIへの期待感への影響	単	2021年12月21-23日	第80回日本公衆衛生学会総会	実装実験の参加経験が及ぼす郊外在住の視覚障害者におけるAIへの期待感への影響について報告した。
A Study on Factors that Improve Web Information Access Literacy by Voice Input among Blind People Living in Suburban Areas	単	2021年3月5日	第15回情報アクセサビリティ研究会	郊外在住の失明者において音声入力によるスマートフォン操作能力の調査を、電話インタビューによって実施し、実際の利用率が20%であったことを報告した。
視覚障害者における合成音声に付与した感情表現技術の体験が及ぼすAIへの実用期待感	単	2021年7月17日	第16回情報アクセサビリティ研究会	都市部在住の失明者において、AIによる音声合成技術をもとに、AI技術の体験前後で期待感の変化を測定し報告した。
沖縄県大宜味村の超高齢者における健康リテラシーの伝搬について	単	2021年6月19日	第7回日本公衆衛生理学療法学会	沖縄県大宜味村の超高齢者における健康リテラシーの伝搬について報告した。
遠隔理学療法の基礎技術としてのNeuroprostheticsに関する研究	共	2021年6月19日	第7回日本公衆衛生理学療法学会	遠隔理学療法の基礎技術としてのNeuroprostheticsについて報告した。北村達夫、木村 朗、田辺 将也

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科 氏名

鈴木 学

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
3. 標準理学療法学（専門分野）日常生活活動学・生活環境学 第6版	共著	2021年12月	医学書院	日常生活活動学第2章各論IX ロービジョンの項で視覚障害の実態とADL指導のポイントについて記述した。P208～213

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
理学療法学生の実習施設内行動レベルと性格特性との関連について	共著	2021年9月	第40回関東甲信越ブロック理学療法学会（於：新潟）	A大学理学療法学科4年生78名を対象にK-T性格検査による性格タイプ実習施設内行動レベルとの関連を検討した。各性格型と行動レベル関係は「自己抑制型」では28項目との間、「自己解放型」では2項目との間、「繊細型」は7項目との間で有意な負の相関がみられた。「着実型」では8項目との間で有意な正の相関がみられた。（ $r = 0.23 \sim 0.53$ ） 発表者：鈴木学、北村達夫、浅田春美、橋口優、中徹

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科 氏名

岡崎大資

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
23 最新理学療法講座 物理療法学 11. 水治療法	共著	令和3年1月	医歯薬出版	水治療法における物理的特性、身体的影響、各モダリティの具体的使用方法、清掃方法、適応と禁忌について記した。 P175-190 岡崎大資
24 標準理学療法学 日常生活活動・生活環境学第6版 ADLを支援する機器(2)-歩行補助具	共著	令和3年12月	医学書院	日常生活活動や生活の質における歩行の重要性を提示し、歩行補助具の目的と選択方法、その機能、役割などを紹介した。また、歩行練習場面での歩行補助具の実践例を提示した。 P85-P89 岡崎大資
25 標準理学療法学 日常生活活動・生活環境学第6版 高齢者の転倒予防と環境調整	共著	令和3年12月	医学書院	高齢者の転倒の実態について、環境・身体的背景を説明し、特に心理・社会的特徴について説明した。また、転倒予防のための身体的介入と心理・社会的介入について具体例を挙げながら実践方法を概説した。 P320-P325 岡崎大資

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科 氏名

目黒 力

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
8. 物理療法学 第3版 第3章 温熱療法	単著	2021年3月	金原出版	<p>温熱療法全般について解説した。1. 温熱療法とは（総論）、2. 温熱の生理学、3. 温熱（伝導熱）療法の実際、にわけ解説した。</p> <p>1. 温熱療法ではさらに熱力学の基礎と熱の移動という観点から熱伝導工学をもとに解説し例題も附した。2. 温熱の生理学では、全身温熱と局所温熱の作用の違いについて詳細に解説した。3. 温熱（伝導熱）療法の実際ではホットパックとパラフィン療法を取り上げ、原理のみならず、実際に理学療法士が実施する方法論について詳細に解説した。また巻末ではセルフチェックをつけ国家試験にも十二分に対応できるものとしている。pp. 35-pp. 56</p>
9. 物理療法学 第3版 第4章 寒冷療法	単著	2021年3月	金原出版	<p>寒冷療法について詳細に解説した。章を1. 寒冷療法の概要、2. 寒冷の生理学、3. 寒冷療法の適応と禁忌、4. 寒冷療法の実際にわけしている。まず、1. 寒冷療法の概要では寒冷療法の歴史と現在の広がりについて述べている。2. 寒冷療法の生理学ではA. 血液循環系への作用、B. 生体内の温度変化への作用、C. 代謝系への作用、D. 神経・筋への作用、E. 結合組織への作用、F. 呼吸系への作用、G. その他の作用にわけ述べた。3. 寒冷療法の適応と禁忌では一般的に示されている適応、禁忌についてまとめている。4. 寒冷療法の実際では、現在臨床で実施されているものはもちろんであるが、過去理学療法の臨床場面で頻繁に実施されていたが現在は少なくなっているモダリティーについても詳細に特に臨床での方法論を中心に解説した。内容は以下の通りである。A. アイシングとクーリング、B. アイスマッサージ、C. アイスパック、コールドパック、D. 蒸気冷却スプレー、E. 冷浴、F. 持続的冷却法、G. 極低温療法。また章末にはセルフチェックとして国家試験等で問われるものもまとめている。pp. 57-pp. 78</p>
10. 物理療法学 第3版 第6章 電磁波療法Ⅱ 光線療法	単著	2021年3月	金原出版	<p>光線療法についてまとめた。章を1. 光線療法、2. 紫外線療法、3. 赤外線療法、4. レーザー光線療法の4つにわけ解説した。まず1. の光線療法はA. 光線療法概論、B. 光とは、C. 光の作用の3つにわけ記載した。2. 紫外線療法はA. 紫外線療法概論、B. 紫外線の物理学的特製、C. 紫外線の生理学的作用、D. 紫外線発生装置、E. 紫外線感受性検査（最小紅斑量テスト）、F. 紫外線照射実施方法、C. 適応と禁忌にわけ解説している。3. 赤外線療法はA. 赤外線療法概論、B. 赤外線の特徴、C. 赤外線の生理学的作用、D. 赤外線装置の種類、E. 赤外線照射療法の実際、F. 適応と禁忌にわけ説明した。4. レーザー光線療法は、A. レーザー光線療法概論、B. レーザー発生の原理、C. レーザーの特徴、D. レーザーの種類、E. レーザー光の生理学的作用、F. レーザー光線療法の実際、G. 適応と禁忌にわけ特に工学的知見を踏まえわかりやすく説明することに心がけた。pp. 99-pp. 136</p>

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
11. 物理療法学 第3版 第10章 牽引療法	単著	2021年3月	金原出版	牽引療法、特に介達牽引療法についてまとめたものである。章の構成は以下の通りである。1. 牽引療法の基礎、2. 牽引療法の種類と分類、3. 脊椎牽引療法の生理的作用、4. 頸椎牽引の実際、5. 腰椎牽引の実際、セルフチェックでありリメディアルの一貫として「参考：力とは何か」を章末に掲載している。1. 牽引療法の基礎ではさらにA. 歴史、B. 牽引療法の普及、C. 牽引療法の目的にわけ総論を記載した。2. 牽引療法の種類と分類では、A. 肢位・部位的分類、B. 力学的分類、C. 時間的分類にわけ様々な形で実施される牽引療法をまとめた。3. 脊椎牽引療法の生理的作用ではA. 力学的効果、B. 神経生理学的効果、C. 心理的効果に分けエヴィデンス的には十分とは未だ言い難い牽引療法の効果について説明している。4. 頸椎牽引の実際、5. 腰椎牽引の実際ではそれぞれ、A. 牽引力、B. 牽引角度、C. 牽引時間・期間・頻度、D. 牽引肢位、E. 治療手順、F. 適応と禁忌にそれぞれをわけ治療部位別にわけること学生への理解を早めることを心がけた。pp. 221-pp. 259
12. 物理療法学 第3版 第13章 発展学習	単著	2021年3月	金原出版	発展学習では物理療法実習や研究に役立つよう従来から行われている課題をわかりやすく、また新たな課題も盛り込むことで学生の物理療法への興味関心の賦活を狙ったものである。筆者が担当したのは以下の項目で行動目標は以下の通りである 1. ホットパック療法前後における皮膚温の変化では表在温熱における深部温と表在温の変化を正しい手順で測定すること、2. 血圧ならびに脈拍に与える寒冷の影響では、冷水浴におけるバイタルサインの変化の観察を正しい手順で実施できる、4. 最小紅斑量テスト「ホット・クォーツ発生装置を用いた紫外線による紅斑測定法」では紫外線照射量の測定を正しい手順で実施できる事、9. 牽引療法「アネロイド式血圧計を用いた腰椎牽引肢位における腰椎前彎度の測定」では牽引療法における脊椎前彎の変化を定量的に観察し、筋緊張との関係を説明できることとした。いずれも、養成校に備えてある機材で十分に安全に計測可能なものを中心に手順を理解しやすくするために詳細に記載する事を心がけた。pp. 310-pp311, pp312, pp. 316-318, pp329-pp. 331

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科

氏名

宗宮 真

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科 氏名

浅田 春美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「理学療法学生の実習施設内行動レベルと性格特性との関連について」	共著	2021年9月	第40回関東甲信越ブロック理学療法学会	本研究では、理学療法学生の実習での施設内行動レベルと性格との関係を明らかにすることを目的とし、実習終了後K-T性格検査で5つの性格タイプの強弱から主たる性格を設定し、行動レベルは概ね実施している37項目を5件法により自己評価した。その結果「自己抑制型」は最も多くの行動レベルで有意な負の相関を呈し、主たる性格で他の性格よりも低い行動レベルになり、この性格要素が高いと実習行動は好ましくない結果になることが示唆された。鈴木学、北村達夫、浅田春美、橋口優、中徹

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科 氏名

城下貴司

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
運動機能系理学療法診断学 上肢編	単著	2021年3月		上肢疾患に対して運動器系理学療法における評価を網羅した
運動機能系理学療法診断学 下肢編	単著	2021年3月		下肢疾患に対して運動器系理学療法における評価を網羅した
運動機能系理学療法診断学 脊柱編	単著	2021年9月		脊柱疾患に対して運動器系理学療法における評価を網羅した

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
KINEMATIC ROLE OF ROCKER FUNCTION IN WALKING: FOCUSING ON THE SECOND AND THIRD ROCKERS	単著	2021. 4. 9～11	Congress 2021 World Physiotherapy congress	歩行のロッカーファンクションについて解析した。アングルロッカーはアングルに、フォアフットロッカーはモーメントに関連することを明らかにした。
49(学術大会座長)	座長	2021. 9. 11-12	第9回日本運動器理学療法学会学術大会 座長	座長として以下の演題を担当した。「昇段動作の速度と股関節内・外転モーメントインパルスの関係性」「歩行時における膝伸展制限角度と下肢セグメントモーメントパワー極性の関係」「座位でのCKCエクササイズ運動力学的および筋電図学的解析」「靴下着脱動作パターンの違いが脊柱・骨盤・下肢の三次元空間運動に与える影響」「超音波画像診断装置と体組成計を用いた大腿四頭筋各筋の量的・質的評価が膝伸展筋力に及ぼす影響」

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科

氏名

洞口 貴弘

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Constructing questionnaire using INPUT BOX method of Microsoft Excel VBA. (Microsoft Excel VBAのINPUT BOXメソッドを用いた質問紙作成方法の紹介) (査読付)	単著	印刷中	群馬パース大学紀要	Microsoft社が販売するMicrosoft Officeに含まれる表計算ソフトのExcelには、作業を記録し、繰り返し再現するための機能としてマクロ機能が備わっている。この工程はVisual Basic言語とほぼ同じであるVisual Basic for Application (VBA)というプログラム言語によりVBAプログラムのコード(以下、コード)として記述されており、編集したり、新規コードを作成したりすることができる。本研究では初心者でも理解・改編可能なコードを用いて最大11の尺度や自由記述がPC画面上で可能なアンケートを表示・集計可能なアプリケーションを作成し、複数の新旧バージョンのExcelやOSで動作するかどうかを検討した。 その結果、検討した全てのExcel上で正常な動作が確認できた。それにより、学生が各々のノートPCを使って例えば老人ホームなどで簡単にアンケートを取ることが可能となった。 (実験、解析、全体の考察、執筆を担当)(筆頭論文) 共著者：Horaguchi, T

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科

氏名

黒川 望

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
なし				

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
なし				

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
なし				

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科 氏名

橋口 優

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
理学療法ガイドライン第2版	共著	令和3年10月15日	医学書院	低出生体重児に対する姿勢変換のエビデンスに関して「小児理学療法ガイドライン(p154-155)」の章にて、執筆した。 [著者]日本理学療法士協会 監修: 橋口

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
A Propagation Model of Health Literacy Formation among the Very Elderly in Ogimi of Okinawa (査読付) (沖縄県大宜味村の超高齢者におけるヘルスリテラシー形成の伝播モデル)	共著	令和3年8月15日	Japanese Journal of Public Health Physical Therapy 8(1):7-10	超高齢者のヘルスリテラシー形成の伝搬について感染症で利用される数理モデルを利用して明らかとした。 [著者]Akira Kimura, Masae Yaiima.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
理学療法学生の実習施設内行動レベルと性格特性との関連について	—	令和3年9月5日	第40回関東甲信越ブロック理学療法士学会	学生の実習施設内行動レベルと性格との関係について検討し、実習にて好ましくない結果となる可能性のある状況について明らかにした。

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 理学療法学科

氏名

田辺 将也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
I A Propagation Model of Health Literacy Formation among the Very Elderly in Ogimi of Okinawa(査読付)	共著	2021.1	JJPHPT	<p>感染症の数学的モデルを用いて、沖縄県大宜味村の超高齢者コミュニティにおける健康の知恵の伝達を推定するために必要な要因を特定する研究。民間療法に関する否定的な情報の取得後に感染の停止があると仮定したモデルは、実際のデータとの違いが5%未満であり、推定が可能であることを示した。</p> <p>(共同研究につき、本人担当分抽出不可能) 共著者：Akira Kimura, Masae Yajima, Masaya Tanabe, Yu Hashiguchi, Shou Oikawa</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 作業療法学科

氏名

石井 良和

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
作業同一性質問紙の臨床的有用性の検討～地域在住要支援・要介護高齢者の3事例を通して～	共著	2021年6月	作業行動研究25(1)38-47	人間作業モデルの主要な概念の一つである作業同一性を評価する道具の開発であり、今回は3名の事例を通してその有用性を検討した。 著者：鹿田将隆，篠原和也，二村元気，高木初代，石井良和，谷村厚子
回復期リハビリテーション病棟入院中のクライアントと作業療法士の治療関係はどのような経験から成り立つのか～解釈学的現象学の方法を用いて～	共著	2021年10月	作業療法40(5)581-590	クライアントと作業療法士との治療関係がどのような入院経験から成り立つのかを回復期リハビリテーション病棟を対象として解釈学的現象学の方法を用いて検討した質的研究である。 著者：嶋田隆一，石井良和，ボンジェ・ペイター，塩路理恵子

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「意欲，発動性の低下した認知症高齢者のよりよい作業体験に向けて～間身体性に焦点を当てた関わり～」	共著	2021年9月	第55回日本作業療法学会	発表者：岡田直純，石井良和，小林隆司
セルフネグレクト状態にあった精神障害者への自立支援	共著	2021年9月	第55回日本作業療法学会	発表者：馬場，石井良和，小砂哲太郎，浅黄真紀子
就労世代の脳血管系疾患患者が回復期リハビリテーション病棟を退院するまでのプロセスとその要因～複線経路等至性アプローチの分析～	共著	2021年9月	第55回日本作業療法学会	発表者：菊池祐介，石井良和

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 作業療法学科 氏名

竹原 敦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 【つながり再考!】新型コロナウイルス感染症に対する新たな生活様式のための作業療法 閉ざされた介護老人保健施設の人が社会とつながるには	共著	令和3年2月	東京作業療法 9:20-25, 2021	本論の目的は、介護老人保健施設内の入所者、通所利用者と外界との「つながり」に関する作業療法実践の意義を考察することであった。コロナ禍において、老健で行った様々な作業療法実践は、利用者のつながりを促進することに役立つ内容と思われる。感染防止のためのあらゆる自粛の方策は医学的には正しいことかもしれない。しかし、そのことは同時に、利用者から多くの作業を奪ってしまうという弊害を生んだ。こうした作業剥奪 (Occupational deprivation) により、人は作業機能障害に陥り、不健康になってゆくと考えられる。コロナ禍の生活について、適切な作業の評価を行い、新たな生活様式の中、剥奪された作業に代わる真の新たな作業を発見し、利用者の生活適応を支援すること、それが作業療法士の責務と考えられる。 共同研究のため担当部分抽出不可能 上村淳, 竹原敦

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 群馬県作業療法士会主催 研修会 認知症ケア資質向上のための研修 第2回 東京都における認知症支援のニーズと認知症ケアの現状～東京都作業療法士会認知症の人と家族の生活支援委員会の活動を通して～	単独	令和3年2月6日	群馬県作業療法士会	認知症の人と家族に対する作業療法実践の視点について解説した。特に、認知症の症状に伴う生活支援の方法、東京都作業療法士会の関連委員会活動の紹介等を実施した。群馬県の認知症に対する支援の今後の協業が期待された。
2 認定作業療法士取得研修 選択 老年期 老年期障害の作業療法①高齢者に対する作業療法	単独	令和3年6月19日～20日	日本作業療法士協会	認定作業療法取得条件のための研修を行った。老年期の作業療法実践の評価、介入、成果の示し方、事例検討などを実施した。
3 コロナに負けるな!! 私たちで考える「コロナ禍の生活」2021	単独	令和3年7月11日	第17回東京都作業療法学会抄録集:7, 2021.	2020年に発生した新型コロナウイルスにより、自粛生活を余儀なくされている中、高齢者、認知症の人は、「作業剥奪」や「作業不均衡」となっていることが多いと思われる。こうした状況から抜けだし、あたりまえの生活を取り戻すには、作業療法はどのような貢献ができるかを考察した。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 睡眠の質と活動量の関連性が見える化は高齢者の活動量を意識化する	共同	令和3年7月11日	第17回東京都作業療法学会抄録集:35-36, 2021.	通所リハビリテーションの利用者の中には、日中の大半を家で横になってテレビを観て過ごすなど活動量が低い方も多い。本論は、高齢者が日中の活動量とそれに伴う良眠の好循環を得るための作業療法の視点を導き出す目的で5名の利用者を対象とした。活動量の影響を対象者や家族、職員などに見えるようにすることで、対象者が生活について意識をして活動的になろうとすることが示唆された。 共同研究のため担当部分抽出不可能 上村淳，竹原敦，木村信之
5 認定作業療法士取得研修選択 老年期 老年期障害の作業療法②高齢者に対する作業療法	単独	令和3年7月17日～18日	日本作業療法士協会	認定作業療法取得条件のための研修を行った。老年期の作業療法実践の評価、介入、成果の示し方、事例検討などを実施した。
6 認知症の人が住み慣れた地域で生活するために～生きる力を支える見方～	単独	令和3年8月25日	群馬県利根沼田地域リハビリテーション研究会	認知症の人が地域でよりよく生活するためには、どのようにして支えてゆくとよいのだろうか。認知症の人口動態、症状の特徴、周囲の支援の方法、予防の是非、社会的役割を担う可能性などについて講演した。
7 第55回日本作業療法学会教育講演 認知症の人が社会に参加するための作業療法	単独	令和3年9月11日	日本作業療法士協会	認知症の人の多くは、日常生活の中で動揺や緊張、怒り、不安や恐れ、退屈、悲壮感などにさいなまれている場合が多いと言われる。しかし、体験を伴う感情の持続時間や減退は認知症の人と認知症のない人で差がなく、認知症の人は上手に社会と関わりを持ち、愛着のあるコミュニケーション行動が得られると言われている。認知症の人の地域での生活、そして、社会参加は、どのように形作られてゆくのだろうか。認知症の人とその家族が、社会参加をするための作業療法実践として、認知症の人の想い、認知症の人と家族の役割、認知症の人に対する先入観の3つの視点から作業療法が捉えるべき視点を考察した。
8 令和3年度生涯教育研修現職者選択研修 1「老年期の基礎知識」及びテーマ2「老年期作業療法の基礎知識」	単独	令和3年10月9日	岩手県作業療法士会	認定作業療法の現職者選択研修を行った。老年期の基礎知識と老年期作業療法の基礎知識について講演した。日本作業療法士協会のシラバスに基づき行った。
9 臨床作業療法学演習	単独	令和3年10月28日	神奈川県立保健福祉大学	認知症の人と家族に対する作業療法実践を、背景、症状、評価、アプローチと成果の視点で講義した。臨床実習を補充する実践的な内容を伝えた。
10 第107回全国図書館大会山梨大会 第15分科会 健康情報「認知症と図書館のバリアフリー」 図書館は認知症の人にとってバリアとなるのか？～作業療法の観点から～	単独	令和3年11月11日～12日	日本図書館協会	作業療法士の立場から、認知症の人が、地域社会で安心して生活するために図書館ができることをテーマに講演した。『公共図書館の任務と目標』における図書館を利用する権利の保障についての項目を紹介しながら、認知症の人が図書館を利用する際に不公正が生じないように、図書館職員は認知症の人が利用しやすく心地よい空間を創るための工夫と配慮が重要であることが提案した。また、図書館職員と作業療法士が協力して、認知症の人が安心して暮らせる社会を創ることへの可能性を述べた。
11 イムスグループ研修会	単独	令和3年11月14日	医療法人イムスグループ	医療法人のPT、OT、ST向けに、認知症の基本、リハビリテーションの捉え方、認知症の人と家族を取り巻く現状、実践への指針など、職種に共通する認知症の人のアプローチに役立つ内容を講演した。

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 作業療学科 氏名 南征吾

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
作業療法の臨床的リハビリテーション理論を活かすー	共著	令和4年 発行予定	メディカルビュー社 計10項程度	第3章 4.『緩和におけるリハビリテーションの特徴』を担当した。 本書では、緩和に対する作業療法について、作業療法理論を用いて事例実践と臨床推論のプロセスを報告した。内容は、緩和におけるリハビリテーションと作業療法理論について科学的リハビリテーション、物語的リハビリテーション、実際的リハビリテーション、倫理的リハビリテーション、相互交流的リハビリテーション、リハビリテーションの統合を説明した。その後、緩和ケア病棟で入院中の事例について、各リハビリテーションの考え方を示した。 計10項程度（2021年11月に投稿済み） 南征吾

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Effect of home-based rehabilitation of purposeful activity-based electrical stimulation therapy for chronic stroke survivors: a crossover randomized controlled trial	共著	令和3年	Restorative Neurology and Neuroscience 39 173-180	本研究は、意図的な活動と電気刺激療法（PA-EST）の効果を組み合わせて、単一のケーススタディで慢性脳卒中生存者の重度の片麻痺性上肢から補助上肢への移行を促進しました。 目的：この研究の目的は、クロスオーバーランダム化比較試験において上肢の運動機能に対するPA-ESTの効果を調べることでした。 Seigo Minamia, Yoshihiro Fukumotob, Ryuji Kobayashid, Hideaki Aokie and Tomoki Aoyama
Effect of purposeful activity-based electrical stimulation on auditory event-related potential in a stroke survivor with a severely paretic upper limb	共著	令和3年	COGNITION & REHABILITATION 2-1 36-40	本研究の目的は、慢性脳卒中生存者の聴覚事象関連電位（ERP）を使用して、認知機能に対する意図的な活動ベースの電気刺激療法（PA-EST）の効果を決定することでした。聴覚ERPのP300潜時成分（Fz、Cz、およびPz）は、初期評価と比較してフェーズIIの後に短縮され、その後は著しく変化しませんでした。上肢のFMA、MALの使用量、動きの質、およびGAS-Lは、フェーズIIおよびIVに続いて改善を示しました。上肢のFMAは、フェーズIIまで劇的な改善を示し、このフェーズ後には最小限の違いが観察されました Seigo MINAMI, Yoshihiro FUKUMOTO, Ryuji KOBAYASHI, Kenji ISHIKAWA, Nobuyuki SANO, Mitsumasa HIDA, Hideaki AOKI, Tomoki AOYAMA

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Coronal Spinal Postural Alignment Screening Tool using Markerless Digital Photography	共著	令和3年	Advances in Science, Technology and Engineering Systems Journal 6(2) 965-970	本研究の目的は、マーカースレスデジタル写真からADSスクリーニングツールを開発し、その信頼性を検証いたしました。この研究には17人の参加者が含まれました。外眼角-水平角 (OHA) と僧帽筋-水平角 (THA) は、ImageJを使用して冠状面での被験者の上半身の画像から計算されました。コブ角を測定して、OHAとTHAの相関関係を調べました。クラス内相関係数を分析して、熟練および非熟練の理学療法士の値を使用して信頼性を検証しました。研究結果は、THAとコブ角の間に優れた相関関係があることを示しました。THAはまた、ほぼ完璧なイントラおよびインターレーターの信頼性を備えていました。 Mitsumasa Hida, Ayuna Hasegawa, Sachiyo Kamitani, Yumi Kamitani, Kodai Kitagawa, Shogo Okamatsu, Tadasuke Ohnishi, <u>Seigo Minami</u> , Chikamune Wada
Cut-off Values for Lower Limb Muscle Thickness to Detect Low Muscle Mass for Sarcopenia in Older Adults	共著	令和3年	Clinical Interventions in Aging 16 1215-1222	本研究は、超音波由来の大腿部と下肢筋厚 (MT) の予測精度とカットオフ値を明らかにして、高齢者の低骨格筋質量指数 (SMI) を検出し、2つの標準偏差に基づいてカットオフ値を推定することを目的としました。 Yoshihiro Fukumoto, Tome Ikezoe, Masashi Taniguchi, Yosuke Yamada, Shinichiro Sawano, <u>Seigo Minami</u> , Tsuyoshi Asai, Misaka Kimura, Noriaki Ichihashi

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
回復期病棟の重度片麻痺側上肢に対する合目的電気刺激療法の効果無作為化比較対照試験	共著	令和3年9月	第55回日本作業療法学会	本研究は、PA-ESTを回復期病棟で重度片麻痺上肢をもつ人に対して実施し、上肢の生活行為の効果の有無を確認した。本研究は、無作為化比較対照試験により検証したので報告する。(査読有) 南征吾、小林隆司、竹内健二、吉原賢悟、青山朋樹
慢性重度片麻痺を呈した人の作業失意サイクルからの回復：質的研究	共著	令和3年9月	第55回日本作業療法学会	本研究は、そのような陳旧性の重度片麻痺上肢であっても、電気刺激装置を用いて使用頻度を上げられることを示した。しかしながら、廃用手から補助的上肢を獲得するに至るまでの心理的なプロセスは明らかにされていない。本研究の目的は、質的研究を用いて慢性重度片麻痺のある人の廃用手から補助手に至るまでの心理的な契機構造を明らかにするものである。(査読有) 阪口満陽, 南征吾, 大野直紀、藤田将敬、小林隆司

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Occupational Therapy: Connecting people and technology	共著	令和3年6月	60th Japanese society for medical and biological engineering 36th Japan biomagnetism and bioelectromagnetics society	本報告は、情報通信技術（ICT）を使用して作業療法（OT）をさらに改善し、患者が日常生活動作を拡大できるようにすることです。OTは、患者を動機付ける価値観や興味から派生した目的のある活動であるため、プログラムを検討しました。このプログラムは、OTと電気刺激装置を組み合わせたものです。このプログラムは、目的のある活動ベースの電気刺激療法（PA-EST）として指定されました。目的のある活動は、患者が自分の存在を高めるタスクを認識するのに役立ちます。（査読有） Seigo MINAMI, Ryuji KOBAYASHI, Tomoki AOYAMA
Effect of purposeful activity-based electrical stimulation in severe hemiplegic stroke survivors in a convalescent ward : A randomized controlled trial	共著	令和3年6月	International Society of Physical and Rehabilitation Medicine 2021	この研究の目的は、回復期病棟に入院した重度の片麻痺性上肢を有する脳卒中生存者の日常活動と運動の質に対する意図的な活動ベースの電気刺激療法の効果を調査することでした。（査読有） Seigo MINAMI, Ryuji KOBAYASHI, Yoshihiro FUKUMOTO, Hideki AOKI, Mitsumasa HIDA, Kenji TAKEUCHI, Kengo YOSHIHARA, Tomoki AOYAMA
慢性重度片麻痺脳卒中患者に対する合目的的電気刺激療法による事象関連電位の変化（事例報告）	共著	令和3年6月	第58回日本リハビリテーション医学会学術集会	本報告は、脳卒中による重度片麻痺上肢を持つ人に対して、生活適応に焦点あてた合目的的電気刺激療法（Purposeful activity-based Electrical Stimulation Therapy ; PA-EST）を実施し、上肢機能と生活行為に改善を認めた（S Minami et al: 2020）。本研究の目的は、慢性重度片麻痺側脳卒中患者に対するPA-ESTの脳機能に及ぼす影響について、聴性事象関連電位（P300潜時）を用いて検証することである。（査読有） 南征吾, 小林隆司, 石川健二, 肥田光正, 福元喜啓, 青木秀哲, 青山朋樹

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 作業療法学科 氏名 宮寺 寛子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
仮設住宅入居高齢者が認識する生活課題の検討	共著	2021年2月	作業療法40 (1) : 61-71	災害後に仮設住宅で生活する高齢者が認識する生活課題を作業療法の視点から明らかにし、QOL向上に寄与しうる支援方法の示唆を得た。 宮寺寛子 , 川又寛徳, 谷村厚子, 小林法一
Effectiveness of the Parent-Child Social Skills Training Program for Children with Developmental Disorders: A quasi-experimental design	共著	2021年4月	Asian journal of occupational therapy17 (1) : 37-44	子どもとその保護者に対してSSTを実施した。子どもに対するSST効果を高めるために、親の対応が重要であること、子どものソーシャルスキルの定着には親の影響が重要であることが示唆された。 Kimiko Shibata, Hirokazu Nishikata, Sayoko Kawabata, Hiroko Miyadera , Yohei Kuriki

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
災害復興期において被災高齢者の生活に影響を及ぼす環境に関するシステムティックレビュー	共同	2021年9月	第55回日本作業療法学会	災害後の生活に影響を及ぼす因子を文献レビューで検証した。 宮寺寛子 , 石代敏弘, 村田和香
スマートペンを活用した上肢協調運動機能の定量的評価の試み	共同	2021年9月	第55回日本作業療法学会	上肢協調運動機能の定量的評価に向けて予備実験を行い、スマートペン使用の妥当性を確認した。 宮寺亮輔, 古田常人, 山口智晴, 宮寺寛子
作業参加の視点から保育所等訪問支援における保育士への助言を行った事例	共同	2021年10月	第23回群馬県作業療法学会	保育所等訪問支援事業での支援を作業y朗報の理論を用いて実施し、保育士の困りごと解決に有用である可能性を示した。 宮寺寛子 , 比良亜希子
Effects of active learning for understanding the occupational therapy evaluation process on students' self-evaluation of reach in clinical skills and their results of clinical training	共同	2021年11月	7TH ASIA PACIFIC OCCUPATIONAL THERAPY CONGRESS	アクティブラーニングを用いた教育プロセスが学生の自己評価および臨床実践に及ぼす影響を検証した。結果、高い効果が期待されることが明らかになった。 宮寺亮輔, 古田常人, 山口智晴, 宮寺寛子 , 西方浩一

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 作業療法学科 氏名

馬場順子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. セルフネグレクト状態にあった精神障害者への自立支援 (査読付)	共著	令和3年 9月10日	第55回日本作業療法学会 (於：仙台オンライン配信)	地域で生活していたセルフネグレクト状態の精神障害者に対する自立生活支援に関する事例発表。地域精神科訪問支援での困難事例には、セルフネグレクトにより精神科医療に繋がらない事例が多いとされている。本事例は、精神科医療への定期的な受診と自炊などの自立した生活のために、人間作業モデルを支援に用いることでクライアントの生活の文脈に沿った作業を導入することを可能にした。そのことで、精神科医師との良好な関係の構築と、自炊のための買い物や自炊を生活の中に取り入れることで、セルフネグレクトの状態が好転した。 担当部分：序論，方法，結果，考察の全て 共著者：馬場順子，石井良和，小砂哲太郎，浅黄真紀子
2. 精神科訪問看護事例における作業療法士の取り組みに関する文献レビュー (査読付)	共著	令和3年 9月10日	第55回日本作業療法学会 (於：仙台オンライン配信)	精神科訪問看護に携わる作業療法士は、どのような視点で支援を行っているのか、精神科訪問看護に関する作業療法士の事例文献をレビューした。分類の方法は、Occupational Therapy Practice Framework：Domain and Process 4thを用いたところ、作業療法士は対象者が希望する生活の価値、信念、スピリチュアリティを重視し、習慣や日課、役割などの領域に働きかけを行っていた。 担当部分：方法の一部，発表補助 共著者：安孫子樹莉，馬場順子，鹿田将隆

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 職場復帰プログラムにおける社会交流評価 (ESI) を用いた臨床実践 (査読付)	共著	令和3年 9月10日	第55回日本作業療法学会 (於：仙台オンライン配信)	精神障害者の休職では、リワーク支援という精神科デイケアでの復職に向けた取り組みがある。リワークの対象者はうつ病患者が多いが、特に職場でのコミュニケーションが上手くいかず休職に至る事例が多い。本事例では、コミュニケーションに課題を持つうつ病患者に対し、作業療法が開発した評価法である、Evaluation of Social Integrationを用いて支援をした結果、コミュニケーション能力が向上し、復職に至った。 担当部分：方法の一部、発表補助 共著者：村岡和也、馬場順子
4. 人間作業モデルを用いた初めての就労支援-クライアントと作業療法士にとって- (査読付)	共著	令和3年 9月10日	第55回日本作業療法学会 (於：仙台オンライン配信)	近年、作業療法士は就労支援に支援者として携わることが増えている。就労移行支援事業所で働く作業療法士が初めて就労支援を行うにあたり、対象者も障害者として初めて就労支援を受けるにあたって、人間作業モデルのOCAIRSの評価を用いて、クライアントの強みを明らかにし、能力を発揮するための環境調整について検討した結果、一般企業での就労に至り就労を継続している経過を報告した。 担当部分：方法の一部、発表補助 共著者：浅黄真紀子、馬場順子
5. 生活の全てを高齢の母に頼り、自宅閉居気味の生活を送っていた精神障害者への自立生活支援	共著	令和3年 10月31日	第23回群馬作業療法学会 (於：オンライン配信)	障害福祉サービスの自立生活支援員として作業療法士が関わった事例。地域での8050問題の背景には精神障害の存在があり、本事例も80代の親と50代の息子で息子が精神障害を持ち、母亡き後の生活に不安を感じていた。作業療法士は、人間作業モデル、自己効力感尺度などの理論を用いて、クライアントが大事にしている作業を行うことで、自立生活に向けた買い物や洗濯などが習慣化された。 担当部分：序論、方法、結果、考察の全て 共著者：馬場順子、岡田直純
6. 認知症クライアントの作業従事の継続に関わり-人間作業モデルの再動機づけ過程からの振り返り-	共著	令和3年 10月31日	第23回群馬作業療法学会 (於：オンライン配信)	認知症クライアントの自己決定に寄り添い、作業継続に至るために人間作業モデルの再動機づけ過程を用いた関わりをした結果、クリスマスカードを自力で完成させるに至った。 担当部分：共同研究につき担当部分抽出不可能 共著者：岡田直純、馬場順子
7. 第55回日本作業療法学会専門作業療法士セミナー		令和3年 9月10日	第55回日本作業療法学会	専門作業療法士セミナー (就労支援) 講師 馬場順子、野々垣睦美、田中啓介、田中三恵

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 作業療法学科 氏名

吉岡 和哉

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 作業療法学科 氏名 岡田直純

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 非常勤講師 講義「認知症の作業療法」		令和3年7月	昭和大学 作業療法学科3年 精神障害治療学演習（90分）	臨床で関わった具体的な事例の提示から作業療法の実践につき説明し、グループワークを行なった。
2 『意欲、発動性の低下した認知症高齢者のよりよい作業体験に向けて～間身体性に焦点を当てた関わり～』	共著	令和3年9月	第54回作業療法全国学会（仙台）ポスター発表	認知症の方との関わりを視線を交わす、声を合わせるとの視点から間身体性ととらえ、変化を意志質問紙（VQ）にて測定した。発表者 岡田直純、石井良和、小林隆司
3 認知症クライアントの作業従事の継続に向けた関わり～人間作業モデルにおける再動機づけ過程からの振り返り～	共著	令和3年10月	第23回群馬県作業療法学会 口述発表	認知症クライアントの作業従事についての関わりを人間作業モデルの再動機づけ過程に基づいて考察した。発表者 岡田直純、馬場順子

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 作業療法学科 氏名

近藤健

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Aging and Bimanual Effects on Finger Center of Pressure during Precision Grip: Different Strategies for Spatial Stability	共著	2021年12月	Sensors 21(24) 8396-8396 (IF3.576)	本研究は、高齢者と若年者のつまみの特徴を圧センサーを使用し明らかにしました。高齢者と若年者ではつまみを安定させる戦略が異なっていました。 Ryoto Akiyama, Naoto Noguchi, <u>Ken Kondo</u> , Koji Tanaka, Bumsuk Lee
2. Effects of a nurse-occupational therapist meeting on function and motivation in hospitalized elderly patients: A pilot randomized control trial	共著	2021年5月	British Journal of Occupational Therapy 1-8 (IF:1.243)	この研究では看護師と作業療法士の協働実践について調査しました。結果、2職種間の協働は患者の社会的認知機能を向上することを示しました(査読付) <u>Ken Kondo</u> , Naoto Noguchi, Ryouto Teshima, Kouji Tanaka, Bumsuk Lee

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. マスキングテープを使用したちぎり絵の紹介	共著	令和3年11月	作業療法ジャーナル(報告)	本報告はマスキングテープを使用したちぎり絵を症例を交えて紹介しました。(査読付) 近藤健、近藤真知子、藤井洋有、森崎裕美、関根圭介
2. 医療従事者からみた自作パウチ飲料キャップオープナーの有用性	共著	令和3年11月	日本作業療法研究学会(学会発表)	本報告は、医療従事者からみたパウチ飲料キャップオープナーの有用性を検討しました。製作したオープナーは医療従事者から高い満足度を得ました(査読付) 近藤健、松山励悦、Vo QUOC DUY, 李範爽
3. 頸椎症患者のQOLにおける術前関連因子の検討	共著	令和3年11月	日本作業療法研究学会(学会発表)	本報告は、頸椎症患者の四肢機能とQOLの関係を調査しました。巧緻動作とQOLに関連を認めました(査読付) 野口直人、李範爽、近藤健、秋山稜登、佐藤里沙、Vo QUOC DUY, 山崎 恆夫
4. 3Dプリンターで制作した自助具を使用し、飲料パック開封の困難さが軽減した独居高齢者の一例	共著	令和3年10月	群馬県作業療法学会(学会発表)	3Dプリンターを使用し、牛乳パック開封が困難な方への自助具製作、適応の過程を報告しました(査読付) 近藤健、松山励悦、関根圭介、李範爽
5. Effects of cooking training on psychological distress for digestive tract cancer patients after surgery	共著	令和3年9月	日本作業療法学会(学会発表)	がん術後患者への調理練習の効果を調査しました。超練習を行った患者にうつ症状の改善が認められました(査読付)。 <u>ken kondo</u> , Hirokuni Hujii, Naoto Noguchi, Koji Tanaka, Bumsuk Lee

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. Coordination of Hand Intrinsic Muscles during Precision Grasp in Cervical Myelopathy	共著	令和3年9月	日本作業療法学会（学会発表）	頰椎症患者のつまみの特徴を圧センサー筋電計を用いて調査しました。頰椎症患者は健常者と比べて筋出力のバランスに異なる特徴を示しました（査読付）。 Naoto Noguchi, Bumsuk Lee, <u>Ken Kondo</u> , Ryoto Teshima, Tsuneo Yamazaki
7. 作業療法士を含む認知症ケアチームが介入した患者の活動レベルの変化	共著	令和3年9月	日本作業療法学会（学会発表）	認知症ケアチームの効果を単一グループで調査しました。その結果、機能レベルの改善に比べて活動レベルの改善が顕著に見られました（査読付）。 常深 志子, <u>近藤 健</u> , 中野 美佐

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 作業療法学科

氏名

石代 敏拓

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等 の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
災害復興期において被災高齢者の生活に影響を及ぼす環境に関するシステマティックレビュー	-	2021年9月	第55回日本作業療法学会 (仙台・オンライン)	災害復興期の被災高齢者の生活に影響を及ぼす環境を系統的に整理し、災害時に作業療法士が行える支援および災害への備えとしての支援を検討することを目的にシステマティックレビューを実施した。結果、物理的環境（自宅周辺の商店・バス停、食料品店、家屋損傷）、社会的環境（家族、友人、近隣住民、被災者）、環境の政治的・経済的状況（高齢世帯支援、生活復興支援、給食サービス、情緒的サポート、年金）が作業療法によって調整可能な環境と考えられた。 (共同発表者：宮寺寛子、村田和香、石代敏拓)

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 言語聴覚学科 氏名

白坂 康俊

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
なし				

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 言語聴覚学科 氏名

齊藤吉人

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
言語聴覚士養成課程における聴覚領域の現状と課題□	共著	2021年6月	言語聴覚研究	全国の言語聴覚士養成校を対象としたアンケート調査を実施し、聴覚領域の養成における現状や課題を検討した。1 聴覚領域を経験できる臨床実習先の不足、2 聴覚領域の就職先の不足、3 聴覚領域の卒後研修の場の不足、4 聴覚領域の専任教員数の不足、5 一部の学校における専任教員の聴覚領域の臨床経験業務や臨床施設の不足、6 検査・訓練機材の購入・維持管理の難しさ、が、明らかになった。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 言語聴覚学科 氏名

神山政恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属

言語聴覚学科

浅見知市郎

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名 称	概 要
生活習慣が血清中 サイトカイン濃度 (IL-4, IL-6) に及ぼす影響	共著	2021年9月11日	コ・メディカル形態機能 学会 第19回学術集会・ 総会 Web開催	同意の得られた健常者 36 名 (27～87 歳) を対 象として採血し、血清を分離した。生活習慣は 「健康度・生活習慣診断検査 (DIHAL.2)」に て評価し、統計は Spearman の順位相関にて解 析した。IL-6 は生活習慣との相関はなかった が、IL-4 は休養 ($p < 0.05$, $r_s = -0.41$)、睡眠の 規則性 ($p < 0.05$, $r_s = -0.41$) 及び、睡眠の充足 度 ($p < 0.01$, $r_s = -0.45$) の項目で有意な負の相 関が認められた。一方、ストレス回避では負の 相関傾向があった。IL-4 は休養の項目と負の相 関が認められたことから、休養が不足すると液 性免疫系に影響する可能性が示唆された。藤本 友香、浅見 知市郎、林由里子、岡山香里、 長田誠、亀子光明、古田島伸雄、小河原はつ 江
血清中サイトカイン (IL4と IL-6) 濃度と生活習慣の関連 について	共著	2021/ 11/20	第28回日本末病学会学術 総会 大阪市	生活習慣が血清中サイトカイン濃度に及ぼす影 響を検討したところ、IL-4濃度において、運動 習慣がある群の中央値はない群に比して有意に 低下していた。Helenius らによると、激しい運 動直後は、IL4やIL-6などのサイトカインが増加 するため、運動選手に多いとされるアレルギー 体質 (運動誘発性喘息や花粉症など) の一因で はないかと報告している。しかし、本研究では 適度な運動習慣は、むしろIL-4濃度を低下させ アレルギーのリスクを低減する可能性があ ると考えられた。藤本 友香、浅見 知市郎、柳 川 益美、時田 佳治、古田島 伸雄、林 由里 子、小河原 はつ江、

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 言語聴覚学科 氏名

三浦康子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
該当なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
該当なし				

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 言語聴覚学科 氏名

丹下 弥生

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
なし				

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 言語聴覚学科 氏名 後藤 遼佑

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
Differences in the vertical components of substrate reaction forces between two modes of infant carryin in Japanese macaques (<i>Macaca fuscata fuscata</i>) (ニホンザルの子ザル運搬様式間における支持基体反力垂直分力の差異) (査読付き)	共著	2021年10月	American Journal of Biological Anthropology 177: 300-313	ニホンザルでは子ザルが成長するとともに、母ザルが子ザルを運搬の様式が腹側運搬から背側運搬へ変化する。二つの運搬様式を生体力学的に解析した。腹側運搬では前肢にかかる支持基体反力垂直成分が有意に高く、一方、背側運搬では高い垂直分力が後肢に作用することが分かった。霊長類は前後肢の機能分化の程度が高いため、背側への運搬様式の移行は物体操作等に使用する前肢に過剰な支持基体反力が作用することを避ける行動的な適応であると考えられた。 (研究の資金獲得、実験の計画と実施、分析、考察、執筆を担当)(筆頭論文) 共著者：後藤遼佑、山田一憲、中野良彦

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
Paraspinal muscle activation during bipedal walking in orthograde primates and its implications for the evolution of trunk balance. (Orthograde霊長類の二足歩行における傍脊柱筋の活動と体幹運動制御の進化に関する考察)	-	2021年4月	90th Annual Meeting of the American Association of Physical Anthropologists	ヒトと非ヒト霊長類が行う二足歩行の同質性を明らかにするために、ヒトとシロテテナガザル、ニホンザルの二足歩行時における傍脊柱筋の活動を多分節で記録した。先天的に二足性を示すヒトとテナガザルでは傍脊柱筋が頭側から尾側へ向かい活動をするのに対し、非二足性のニホンザルではそのようなパターンが認められなかった。各系統で独自に二足歩行を獲得したヒトとテナガザルは、平行進化の結果、傍脊柱筋の活動を制御する類似した神経メカニズムが生じたと考えられた。 共同発表者：後藤遼佑、Neysa Grider-Potter、木下勇貴、岡健司、設楽哲弥、中野良彦
A comparison of axial rotation of the trunk during bipedal walking between human, white-handed gibbon and Japanese macaque. (ヒト、シロテテナガザル、ニホンザルにおける二足歩行時の体軸回旋運動の比較)	-	2021年4月	90th Annual Meeting of the American Association of Physical Anthropologists	ヒトと非ヒト霊長類が行う二足歩行の同質性を明らかにするために、ヒトとシロテテナガザル、ニホンザルの二足歩行時における体軸回りの回旋運動パターンを計測した。その結果、3種全てで基本的には類似した回旋運動パターンが確認された。非二足性霊長類であるニホンザルの共通するパターンが認められたことから、体軸回旋パターンは種ごとの運動適応よりも二足歩行の力学的要求から生じる運動であることが示唆された。 共同発表者：木下勇貴、後藤遼佑、中野良彦、平崎鋭矢

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
The influence of locomotor mode on nuchal muscle activity in <i>Macaca fuscata</i> and <i>Hylobates lar</i> . (ニホンザルとシロテナガザルにおけるロコモーション様式が頸筋群の活動に及ぼす影響)	-	2021年4月	90th Annual Meeting of the American Association of Physical Anthropologists	ロコモーション時の頸部筋の機能を明らかにするために、ニホンザルやシロテナガザルが行う複数のロコモーション様式間で前肢から頸部にかけての筋群の活動を計測した。各種、ロコモーションごとに頸部の運動角度が異なるが、ロコモーション様式間で筋の活動量に大きな違いは認められなかった。しかし、頸部のと前肢の筋活動を分析すると、活動のタイミングや強度に高い相関関係が認められ、頸部筋は頸部運動に直接関わるだけでなく、前肢運動を補助する機能も有することが分かった。 共同発表者：Neysa Grider-Potter、後藤遼佐、設楽哲弥、中野良彦
霊長類二足歩行における傍脊柱筋の活動とその神経基盤に関する考察。	-	2021年10月	第75回日本人類学会、シンポジウム「固有背筋の比較形態・機能学」	四年間の計画で実施した科研費若手研究「ヒトとテナガザルの二足歩行における体幹運動の類似性検証」の成果を総括して発表した。 発表者：後藤遼佐
二足歩行において傍脊柱筋の予期的な活動が頭部を安定させる：ヒト、テナガザル、ニホンザルの場合。	-	2021年10月	第75回日本人類学会	ヒト固有の二足歩行の特徴を明らかにするために、ヒト、テナガザル、ニホンザルを対象として、二足歩行時の傍脊柱筋の活動と、頭部および体幹の前方加速度を計測した。その結果から、3種の中でヒトだけが、頭部と骨盤の前進加速度の位相があっており、その加速度変化に対して傍脊柱筋が予期的に活動することがわかった。多種の結果と比較すると、この加速度パターンと筋活動タイミングは、ヒトの直立二足歩行に固有の特徴である可能性が示された。 発表者：後藤遼佐、Neysa Grider-Potter、岡健司、設楽哲弥、木下勇貴、中野良彦
ニホンザル四足歩行と二足歩行における中殿筋の機能的差異について。	-	2021年10月	第75回日本人類学会	ヒトの進化史において起こった四足歩行から二足歩行への姿勢変化が、二足歩行において重要な中殿筋の機能へ与える影響を、ニホンザルを対象として形態学的分析と運動学的に推定した。その結果、四足歩行では股関節の伸展に作用する中殿筋が、二足歩行になると股関節の外転筋として作用することが分かった。今回の結果から、二足歩行の進化史において、中殿筋の形態進化に先行して姿勢的な変化が生じた可能性が示唆された。 発表者：設楽哲弥、伊藤幸太、藤原峻宇、後藤遼佐、平崎鋭矢、中野良彦

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 言語聴覚学科 氏名

岡野 由実

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
特別支援教育・療育における聴覚障害のある子どもの理解と支援	共著	2021年8月	学苑社	聴覚障害のある子どもの発達について、言語・認知・心理・社会・情緒発達などの広い視点で理解を深め、近年の知見をもとに言語習得の支援を概説した著。第IV章C「障害認識と発達の支援」(p258-263)を分担執筆した。 編著：廣田栄子 分担執筆：杉内智子、富澤晃文、井脇貴子、赤松裕介、齋藤佐和、中村公枝、四日市章、東山薫、武居渡、山本晃、小淵千絵、木暮由季、大原重洋、長岡康彦、野原信、玉田美子、原田公人、中津真美、岡野由実、星川則子、北義子、奥沢忍

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 『当クリニックにおける受診状況から見た地域の言語聴覚士に対するニーズの実態』	共著 (筆頭)	2021年4月	音声言語医学 62巻 p147-155 (日本音声言語医学会)	目白大学耳科学研究所クリニックに言語聴覚療法もしくは補聴器外来を希望して来院した264名を対象に、診療録を後方視的に分析し、地域の言語聴覚療法に対するニーズを検討した。小児例のことばの遅れや発音不明瞭に対するニーズと、加齢性難聴に対する対応が求められていることを示した。初診時耳鼻咽喉科疾患を認めた症例は約半数おり、地域耳鼻咽喉科クリニックにおける言語聴覚士のニーズは高く、果たす役割は大きいことを論じた。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) 共著者：岡野由実、富澤晃文、池田泰子、坂崎弘幸、角田玲子、伏木宏彰

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 『言語聴覚障害児の就学選択と療育から学校への切れ目のない支援；幼児早期療育に関わる立場から』	— (シボジスト)	2021年9月	日本特殊教育学会 第59回大会 (学会企画シンポジウム)	学会企画シンポジウム『特別支援教育システムの課題と新たな制度設計—障害のある子どもの障害特性と教育ニーズに応じた学びの本質から考える—』において話題提供者として、特別支援教育システムにおける問題提起と医療専門職としての提案を行った。 企画者：佐島 毅、河合 康 話題提供者：岡野由実、涌井 恵、伊藤琢也 指定討論者：青木隆一

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 『障害学生が受講するオンライン授業における大学教員の評価』	—	2021年9月	日本特殊教育学会 第59回大会	COVID-19の影響により大学ではオンライン授業が行われ、障害学生におけるオンライン授業のアクセシビリティを検討した。授業担当教員へのアンケート調査から、学生側は受講しやすいと評価した授業でも教員側は困難さを感じている実態が示された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：佐々木銀河, 藤原あや, 岡野由実, 山森一希, 鶴井孝大, 竹田一則
3. 『当クリニックにおける補聴器外来の変遷と特徴；言語聴覚士と認定補聴器技能者の役割に焦点を当てて』	— (筆頭)	2021年10月	第66回日本音声言語医学会総会・学術講演会	目白大学耳科学研究所クリニックにおける補聴器外来システムから、補聴器臨床におけるSTの役割は医療の立場からのカウンセリングと客観的評価であり、補聴器技能者の専門性との協働における役割について考察し口演した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：岡野由実, 池田泰子, 坂崎弘幸, 富澤晃文, 角田玲子, 伏木宏彰
4. 『一側性難聴者における社会的支援のニーズに関する調査』	— (筆頭)	2021年10月	第66回日本聴覚医学会総会・学術講演会	一側性難聴当事者団体の会員を対象として、社会的支援/保障と医療対応のニーズについて調査し、社会的認知度の向上と社会的補償の拡充が求められていることを示した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：岡野由実, 岩崎 聡, 高橋優宏, 古舘佐起子, 岡 晋一郎, 小山田匠吾, 久保田江里, 植草智子, 櫻井 梓

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 言語聴覚学科 氏名

及川 翔

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 回復期リハビリテーション病棟における失語症者のコミュニケーション—言語聴覚士と看護師の情報共有の検討—	共著	令和3年12月	言語聴覚研究18巻4号	原著論文 概要：失語症者のコミュニケーションに関する情報共有について、包括的な活動場面を評価する方法について検討するため、看護師が必要とする情報と言語聴覚士が提供する情報の差異を調べた。その結果、看護師は活動の情報や、認知・非言語的コミュニケーション・言語理解の情報を必要としていた。言語聴覚士には機能に偏らない情報提供が求められることが示唆された。 (実験の遂行、全体の考察、執筆を担当)(筆頭論文) 共著者：及川翔、藤田郁代
2. A Propagation Model of Health Literacy Formation among the Very Elderly in Ogimi of Okinawa	共著	令和3年12月	JJPHPT Vol.1, 8 No. 1	感染症の数学的モデルを使用して、沖縄県大宜味村の超高齢者コミュニティで健康知恵の伝達を推定するために必要な要因を特定するため、同村在住90歳以上の高齢者を対象に調査を行った。その結果、この研究のデータは、民間療法に関する否定的な情報を取得した後に送信が停止することを前提とするモデルが、いくつかの追加情報とともに、実際のデータと5%未満(SIRモデルと比較して)明らかに異なることを示していた。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 失語症における描画障害の特徴	-	令和3年12月10日	第45回 日本高次脳機能障害学会	失語症者が描く絵の描画率について、描画課題を作成し、失語群と健常対照群に描いてもらう課題と、描かれた絵をランダムな順で第三者に提示し、何が描かれているか回答を求め、描画率と誤解釈の種類数を調べた。その結果、失語群は、非記号的題材の描画時にNR反応が多く、描いても第三者には伝わらない絵になることが多かった。また、読み手によって、さまざまに解釈された。これには、意味の賦活不全による絵の必須要素の脱落が関係すると考えられた。描画率は漢字書字成績と関係した。描画と漢字単語の書字の認知処理過程は類似し、両者を支える神経基盤の共通性は高いと考えられた。 (共同研究につき、本人担当部分の抽出不可能) 共同発表者：小森規代、地主千尋、上地桃子、橋本律夫、平野絵美、及川翔

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 教養部 氏名 杉田 雅子

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. 「翻訳」 Benjamin Disraeli, 『コニングズビー』 (査読付き)	共訳	令和3年3月	Fortuna 第32号 欧米言語文化学会誌	Benjamin Disraeliの小説 <i>Coningsby</i> の第4巻 第13章～第16章を翻訳。 B5判全91頁 担当部分：第4巻第13章、第14章 pp. 29～ 39 共訳者：杉田雅子、閑田朋子

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 教養部 氏名 榎本 光邦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. コロナ禍における日本人間性心理学会年次大会の開催と今後の展望について (査読付き)	単著	2021年3月	群馬パース大学紀要, 27 pp. 1-7	日本人間性心理学会第39回大会は、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、従来の参集する形式ではなく、Zoomによるオンライン形式で開催された。「今、ここで」起こる体験を重視する人間性心理学会の年次大会をオンライン形式で開催することについて賛否があったが、今後の人間性心理学の実践や、日本人間性心理学会の年次大会の開催について検討する良い機会となった。第39回大会の開催を通し、人間性心理学の実践や、学会の年次大会の開催は対面形式とオンライン形式を組み合わせることで、人間性心理学会の目的をより多角的に達成することに寄与すると考えられた。
2. 新型コロナウイルス感染症禍における日本人間性心理学会第39回大会の実施について	単著	2021年3月	人間性心理学研究, 38 (2) pp. 209-213	日本人間性心理学会第39回大会は、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、従来の参集する形式ではなく、Zoomによるオンライン形式で開催された。「今、ここで」起こる体験を重視する人間性心理学会の年次大会をオンライン形式で開催することについて賛否があったが、今後の人間性心理学の実践や、日本人間性心理学会の年次大会の開催について検討する良い機会となった。第39回大会の開催を通し、人間性心理学の実践や、学会の年次大会の開催は対面形式とオンライン形式を組み合わせることで、人間性心理学会の目的をより多角的に達成することに寄与すると考えられた。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. コロナ禍における心理学の实践 - 基礎心理学と人間性心理学の交差VI -	-	2021年8月	日本人間性心理学会第40回記念大会	<p>新型コロナウイルス感染症拡大（コロナ禍）は2年目を迎えたが、未だに収束の目途が立たない。あらゆる個人の日常行動の変容が求められるコロナ禍において、基礎心理学・人間性心理学がそれぞれの立場でどのように実践されてきているかを語り合うことで、心理学の新たな実践の形を模索した。コロナ禍において発表者が携わった学生相談室の活動や大学院における臨床実習指導などの大学教育を実践するに当たって新たに取り組んだこと、これまでの取り組みを変えずに済んだことなどについて話題提供を行った。</p> <p>担当：話題提供 発表者：宮田周平，久羽康，藤木大介，榎本光邦</p>
2. コロナ禍における大学生のストレスマネジメントに関する研究	-	2021年9月	日本心理学会第85回大会	<p>本研究は、緊急事態宣言下にある都道府県の大学に在籍し、登校が禁止され、オンラインで講義を受講している大学生を対象とする。対象者がオンラインで受講した「ストレスマネジメント」に関する講義において回答したディブリーフィングを目的とした質問（①コロナ禍において現在ストレスを感じていること、②それを解消するために必要だと思う対処方法、③それを支援してくれそうな人物や団体、④それらの対応がどれくらいできているか）への回答結果について、内容分析を行った。</p> <p>その結果、大学生が抱えるストレスの原因や対処方法は明確であるが、対処の実行が困難であり、そのような状況にある大学生を支援する方法の構築が急務であることが示唆された。</p>

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 教養部 氏名 アンドリュース デビッド

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
Good In-Person, Even Better Online (対面は良い、遠隔はなお良い) (査読付)	単著	2021年9月	Speakeasy Journal (スピークイージー・ジャーナル), December 2021, Vol. 32, JALT (全国語学教育学会), pp. 8-11	対面授業から遠隔授業への移行にあたり、教員が対応に追われる中、対面授業と遠隔授業それぞれの利点を比較分析することで、遠隔授業だからこそ学習効果が向上した授業活動例を示し考察した。
Taking a Step Back (一歩離れて)	単著	2021年12月	Translator Perspectives (翻訳者の目線) 2021 JAT (日本翻訳者協会), pp. 1-2	翻訳から一歩離れ大学教員になったことで、言語習得過程を客観視する機会が得られた。25年のキャリアを持つ翻訳者の視点から外国語習得の過程における動機付けの重要性とそれによる学習効果について考察した。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
1 「不良判定装置」(特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2021年1月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本発明は不良判定装置に関する。発明の背景は以下の通り。日本国特許公開2019-201741号公報は、ミシンが縫製する縫製対象物の縫い目の異常(目飛び、糸切れ等)を検出する縫い目検査装置を開示する。縫い目検査装置は、上糸の張力を検出する張力センサを備え、張力センサの検出値から検出特徴量と参照特徴量とを算出する。検出特徴量は、上糸の張力の実際の特徴量を示す。参照特徴量は、縫製対象物の縫い目が正常である時の上糸の張力の特徴量を示す。モータの回転角度が270°以上360°以下の時、縫い目検査装置は、縫い目が正常である時の上糸の張力よりも実際の上糸の張力が小さいことに基づき、目飛びが発生したと判定する。また、モータの回転角度が0°以上90°以下の時、縫い目検査装置は、縫い目が正常である時の上糸の張力よりも実際の上糸の張力が小さいことに基づき、糸切れが発生したと判定する。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 「液体吐出装置」(特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2021年2月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本開示は、液体吐出装置に関する。発明の背景は以下の通り。 ヘッドが装着される装着部を備え、ヘッドから液体を吐出する液体吐出装置が知られている。画像形成装置では、ベースフレームにヘッドが装着され、ヘッドからインクが吐出される。ヘッドには基準面が設けられており、ベースフレームには位置決めピンが設けられている。ヘッドは、位置決めピンに基準面が突き当てられて、ベースフレームに装着される。このとき、作業者はベースフレームに対してヘッドが動かないように、治具によってヘッドを保持する。この状態で、作業者はヘッドをネジでベースフレームに固定する。
3 「液体吐出装置」(特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2021年2月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本開示は、液体吐出装置に関する。発明の背景は以下の通り。 ヘッドからインク、抜染剤等の液体を媒体に吐出する液体吐出装置が知られている。インクジェット記録装置は、一对のガイドレールとキャリッジとヘッドとを備える。一对のガイドレールはそれぞれキャリッジの走査方向に延びる。一对のガイドレールのそれぞれには係合部が設けられる。各係合部は一对のガイドレールに沿って移動可能にそれぞれのガイドレールに係合する。キャリッジは各係合部に固定され、ヘッドを搭載する。ヘッドは媒体にインクを吐出することで画像を印刷する。
4 「上送り装置」(特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2021年5月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本開示は、ミシンの押え棒に装着される上送り装置に関する。発明の背景は以下の通り。 従来の上送り装置は、本体部と、押え足とを備える。本体部は、ミシンの押え棒に取り外し可能に装着される。本体部は、送り歯と、一对のアーム部とを備える。上送り歯は、ミシンの針棒の上下動に連動して上下方向に動き、下降した時にミシンの送り歯との間に被縫製物を挟持して、被縫製物を搬送方向に搬送する。一对のアーム部は各々、ミシンの搬送方向に延び、互いに対向する方向に突出した係合軸部を備える。一对のアーム部は各々、係合軸部が押え足に設けられた孔に挿通されることで押え足を回動可能に支持する。押え足は、被縫製物を上側から押さえる。
5 「位置決め用具」(特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2021年5月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本開示は、カートリッジに固定されるペンの位置決めを行うための位置決め用具に関する。発明の背景は以下の通り。 シート状の対象物を切断する切断装置が知られている。切断装置には、カッターが固定されるカッターカートリッジが装着される。切断装置は、カッターカートリッジを対象物に対して移動させることによって、対象物を切断する。又、切断装置は、カッターカートリッジに代えて、ペンが固定されるペンカートリッジの装着が可能な場合がある。この場合、切断装置は、ペンカートリッジを対象物に対して移動させることで、模様や図柄をペンによって対象物に描画できる。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 「保持枠、保持枠の枠形成部、および保持枠のための保持具」(特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2021年11月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本開示は、保持枠、保持枠の枠形成部、および保持枠のための保持具に関する。発明の背景は以下の通り。 従来、布を展張する保持枠が知られている。従来の保持枠は、4つの枠辺部から形成される枠体と、複数の保持具とで構成される。保持具は、頂部と、頂部の両端から二股状に延びるガイド片とから構成される。保持具の頂部、または枠辺部のいずれか一方に、磁石部材が取り付けられ、他方に被吸着部材が取り付けられる。複数の保持具が布を介して枠辺部に跨るように被せられる状態において、磁石部材が被吸着部材に対向する姿勢で吸着することで、保持枠が布を展張する。
7 「記憶媒体、及びミシン」(特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2021年12月提出	特許庁	未公開のため記載不可。本開示は、記憶媒体及びミシンに関する。発明の背景は以下の通り。 縁縫いミシンは、模様データに基づいてモータ等を駆動し、模様を刺繍した刺繍縫いを形成させる。縁切りが有効とされている場合、ユーザは、針棒に装着された縫針をメス針に取り換える。縁縫いミシンは、針棒にメス針が装着された状態で、縁データに基づいてモータ等を駆動し、刺繍縫いの外形をメス針により切断する。一方、縁切りが無効とされている場合、縁縫いミシンは、針棒に縫針が装着された状態で、縁データに基づいてモータ等を駆動し、刺繍縫いの外形に沿って縁縫いを実行する。
8 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書(全97件)(和文英訳)	単訳	2021年1月～12月	国際知的所有機関	非公開のため記載不可。

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 教養部 氏名 峯村優一

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. 研究公正に関する自己記述式尺度における質問文の検討—尺度作成における議論を通して—	共著	2021年12月	教養教育論文集フーマーナ（京都府立医科大学）、55号、83-90頁	研究倫理評価尺度の開発において、自己記述式尺度が抱える問題点を克服するため、質問文作成時に検討した内容、オリジナリティを出すため過程、また問題点について明らかにした。 共著者：景山千愛、手良向聡、吾妻知美、山脇正永、渡邊洋子、松山琴音、吉井健悟、今井浩二郎、河原直人、峯村優一、瀬戸山晃一
2. 研究活動における「隠れたカリキュラム」の可視化の試み—重回帰分析による分析と考察—	共著	2021年12月	教養教育論文集フーマーナ（京都府立医科大学）、55号、91-102頁	研究倫理に関する規範意識・行動様式を問う質問紙から成る評価尺度において、「あなたならばどう行動するか」と「あなたの周りの人ならばどう行動すると考えるか」について質問し、それら質問への回答における得点差を見ることにより、意思決定に影響を及ぼす「隠れたカリキュラム」を可視化して表した。 共著者：四宮康亮、吉井健悟、山脇正永、渡邊洋子、吾妻知美、手良向聡、松山琴音、河原直人、今井浩二郎、峯村優一、景山千愛、瀬戸山晃一

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. Analysis of Human Elements Constituting the Organizational Climate that Influence the Decision-Making of Japanese Medical Researchers（日本の医学系研究者の意思決定に影響を及ぼす組織環境を構成する人的要素の分析）	-	2月25日	30th Annual APPE International Conference（オンライン開催）	医学系研究者の意思決定に影響を及ぼす組織環境を構成する人的要素について分析し、統計学的に有意差のある要素を明らかにした。 共同発表者： 峯村優一、吉井健悟、景山千愛、瀬戸山晃一
2. 多面化する疾患概念研究	-	5月23日	応用哲学会第13回年次研究大会（オンライン開催）	疾患の概念分析をする自然主義理論、規範主義理論、自然主義と規範主義のハイブリッド理論の各特長を示し比較衡量した上で、それぞれの問題点を明らかにした。 共同発表者： 峯村優一、杉本俊介、豊島史彬

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 「研究者の倫理的意思決定と組織環境～隠れたカリキュラムの影響の可視化の試み～」	-	11月6日	日本医学哲学倫理学会第40回年次大会（オンライン開催）	医学系研究者の倫理的意思決定能力を測定するオリジナル評価尺度の開発において、海外の先行研究をどのように取り入れ、また乗り越えたかを含め、倫理的意思決定に関するシナリオ問題作成の過程を明らかにした。 共同発表者： 瀬戸山晃一、景山千愛、峯村優二、吉井健悟
4. A Philosophical Examination of Mental Disorders	-	11月7日	Romanell Center Annual Conference 2021	精神障害を哲学的に分析する自然主義理論、ハイブリッド理論、アリストテレス的学説、込み入った学説を考察し、どれか一つの理論に限定するのではなく、いくつかの理論を組み合わせ、疾患を明らかにする方法を提言した。峯村優一

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 教養部 氏名 衣川 隆

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2021年1月～2021年12月)

所属 教養部 氏名 岩城 翔平

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
任意の呼吸調整による呼吸相の違いが四肢の等尺性・等速性筋力発揮に与える影響に関する国内文献の研究	共著	令和3年3月(群馬パース大学紀要第26号に向けて投稿、令和2年12月25日付で受理された旨の論文受理通知書有)	群馬パース大学紀要 第27号に掲載予定	任意の呼吸調整による呼吸相の違いが四肢の等尺性・等速性筋力発揮に与える影響の仕組みについて、関連する既存の研究論文を整理し、その中で呼吸と筋力の因果関係を調べている研究に注目して、その効果を統計的に明らかにすることを目的とした。各データベースで呼吸と筋力に関するキーワードを組み合わせて検索を行ったところ、最終的に抽出された論文数は2編となった。いずれの文献も各被検者データの記載がなく、呼吸と筋力の因果関係およびその効果を統計的に明らかにするには至らなかった。 岩城翔平、木村朗
スイング計測装置を用いた野球のスイング特性を探る	共著	令和3年3月	国土舘大学 体育研究所報 第39巻, p. 37-43. (令和2年度)	簡易型スイング解析装置SwingTracerの有効性を検証することで、野球指導への有益な情報提供を目的とした。大学準硬式野球選手を対象とし、置きティー打撃の3コース (Inside、Midle、Outside) 打球飛距離及びスイング特性の測定を実施した。3コース打球飛距離とスイング特性の4項目(スイング時間、最大ヘッド速度、ヘッド角度、スイング軌道)を比較した結果、従来の高速カメラ等を用いた研究と同様に3コースの打球飛距離と最大ヘッド速度の間に有意な相関関係が認められた。(共同研究のため担当部分抽出不可能) 畑島一翔、小川直人、田中重陽、岩城翔平、磯貝貴大、角田直也

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2021年1月～2021年12月）

所属 教養部 氏名 鎌田 依里

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
「死なないはずの病いが、死ぬかもしれない病いへと変貌した、今」を生き抜くために—難治性疾患療養者支援の現場より—（査読有）	単著	2021年3月	心理臨床 スーパーヴィジョン学第 7号, 23-28.	世界中で猛威を振っているCOVID19により、難病療養者の生活およびところがどのように変化をしたか、また難病療養者を支援する支援者のところにどのような影響が生じているかについて述べた。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
こころの現場から「相手への思いやりの醸成」	単著	2021年1月	沖縄県難病相談 支援センター 難病情報誌 アンビシャス224号	新型コロナウイルス感染症により大きく変化をした日常であるが、改めて相手への思いやりとは何かを具体的に考え検討する。衣食住の満足にとどまらず心理的に支えになってくれること、笑いかけると笑顔が返ってくること等、普段何気なく受けている温かい言動は、実はとても貴重なものである。
こころの現場から「犬好きには伝わる話」	単著	2021年2月	沖縄県難病相談 支援センター 難病情報誌 アンビシャス225号	相手の話を聴く際に、「傾聴する」ことが大事であることは広く社会で認識されているが、聴いている人が「傾聴しているつもり」であるだけで、本当の意味で傾聴していない場合がある。傾聴の良い例として、犬によるアニマルセラピーを挙げ、傾聴とは何かについて述べた。
〈特集〉糖尿病患者への心理的支援に関する探索的研究（特集II：平成31年度京都大学教育研究振興財団研究活動推進助成報告書）	共著	2021年3月	京都大学大学院 教育学研究科附属臨床 教育実践研究センター 紀要	京都大学大学院のDM研究会において、糖尿病を抱えて生きる方の心理的支援について考察した。これまで継続的にかかわらせていただいている糖尿病を抱えて生きる方のところについて、心理臨床の視点から支援を検討した結果について報告をした。内容を全員で検討した共著のため、執筆箇所については明示できない。 豊原響子，清重英矩，野田実希，鎌田依里，西岡真由美，平子侑里絵，藤本航平，三田桂子，上田裕也，西岡小春，橋本由布子，山崎基嗣

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
こころの現場から「大切な人に、あなたは何を与えますか」	単著	2021年3月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス226号	人は相手に「何かをしてあげる」ことを想定する際に、人は、「自分の身体を活用して、何かをする」ことを無意識に想定する。だからこそ、自分の身体が動かない将来を想定し、何もしてあげられないと悲嘆するのだ。相手に何かをすることは、大きな身体動作を伴って行うことだけとは限らない。病床にいても相手の話を聴くことはできるし、相手にこれまでの感謝を伝えることもできるし、笑顔でいることもできる。表情がうまく動かない場合でも相手に対して慈しみを込めた瞳で訴えかけることもできるのだ。
こころの現場から「謝る必要のない生き方をしたい」	単著	2021年4月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス227号	心理臨床の現場では、相手を深く傷つけたにもかかわらず「自分がやったのではなく、自分の病気がそうさせたのだ。だから許してほしい」と言う方に出会うこともある。その方の在り方はとても悲しい。おそらく、余命が宣告されている場合には、残りの人生で自分の大切な人にしてやれるできる限りのことを何でもしようという気持ちになる。人は自分の命があたかも永遠のように続くかのように錯覚をしているので、人を傷つけてしまうことがあるのだ。
こころの現場から「名前の不思議」	単著	2021年5月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス228号	電話相談をする際に自分の名前を名乗るか否かについて。自分の名前とは不思議なもので、名前を名乗ったり聞いたりすると、ここには責任が生じる。自分が相談をする場合には、相手に自分の名前を言える時には、自分が相談をした問題を自分自身で引き受けようとする覚悟があり、自分の悩みや自分自身の存在を肯定的に捉えている場合が多くある。つまり、自分の存在や生き方に、ある意味では、自信をもっていると言ってよい。自分の名前を相談する場に出すことができる方は、心理療法の効果も出やすいとも言える。
こころの現場から「こころは伝わる」	単著	2021年6月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス229号	C.R. ロジャーズ (1902-1987) のカウンセリング場面について例示し、例えばALSで呼吸器をつけることを選択した場合の、文字盤や機器等を活用してコミュニケーションをとることについて述べた。それらは自分らしく生きるためにとっても大切なことであり、言葉以外のところで人同士が通じ合っていると感じあうことも大切である。やはり人は、互いに同時に種類の異なる支援をしあっているといえよう。
基礎研修 I	—	2021年6月	群馬県難病相談支援センター 第3回 難病ピア・サポーター養成研修会	講演 (鎌田依里・川尻洋美)
こころの現場から「意識して正しい判断を」	単著	2021年7月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス230号	COVID-19への感染にまつわる不安と恐怖は、人の弱みを批判する行動や闘争心をも掻き立てる。心理的な負担が大きくなりその負荷にこころが耐えきれなくなると、人は、「もしかしたら、私だけは大丈夫かもしれない」という全く根拠もない自信を抱く。誤った判断は、初期には修正も可能ですが、誤った判断のまましばらく進んでいると慣れてしまい修正が非常に難しくなる。そして誤った判断と思考が、あたかも正しいもののように正当化されていく。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「自分らしく生きる」を支える一語の場があり、そこに聴き手が存在する意味	共著	2021年8月	難病と在宅ケア 27巻6号, 5-9.	難病療養者が療養生活の中で様々な自己決定をおこなう際の、心理的な過程について実際の事例も挙げ、具体的に示した。心理臨床学において難病療養者への支援について先駆けとなる資料である。内容については共著者と執筆した。 川尻洋美, 鎌田依里.
こころの現場から「意識して基本に戻ろう～ピアサポート～」	単著	2021年8月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス231号	ピアサポートの知識を学び実践経験が増えるにつれて、ピアサポーター自身が「有能なピアサポーター」という肩書が付いていると思いついてしまい、本来対等であるべき立場のピアサポーターであるにもかかわらず指導的な態度をとってしまう場合も現実にはある。経験を重ねると、様々な状況を見聞きすることになり、ピアサポートをしてやっていると自負が生まれ、助言をする場合が増える傾向にあるので意識して基本に戻ることが必要である。
こころの現場から「自分の身体の状態や想いを基準に、判断する」	単著	2021年9月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス232号	本来、人間はすべて固有な存在であるにもかかわらず、なぜか画一化され、「普通」が良いこととされ、「人並み」になることを要求されながら生活してきた。「普通」や「人並み」とは、大多数の人の意見を取り入れたもの、あるいは思い込みやステレオタイプである。難病やその他の基礎疾患をもって生きている場合には、「一般的に〇〇である」という視点によって収集した情報は、役に立たなかったり、むしろ有害な結果を引き起こしたりすることがあるので注意が必要である。
こころの現場から「万華鏡」	単著	2021年10月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス233号	人のこころはある意味で万華鏡のようだと考えられる。本人には情感を伴ったものだが、体験していない人は想像することすら難しいからである。その本人が見ている世界は分からないので、見えている模様や色合いや感動等を言葉で伝えてもらうことが必要。そして言葉で伝えられたものを自分なりにできるだけ正確にイメージすることが傾聴だと言える。相手のこころを理解する、つまり相手のこころの有り様を知ろうと努力し視覚的にイメージすることが傾聴には大事なものである。
基礎研修Ⅲ 良い聴き手の存在と語る大切さ(演習 4)	—	2021年10月	群馬県難病相談支援センター 第3回 難病ピア・サポーター養成研修会	講演・演習 (鎌田依里・川尻洋美)
難病療養者の心理支援を目的とした絵本の作成	—	2021年10月	厚生労働省難病患者サポート事業 全国難病センター研究会 第35回大会	心理的自己像を示す木を用いて、難病と診断された難病療養者が、どのように自己決定をおこない、より豊かで自分らしい療養生活を送っていくかについて、描いた絵本について、紹介し、関係機関について周知するとともに、難病療養者やその支援者からの意見も伺いたいとアナウンスした。
心理的自己像を表す1本の木を主人公として描いた絵本による、難病療養者の心理的ケアの試み	—	2021年11月	日本難病医療ネットワーク学会第9回学術集会	心理的自己像を示す木を用いて、難病と診断された難病療養者が、どのように自己決定をおこない、より豊かで自分らしい療養生活を送っていくかについて、描いた絵本について、心理臨床学の知見から論じた。 (筆頭) 鎌田依里、金古さつき、渡邊はるみ、川尻洋美

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
基礎研修Ⅲ 語り手と聴き手の体験①	—	2021年11月	群馬県難病相談支援センター 第3回 難病ピア・サポーター養成研修会	講演・演習（鎌田依里・川尻洋美）
基礎研修Ⅲ 語り手と聴き手の体験②	—	2021年11月	群馬県難病相談支援センター 第3回 難病ピア・サポーター養成研修会	講演・演習（鎌田依里・川尻洋美）
こころの現場から「入院中の患者に対する家族の気持ち」	単著	2021年11月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス234号	新型コロナウイルス感染症が蔓延している現在では、家族や親族が入院した場合の面会が制限される。入院の状況や病状を直接自分の目でみる事ができず、家族の想像は悪い方へ悪い方へと膨らんでしまう傾向にある。最悪の事態等も含め必要以上に様々な悪い結果を想像して、イライラしたり、落ち込んだり、抑うつ的になったり、塞ぎ込んだり、眠れなかったり、食欲が落ちたり、逆に過食になったりもする。各々ができることを精一杯することにより防ぐことが可能である。
こころの現場から「かけがえのない、あなたへ」	単著	2021年12月	沖縄県難病相談支援センター 難病情報誌 アンビシャス235号	谷川俊太郎氏の詩『宝だから』。もし自分が役に立っていないと思うのであれば、それを嘆くのではなく、どうしたら身近にいる人のためになるかを考え、自分のできる範囲で少しずついいから実行してみる。感謝の想いを伝えるのもよいし、こころからの笑顔を向けるだけでもよい。この世に生きていることは奇跡の積み重ねである。自分の傍に当然のように居るたいせつな人が、居ることの奇跡をかみしめてみる時間をつくってもよいのではないだろうか。